
時を越えた輪廻

国府神紫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時を越えた輪廻

【Nコード】

N6477F

【作者名】

国府神紫音

【あらすじ】

芝貫グループの第一子息、芝貫謡が出会ったのは、右目に眼帯、髪に真つ赤なりボンをつけた無表情の女性だった。大企業社長の父親に怯えながらも毎日を送っていた彼の生活は、彼女との出会いから転換期を迎える。ユニークアクセスが12000人を突破しました（＾ー＾）お読みいただき、多謝 本当にありがとうございますっ！

・注意！ 手酷い目に合っていますが、主人公は謡です！

選后という名のプロローグ（前書き）

また新しい話始めました。他の二話同様、自分のペースで頑張ります。

邂逅という名のプロローグ

「あつ、いたいた！ 楡乃木さん！！」

また来た、と私はため息混じりに思う。場所は西崎臨海公園北側、時刻は茜差す午後四時過ぎ。“彼”は一人ではなかった。パーカーのフードを目深に被った小柄な少年と一緒に。私は読んでいた文庫本をバッグに仕舞い、“彼”に向けて少し手を上げて応えてやる。少し前の私ならば有り得なかった所作に、自分でも驚く。ごく僅かだが。

「こんにちは」

ぎこちなく笑うのは出会った時からずっと変わらない。私のほうが変化“させられ”ている。

「楡乃木さん、何か考え事？」

「いや、別に。ーそっちは？」

その問いに他意はなかったのだが、私が眼を遣った相手は大袈裟にビクツと肩を竦めた。両腕に掻き抱いた書店の袋がガサツと乾いた音をたてる。

「俺の知り合いの子で、神薙愁って言います。俺が家庭教師やってる子です」

「ああ、前にそんなこと言ってたね。ーふうん、その子」

「愁君」

“彼”に促され、カンナギシユウがおずおずとフードを脱いだ。如何にも気の弱そうな顔をしている。“あれ”が好みそうな感じた。

「か、神薙愁、です、」

取り敢えず私も名乗り返す。

「楡乃木涼子という。カンナギシユウとは、どういう漢字だ？」

「え、えっと、神様の神に草冠の薙ぐに、秋と心の愁、です」

「神、薙、愁。ー大層な名だ。お前、名前負けしてるな」

私としては思ったことを言っただけで特に深い意味など持っていない

かったのだが、愁とやは

「…ですよね」

と悲しげにフードを被ってしまった―難しいな、コミュニケーションとやは、と私は嘆息する。

「―おい謡。何がおかしいんだ」

気付けば“彼”―芝貫謡が満足気に笑んでいる。少し腹に来て、私はつい謡を睨み付ける。

「いや、楡乃木さんが俺以外と話すの見るの初めてだから何だか新鮮で」

悪気のない穏やかな笑顔―“あの方”そっくりだと私は一人思う。

「減らず口を叩く。…もう帰れ」

「え、でもまだ四時だし、」

「そういう意味じゃない。あと十分もしないうちに雨になるからだ。二人とも傘、持っていないだろ」

「雨？でも、」

「良いから。濡れたくないならさっさと帰ったほうがいい。もしかしたら雷も鳴るかも知れん」

雷云々は出任せだが、効果ありだ。神薙愁が謡のシャツの裾を掴んで言ったのだ。

「やだ、雷―怖い」

謡が

「分かった分かった」

と愁の肩を軽く叩く。

「今日は帰ります。雨、本当に降るんですか？」

謡が疑わしそうに天を仰ぐ。初夏の空は真っ青に晴れ渡り、雲一つない。謡でなくとも疑うだろう。

「信じなくても構わないが―」

「信じますって」

謡が苦笑する。どうも巧くあしらわれている気がして仕方ない。

「じゃあ今日は帰ります。楡乃木さんは？」

「私はもう少し此処にいる」

「分かりました」

謡は愁を促し、私に背を向けた。その背が“あの方”に重なる―が、すぐに幻想だと言い聞かせる。

―遠ざかる背中。舞い散る赤い液体。冷たい手。冷たい瞳。

『お前は誰だ』

「―さあ、誰でしょう」

私の呟きは空気に溶けて消え、謡に届くことはなかった。

「どうだった？今の人」

「う、うん」

愁が戸惑った声を出す。

「愁君？」

「あ、あのね…さつき、誰かに見られてた気がした、の……」

愁のその言葉に、謡は思わず足を止める。

「え？」

先程買った参考書の入っている袋を掻き抱く愁の体は小さく震えている。もしかや過呼吸の発作だろうか。何処か人の少ないところで休憩させないと。

「愁君、少し休もう。顔色が悪い」

「で、でも、」

涼子の言った雷を懸念しているのか。

「う、けほっ、けほっ」

しかし体は正直で、程なく愁は苦しげに咳き込み始めた。

「愁君」

普段優しい口調の謡からキツめの声が發され、愁は小柄な体をびくつかせる。

「少し休んで帰ろう。僕も一緒にいるから」

愁はまだ迷っているようだったが、謡が引かないと悟ったのか、こくりと首を縦に振った。空には微かに雨雲が差し始めていた。

「じゃな、誓。また明日」

「うん。バイバーイ」

芝貫誓は友人と別れると、のんびりと歩き出した。

「今日の晩飯は何かな」と。あれは、^{には}匂？」

大きなドングリ眼、緩くウェーブのかかった栗色の髪、色白の肌。外見は可愛い、誓と同年代くらいの少女が、周囲をキョロキョロと見回しながら歩いていた。一度帰宅したらしく、私服姿だ。

「おい、匂！何してんだ？」

少女―神薙匂は誓に気付いた途端、鼻の頭に幾本もの深い皺を刻んだ。眼もスツと細まり、胡散臭いものでも見るようである。

「出たな、阿呆弟」

少女の口から紡がれた第一声はそれだった。

「だから何度も言ってるだろー。俺はお前の弟じゃねえってー」

「うるさい、黙れーと、お前、愁を見てないか？」

「愁？どつかその辺でピーピー泣いてるんじゃないの？」

嫌味ぶった口調で返され、匂はムツとするが、すぐにこいつはこういう人間なのだと言い聞かせる。「お前に訊いた私がバカだった。もういい、」

「ばあか、ばあか、匂のばか」

匂は誓の頭を叩いた。だが誓はヘラヘラと笑うだけで、怒りもしなければ痛そうな様子を見せたりすることも無い。

「っ、謡さんはしっかりしてるのに、貴様はっ……！」

こんなのが幼馴染みだなんて！と匂は怒りに肩を震わせる。だがすぐに弟である愁を探さねばならないことを思い出した。

「こんなのにも構ってる場合じゃない！！」

匂は誓を放って、走り出した。

「頑張ってる」

一切事情を解していない少年の呑気な声のんびりと響いた。

「ぜえぜえ…けほつ、はあはあはあはあ」

「愁君、大丈夫？」

愁の体調は落ち着くどころか悪化していく一方だ。荒い息と苦しげな咳を繰り返し、ぐったりと謡に凭れ掛かっている。

（凄く体が熱い…。帰ったほうが良かったかな）

謡は愁を連れ、大通りを一本逸れた裏道に入っていた。閉店して久しぶりな雑貨屋の軒先に腰を下ろして愁を安静にさせようとしたのだが。

「愁君ごめん、僕が無理矢理休ませたから、」

愁が首を横に振って否定してくれるが、愁の具合が明らかに悪化しているので慰めにはならなかった。

「そうだ、家に電話しよう」

あまり家に頼りたくないが、愁の体のことがある。意地を張るばかりではだめだ。そう思った謡が鞆から携帯を取り出そうとしたときだった。

「あつれ、神薙じゃん」

軽薄そうな声に、愁が体を硬直させた。謡はその様子を怪訝に思いながら顔を上げる。いつのまにやら、学ランをだらしく着崩した三人の少年が謡と愁を囲むように立っていた。「こんなとこで何してんのかな？ん？」

「っ、」

顔を覗き込まれそうになり、愁は俯いた。がたがたと寒さや発作

以外の原因が彼の体を震わせる。シャツの裾を掴む手も震えていて、謡に、目の前の三人が決して愁にとって仲の良い友人などではないことを教えていた。

「学校にも来ないで何してんのかって聞いてんだよ、蛆虫！」

愁からの返事がないことに激昂した一人が愁の腕を掴む。

「……痛っ、」

「止めろ！」

謡は愁の腕を掴んだ少年の手を払った。恐らく愁とは同学年だろうが、年上の謡より体格はいい。決して喧嘩は得意でも好きでもないが、大事な知人が傷つけられるのを黙って見ているわけにはいかない。

「あ？何だよ、あんた」

「俺は愁君の知り合いだ。怯えてるだろ、止めろよ」

「う、謡さん……」

「うわ、なあんか正義の味方気取りが出て来たよ」

一人がおちよくるように言い、他の二人がぎやはははっ、と下品な笑い声を立てる。

「愁君、行こう」

「あ、う、うん」

謡は愁の手を引いて離れようとした。

「待てよ！」

だが甘かったらしい。見咎められた瞬間、激しい蹴りが謡の腹部に入っていた。激痛に、謡はその場に蹲る。

「ぐっ……………」

「謡さん！」

愁の悲痛な呼び声がする。

「まだお話は終わってないんだけど？」

胸ぐらを掴まれ、拳で頬を殴られる。一発、二発。

「う、謡さんっ」

「誰か神薙捕まえとけ。金取っどけ」

「りよゝかい」

「やめつ、ぐつ……」

愁に向かう一人を止めようとしたが、再び腹部に蹴りを浴びせられて謡は敢えなく地面に崩れ落ちた。

「ひやははははっ、偉そうなこと言っというてやられっぱなしじゃん！カッコ悪〜」

「謡さんっ、痛い……っ」

愁は財布を盗られ、ついでのように殴られる。倒れた愁に、蹴りが浴びせられる。

『苛められてみたいなんです。殴られて、お金とか物を盗られたり……。なのに愁、ずっと我慢して、』

愁の姉である匂から聞いていた話が脳裏を過る。

（……こいつらが愁君、を苛めてたのかっ）

怒りで胸が熱くなるが、喧嘩など殆んどしたことのない謡には太刀打ち出来ず、ただ暴行されるがまだ。通行人に助けを求めたくとも、人通りが元来から少ないのに加え、たまたま通りかかった人も見てみぬふりだった。

「……………」

愁は抵抗はおろか痛みに声を上げることさえできないくらいに弱っているのに、蹴りは止まない。謡もついでのように足蹴にされる。（愁君が危ない……だけど、どうしたら）

こいつらが飽きるのを待つしかないのか、と謡が思った矢先、

「つまらないことしてるのだねえ」

楡乃木涼子の言った通りに降りだした雨の下、やけにのんびりした

口調でそう言う者がいた。

「つまらなすぎて逆に喜劇だ」

再会へのキス

「……………」

謡は痛みを堪えながら、顔を上げた。

少し霞む視界の中、一人の女性がつかつかと歩み寄って来る。口元まである襟のシャツの上から半袖のロングコートを纏い、タータンチェック柄のミニスカート、膝下の黒いソックス、ナイキのスニーカーという出で立ち。左目は長い前髪で見えず、見える右目は猫のそのようにつり上がって笑みの形に歪んでいる。（榆乃木、さん……？）

一瞬西崎臨海公園にいる榆乃木涼子に見えたが、別人だ。だが、似ている。

「何だ、お前は」

謡と愁を暴行していた三人が謎の女性に突っかかる。その隙に、痛み体を圧して、謡はぐったりした愁に膝を使って近寄る。

「愁君、愁君！大丈夫！？」

「うた、謡さん……？」

唇の端から垂れた赤い液体が白い首筋を濡らして、腹の痛み到低く呻く。匂ちゃんがこれを見たら構わず三人に突っかかるに違いない。

「痛い……」

「ちよっと待ってて」

今度こそ携帯を取り出し、父親の携帯を鳴らす。相手は珍しく二回という短いコール音で出たが、父親ではなかった。

「はい、春樹さまの携帯電話でございます」

耳に心地よいハスキーな声。父親ではなく彼が出たことに我知らずホッとする。

「もしもし、神楽さんですか。謡です」

「これは謡様。どうされました」

「あの、父は」

「春樹さまは急な会議に入れまして、取り次ぎはできかねますが……」
心苦しそうな声に、謡は慌てる。父親が多忙なのは今に始まったことではないし、それで神楽が負い目を感じる必要はない。

「お願いがあるんです。小さい車で良いんで、一台回してもらえませんか？…神籬の長男が、怪我をしまして」

これが父親相手なら、お前はまだあのくずと交際があるのか、とかそんなことに回せる車はないだとか言い出すが、神楽に限ってそれはない。

「愁様が？分かりました。私の権限で一台お車を回します。どちらへ伺えば宜しいですか？」

「えっと、辻音大通りを一本奥に入った路地で……“ペイン”という潰れた雑貨屋の前です」

こんな説明で分かるだろうかと不安になったが、神楽は分かりました、とあっさり言ってくれた。

「あと、女の人が」

俺たちを庇ってピンチです、と続けようとした矢先、ドガツという物々しい音が謡の耳を打った。

「！？」

音のした方を見て、謡も愁も愕然とした。学ラン姿の少年三人が無様な姿になって倒れていた。ピクピクと手やら足やらが痙攣しており、そんな彼らをニヤニヤと笑んで女性が見下ろしている。なかなかシユールな光景だ。

「三人束になってこの程度か。眠気覚ましにもならんのう」

（あいつらを皆、一人で……？）

謡は信じられぬ心境で女性を眺めていた。携帯から神楽の声が聞こえて来て、慌てて耳に充て直す。

「謡様、どうかされたのですか？まさか謡様までお怪我を？」

謡や謡の父親、春樹のことになると視野が狭まる神楽に、謡は慌てて否定をする。確かに殴られ蹴られもしたが、正直に申告しようも

のなら三人の命は保証できなくなる。愁を傷つけたことは許し難いが、死んで欲しいとまでは思えないし、神楽に人殺しにはなつて欲しくない。

「俺は平気です。…車、お願いします」

「分かりました。すぐに回させていただきます」

携帯を切り、謡は蹲つて震える愁に自分が着ていた上のシャツをかけてやる。

「あまり変わらないと思うけど」

雨は本降りになりつつあった。初夏とはいえ、雨は冷たい。そろそろ梅雨かな、と謡は思う。

「で、でも謡さんが、」

「俺は大丈夫」

愁が目を伏せて、項垂れる。

「ありがとうございます」

消え入りそうな小さな声。謡が応えようとすると、

「そんな言い方では相手には伝わらぬよ、少年」

「!？」

いつの間にか、三人を伸した猫目の女性が二人の前にやって来ていた。にこやかな笑みが小さな顔を縁取っている。

「あ、助けてくれて…ありがとうございます」

謡は慌てて立ち上がり、頭を下げる。

「何、礼には及ばんよ。少し暴れたかったのもあるしの…しかし最近の子供は弱くて詰まらん。時代の流れかのう」

「は、はあ」

不思議な物言いの人だな、と謡は思う。愁を見れば、彼もぽかんとした表情で女性を見上げている。

「弱いもの苛めなど言語道断よのう。主、痛みはないか」

主、と呼ばれたのは愁だ。愁は慌てて首を立てに振る。

「血が出ておところはちゃんと消毒せなあかんよ？兄ちゃんも氣いっけたり」

「は、はい」

ついには方言まで出始める。本当に不思議な人だ。

「時に主、」

「は、はいっ？」

「……」

真顔で見つめられ、謡は顔が赤くなるのを感じた。猫目が、謡を観察……というより走査している。

「ふむ、主が……の」

何かを納得したかのように呟き、女性は満足気に微笑んだ。謡は首を傾げるだけだ。

「ふふっ、主とはまた会う気がするのう」

「は、はあ」

「その時は、どうぞ良しなに」

そして、

「!？」

いきなり女性が自分の頬にキスをして来て、謡は瞠目する。女性がその様子を見て、嬉しげに笑う。

「初い（うい）反応」

「っ、」

赤面する謡にウィンクを残し、女性は軽やかな足取りで去っていく。降る雨など何のその、と言った風に。その背中を謡と愁は呆然と見送った。

「愁のバカ!」

謎の女性と出会って約一時間後。愁は姉の叱責に怯えて頂垂れていた。

「に、匂ちゃん余り強く言わないであげて」

「謡さんは黙ってて下さいっ!!」

「は、はいっ」

神薙匂は、錠剤を愁の鼻先に突きつけた。

「何で外出するのにこれを持って行かなかったの！案の定発作起こして謡さんに迷惑かけてっ」匂が持っている錠剤は精神安定剤の類いだ。愁は定期的に精神科にかかり、薬を貰っている。外出の際には携帯を医師からも言われているのだが。薬に頼ってばかりいたくないと言った愁を、謡は止めなかった。だから愁ばかり怒られるのはおかしいと謡は思うのだが。

「あ、あのさ僕も悪かったわけだし、愁君も疲れてるし、」

「謡さんは、」

「匂うるさいいゝ」

「誓！」

何火に油を注ぐようなことを言うんだと、謡は呆れる。叱られたと思っていないのか、誓は兄に怒鳴られてもにへらと締まりのない笑顔を浮かべるだけだ。

「誓、お前はもう少し…、」

苦言を呈そうとした時、携帯が鳴った。誰だろうとディスプレイを見た謡は、無意識に眉を顰めた。父らしい。匂たちから離れ、謡は携帯を耳にあてた。深呼吸をして、耳を澄ませる。

親と子

「…もしもし、父さん？」

「何をした」

父親の第一声はそれだった。低く押し殺したような声。不機嫌そのもの。謡は携帯を持っていない手をギュツと握った。

「神楽に車を回させたそうだな。何をした」

「…愁君が、怪我をしたから。発作もあって、具合も悪かったから、車を使わせてもらっ、」

最後まで言い切る前に、父親の怒号が謡を遮った。

「そんなくだらんことに使うなっ！！」

「……！」

「良いか、うちの車はお前の玩具じゃないんだ！神楽の息子の具合が悪かった！？だからどうしたというんだ、なぜそこにうちの車が関わらんといかんのだっ！！」

「父さん、」

「だから言っただろう、神楽には関わりを持つなと！それを無視して家庭教師はするわ、車は私用化するわ、喧嘩には巻き込まれるわ！お前、芝罘グループの名にどれだけ泥を塗る気だ！？」

「お、俺はそんなつもりっ……」

「何が“俺”だ！自分のことは“僕”と称せと言っているだろうがっ！！」

「父さん、お願いだから怒鳴らないでよ。皆に聞こえるから」

「構うものか！神楽愁にも言っておけ、不良に絡まれるのはお前の勝手だが謡を巻き込むな、とな！」

「父さん！！」

余りの暴言に、さすがに耐えかね、謡は声を荒げた。だがそれで怯むような父親ではない。さらに荒い声が返ってきただけだ。「お前は私に齒向かうのか！親にタダ飯を食わせてもらっている半人前以

下のくせに、私に齒向かうのか!？」

「……」

謡は携帯を切った。これ以上今は父と話したくなかった。どうせ今日は多忙で家には帰ってこないだろうから。

「謡さん？大丈夫ですか？」

匂が心配そうに謡の背中に声をかける。謡は自分が皆の注目の的になっていたのだとようやく気付く。愁など、泣きそうな目で謡を見上げている。謡の父親の声が聞こえてしまったに違いない。

「う、謡さん……僕のせいでおじさんに、」

謡は無理矢理、ではあるが、どうにか微笑む。

「愁君のせいじゃないから。大丈夫」

愁はまだ何かを言い掛けたが、結局は何も言えないままに口を閉じる。

「あの、謡さん。本当にごめんなさい……愁のせいで、沢山迷惑をかけて、」

匂が頭を下げ、愁も倣う。謡は慌てて頭をあげるよう言う。

「ほ、本当に気にしなくて良いんだよ。俺は大丈夫だから」

ただちよつと殴られたり、父親から酷い言葉を浴びせられたただけだ。そう、たったそれだけだ。

「それじゃ俺はそろそろ失礼するね。誓、帰るよ」

「ふいっ、りょーかい」

誓は勝手にごろごろと寝転がっていた。芝貫家と神薙家は謡が生まれたときからの近所だったため、勝手知ったるなんとやら……だが匂はひどく嫌そうな顔をする。

「あんたの匂いが付くとうちの犬が嫌がるのよ。だから止めて」

「ま、もう帰るし」

「あんたはああ言えばこう言う!」

匂がいきり立つのを、愁が制止する。

「ね、姉さん落ち着いて……っ」

「ったく、」

匂は苛々と髪を搔く。

「じゃ、愁君。安静にしてるんだよ」

「は、はい」

謡は優しく微笑み、誓を伴って神薙家を後にした。

「全く、」

苛々と指で机を叩く姿に、神楽は思わず笑みを溢す。控えめに笑ったつもりだったが、春樹はあっさり気付いた。

「神楽、何がおかしい」

「いえ。春樹さまも、謡さまのことになるとたんに心配性になれるのだと思ひまして」

「心配などしとらん。あれの無能さに呆れているだけだ」

「ふふ」

「神楽！貴様も悪いんだぞ。神薙のために車を動かすなど」

「申し訳ありません」

「…にこやかに謝られてもな」

「しかし春樹さま、何分言い過ぎでは…」

「謡の話はもう良い。榎崎さんをご案内してくれ」

春樹は神楽の言葉を遮り、命令を下した。神楽は何か言いたそうだったが、何も言わずに一旦執務室を後にした。

「全くあんたって子は」

スーパードのパートタイムを終えた神薙美佳子が帰宅して来たのは、午後六時を少し回った頃だった。息子が唇の端に絆創膏を貼っていたり、瞼を腫らしたりしているのを見て、事情を聞き出すこと五分。

ため息をついた美佳子の呟きに、愁は小柄な体を更に縮めた。そんな息子に、美佳子は問いかける。

「私が呆れている理由が分かる？」

「ぼ、僕が薬を持って行かなかったから…」

「違います」

「え、」

「薬に頼らないでいようと思い、実践に移したこと、母さんは偉いと思います。とても良いことです」

「じゃ、じゃあどうして、」

美佳子の相貌に苛立ちが浮かび、愁は身を固くする。そんなことも分からないのかと言外に言われているようで、居心地が悪い。

「実践に移すときに、芝貫の人間といたことですよ！！」

「！」

「次男ならいざ知らず、よりによって長男と！しかもあなたが原因で長男が喧嘩に巻き込まれたと向こうに知れたら！ああ、考えるだけでおぞましい！！何故芝貫の者と、あの長男といるときにそんなことを実践したのですか！」

「そ、それは……謡さんといたら、大丈夫だと、思っ、」

「笑止！芝貫の人間といて大丈夫だと思うとは何事ですか！芝貫がどんな人間か、お前もよく知っているでしょう！」

確かに母や父から芝貫グループや、芝貫家の人々の実態がどのようなものか聞いてはいた。誇張も含まれてはいるだろうが、根本的なところは一致しているだろうと。でも、

「う、謡さんはそんな人じゃないっ。母さんたちが思ってるような人じゃ…」

「黙りなさい！」

「っ！」

鋭い平手打ちが、愁の右頬に炸裂した。

「よくもそのようなことが言えますね！」

もう一発平手打ち。

「お父さんが、あいつらのせいでどのような目に遭っているか分かっていてお前はそんなことを言うの!？」

「ご、ごめんなさい…ごめんなさい」

「良いですか、愁！あの謡とは深く関わらぬように！家庭教師をされているというだけで、この家に入られるだけでおぞけが立つような人間とは深く関わらぬように!！」

「……はい、お母さん」

愁が項垂れるように頷くと、ようやく怒りの矛先を収めたのか美佳子はふうとため息をついた。

「もう良いわ。部屋で休んでいなさい」

「はい、」

愁は立ち上がり、美佳子の部屋を出た。項垂れたまま上がる階段の途中で、自分の不甲斐なさに涙が零れて来た。

（謡さんは全然悪くないのに。僕のこと、必死に守ってくれようとしたのに、僕は……母さんに何も反論できなかった。叩かれるのが嫌で、僕は、逃げたんだ……）

謡の、心配そうに自分を見る瞳が思い出されて、愁は部屋に入るなり声を上げて泣き始めた。

出逢い

初めて謡と出会ったのも、こんな雨の日だったな……と楡乃木涼子は雨に打たれながら思った。本降りの雨の中、傘を差すこともなく、悠然と雨に打たれながらベンチに腰かけている彼女を、誰も彼もが物珍しそうに見ながら通り過ぎていく。だが涼子にそんな視線は何の動揺も与えない。荒れ始めた海原を遠くに見ながら、初めて謡と出会ったときのことを思い出していた。

「あの、傘、無いんですか？」

五月半ばの五月晴れで始まったその日、午後四時頃からいきなり曇天になり大雨が降り始めた。

天気予報では終日快晴だったため、突然の降雨に人々は傘もなくハンカチや鞆などで頭を雨から庇いながら地上を早足や駆け足で道を急いだ。そんな中であつて、涼子は公園のベンチに傘もなしに座つて雨にけぶる海原を眺めていた。そこに、声をかけてきたのは学生服の少年だった。涼子が顔を上げると、少し幼さの残る顔が優しく微笑んでいた。何処と無く気品のある雰囲気を感じて、思った記憶がある。

「僕予備があるから、良かったらこれ使つて下さい」

少年が傘の柄を差し出して来るが、涼子は顔を海原に向け直し、有り体に言えば少年の言葉を無視した。傘など必要ないと無言の拒絶を示したつもりなのだが、少年は気付いたのか気付かないほどに鈍感なのか何故か涼子の横に腰を下ろしたのである。ベンチは濡れているというのに、何の抵抗もなく。涼子は一瞬少年を見たが、少年が気付いた瞬間にすぐ視線を戻した。

「寒くないですか？」

「……………」

「海を見るの、好きなんですか？」

「……………」

「僕は好きです」

「何か用か」

「いえ。何だか声をかけたくなくて、勇気を出してみただけです」
面白いことを言う、と涼子は思う。それでも涼子は少年の方に体を向けようとはしないでいた。他人とは一切関わる気はなかったからだ。毎日この公園のこのベンチに座っているのは、“ある目的”のためなのだから。それ以外には一切心を動かされることはない——というより動かす気はなかった。少なくとも、初めて少年に会った頃は。「本当は、もっと早く声を掛けてるつもりだったんですけど」
「……………」

涼子は無言で立ち上がった。一度立ち去り、少年がいなくなったらまた戻ってくるつもりで。

「あ、帰るんですか。じゃ、僕もこれで」

なのに少年はあっさり自分も腰を上げ、さっさと去っていく。涼子がかげ動いていない内に、後ろを振り返ることなく。

「なんだ、あれは」

思わず出た本音に、涼子は少しだけ少年に面白みを感じていた。

あれから時が経ち、今では普通に日常会話までするようになった。謡が芝貫グループの第一子息であると知ったときは驚いたものだ。今や政財界、不動産業界に絶大なる力を誇る、大会社の跡取り息子。「僕は、父の跡を継ぐ気はありませんよ」

ぽつりぽつりと話をするようになった、ある六月初旬の火曜日。学校帰りに謡が公園のベンチに寄ったことがあったが、その時にそんなことを言い出した。「そうなのか？将来安泰な気がするが」

クスツ、と小さく笑い、

「僕は気楽に生きたいから、庶民が合ってます」

庶民でも波瀾万丈な人生を送る人間は沢山いるが、と涼子は思う。

「確かに：君は人の上に立つのが下手そうだな」

この時、まだ涼子は謡を君と呼んでいた。

「引率力がないというより、色々考え過ぎて行動に移せないでいるうちに会社を潰しそうだ」

「あ、それ良いですね。あの人の面目を潰す良い機会だ」

どうやら謡は父親とうまく行っていないだろうことは薄々感付いてはいたが、これでハツキリした。

「君は父親のことが嫌いなのか」

あからさまな問いに、謡はやけに透き通った笑みを浮かべた。

「今日も収穫なし、か」

涼子は小さく呟いて、ベンチから立ち上がろうとした。その彼女の肩を掴む者がいた。

「！」

ぐるっ、と振り向くが、そこにいたのは一番会いたくない相手だった。

「やあ。“彼”だと思った？」

「お前か」

「あたしで残念でした」

いつもと同じ半袖のコートを着た女が、イタズラ好きな子供のような笑みを浮かべて涼子を見ている。

「何だ」

「“彼”を待ちわびてるあんたに、楽しいお話を持ってきたよん」
いちいち彼という単語を出す相手に、涼子は徐々に苛々としてきた。
だが素直にそれを示せば、相手が喜ぶのが分かるため、抑える。素

知らぬ振りをするのは昔から得意だ。「彼」に似てる子見つけたよ。何か痛い目に遭ってたから、助けてあげたんだよ」

だらだらした喋り方に、涼子は思わず口端をひくつかせる。

「そう。おめでとう」

「何かちっちゃい子と一緒にだったけど」

「ちっちゃい子？」

何故か不意に、謡と一緒にいたパーカー姿の少年の姿が思い出される。小さい子など掃いて捨てるほどにいるのに、何故あの子のことを思い出したのだろう。

「用がないなら帰るから。じゃあね」

相手は呼び止めることはなかった。背中を見つめられているのを承知しながら、涼子は泰然と歩き出した。

苛め（いじめ）

会社は大きく裕福な暮らしが可能ではあるが、今謡が家族と暮らしている家は何処にでもある二階建ての一軒家である。少し大きくらいで、内装が華美であるといったこともない。

「なあ兄貴」

そんな家のリビングに、謡と誓はいた。

「何、誓」

誓はクリーム色のソファにだらしなく凭れてテレビを見ており、謡は誓の弁当箱を洗っていた。

「明日は学校行くの？」

何気無い問い。誓に他意がないことは、今まで一緒に生きてきて十分に分かっている。謡は微かに眉を顰めたが、返す声は落ち着いていた。

「……そのつもりだよ」

下駄箱に入っていた、脅迫文めいていた手紙は部屋の机の引き出しに突っ込んだまま。教科書の間に挟まれていたカッターナイフの刃は未だに謡の記憶の中で鋭い光を放っている。誓はそっかあ、と気の抜けた口調で言い眠そうに目を擦った。

「ご飯出来たら呼ぶから、少し休んでたら？」

「ん、じゃあそうする……」

誓はふらふらと立ち上がり廊下とリビングを繋ぐドアのノブに手をかけた。そして何かを思い出したかのように、

「あ」

と呟いて謡を振り返った。謡はどうしたのかと誓を見返す。

「どうして兄貴はそんなに我慢するのか、俺には不思議なんだけど

」

「！」

「んじゃ、料理よろしく」

動揺して皿を取り落とした謡には構わず、誓は弛い感じで笑ってリビングを出て行った。

「……我慢、か」

いい得て妙な弟の言葉に、謡は微かに自虐的な笑みを浮かべた。

「今日も芝貫、来なかったなあ」

謡と誓が学生としての籍を置いている学校―私立鵬命学園高等部の二年E組の教室。

そこにはまだ四人の男子生徒が残っていた。

有名私学ということで校則も厳しいためかこれと言って制服や髪型に手を加えているわけではないが、あまり普段の生活態度が良いとは思えない印象の生徒ばかりだ。特にその内の一人は目付きが鋭く気の弱い人間ならば一睨みされただけで腰砕けになりそうなくらいだ。その彼―藪内奏はふんつ、と荒い鼻息をはいた。

「あれだよほら、あの剃刀事件。あれやりすぎだったんだよ」

舞田孝治―身長が高くやけに細い―がケラケラと声を立てて笑う。

「確かになあ。芝貫の奴、顔真つ青にしてさあ。ありゃあ最高だったべ」

「俺も見た。いつも澄ました顔してる奴が泣きそうな顔してるの。笑えたなあ」

舞田に、倉橋祐介―恰幅がよく背は低い―が追従する。

「なあ、渉もそう思うだろ？」

四人のうち最後の一人、藍田渉―小柄で中学生くらいに見える―は、ビクツと体を震わせたが、小さく頷く。

「う、うん……」

「おい渉」

「！な、何、」

藪内奏に呼ばれ、渉は顔をはねあげた。

「お前、裏切るつもりじゃないよな」

「……！」

「？何の話だ？」

舞田たちが興味津々、といった感じで割り込むが、藪内の視線は一瞬たりとも渉から逸らされない。渉は怯えながらも藪内の視線から逃れられないでいる。

「俺の知り合いがな、お前と芝貫が話してるのを見たって言うててな。随分楽しそうだったそうじゃないか」

藪内が腰かけていた机から立ち上がり、渉に近づいていく。渉はそれに気圧されるように下がろうとするが、舞田と倉橋に肩を押さえられる。藪内が近づいて来る。渉は必死で首を何度も左右に振る。

「ち、違うよ。あれはたまたま、」

「たまたま、なんだ」

高い位置から見下ろされ、渉は息苦しさに俯く。藪内の視線が痛いくらいに渉の心をさす。「そ、れは……その、」

頭がうまく回らない。渉は目の前で膨れ上がる苛立ちの気配に身を竦ませた。

『僕といたら、君まで苛められてしまうよ』

そう言つて悲しげに笑う芝貫の顔が思い出されて、渉は更にどう言い訳をしたら良いのか分からなくなる。それでも何か言おうとしかけたが、

「……もう良い」

苛立ちの気配は一気に収縮し、渉から離れた。顔を上げると、藪内はもう渉を見てはいなかった。

「お前がそういうつもりなら、俺にも考えがある。舞田、倉橋、帰るぞ」

「あ、ああ」

妙な空気に気後れしながらも、舞田と倉橋は藪内に従つて。

「……………」

残された渉は、へなへなと腰を抜かした。

「どうしよう、」

謡への苛めは激しくなる。渉はその予感を感じていた。

「……………」

煮物を似ている間、謡はキッチンから出て自室に入っていた。机の引き出しを開け、奥のほうに仕舞っていた“それ”を震える手で掴み、四つ折りの状態を解いた。吐き気を催しながら、ゴシツク体の黒で書かれた文面に目を落とす。

『死ね、死ね、死ね。死なないと、どうなるか分からないぞ。お前も、家族も、友人も』

誰が何のためにこんな手紙を自分に寄越したのか、謡には見当が付かなかった。

父は確かにワンマン経営者として知られ、社員を不要だと思えばバツサリと切り捨て、非合法すれすれのことでも沢山していた。

だが息子である自分にまで敵意を持つものなのだろうかと思ったりもした。

だがそれが思い上がりだったことを、謡はすぐに知ることになる。教室にいと、時たま感じていた悪意。嫉妬心。それが破裂したように感じたのは、先週の月曜日のこと。たまたま土曜日に忘れて机の中に置きっぱなしになっていた英語の教科書を開いた瞬間、人差し指に走った激痛に、謡は目を剥いた。何と、そのページの下部にカッターナイフの刃が貼り付けられ、それが謡の指に刺さったのである。痛みは指だけでなく、心にも広がった。顔が青ざめていくのが自分でも手に取るように分かった。しばらく謡は動けず、一年の教室から兄に漢和辞典を借りに来た誓に声をかけられるまで指から溢れる血も垂れ流しのままだった。

（…傷は塞がったはずなのに、まだ痛い）

刺さった痕は残っているものの、傷は塞がった。なのに、今もじく

じくと痛むことがある。今手にしている手紙を思うときも。

「……………」

クラスメイトの中に、自分に悪意を持つ者がいることは明らかだった。でもそれに立ち向かう気が、謠にはどうしても起こらないでいた。

揺らぎ

「あんたは……。いつまでそうやって泣いてるつもりよ？」

布団に潜り込んで泣いていた愁に、かかる声がある。姉の匂だ。

「だ、だって…… 謡さんは何も悪くないのに、僕を助けてくれたのに……」

言う側から涙が零れて冷たくなったシーツを更に濡らした。匂がため息をつく気配に次いで、ガバツと掛け布団をはね除けられる。

「泣きすぎ」

「っ」

姉は本当に意地悪だと思う。愁がどんな想いで泣いているかも知らないで。なのに、どうして笑顔を見ていると泣きたくなるくらい安心するのだろう。

「ほら、姉の胸に飛び込め」

「……」

愁は小さく頷いて、姉にすがり付いた。

「ね、姉さんっ」

「うん」

背中を撫で、髪をすく手が心地よい。言い様のない不安が軽くなるのを感じる。

「僕、母さんに何も言えなかった。謡さんはとても優しい人で、母さんが思ってるような人じゃないって……！でも、叩かれるのが怖くて、謡さんのこと、何も言えなくて……」

支離滅裂になっていないか不安に思いながらも、愁は言う。匂の腕の中で、自分の気持ちを吐き出す。匂は何も言わず、うんうんと頷いてくれている。

「謡さん、僕のせいでおじさんに怒られて……なのに大丈夫って、笑って、そんな、人なのっ、に……っ！僕は、僕は……っ」

「あんたは本当に優しい子だね」

「う、うう」

「気の済むまで泣けば良いよ。お姉ちゃん、付き合っただけから」
優しい口調で紡がれ、愁は更に涙腺が弛むのを感じた。

手紙やカッターナイフのことを心の奥に押し込めた謡が調理を終えたのは、午後七時半頃だった。テーブルに料理を並べて誓の部屋のドアをノックしたのだが、返事がない。眠り込んで気付かないのだろうか。

「誓？入るよ？」

案の定、誓はベッドでぐっすりと眠り込んでいた。しかもヘッドフォンをつけたままだ。これじゃあ気付かないよな、と苦笑して弟の肩を揺するうとした時だった。

「え、」

あの“手紙”が、あった。口の開いた誓の鞆から覗く真っ白な紙。ぐしゃぐしゃにされているが、ゴシック体の文字が見えたのだ。死ね、という単語が謡の目に飛び込んでくる。足元が揺さぶられた気がした。

（……誓も俺と同じ目にあってるのか？）

誓は楽しい夢でも見ているのか、ふふつと口を綻ばせた。

（…………）

鞆に手を伸ばしかけて、謡は止めた。これは誓のプライベートなことだ。兄とはいえ、誓から何も相談をされないままに触れてもいいのか判断が付かない。

「む…ん、兄貴？」

「！誓、」

気付けば誓が薄目を開けて謡を見上げていた。ヘッドフォンを外し、いつも通りの締まりのない笑みを浮かべる。

「何かいい匂いがするなあ…。飯、出来たの？」

「あ、ああ。食べよう」

「ふーい」

誓は目を擦りながら立ち上がる。手紙のことを聞こうかどうか迷ったが、結局口には出せなかった。

「きっとこの海は何年経っても変わらないはずだよ。だから、僕も君も好きなこの海を目印にしよう」

私は目印、という言葉にくすぐったい気持ちになった。

「目印？」

「そう。僕たちが生まれ変わってもまた会えるように。この海を目印にしよう」

「生まれ変わって、お互いがまた出会うかしら」

彼は私の肩を引き寄せ、優しい笑みを浮かべる。私は彼のその笑顔が大好きだった。

「大丈夫。僕は君をとて愛しているから。必ず君を探し出すよ」

「……信じて待ってて良いの？」

彼の手が私の髪を優しい手付きですく。くすぐたくて、私は首を竦めた。

「ああ。僕を信じて」

「……はい」

私は幸せな気持ちで、頷く。“あれ”がすぐ側まで迫っていることに、全く気付きもせず。

「はあ、またか」

涼子は額に手をやって、雨は止んだものの、どんよりしたままの空を見上げた。微かに頭が痛む。そして見た“夢”に、憂鬱な心持ちになる。加えて、時が経つほどに“彼”の顔を思い出せなくなっている。それが悔しくて、ベンチに座ったまま俯く。そこに近づく影。
「やつぱり、いた」

「！謡？」

芝貫謡が、いた。軽い笑みを称えて。

「こんばんは。……夜に会うのは二度目、かな……」

「……親が厳しくて夜は出歩けないのではなかったのかな」

謡の格好は夕方に会ったときのままだ。

違うのは一人だということと、夕方の穏やかな顔と違って悲しそうな顔をしている、ということ。

「父は今日泊まりみたいですから」

平坦な口調。謡は父親のことになるとあまり感情を挟まないが、今日は特に感情がこもっていない。どうでもいい、と言外に言っているような気がする。「父親と何かあったのか？」

まあ素直に答えることはないだろうな、と思いながら涼子は軽い気持ちで訊いたのだが。

「……何か、つてないほうが珍しいですよ」

「……謡？」

「あの人は僕がロボットでいた方が喜ぶんですよ」

何かおかしい。謡にしてはひどく自虐的だ。普段の謡なら、自分は大丈夫だ、と笑って想いを封じ込める。悩んでいると思われないように平気な顔をする。

「父親……とのことだけじゃないみたいだな。今日も学校に行かなかったのか？」

謡が学校を休みがちであることは、涼子も気付いている。今日のような夕方は別にして、学生なら学校にいて然るべき真っ昼間から涼子に会いに来ることも何度かあった。だが涼子は特に咎めることも休む理由を追及することもなかった。今のは、普段と違う謡の様子

にあてられて無意識に出た言葉だ。

「……やっぱり、気付いてましたか」

はは、と空虚な笑いが謡の形のよい唇から漏れる。

「何となく、だが」

「まあそうですね。平日の昼間から、榆乃木さんに会いに来れば誰だってそう思います」

「………今日はどうも変だな。やけに感傷的じゃないか」

涼子がそう言ったとき、

「あ、待ってってば！」

少し高い少年の声が静かな園内に響いた。

「？」

ついで、ちたちたちた、という軽い音。謡を見れば、彼もその音に気付いたように軽く首を傾げている。

「犬？」

「…犬、だな」

まだ子供だろう小さな柴犬が、二人の足元にまで走ってきて、はっはっは、と呼吸をしながら二人を綺麗な黒目で見上げている。人間が珍しいのだろうか。微かに石鹸の匂いがする。

「す、すみません。僕の犬がつ」

柴犬を追ってやって来たのは、涼子から見れば中学生くらいの少年だった。背は155あるかないくらい。癖のない黒髪は綺麗に切り揃えられ、柴犬のように大きく綺麗な瞳が印象的だ。涼子は柴犬を抱き上げ、少年に差し出す。

「あ、ありがー！？」

涼子から柴犬を受け取るうとした少年が、謡を見て息を止めた。
「？」

釣られて謡を見れば、謡も目を見開いて少年を見返している。

「藍田君、」

「す、すみません」

我に返ったのは藍田と呼ばれた少年が先だった。栗を食ったように

慌てて柴犬を抱くと、脱兎のごとく走り去ろうとする。

「待って！」

「！」

謡の制止に、少年は素直に立ち止まった。

「あ、あの、藍田君に訊きたいことがあるんだ、」

「……」

藍田少年が恐る恐る振り返る。何に怯えているのだろう。抱き締められた柴犬が不思議そうに見上げている。

「あの日、僕と話してるところ見られたんじゃないかって不安になったんだ。君も、いじめられるようになったんじゃないかって、」涼子は眉をひそめた。君も、と謡は言った。まさか謡が？と涼子は思う。

「大丈夫？僕の知らないところでいじめられたりなんてしてない？」

「……バカじゃないの」

藍田少年の呟きに、謡が体を硬直させるのが分かる。

「藍田君、」

「じ、自分の心配だけしてれば良いじゃない」

「……そう、だね」

「それじゃ」

藍田少年は謡をまともに見ることなく、駆けていく。謡は呆けた顔でベンチに腰を下ろす。涼子は何も言えず、横に座っていることしかできなかった。

「はあ、はあ、はあ」

まさか謡がいるとは思わなかった。藍田渉は、公園からだいぶ離れた路地でようやく足を止めた。

「あんなこと、言うつもりじゃなかったのに……」

大丈夫だって。心配ない、って言いたかったのに。何で、あんな言

い方。

「お前が公園に入るからだ」

腕の中の犬を恨めしげに見下ろす。犬は不思議そうに歩を見返すだけだった。

確執

藍田少年が去ってから二分程して、謡は溜めていた息を吐き出した。その横顔は凝り固まり、受けた衝撃の強さを物語っていた。涼子は、しかし何も訊かない。

「何も、訊かないんですね。榆乃木さんは」

謡の声は酷く掠れていて、涼子の心は軽く震えた。

「私がそういう人間だということ、謡はよく分かっているだろう？」

「……まあ、」

謡は笑おうとしたようだが、強張った笑みにしかならない。「だが、聞かせられるのは、嫌じゃないよ」

謡がこちらを勢いよく向いたのを気配で感じ取ったが、涼子の目線は前を向いたままだ。意外なんだろうな、と涼子は思った。

「僕のこと変とか言いながら、榆乃木さんも今日は何か変ですね」

「………」

そつかかもしれない。きっとあの“夢”のせいだ。あの“夢”を見ると、しばらくは自分が自分ではなくなるから。

「……今の、藍田涉君って言って、僕のクラスメイトなんです」

謡は静かに話し始めた。波の音を背に。

「藍田君と僕は、クラスメイトと言っても大して接点はありません。でも、藍田君の幼友達の子とは、衝突が多くて……」

衝突という単語は謡に相応しくないと涼子は感じた。恐らく一方的に因縁を付けられているのだろう。

「……自然と藍田君もそちらがわにつくような格好になって」

謡は悲しげに笑う。

「そんな中、ちょっと前に藍田君と話す機会があつたんです。学外で互いに一人きりだったからか、藍田君も普通に接してくれて……。だけでもしその場面を誰かに見られて、告げ口みたいなことをされたらって思うと、心配で……僕と話したせいで藍田君まで……」

謡が不自然に息を詰まらせる。だが謡は続けた。苦しげに目を閉じて。

「……いじめられたら、って」

これで謡が学校でいじめられていることが明らかになったわけだが、もしその藍田がいじめられているとしたら、謡はどうするんだ？」

「……えっ？」

予想外の質問だったのか、謡が声を上げる。少し上擦った声を。

「謡のせいでいじめられていると知ったらどうするんだ？ 藍田を庇うのか？」

「そ、それは……そうですね。本来いじめられない人が僕のせいでいじめられているのなら、助けなきゃ……」

「だが藍田はお前がいじめられているのを見ても助けてはくれないのだろう？」

意地悪な質問だとは思う。だが回り出した口は止まらない。謡の顔が街灯の下でひきつつていく。

「そ、それはいいんです」

「何が？ 謡はいじめられるようなことをしたのか？」

「榆乃木さん、どうしたんですか？ 何かおかしいですよ、」

「そうか、おかしいか。こんなおかしい奴と話すのが嫌なら早く帰れ」

私は何をこんなに焦っているのだろう。涼子は今喋っているのが自分ではないような違和感を感じていた。頭の奥が妙に熱い。何だ、この感覚は。

「あ、あの、」

謡が涼子の様子を不審に思った矢先、ズボンのポケットに入っていた携帯電話が振動した。

「……っ」

液晶画面を見た謡の目が見開かれる。父さん、と声もなく唇が象つたのを見て、涼子の頭は急速に冷えていく。

「早く帰ったほうがいい」

「……もしもし」

謡が電話の相手に言った瞬間、涼子の耳にも怒声が聞こえてきた。何故なら、声の主はすぐ側まで迫っていたからだ。謡の面影があるが、彼よりも体格は良い。太っているのではなく、筋肉質という意味で。

「と、父さん、」

怯む謡の腕を、謡の父―芝貫春樹が掴む。

「こんな時間にこんなところで何をしている」

整った顔立ちが怒気に歪んでいる。涼子には気付いているだろうが、怒りに燃えた瞳が彼女に向くことはない。

「と、父さんは何でここ……っ、」

「訊いているのはこちらだ!!」

謡が顔を痛みに歪めて呻く。涼子から見ても、謡の腕を掴む父親の手がかなりの力を込めているのが分かる。

「は、春樹さまっ」

父親からかなり遅れて現れたのは、スーツ姿の生真面目そうな青年だった。右手にキーらしきものを持っているから、車の運転手か何かだろう。年は二十代後半くらいか。かなり背が高いが威圧感がないのは、穏やかそうな風貌のためだろう。

「乱暴はっ、」

「神楽は黙っていなさい。私は今謡と話しているんだ」

「し、しかし」

「謡、お前はいつも次期社長としても気構えが足りないようだな……?」

神楽という青年との会話を打ち切り、芝貫春樹が低く沈んだ声を出す。ビクッ、と謡が肩を震わせる。

「また以前のようにしばらく“勉強会”をしなければならぬのか?」

「……!」

「春樹さまっ」

「それが嫌なら少しは分別を身に付ける！」

再び怒鳴り、父親は謡を殴り付けようと空いている手を振り上げた。
「……！」

ぎゅっと目を閉じて首を竦ませ、

「……何だ、お前は」

という父親の声に恐る恐る涙の滲んだ目を開ける。

「に、れのきさん……」「うるさい」

「何だと？」

涼子は横目で父親を睨みながら、彼の手首を締め付ける。

「何だ、貴様！」

「うるさい、と言っている」

海の音が聞こえないじゃないか。“彼”が愛したこの海の、優しい音が。無粋な人間のせいで。

「自分一人でぎゃあぎゃあ叫んで、恥ずかしくないのか」

「榆乃木さん、もう良いからっ」

「勘違いするなよ、謡」

「……！」

出会った当初のように一切の抑揚がない、突き放したような口調に、謡は硬直する。

「お前のために怒ってるんじゃない。私は私の理由で怒ってるんだ」
ギシッ、と骨が擦れるような音が父親の手首から発される。

「ぐっ、」

「お前ら、早く消えろ」

“彼”がいつここに来ても大丈夫なように。私をすぐに見つけられるように。静かに、しろ。

「春樹さまっ」

神楽青年の声に、涼子は父親を解放する。

父親は涼子を睨み付けるが、涼子はすでに海に注意を戻している。
謡の顔も、見ない。

「にれ、」

「謡、帰るぞ。お前に話がある」

「……はい、父さん……」

父親が大腿で苛立たしそうに公園の出入口に向かう。神樂が従う。

「楡乃木さん、」

話をしたかった。例え自分のために父親の手を止めたのでなくとも、お礼を言いたかった。なのに、

「早く帰れ」

涼子の口から発されたのは素っ気ないそんな言葉だった。

「……すみません、でした……」

涙で視界が滲んだ。謡は滲む視界にいる女性に頭を下げ、駆け出した。涼子の赤いリボンが血のように見えたのはどうしてなんだろう。

……。

無力感

暗い気持ちで自宅前にたどり着いた藍田渉だったが、門前にいる人物を見て、呼吸が止まるかと思った。鋭過ぎる瞳、均整のとれた体躯。短い髪はワックスで固めてたてている。そんな少年の瞳が、渉を捉えた。

「よう、渉」

「ど、どうしたの……こんな時間に」

何も疚しいことはしていないのに、偶然とは言え謡と会い会話までした身としては、居心地が悪い。そんな渉に、幼友達の藪内奏がゆっくりと近づいてくる。

「おばさんに訊いたらチコの散歩に行ったって教えてくれたから、待たしてもらってた」

「な、なら中で、」

柴犬一名前はチコーが渉の腕の中で嬉しそうに尻尾を振る。だが藪内の目は渉から少しもぶれない。

「……………なあ、渉」

「な、何？」

「本当なんだな？」

「…え？」

「芝貫と話してたっていうの」

「っ、」

渉は思わず藪内から視線を逸らした。それが渉の後ろめたさを示し、藪内の懸念が真実なのだと彼に知らしめた。藪内はふうん、と頷いて、

「やっぱり本当だったんだな。俺の前でも芝貫の前でも良い顔してたってわけか」

「ち、違っ、」

「何が違うんだよ。俺がいないところじゃあ芝貫に尻尾を振って、

芝貫がいらないところじゃあ俺に尻尾を振ってたんだろ」

「そ、そんな言い方、しなくても……」

ずっと仲のいいと思っていた幼友達から発された暴言に、渉は悲しくなる。だが同時にこれは自分が招いた結果なのだと諦観してもいる。相反する感情に、渉は不安になる。

「……………お前の考えは分かった」

小さく呟き、藪内は渉に背を向ける。

「あ、」

「話はそれだけだ。邪魔したな」

「奏君！」

思わず下の名前で呼んでしまったが、藪内は何の反応も返してくれなかった。暗い夜に消えていく。

「くうん？」

俯く主人の腕の中、柴犬のチコがもの悲しげに鼻を鳴らした。

泣き疲れて眠ってしまった弟の部屋を静かに出て、匂は膿んだため息を吐き出した。

（……………愁があんなに感情を剥き出しにするのは久しぶりだったな）
それほど愁にとって謡の存在は大きいのだろう。本当の兄のように慕っているのだ。

「母さん、」

母の美佳子は、赤くなった目で娘を見た。料理の仕度を一切していないところを見ると、彼女は彼女なりに息子のことで頭が一杯なのだろう。

「今日は何するの？私するから母さんは休んでて良いよ」

「ねえ、匂」

疲れきったような声に、匂は背中を微かに震わせたが、努めて明るく応える。

「なあに？母さん」

「正直に、答えてね」

「だからあ、」

「匂も、芝貫の長男を慕っているの？」

そこに責めるような色はなかったが、不思議で仕方ないといった色が込められていた。

「……愁は芝貫の長男を慕ってる。気付いてたけど、これ程とは思っていなかったわ。正直、ショックよ」

「そんなに…？」

「だってあの父親は、あなたたちの父親を貶めたのよ？敵なの」

「て、敵って大袈裟な……」

「敵なの。なのに、愁は敵の息子なんかを慕って……」

愁が可哀想だ、と匂は思う。愁は優しくて他人想いの謡を慕っているだけだ。人見知りしがちな愁が心を開ける人なのに。匂はやるせない気持ちで母親を見つめる。彼女の気持ちも分かるだけに、やりきれないのだ。「私は、」

匂が答えようとしたとき、静かだった屋外から男の喚き声が聞こえてきた。母親が顔を強張らせ、窓を振り返る。カーテンをしているため外は見えない、が。

「……匂、ごめんなさい。母さん、先に休むわ」

「え、あ…うん」

母親の顔色はお世辞にも良いとはいい難く、匂は頷いていた。母親がダイニングを出ていき、匂は嫌な予感がして着けたばかりのエプロンを脱いだ。今の喚き声が本当に謡の父親のものなら…と危惧したからだ。以前も同じことがあったとき、謡は次の日から一週間家から出して貰えなかったらしいのだ。謡の家庭教師がぶつくり途絶えてしまったために不安になった愁が匂に相談をしてきたため、誓に謡のことを訊いたのである。すると誓は気の抜けた笑みを浮かべ、「兄貴なら親父の怒りを買って閉じ込められてる」

と普通に言った。兄がそんな目に遭って怒った様子もない誓に呆れ

たが、それ以上に謡のことが心配だった。あの時は謹慎を解かれた謡はひどく憔悴していたが、匂や愁にはいつも通りの優しい態度で接してくれた。だが謡の心のダメージは大きかったはずだ。

「……」

匂はダイニングを飛び出し、外へ出た。

「おじさん、謡さん！」

「に、匂ちゃん……」

謡は父親に引き摺られるように歩いていた。謡は匂に反応を返したが、父親の春樹は端から無視だ。匂の存在などとるに足らないとでも言いたいのだろうか。

「おじさん！」

春樹を呼び止めてどうしたいのか、匂は一切考えていなかった。だが荷物を運ぶかのように謡を引き摺ることを止めて欲しかった。

「おじさん！」

「何だ、煩わしい!!」

怒りの矛先が匂に向かったと思ったのだろう、謡が声を上げる。匂に、家に帰るようにと。

「匂ちゃん、僕は大丈夫だから」

「だ、だけど謡さん、」

「匂ちゃん、お願いだから。……ね？」

どうして？匂は思い、何も考えずに怒鳴っていた。

「どうして!？」

「に、ほちゃん……」

春樹が邪魔臭そうに匂を睨み付ける。だが匂は怯まない。

「謡さんはどうしてそんなに我慢するの!？おじさんは、どうして謡さんを大事にしないの!？親子でしょ!!？」

「匂ちゃん、僕は、」

「愁が泣いてたわ！」

「……愁君が？」

「謡さんは優しくて良い人なのに、母さんの誤解を解くことが出来

ないって。謡さんは自分を助けてくれたのに、自分は母親に何も反論出来なかったって泣いてたっ！」

薄闇の中、謡の顔が歪む。だがそんな謡と、匂の間に春樹が立ち塞がる。

「父さんっ……」

「悪いが大事な跡取りに余計な感情を与えないでくれんか」

高圧的な口調。匂は震えを押さえ込みながら、真っ向から対立する。春樹を見据え、

「余計ってどういう意味ですか」

「経営者に情は必要ない、という意味だ。ただではえこれは経営者には向いていない質なのに、これ以上使い物にならないことを助長させるわけにはいかんのだよ」

これ。今、息子を“これ”と言わなかったか？匂は春樹にさらに不快感を抱いた。本当に謡さんが可哀想だ。

「そんな言い方っ」

「匂ちゃん、もう良いから」

悲しげな謡の声が、匂の胸を震わせる。何が良いんだ、と腹立たしくさえる。「何が良いんですか？謡さん苦しいでしょ、悲しいでしょ！？」

「訳の分からんことを言うなっ！！」

春樹が匂を突き飛ばそうとする。

「父さん、止めてっ！」

謡が父親の腕を掴む。

「匂ちゃん、早く家に帰るんだっ」

「嫌です！」

「に、」

「放せ、謡」

「っ！！」

春樹に片手で突き飛ばされ、謡は地面に倒れ込んだ。

「謡さんっ！！」

「親が親なら子も子だな。謡、帰るぞ」

春樹はもう匂を見ることなく、自宅のほうへ歩いて行く。

「う、謡さん大丈夫ですか!？」

匂が謡に駆け寄ると、謡は昼間の怪我の残る顔で緩く微笑んだ。以前目にした透明な笑顔に、匂は胸が痛むのを感じた。そんな顔で笑わないで欲しい。いつもの、優しい朗らかな笑顔をして欲しい。

「謡さん、私……」

「ホントに、大丈夫だから……ね？」

「謡さん、」

「おやすみ、匂ちゃん」

謡は匂の頭を優しく撫でると、父親のあとを追った。その背中がいきなり消えてしまいそうで、匂は怖くなった。

「私じゃ、謡さんは助けられないの……かな」

小さく呟き、匂は自分の無力さに一人項垂れた。

其々（それぞれ）の夜と朝

バタンツと、玄関が荒々しい音で閉められるのを聞いて、うつらうつらしていた誓は目を開けた。

「んあゝ、兄貴かな」

目を擦り擦り顔を上げてダイニングと廊下をつなぐドアを見た。影が見え、ダイニングに入ってきたのは、誓の予想通り兄の謡だった。

「兄貴、お帰り」

「誓、」

謡が何かにすぐるような目で誓を見た。兄にしては珍しい目だ、と誓にしては鋭く気付く。

「ただいま、」

弱々しく笑う謡の背後から、父の顔が覗く。機嫌が悪いのは明らかだが、誓はいつもの緩い笑みで父を迎えた。

「お帰り、父さん」

「ああ」

誓の顔をまともに見ないまま、春樹はキッチンへ行く。帰宅後お決まりの一杯のためだろう。いつもの光景だ。

「？」

だから春樹が水道水をコップに入れて此方に戻ってきたとき、誓は少し違和を感じ取った。

「謡」

「……………」

呼ばれて顔を上げた謡の顔に向かって、春樹はコップの水をかけた。謡が愕然と春樹を見上げる。春樹の目は底冷えしそうなほど冷たく、謡はガタガタと恐怖に体を震わせた。

「と、父さん……………」

「少しは頭を冷やせ…………軟禁されたいなら別だがな」

親が子に向かって言うセリフではない。だがこの場にそう感じる存

在はない。謡は自分が悪いのだから当然だと思い、春樹は息子が悪いのだから当然だと思い、誓はこれが我が家の日常茶飯事だから普通だと思っているからだ。春樹はそれ以上何も言わず、無言でダイニングを出た。誓は俺も寝よう、と呟く。

「兄貴、おやすみ」

「あ、うん。おやすみ…」

謡は暫にそう応え、春樹が落としたコップを拾った。拾うために俯いた黒髪の中から、水滴が一滴、落ちた。頬を伝う透明な液体は、無視した。

意気消沈した匂は、俯きがちに帰宅した。恐らく部屋で休んでいる母親と愁しか家にはいないため、屋内はしんと静まり返っている。

「父さん、」

仏間に行き、父親の写真の前に座る。

「私じゃ、謡さんを助けられない…？」

自分なんかが他人を助けようと思うことが烏滸おこがましいのだろうか。でも、謡が無理をしているのは明らかだ。さっきの、透明な笑みが匂を捕えて放さない。謡が明日になったら急にいなくなっているような気がして、怖い。

「だ、ダメダメっ」

匂は慌てて首を何度も左右に振った。そんな不吉なこと、考えたらダメだ。

（もう今日はダメだ……）

匂は仏間を出ると、自室のベッドにもぐり込んだ。

「あんな風に突き放して良かったん？」

涼子が海を眺めていると、急に現れた人物に質問をされた。

「…見てたの？」

「見てはいないよ。聞いてた」

涼子の分かる範囲で言えば、半径一キロにはいなかったように思うのだが。

「相変わらずの地獄耳ね」

「ありがとね」

「……………」

話す気力は一気に失せた。

「まだ質問の答、貰ってないよ？」

「答える義理はないでしょう」

「あの子すごいシヨック受けてたなあ。特にあんにすげなくされたとき」

十分見ているじゃないか、と涼子と思う。話すだけ無駄だと判断し、涼子は黙る。海に神経を集中させようとする。だが、

「私が言ってたの、さっきの子だよ」

という言葉には思わず反応してしまった。

「何が？」

「だからあ、“彼”と似てる子に会ったって言ったでしょ？それが、さっきの子」

「……………」

自分が謡に感じていた既視感を、こいつも感じていたのか、と思う。

『君は、生きて』

臨終間際の、“彼”の言葉。目は抉りとられ、真っ赤な眼窩が涼子を見上げている。

『もう君を見ることも守ることも出来ないけど、必ず、また会えるから…その時は、また』

それが、最期の言葉。

「またフラッシュバックが来てるな」

「…………… 謡が本当に“彼”だとしても、まだ目覚めていないもの。ならば、謡は謡でしかなく、“彼”ではないわ」

「だから突き放した？」

「そう思いたいなら思えば良い」

涼子は二べもない。相手は苦笑して、肩を竦めた。

翌朝。泣き疲れて眠ってしまったのだろう、謡はダイニングで目覚めた。

「朝、か」

今日は学校に行かなければ。春樹は今のところ学校を休むことには言及しては来ない。

だが謡が学校を休みがちな人には気付いているだろうし、神楽から逐一報告が届いているはずだ。それでも春樹が何も言わないのは、彼の中では“学校”というものは大したステータスを有していないからだろう。どちらかと言えば、自分が手配した家庭教師を信頼していると言える。またはその他の習い事など。

（そう言えば今日は村主先生がお見えになるんだっけ……………）
春樹が手配した家庭教師、村主竜司。東大の三年生である彼は、穏やかな気性の持ち主で忍耐力もあるため家庭教師に向いているとは思う。思うが…、

（あの時は、怖かった……………）

父の怒りを買って、部屋に軟禁された翌週の家庭教師の日に来た竜司に、つい春樹のことを話してしまった。父さんが怖い、と。すると竜司は柳眉を吊り上げ、大きな声で捲し立てたのである。

『あの人は君を思つてなさっているのに、何てことを言つんだ。そんな戯れ言をぬかす暇があるなら早くこの問題を解け!』

そして机の上の謡の手のひらをぴしゃりと叩いた。意外と力がこもっており、謡は驚きと痛みに襲われた。あれ以来、竜司には勉強のこと以外話すことはなくなった。勿論学校を休みがちだとは言えない。

(僕は気が小さいのだろう……)

自嘲気味に考えながら、謡はクローゼットを開けた。そして二日間袖を通していない制服を見て、憂鬱そうなため息をついた。

「ん、起きなきゃ、」

謡が起床したのと同じ頃、匂もベッドの中で目覚めていた。アラームが鳴る前の時計に手を伸ばし、スイッチをオフにする。いつもはしゃっきり目覚める匂だが、昨日の出来事のせいかなかなか体に元気が出ない。それでも匂は重い体を引き摺るようにしてベッドから這い出した。

「愁は起きたかな。」

愁も昨日色々あったし、疲れていないだろうか。愁は精神が体調に影響しやすいから、熱でも出していなければ良いのだが。そんなことを考えながら愁の部屋のドアをノックする。返事はない。

「愁、入るよ?」

まだ寝てるかな、と思いながら部屋に入り匂は目を見開いた。

「愁!？」

「はあ、はあ…ね、えさん…?」

愁はまだベッドの中にいたが、顔が嘘のように真っ赤だ。掛け布団が床に落ちている。苦しげに息をしながら、愁が匂を見る。

「どうしたの?」

「体がすごく、熱い…んだ。頭がガンガンする」

そう言つて、顔を顰める。匂は慌てて愁の額に手をやって、ぎよつと顔を強張らせた。

「す、凄い熱じゃない！何で携帯鳴らさないの！」

「だ、だつて……」

「ちよつと待つて、母さん起こして病院に、」

匂は愁の部屋を飛び出して母の部屋に飛び込む。だが母の姿はなく、パジャマが綺麗に畳まれてベッドの上に置いてあつた。下か、と匂は急いで階下に向かう。

「母さん！」

美佳子は朝食の準備をしていた。だがいつもの部屋着姿ではなく、きちんとしたスーツ姿で。

「おはよう、匂。ご飯出来たから、勝手に食べてね」

美佳子は娘の顔を見ようとしてもしない。ぼそぼそと、口の中で話す。

「…何処かでかけるの？」

何だか、胸の中がざわつく。神経がささくれ立つ。

「少しね」

エプロンを外す母親に、娘は慌てて用件を思い出す。

「母さん、愁が凄い熱なの。頭も痛いって、」

美佳子の表情が一瞬動いたが、だからどうするということもなかった。

「病院に行くくらいなら、救急車を呼んで頂戴」

「は？」

匂は美佳子は何を言ったのか分からなかった。ポカン、と母親を見る。

「く、車で、」

「言ったでしょう。母さん出かけるって」

「ちよつと待つてよ！子供が体調悪くて苦しんでるのに、それ放つて何処に行くって言うのよ……！」

「あとはよろしくね」

「母さん……！」

匂は出て行こうとする美佳子の腕を掴もうとした。だが、

「姉さん…もう、良い…よ」

「愁！」

愁はふらつきながらダイニングに入って来る。

「お母さん、行ってらっしゃい、」

弱々しく微笑む息子に、美佳子は何も応えない。

「母さん！」

娘にも最早何も応えず、美佳子は家を出て行った。

「な、によ、あれ…！」

「姉さん、」

「あんたもあんたよ！何がお母さん、行ってらっしゃい、よ！！バカじゃないの！」

愁は苦しげに息をしながらも、微笑む。今にも泣き出しそうな、相手の胸を締め付けるような笑み。

「もう…良いんだ。僕が、悪いん、だから、」

次の瞬間、糸の切れた操り人形のように愁の体がぐらりと匂に向かつて倒れ込んで来た。

「しゅ、愁っ！！」

ぐったりとした愁の体は、燃えるように熱い。

「っ、」

匂は愁をソファーに横たえさせ、泣くのを堪えながら119番に電話を掛けた。

また今日も一日が始まる。ただじつとこのベンチに座り、“彼”を待つ一日が。でも、本当に自分が待っているのは…“彼”なのだろうか。それとも、何処か影を背負ったような、あの不思議な少年の

ことだろうか。榆乃木涼子は次第にそれが分からなくなっていた。

其々（それぞれ）の夜と朝（後書き）

愁の母さん酷いなあ、と書いてる私が思いました（……）。謡は父さんに酷い接し方されてるし、この作品には良い大人がいない気が……。

傷つけ合う人々（前書き）

嫌なサブタイトルだなあ……。

傷つけ合う人々

家を出る時間になっても、謡はなかなか学校に行く決心がつかないでいた。

（はぁ、行かないといけないのに……）

今は学校に、ではなく涼子のいるあの公園に行きたかった。どうしたんだろう。昨晚手酷く突き放されてから、涼子に会いたいと思う想いが強い。

「そろそろ、行かなきゃ……」

制服には着替えたから、後は靴を履いて玄関のドアを開けるだけ。

謡はゆるゆると立ち上がり、玄関に向かった。だがその耳に、救急車のサイレンの音が聞こえてきた。しかも家の前を通り、すぐ近くで止まったではないか。謡は嫌な予感がして、慌てて外に飛び出した。

「匂ちゃん!？」

「う、謡さんっ、」

救急車の後部が開き、担架に乗せられた人物が運び込まれる。

「どうしたの!？」

「し、愁が凄いい熱で、意識もなくて……」

担架に乗せられていたのは愁で、姉の匂は涙で頬を濡らして謡を見る。

「ご家族の方、お付き添いを」

救急隊員の一人に言われて、匂は慌てて頷く。素足なのに、それに気付いていない。

「謡さん、」

いつも勝ち気に輝いている匂の瞳が不安げに揺らいている。自分も付き添いたかったが、どこから春樹や匂の母親の耳に入るか知れない。匂や愁が傷付くことになることは避けたい。

「何かあったら携帯に連絡して。授業中以外なら応じるから」

「…はい」

匂はこくり、と頷き救急車に乗り込む。謡には彼女を見送るしか出来なかった。

その頃、私立鵬命学園では藪内奏が謡の下駄箱に封筒を入れようとしていた。だがそんな彼にかかる声。

「か、奏くんっ、」

彼を下の名前で呼ぶのは、たった一人の幼友達だけだ。普段から下の名前で呼ぶなど言っているのに。藪内は冷たい目で幼友達―藍田渉を見た。渉はビクッ、と怯んだようだが藪内から目は逸らさない。

「……あの、あの、」

「何だよ。言いたいことがあるなら言えよ」

言いたいことは察していたが、藪内は意地悪く訊いた。彼は加虐心が強く、本人もまたそれを自覚していた。渉は何度か口を開閉させた後、この世の終わりに直面したかのような顔をして言った。

「も、もう止めようよっ 奏くんっ」

「…へえ」

藪内は謡の下駄箱に入れようとしていた封筒を握りつぶしながら、渉に近づいて行く。しり込みするように一歩退く渉。

「何を？」

「し、芝貫くんを苛め……ること、」

藪内の足は止まらない。退き続ける渉の背中がガラス張りの扉に当たる。渉が恐怖に竦むのを知りながら、藪内は殊更に不敵な笑みを浮かべる。

「いつも俺の後をぴいぴい言いながらくつついてきた奴が、随分デカイ口を聞くようになったな……」

「……っ、」

「芝貫にどうやってたらしこまれたんだ？」

「ち、違う…そんなんじゃない、」

昨晚に偶然会ったときの謡の言葉。自分が苛められて辛い筈なのに、自分と話した渉が苛められてはいないか懸念していたという。それが、胸から離れない。たらしこまれたのじゃない。渉ははっきりそう言おうとした。だがその前に藪内から発された言葉と冷気に、渉は開けかけた口を塞がれる。

「……裏切り者」

「……………!!」

「良いぜ。芝貫を苛めるのは止めてやるよ……それで良いだろ？みんな」

みんな？ 渉が眉を寄せる中、いつからいたのか倉橋、舞田が姿を見せた。二人ともニヤニヤ笑って渉を見下ろしながら、口々に言う。

「良いぜ」

「俺も構わん」

「だってよ、渉。満場一致で芝貫を苛めるのは止めた。約束する」
藪内は口にしたことを取り消すことがないのは長い付き合いで渉も知っている。その彼がはつきりと謡を苛めないと宣言した。嬉しい筈なのに、素直に喜べない。急速に膨れ上がる不安。藪内の手が不意に伸びてきて、渉は咄嗟に逃げ出そうとした。だが、呆気なく捕まる。

「奏く、」

「標的変更」

ニヤリと笑う藪内の蹴りが、渉の腹に直撃した。

校門が見えてきた所で、謡は足を止めそうになった。だが齒を食いしばって歩き続ける。

「お、芝貫。風邪はもう良いのか？」

「はい。お陰様で」

「そうか。あまり無理はするなよ」

「ありがとうございます」

昇降口で会った顔見知りの教師と会話をし、謡は階段を上がる。二年E組の前で、ドアの取っ手に手を置いて踏う。

「…んなとこに突っ立ってたら邪魔だ」

「っ！」

すぐ真横に、自分より少し背の高い生徒が立っていた。鋭い視線が謡を見下ろす。二人の間に走る緊張。謡は足が動かない。

「風邪はもう良いのか」

「えっ？」

藪内奏から発された気遣う言葉に、謡は思わず間抜けな声を上げる。

「何だよその顔は、」

「あ、その…」

「とにかく入れよ、俺が入れん」

「えっ、あ、うん」

謡は押されるようにして教室に入った。当たり前だが三日前と何一つ変わっていない。変わっているのは黒板に書かれた日付くらいか。

「おっす、芝貫」

「久しぶり〜」

藪内の友人、倉橋と舞田にもにこやかに挨拶をされた。ほんの三日前には近づくだけで嫌悪に顔を歪ませていたのに。

「あ、おは…！？」

謡は目を疑った。

「藍田…君？」

倉橋と舞田が囲っている席に俯いて座っている生徒―藍田渉の机には油性ペンで様々な落書きが施されていた。奇妙な絵や、死ぬ、汚い、といった暴言などが。

渉は謡が声をかけても反応しない。ただ細い肩がカタカタと震えているだけだ。その様子で、謡は悟る。渉が自分の代わりになったのだと。涼子の言葉が蘇る。

「自分のせいで苛められているなら、助けなきゃ。」

『だが藍田はお前が苛められているのを見ても助けてはくれないの
だろう？』

涼子の言葉が胸を刺す。確かに渉は謡が苛めを受けていても助けに
は入らなかった。でも、それでも、

「……藍田君、君が身代わりになる必要はない」

ビクツと渉が体を震わせる。

「ふうん？」

面白げに鼻を鳴らす藪内を、謡は精一杯の虚勢で睨み付ける。

「苛めの、何が楽しいの」

倉橋と舞田も睨み付ける。何の効果もなく、三人ともニヤニヤと自
分を見てくる。それでも、謡の口は止まらない。渉がシャツの裾を
掴んで来たのに気付いても、止まらない。止めない。「他人を傷付
けて、何が楽しいのかって訊いてるんだよ！藍田君は、君のこと慕
って、いつも一緒にいたんだ。そんな人を何でそんな簡単に苛めら
れるんだよ！」

「芝貫君、もう……」

「良くないよ。良くないっ」

いつも自分が使う言葉だ。父に虐げられた自分を庇ってくれる匂に、
もう良いと言う。自分は大丈夫だと。……大丈夫な筈がない。こん
なに、苦しいのに。こんなに、息苦しさに胸が張り裂けそうなのに。
謡にとつて『もう良いから。僕は大丈夫だから』という言葉は魔法
の言葉だった。周囲と自分を隔てることの出来る魔法の言葉。その
魔法のおかげで、“芝貫謡”という存在を守ることができた。謡を
傷付けようとする人からも、守ろうとする人からも。でも、もしか
したら違ったのかもしれない。その魔法の言葉は、謡を救うのでは
なく追い詰めるものだったのかも知れない。

「ふうん、お前やけに渉の肩持つな……」

口元は笑いながらも目が笑っていない藪内奏が、謡の肩を押した。

「っ！」

謡の体はバランスを崩し、倒れそうになる。

「芝貫君っ、」

渉が慌てて支えてくれたお陰で、倒れるのは防ぐことができた。

「あ、ありがとう…藍田君」

「べ、別に…」

渉が藪内を上目遣いに見て、居心地悪そうに再び腰を落とした。

「何か興が覚めたな。お前ら、一時間目フケるぞ」

倉橋と舞田がおう、と声を揃えて藪内に従う。彼らの姿が消えて、

謡は突き詰めていた息を吐いた。

「……本当は優しいんだ…」

ポツリ、と渉が吐き出した言葉に、謡は何の事かと怪訝に思った。

「奏君は、本当は優しい人なんだ。だけど、家が少しゴタゴタしてて、少し疲れてるだけなんだ、誰かに中らないと、やってられないんだ、」

ギョツ、と瞑った瞳から涙がポロポロと零れる。男女問わず涙の苦手な謡は、慌てる。周囲の生徒たちが泣いている渉を不思議そうに見ては、机の落書きに気付いて腑に落ちたような顔をする。渉が泣いているのは、机の落書きのせいだと思っているのだろう。

「あ、藍田君っ、泣かないでよ、」

「ごめ、こめんなさい」

一体誰に謝っているのか、謡には分からなかった。

謡に電話をしたかった。謡に側にいて欲しかった。けれど匂は我慢する。謡さんは学校に行ってる。最近休みがちだった謡さんが学校に行ってる。迷惑はかけられない。かけたくない。匂は呪文のように迷惑をかけたくない、とぶつぶつ口の中で呟きながら処置室の前の椅子に座っていた。どうしよう、何か悪い病気だったら。愁が死

んじやったらどうしよう。……ダメだ、そんな風に思っちゃダメだ。
愁は、大丈夫だ。

「お姉さんですか？」

「えっ、あ、はいっ」

いつの間にやら、白衣を着た中年の医師がいた。心配そうに匂の顔を覗き込んでいた。

「弟さんー愁君ですが、大丈夫ですよ。熱も下がりましたし。……ただ精神的に疲れがあるので、必要なら精神科の受診も出来ませんが」

「精神的に……」

「今日は安静をとって入院していただきます。親御さんへのご連絡をお願いしますね」

「あ……はい。あの、弟に会っても……？」

「すぐ病室に移しますので、それからお願い出来ますか？」

「は、はい」

匂は医師に導かれ、一端待合室に戻った。

藪内の怒りを痛いほどに感じたのは、二時間目の数字の時間だった。だが謡は授業に集中出来ずに、窓の外をぼんやりと眺めていた。救急車で運ばれた愁は、彼に付き添う匂は大丈夫だろうか。

「芝貫、芝貫っ！」

「あ、はいっ！」

どうやら教師から呼ばれていたらしい。

「2日振りに来たと思っただけっとして……。ほら、この問題、前に来て解いて」

謡は顔を赤くしながら立ち上がる。

「……………」

謡は黒板の前に立ち、教師から渡されたチョークですらすらと数式

を書き、答えを導く。

「よし、正解。応用だが、ちゃんと理解できているようだな」

謡はありがとうございます、と一言残して自分の席に戻ろうと振り返った。

「……！」

だがある一人と視線がかち合い、謡は身を強張らせた。

「……………」

藪内奏が、謡を睨んでいた。腕を組み、椅子の背に凭れてふんぞり返り、今まで謡が見たことのないような鋭く、どろりとした目付きで。謡は動けなくなる。怪訝に思った教師が声をかけてくる。

「芝貫どうした？」

「あつ、いえ……………」

睨み付けられたまま、謡は席に戻る。渉の方を見遣れば、彼はずっと俯いていた。

止まらない涙（前書き）

あけましておめでとございます！！今年も頑張って執筆するので、見捨てないで下さい（笑）でわでわ本文へどうぞ。

止まらない涙

「……………」

「珍しくぼけっつとしくさってるね！」

先日のように後ろからポンツと肩を叩かれ、榆乃木涼子はすげなくその手を払った。

「おっ、ご機嫌斜め？」

「うるさい」

「昨晚のこと気にしてるんだね」。“彼”に似た男の子のこと」

「……………」

「謝りに行けば？昨日冷たくしてすみませんでしたっって」

何処までも茶化す相手に、涼子は反応することを止めた。相手の声を聴覚から追い出し、海に意識を集中させる。“彼”が好きだった海。今は、涼子だけが眺めている。隣にあの人はいない。

（もし、本当に謡が“彼”だとしたら……）

だとしたら、自分はどうするのだろう。

「無視か、無視かいな」

話し相手はつまらなそうにぼやき、ぐっ…と背中を伸ばした。

「氣い向いたら声かけてな。あんたのためなら何時でも協力してあげるからな」

涼子は応えない。それを気にした風もなく、相手は鼻歌を歌いながら去っていく。

「謡、」

何となく少年の名前を呟いてみる。昨晚自分が彼に対して取った行動に、微かに嫌悪感を感じながら。

「お話というのは何ですか……というよりあなたがわが社にやって

来るなど、どう言った風のふきまわしです？」

芝貫コーポレーション本社最上階、社長室で芝貫春樹と、匂と愁の母・美佳子が対面していた。春樹の傍らには、心配顔の神楽が立っている。美佳子は屹然とした態度で春樹を見据え、

「そちらの謡さん、何とかありませんの？」

といきなり問い掛けた。春樹の眉が寄せられる。

「どういう意味ですか？」

「愁…私の息子が世迷い事を言いましたね。どうやらお宅の謡さんに相当感化させられているみたいで……どうやってあの子をたらしこんだのでしょうか？」

「愉快、いや不愉快なことを仰いますね。うちの謡があなたの所の愚息をたらしこむ理由などありません。……そういえば長女、匂さんと仰いましたか。あの子は母親に似て口の聞き方を弁えていないようですね」

ぴくつ、と美佳子の眉が動く。動揺を悟った春樹が畳み掛けるように矢継ぎ早に言葉を継ぐ。

「人の子供をどうこう言う前に、お宅のお子さんをきちんと躱けたほうが宜しいのでは？」

「は、春樹さま少し言葉が過ぎませんか？」

さすがに神楽が止めに入るが、美佳子に気丈な瞳で睨み付けられ、ぐつと喉を詰まらせる。

「敵の味方に情けをかけられるなど、真つ平ごめんですわ」

「も、申し訳ありません……」

「うちの優秀な部下を鬱憤晴らしのために叱りつけるのは止めていただきたい」

春樹は棘のある口調でそう言うと、立ち上がった。

「申し訳ないが、十一時から厚生労働省の方との面会を予定しておりますので、お引き取りいただけませんか。神楽、この方を下までお送りして」

神楽がはい、と答えた矢先、美佳子が憤然とした様子で立ち上がった

た。

「見送りなど結構です!!」

声高に怒鳴り、社長室を出ていく。

「春樹さま、」

「全く…娘と言い、母親と言い…。あいつは気の弱い性格だった、女系はじゃじゃ馬ばかりだな……」

春樹はそう呟きながら、急にバツの悪そうな顔になる。

「春樹さま？」

「神楽、その…だ」

「ああ、謡様のことですね。大丈夫です。今日は登校なさったようです」

「……なら良い。神楽、そろそろ出るぞ」

神楽は分かりました、と礼をしてにつこりと微笑んだ。だが笑いながらも、美佳子が春樹や謡の足枷にならないかという懸念も、していた。

愁が漸く目を覚ましたのは、昼前のことだった。匂が見守っていると、小さく呻いてピクツと瞼を震わせた。

「しゅ、愁？」

「ん、……ねえ、さん？」

蒼白な顔に、僅かに赤味が戻っている。

「痛いところ、ない？気分はどう……!？」

「だい…じょうぶ、」

「っ、良かったあ、」

匂はへなへなと力なくパイプイスにへたりこんだ。愁が上半身を起こそうとするが、くらりと目眩を感じて体を強張らせた。気付いた匂が、再び立ち上がって愁を支える。

「ま、まだ起きない方が良くよ!ほら、」

「…うん、」

横になると楽になるらしく、愁は体の強張りを取った。

「姉さん、今、何時……？」

「ん…、もうちよいで正午だよ」

「そっ、かあ」

「お腹すいた？愁が気付く少し前に看護師さんが顔は出してくれたんだけど……」

「僕、は平気。姉さんこそ、お腹すいてない？」

こんなときまで他人の心配か、と匂は苦笑する。愁の黒髪をすいて、
「あたしも平気。ほら、もう一眠りしたら？まだあんまり顔色良くないよ？」

「……うん、」

姉の笑みを見て安心したのか、愁は軽く微笑んで瞳を閉じる。

「……………」

すぐに穏やかな寝息が聞こえてくる中、匂は涙を流していた。

（昨日から色々あってしんどい筈なのに、私の心配なんて……、）

愁も、謡も。どうして自分が辛い時でも他人を気遣えるの？

「……謡さん、」

愁が無事だったことを、匂は無性に謡に報せたかった。

（はぁ、はぁっ……）

一方昼休憩に入った謡は、藍田渉を探していた。どうも渉と藪内の様子が昨日までと違うし、今朝のこともあって渉のことを気にしていたのだが、気が付いたらざわつく教室から渉や藪内、そして取り巻き二人の姿が消えていたのである。ひどく胸騒ぎがして、謡は構内を走り回っていた。

（はぁ、はぁっ、……何だろう、嫌な予感がするっ）

「こら芝貫、廊下は走るな！」

「あ、あの、藍田君を見ませんでしたか!？」

普段は穏やかな謡から切羽詰まった様子で問い詰められ、顔見知りの教師は驚いたようだ。身を乗り出して訊いてくる謡から少し仰け反り、

「あ、藍田? 藍田なら藪内たちと体育館の方へ向かってたぞ?」

「あ、ありがとうございます!」

「おい、何そんなに慌ててるんだ!？」

しかし教師の問いには応えず、謡は体育館の方へ急いだ。

腹の痛みに、渉は目の端に涙を浮かべて踞った。背後には体育館外観の固い壁。ガンツ、と藪内の長い足が壁を蹴り、ビクツと渉の体が震えた。藪内が加虐的な笑みを浮かべて、踞る渉の髪を掴む。

「嫌だ、痛いよっ!」

「痛くしてるんだから当たり前だろ」

藪内の言葉に、取り巻き二人がぎやはははと下卑た笑みを浮かべる。

「奏君、止めてよ、」

「下の名前で呼ぶなって何回言ったら分かるんだ? いつまで経ってもバカなままだな、渉は」

渉の目から涙が零れ落ちる。

「泣くな、鬱陶しい」

眉をしかめ、藪内が渉の頬を殴り付ける。

「……っ、」

抵抗一つ出来ず、渉は地面に倒れる。

「お前が望んだ結果がこれだ。自分でこんな結果にしておきながら、泣くんじゃねえよ、泣き虫渉」

「うあっ……」

藪内がシューズを履いた足で渉の脇腹を踏み付ける。痛みに呻く渉を、取り巻きはニヤニヤと笑いながら見下ろすだけで助けることは

ない。

「奏く…、止めて…」

「下の名前で呼ぶなっつってるだろ!!」

「藍田君っ!!」

激昂した藪内と、渉を探し回っていた謡の声が響いたのは殆んど同時だった。

「芝貫く、ん……」

「………良かったな、王子様が来てくれて」

藪内は鼻を鳴らしながら、渉の脇腹をまた蹴り付けた。

「……………っ!!」

「止めろっ!」

必死な様子で叫ぶ謡を、藪内は汚らしいものでも見るように睨み付けた。

予感は適中していた。体育館裏の湿った空間。倒れている渉と、彼に暴行を働いている藪内の姿に、頭の中が熱くなった。

「藍田君、大丈夫!？」

「芝貫く、ん……何で、」

渉は唇を切ったらしく、そこから血を流していた。シャツは土で汚れ、脇腹には靴痕すら残っている。

「何でこんなこと……!!」

「お前に関係ねえだろ」

「……………」

「ムカつくな、その目。強くもない癖に」

藪内はそう言つて謡と渉に鋭い一瞥をくると、さっさと立ち去っていく。取り巻き二人が慌てて彼を追ったので、謡は取り敢えず安堵のため息をついた。

「藍田君、立てる？」

「う、うん、」

怖かったのだろう、渉の体はいまだにガタガタと震えている。

「あ、ありが…とう、」

喋って唇の傷に障ったのだろう、渉は肩を竦めて痛み顔に顔を歪めた。

「痛む!？」

「す、少し…でも、大丈夫……」

渉は物言いたそうに謡を見上げている。

「藍田君？」

「どうして、助けてくれたの？」

「え、」

「だ、だって……僕は藪内君たちと一緒にあって、し、芝貫君を苛めた、のに、」

苦し気に息をしながら吐き出される言葉に、謡は目をすがめた。

「芝貫君に、助けてもらえる資格、なんて……ない、のにつ、」

「そ、そんな、資格だなんて関係ないよ!」

渉は嗚咽を洩らしながらも、謡の顔を見上げる。

「助けたいと思ったから、だから助けたんだ。だから、そんな資格がないとか、言わないでよ」

「………っ、」

「兎に角、藍田君が無事で良かった……」

その謡の言葉に、渉は膝を着くと、

「あ、藍田君!？」

たじろぐ謡を前に、大きな声を上げて泣き始めた。

「………落ち着いた？」

謡の問いかけに、渉はこくりと頷いた。目や鼻の頭が真っ赤で、涙の痕がまだ頬に残っているが感涙のピークは越えたようだ。

「…ごめんなさい、付き合わせて」

消え入りそうな声で、渉。謡は穏やかに微笑み、首を左右に振る。
「そんなことないよ」

時刻は五時間目がとうに始まっている午後一時四十分。場所は一般棟の屋上。謡は渉が落ち着くまで彼に付き合っていた。結果授業をサボる形になってしまったが、そんなことよりも渉のことが心配だったのだ。

「芝貫君は、優しいね」

「僕が？」

「……うん」

謡は何と応えたら良いか分からず、口ごもる。

「まだ、ちゃんとお礼、言ってなかったよね……助けてくれてありがとう……」

「お礼なんて……。僕が助けたくて助けただけなんだから、そんなに気にしないで良いから」

だが渉は首を左右に振って、意外にも強い口調で謡に反論する。

「駄目だよ。助けて貰ったら、ちゃんとお礼しなきゃ、」

だが途中で自分の口調の強さに気付いたのか、気後れしたように尻切れトンボ状態で口を閉ざした。その様を見ていた謡は呆氣に取られていたが、すぐに柔和に微笑んだ。

「そう、だね。助けて貰ったら、ちゃんとお礼、しなきゃね。藍田君の言う通りだ」

「ほ、本当にそう思う？」

「うん。思うよ」

謡が笑顔で頷くと、渉は嬉しげに頬を緩めた。だがその拍子に、切れた部分に痛みが走ったのだろう唇を押さえた。

「だ、大丈夫？」

「うん、平気……」

二人に沈黙が降り掛かる。しかし渉がすぐに口を開いた。

「……僕と奏君、産まれた病院も産まれた日も一緒なんだ。時間は、僕の方が早かったけど……」

「そうなんだ」

「幼稚園も小学校も中学校もずっと一緒。クラスが別々になったことも一度もない。……僕は、いつも奏君の後ろをくっついてて、でも奏君は嫌な顔しないから……いい気になってたのかも」

「え？」

「高校に入ってから、奏君は急に怖くなった……。家がゴタゴタして、混乱して……不安で、そんな気持ちのやり場が、なくて……、」

「藍田君、」

「悪い人とも付き合いがあつて、喧嘩ばかりして……芝貫君のことだつて……、」

「……」

「でも、本当は凄く優しい人なんだっ。苛められてる僕を何度も助けてくれたし、上級生に苛められてる子を助けたり、怪我をした見ず知らずの人を介抱したり、凄く、優しい人なんだ……」

「そう、なんだ。藍田君は、藪内君のことが大事なんだね」

「……一番、一緒にいて落ち着ける人なんだ、純粋に、信じられる人なんだ、」

またぼろぼろと涙を溢し始める。

「藍田君、」

「どうしたら、良いのかな、」

「え？」

「どうしたら、前みたく優しい奏君に会えるのかな、僕じゃ、奏君を支えられないのかな……」

渉の涙は止まらない。謡は慰めの言葉を持てないまま、ただ渉の横で彼が泣き止むのを待つしかできなかった。

止まらない涙（後書き）

渉、泣いてばかりです。余談ですが、映画252生存者ありを観て泣きました（笑）

“彼”と謡の涙（前書き）

今日も寒いですねっ。関東のほうの雪は大丈夫でしょうか。

“彼”と謡の涙

『初めまして』

穏やかな、けれども少し悲しげな笑顔に、私は見蕩れました。周囲に彼のような、二十代半ばの男性は一切いなかったことも影響しているのですが、彼を純粹に素敵な方なのだろうと感じました。

『こら、お前も挨拶なさい。今日からお前を護ってくださいる方なのだから』

父様に言われて、私は慌てて頭を下げました。すると彼はどうぞよろしく願いますと手を差し出してきました。私は頬が赤くなっていないか気にしながら、彼の手を握りました。意外にほっそりとした手に驚きました。

『何でもお申し付けください』

まるで執事のようなことを言われ、私はくすぐったい気持ちになってクスツと笑ってしまいました。

『こうは言っておられるが、甘えてはいかんぞ』

『分かっておりますわ、父様。もうお屋敷の中は御覧になられましたか？』

『いえ、まだでございます。ご案内していただけるのでしょうか？』

『はい』

私は早く眼の前の男性に屋敷に慣れていただきたい気持ちで一杯でした。私は彼の手を引いて、屋敷の案内に出かけたのです。

「……謡？」

一瞬、目の前に“彼”がいるのかと思った。だが違う。“彼”ほど背は高くないし、筋肉もない。華奢で頼りない少年。

「こんにちわ」

「・・・今日は制服姿なんだな」

昨晚の出来事が酷く頭に残っている所為か、謡はいつも私服というわけの分らない固定観念を抱きつつある。謡がクスツと微笑む。

「それはまあ・・・休みがちですけど、僕は一応学生ですから」
そう言つて、謡は涼子の横に腰を下した。昨晚のことは何の影響も与えていないのだろうか。

「そう・・・だな」

どちらかと言えば涼子の方が気にしていた。だがそれをはっきりと出すのは何となく嫌だった。

「・・・昨日はすみませんでした。父が、少し荒れていて、」

「そのことはもういい。・・・謡は、怪我はしてないんだろう？」

謡がえ、と小さく声を上げて目を見開く。

「何だ、その顔は」

「あ、す、すみませんっ。・・・心配、してくれるんですね」

『僕の心配は要りません。姫様はご自分のことだけお考え下さい。あなたの平穏が僕の幸せなのですから』

「!」

謡と“彼”がダブる。謡の顔が“彼”の穏やかで、そして少し寂しげな笑顔と重なる。

「榆乃木さん？」

「・・・」

謡が涼子の額に手をやり、心配そうに彼女の顔を覗き込んでいた。

「具合悪いんですか？顔色悪い気がするんですけど・・・」

「そんなことはない。手、離してくれるか？」

謡は顔を微かに赤くして、すみませんと再び謝りながら手を涼子の額から退けた。

「・・・」

「・・・」

謡も涼子も何とはなしに黙り込んでしまい、人の少ない園内は静ま

り返っていた。ざざ、んと海がざざめく音だけが二人の耳に響く。

「謡は、父君とうまくいつていないのか」

口火を切ったのは涼子が先だった。二人が黙り込んで五分ほど経過した頃。謡が俯けていた顔を上げ、涼子を見る。

「……そう、見えますよね。昨日のを見せられたら」

膝に置かれた拳がギュツと握られるのを見て、涼子は自分の考えが正しいのだろうと漠然と思った。「昔はそんなことがなかったんですけどね……最近はずっと酷くなって来ました」

掠れた声で話し出す謡。何だか近頃は謡の身上を聞くのが日課になっているような気が、涼子はした。

「多分、母があんなことになってからかな……父さんの様子が変わってきたのは……」

呟くように吐き出された言葉に、涼子はピクツと頬を震わせた。そう言えば、謡の母親のことは何も知らなかったことに今更気づく。

（知らなかったところで何ら問題はないけれど）

「母親は、いないのか」

「いないわけじゃないですよ。……ただ、僕や父のことをちゃんと認識しているのかどうかは、分らないですけど」

話したくない、というわけではないのだろうが、謡の口は重いようだった。ならば無理に聞き出すこともない。

「……言い難いなら無理はしないで良い。何が何でも知りたい訳ではないから」

謡は苦笑すると、海に視線を戻した。今にもその横顔が泣き出しそうに見えて、涼子は落ち着かない気持ちになってきた。“彼”に似ていると感じるから、余計に。

『泣かないで下さい。あなたに泣かれると、僕も泣きなくなってしまうから。僕が泣きたくなると、あなたも悲しいと思うのですから』

不器用なところも、似ている。

「……いつもの楡乃木さんなら、興味ないから良い……」

って言いそうなのに。昨日から変ですね」

「変なのは謡もだろう。・・・秘密主義者の癖に、自棄にぺらぺら
ぺらぺら喋るじゃないか」

「楡乃木さんだから話せるんですけど」

「さりとて言われた言葉はそつと無視する。」

「今、無視しましたよね？」

「話したいのか話したくないのか、どっちだ」

段々素っ気無くなっていく涼子に、からかい過ぎたと思ったのか、

謡は

「す、すみません」

と気弱な感じで頭を下げる。

「母は、記憶喪失なんです」

「・・・記憶喪失？」

「混雑している朝のホームで、線路に転落して。・・・周りに
いた人の話だと、いきなり飛び出してきたって。・・・父さ
んは誰かが故意に母さん突き落としたのだと言ってききませんで
した」

「記憶喪失というのは、」

「電車が何とか急ブレーキで止まって、轢かれるのは避けられたん
ですけどどうも枕木で頭を酷く打ちつけたみたいで・・・打ち所も
悪くて・・・。。目を覚ました母は、僕のこと父のことも、
弟の誓のことも分からなくなっていました」

重いな、涼子是我知らず内心で溜息をついた。父親からの冷たい仕
打ちに、学校での苛め。謡はいつ心を休めているのだろう。愁とい
う少年の家庭教師の時間だろうか。

「・・・それからです。父が更に仕事に打ち込むようになり、僕に
も手酷く接するようになったのは」

仕方ないですね、と謡は笑う。

「父も母があんなことになって、混乱してるんだと思います。感情
の起伏も激しいみたいだし、よく眠れてないみたいで・・・」

「だがそれで謡を辛い想いをするのも違うと思うんだが」

「そう、なんでしょうね・・・きつと」

でも、と謡は続ける。

「仕方ないですよ。僕が頼りないのは確かだし・・・父が怒るのも、僕が至らないからだし」

『仕方ないですよ、所詮僕はあなたの従者。ご両親が僕のようなものを娘の夫にしたいと、思うわけがありませんから』

仕方ない。それが“彼”の口癖だった。特に男女の関係になってからは、頻繁に使っていた。全然、仕方なくなんか無いのに。

「ならどうしてそんなに泣きそうな顔をしてるんだ？」

「・・・え？」

「我慢してるのがよく分かる、と言ってる」

謡の顔に戸惑いが浮かぶ。潤んだ瞳に自分で気付かないのだろうか。

「辛いんだろ、きついんだろ、悲しいんだろ。なのにどうしてそんなに強がるんだ」

私は何を言っているんだ、と涼子は話しながら思う。謡のことをらしくないと言いながら、自分が一番らしくないではないか。普段の自分なら他人の身上話なんてどうでも良いと気にしないだろう。なのに、どうして謡のことになるとこんなにも、

「べ、別に辛くなんて、」

謡は明らかに動揺していた。笑おうとして、うまく口角が上がらないことに戸惑っている。

「きつくなんて・・・悲しくなんて、無いです」

声は徐々に尻すばみになり、震えてくる。涼子から顔を逸らそうとする。

「じゃあ笑え」

「え、」

「無理だろ」

涼子の顔に、苦笑が浮かぶ。その瞬間、

「か、からかうのは止めてくださいよ・・・」

謡が泣き笑いの表情になって、両の瞳から大粒の涙を零した。顔がくしゃっと歪む。

「何で、僕は・・・泣いてるのかな、」

頬を伝う液体を手の甲で拭いながら、謡は自分が泣いているという現実を認めようとはしなかった。

（でも、これで良いのだろう）

泣く事は、それだけでストレスの発散にはなる。謡は溜め込みすぎなんだ、と涼子は溜息をつく。謡のことがこうも心配になるのは、

“彼”に似ているからなのだろうか、と思いながら。

“彼”と謡の涙（後書き）

渉の涙に影響されたか、謡は涼子の前で涙しました。泣くことで少しは謡の心は晴れるのでしょうか。

それぞれの放課後（前書き）

主観がコロコロ変わります。読みにくかったらごめんなさい・・・。
・・。

それぞれの放課後

ぶーんぶーん、と謡の携帯が震えたのは、彼が泣き出して五分ほどしてからだった。自分が泣いていたことが夢だったかのように目をぱちくりとさせ、ズボンのポケットから震える携帯電話を取り出す。

「はい、匂ちゃん？」

「謡さん？・・・今、大丈夫ですか？」

謡は鼻を噉りながら頷く。涼子に目をやると、彼女は分かっているというように頷いた。

「うん、大丈夫だよ」

「謡さん、泣いてるんですか？声が震えてますけど、」

匂の声が心配げなそれになる。謡は慌てて、

「そんなことないよ、大丈夫」

と焦りながら答える。

「なら、良いんですけど、」

匂は疑わしく感じているようだった。謡の“大丈夫”が決して言葉どおりでないことを、彼女も良く知っているのだ。

「どうしたの？愁君の具合が・・・？」

まさか愁に酷い病気でも見つかったのだろうか。謡は焦った。

「あ、いえ・・・精神的なものと肉体的な疲労がたまっていたらしくて・・・重い病気とかそういうことではないんですけど・・・」

・・・

そうか、と謡は安堵の息をつく。

「そんなに酷くないみたいで良かった・・・愁君もそばにいるの？」

「本人は謡さんと話したいみたいでしたけど、今は横になってもらってます。私は待合室からかけてるんです」

「そうなんだ・・・匂ちゃんは、大丈夫？」

電話の向こうで、匂がクスツと笑うのが分かった。

「私は大丈夫です。丈夫なだけ取り柄だから」

「だけ、なんてそんなことないよ……どうしたの、匂ちゃんに
しては弱気だね」

『はは、そうですか?』

匂の声が段々と細くなっていく。もしかして泣いてるのではないかと謡は危惧する。

「匂ちゃん?泣いてるの?」

『私がですか?真逆』

わざと元気な声を出そうとしているのが謡には痛いほど分かった。

「匂ちゃん、今すぐそっちに行くから、待ってて」

『どうしたんですか?焦った声出して、』

「良いから。待っててよ」

匂にはそれ以上言わせず、謡は問答無用で電話を切った。

「榆乃木さん、僕、行つて来ます」

「ああ。気をつけてな……あと顔は洗っていけよ、酷い顔だ」

謡は苦笑して、はい、と頷いた。

謡が来てくれる、それが分かった途端、安堵で体から力が抜けた。

「謡さん、ごめんなさい」

もし、もし万が一句の母、美佳子と鉢合わせたら、彼女から謡に心
無い罵倒が浴びせられるだろう。それでも、そうなくても、

(謡さんに側に居て欲しい……)

あの穏やかな笑顔で、大丈夫だよと微笑んで欲しい。きっと愁も謡
が来たら安堵する。

(あたしはきつと、)

謡さんが好きなんだ、と匂は小さく呟く。美佳子に言えば、馬鹿だ
と罵られるだろう。絶対に謡とは会わせまいとするだろう。

(それでも、あたしは……)

「渉、どうしたのその怪我!!」

帰宅して母親からの第一声がそれだった。

「え、えっと、」

「目も真っ赤じゃない!!まさかまた苛められたの!?!」

母親の頭には、以前渉を苛めていた人間のことがあるのだろう。だが、違う。

「ち、違うよ、そういうのじゃないよ……」

「じゃあ何!!私は渉を心配して訊いてるのよ、ちゃんと答えなさいっ!!」

母親の金切り声に、渉はビクツと身を竦ませた。頭から、奏の顔が離れない。仇敵を見るようなつりあがった目が、離れない。

「だ、だから、これは……」

どうしよう、何て言えば良いの?正直に、奏君にやられたって言えば良いの?それとも、全く知らない不良に絡まれたとも言えは良いの?

「その……知らない人に、絡まれて、」

違う。奏にやられた。知らない人になんて絡まれてない。でも、どうしても奏にやられたという言葉は出てこない。

「あんたは本当に絡まれ易いのね……」

母親はどうやら信じたらしかった。前例があまりにも多すぎて、疑う気も起きないのだろう。

「ちゃんと消毒するから、こっちいらっしやい」

「……」

もし奏にされたと聞いたら、母親はどうするだろう。想像するのも恐くて、渉は思考を止めた。

「なあなあ、芝實本当にしめようぜ？」

駅前のファーストフード店。藪内、舞田、倉橋の三人はだらだらと放課後を過ごしていた。だが藪内は何か気に入らないのか、気難しげに顔を顰め、頬杖をついている。

「おい、藪内どした？この手の話、好きだろ？」

舞田がチョツカイをかけてくるのを、藪内はスルーした。舞田は不思議そうな顔をしたが、倉橋がこそつとそんな彼に耳打ちする。

「ほら、今まで藪内が藍田のこと守ってる、みたいなところあっただろ？でもその役目を芝實に取られたから」

「ああなるほど、そういうことか、」

舞田が納得した瞬間、バシヤツという音とともに彼と倉橋の顔面に水が掛けられた。

「・・・てめえら、今なんつった？」

藪内が御冷を舞田と倉橋にぶっ掛けたのだ。二人はその事実には呆然としていたが、藪内の鋭い目が自分たちを呪い殺さんと言わんばかりに睨んでいるのを見て、自分たちが一体何を口走ったのか今更ながらに理解した。

「い、いやただの冗談だって。本気にするなよ」

「そ、そうそう冗談冗談」

暫く藪内は二人を睨んでいたが、やがてフンっ、と荒い鼻息をついてまた窓の外を見始めた。視線攻撃から解放された二人は、どうやら逆鱗に触れるまでは行かなかったようだ。と安堵の吐息を二人同時に吐いたのだった。

謡があんなに涙を流すのを見たのは初めてだった。一人になった涼

子は、何とも言えない感情が自分の中で渦巻くのを感じていた。何だろう、胸が疼く。

「泣いてたね、あの子」

「！またお前か」

「また、だなんて殺生な」

涼子の横に彼女は座る。

「お前だなんて、葉弓って呼んで」

彼女の名前は、式村葉弓。涼子と顔見知りではあるが、特に仲が良
いというわけでもない。葉弓が勝手に涼子に懐いているだけである。
「可愛い顔が台無しだったけど、泣いてる顔もそられたなあ」

倒錯的なことを言う葉弓の言葉は無視し、涼子は凪ぐ海を見遣った。

「姫様は、輪廻というものを信じますか？」

「輪廻ですか？ううん、私はあまりそういうものは信じません。

だから今、生きている今こそを大事にすべきだと思うのです……

・あなたとのかことを」

「姫様はすぐにそちらに話を持っていかれるので、困ります」

「む、私とどうこうなるといのがそんなに嫌なのですか？」

「そ、そういうわけじゃないですけど……」

「顔が真っ赤。いつまで経っても初なんですから」

「その遠くを見るような目。“彼”のこと思い出してるでしょ？」

葉弓が涼子の物思いを中断させる。きらきらと目を輝かせているが、
前髪の下に隠された右眼は嫌悪に歪んでいることを、涼子は見抜い
ている。

「でも本当に似てるよね、あの子と“彼”。……確かめてみない
？」

その悪魔のささやきにも似た呟きに、涼子は思わず眉を寄せた。

「何を、」

「“彼”ならさ、自分の身が危なくなったり大切な人が危ない目に
あつたりしたら“力”を発現するんじゃない？あんたを守りたいつ
かみたいにさあ……」

「そんなことして、ただで済むと思うなよ」

涼子が声を押し殺しながら言うと、途端に葉弓はニパツと屈託の無い笑みを浮かべた。

「やだな、冗談じゃないか」

「・・・・・・・・・・」

涼子はじつと葉弓から視線を逸らさない。葉弓は調子に乗りすぎたと思ったのか焦りだす。

「冗談だって、しない、変な事絶対しないから」

「・・・・・・・・・・絶対だぞ」

「はい」

涼子は信じたのか否か分からないが、葉弓から視線を逸らしてまた海に目を遣った。葉弓は目を細めて微笑んだまま、意味深に口角をきゅっと上げていた。

母親に怪我の治療をしてもらった後、渉は悄然とした気持ちで部屋に戻った。ベッドに倒れこんだ瞬間に、鞆の中から携帯のバイブレーションの音がした。

「・・・・・・・・誰、」

母親に安全のために持たされた携帯電話の番号とアドレスを知っている者は少ない。そして自分の携帯に登録している番号も少なく、登録していると電話帳に登録された名前が着信時に表示されるが、

「奏、く・・・・・・・・ん？」

電話ではなくメールのようだった。渉は恐る恐るメールを開き、目を見開いた。

『親父とお袋の離婚が正式に決まった。お前にだけは伝えとく・・・・言っておくが、変な同情心は要らないからな。じゃ』

以前から藪内の両親は不仲で、離婚協議中であつた。そして、その

協議が終わったのだろう。彼らは離婚で同意したらしい。

「・・・・・・・・」

渉は居ても立ってもいられない想いで藪内の携帯を鳴らした。藪内はすぐに出たが、機嫌は明らかに悪そうだった。

『渉？・・・・・・・・何』

「あ、あの、今メール貰って・・・・、」

『ああ、親父たちのこと？何だ、俺に同情してくれるのか？』

「ど、同情なんてそんな・・・・・・・・、」

『悪いけど今話す気分じゃないんだ・・・・あんまり苛付かせたらまた蹴るぞ』

不穏な言葉に渉はビクツと体を震わせた。

『切るぞ』

「待って、奏く、」

しかし携帯は無情にも切られた。渉は哀しげに手の中の携帯を見つめた。

「匂ちゃん」

「あ、」

匂は謡に呼ばれて目を覚ました。どうやら謡を待っている間に転寝をしていたようだ。場所は愁の病室がある病棟二階の待合室の一角。人はあまり居ない。

「匂ちゃん、大丈夫？」

「ん・・・・、ちょっと眠くて、」

「一回家に帰る？愁君には僕が付き添うから」

すると匂は目を大きく見開いて首を左右に思いっきり振った。その激しさに謡は驚いて彼女を見つめる。

「・・・・・・・・ダメです、それは」

「え、でも、」

「ダメです、母さんが来たら・・・謡さんのこと、」

「匂！！！！」

「！」

謡も匂も、その場にいた人々も金切り声がした方向に揃って顔を向けた。そちらには鬼のような形相をした美佳子が立っていた。

葉弓の策略

美佳子は怒りに顔を歪めながら匂と謡に近付いていき、戸惑う謡にいきなり平手を喰らわせた。

「母さん!!」

ようやく病院に來たと思えば、いきなり謡を叩くとは。自分の母親ながら理解出来ない。匂は謡と美佳子の間に体を滑り込ませ、美佳子から謡を守るように両腕を広げた。待合室にいた人たちが何だ何だと様子を伺っているがそれどころではない。

「何するの、母さん!!」

謡は匂に守られる格好で頬を押さえて固まっている。

「匂、どうして芝貫の人間がここにいるの……!!」

「しゅ、愁のこと心配して来てくれたんじゃない! そんな言い方しなくたって……!」

「愁のことが心配? どうかしらね、悄然としてるあなたを慰めて取り入ろうって魂胆だったんじゃないのかしら?」

後半は謡に向かって言っているようなものだった。謡が、

「ぼ、僕はそんなつもり、」

と否定の言葉を発そうとするが、美佳子に

「黙りなさい!!」

とヒステリックな声で一喝されて口を噤んだ。

「早く帰きなさい。これ以上匂と愁に関わらないで頂戴」

「母さんっ、」

「匂、愁の様子を見に行きますよ」

「待って母さん、謡さんに謝ってよ……!!」

美佳子の足が止まり、悪鬼のような顔で匂を睨む。まずい、と謡の中の何かが警鐘を鳴らす。自分のせいで匂と美佳子の間が険悪になるのは避けたい。だから、

「じゃあ僕、失礼します」

と努めて穏やかな声を上げた。匂が驚いた顔で見ってくる。

「謡さん・・・？」

「愁君によるしくね。それじゃ」

睨んでくる美佳子に礼をして、謡は周囲の人たちにお騒がせしましたと一人一人に頭を下げながら待合室を退出していく。

「う、謡さん待って、」

折角来てくれたのに。あたしのことを心配して来てくれたのに。

「匂ちゃん、良いから」

あくまで穏やかに微笑む謡の笑顔が哀しすぎて、匂は涙が込み上げてくるのを止められなかった。潤む目を見た謡が一瞬辛そうに顔を歪めるが匂のもとに取って返すことはなかった。

「謡さん、」

彼の足を止めることが出来ないまま、謡は匂の前から去って行った。耐えられず謡を追おうと駆け出すが、美佳子に腕を掴まれて阻まれる。

「匂、あの子を追うことは許しません」

「どうして！？ひどいよ、母さんは今になって来ておいて、何でそんなに偉そうなの！？他人の謡さんの方がよっぽど家族みたいだよ・・・！！」

「・・・何と言おうと許しません。愁の病室に行きますよ」

「一人で行けば良いじゃない！！」一々母さんの言葉に従いたくない！！」

美佳子の眉が更に釣りあがるが、しかし怒りが爆発することはなかった。

「・・・好きになさい。芝貫を追わないなら、何をしても良いわ」

そして美佳子も待合室を去って行く。

（・・・もう、嫌、）

匂は椅子にへたり込み、くぐもった嗚咽を洩らした。

謡は病院の前に立ち、まだじんと痛みを訴える頬にそっと触れた。熱い。

（仕方ない。美佳子さんが僕を勾ちゃんに近づけたくないのも、分かるから。だから、泣くな）

こんな時は涼子に会いたくなる。だがさっき会ったばかりだし、そのときは涙を見られてしまった。また公園に戻り彼女に会ったら、また泣きたくなりそうな気がして恐い。

（もう、帰ろう）

美佳子がいる限り、謡は愁の面会は出来ないだろう。なら、此処にいても仕方ない。早く帰って夕飯の支度をしよう。

謡は涙を堪えながら、家路を歩き出した。

葉弓は誰にしようかな、と唱えながら街中を歩いていた。時間帯の所為か、学生服姿の少年少女が多い。サラリーマンが多くなるのは七時近くなのだろう。

「榆乃木にはああ言ったけど、正直確かめるのが一番早いんだよね」ぶつぶつ呟く彼女の頭には、以前謡と一緒にいたフード姿の小柄な少年―神薙愁の姿が浮かんでいた。

（でも定番過ぎるかなあ、）

でも他にあの子の知り合いらしい子知らないからなあ。謡の名前は涼子と彼の会話のを盗み聞きしたことによって知っているが、交友関係までは知らない。

（いや、待てよ……？）

涼子が謡を冷たく突き放した夜のことを、葉弓は不意に思い出していた。あの時、普通に会話をしていた二人の前に現れた人間のせい

で、二人の様子が徐々に不穏なものになっていったのではないか。
（・・・確か犬を連れた男の子だったよね）

どうやらその男の子は、謡の友達といった感じではなかった。だが、謡は彼と仲良くしたいような様子を見せていたではないか。

葉弓は一人、不気味にほくそえんだ。

「見いつけた」

葉弓の残虐性が、花を咲かせつつあった。

どうも葉弓の意味深な言葉が気になって、涼子は落ち着かなくなってきた。もしかしてこのベンチから立ち上がるべき時が来ているのではないか。

葉弓は危険だ。善と悪の境目が今一不明瞭で、楽しければどんなことでもする。だから謡の存在を葉弓に知られるのはあまり喜ばしいことではないと思っていたのだが。

（私の気のせいだと良いのだが・・・・・・・・）

海を眺める。凪いでいた波が、徐々に荒れ始めていた。

謡が悄然として帰宅すると、弟の誓がダイニングの机に突っ伏して転寝をしていた。

（そう言えば、誓も俺みたいな“手紙”を受け取っていたんだよね・・・）

誓はそのことをどう思っているのだろうか。聞きたくもあり、聞くのが恐くもあった。

「ん、兄貴お帰り・・・・・・・・」

「ただいま。誓、ちゃんとベッドで寝ないと体痛くなるよ」

「ん、でも俺、ベッドよりこの机に突っ伏してる方が気持ちよく寝れるんだけど」

誓の言葉に、謡は苦笑する。

「そう言えば愁、病院に運ばれたって近所の人に聞いたけど、お見舞いに行ってたの？」

「うん……行ったのは、行ったんだけどね」

煮え切らない謡に、誓はへらりと笑い、

「ああ、どうせ匂たちの母さんに帰れとでも言われたんだろ」

「！」

平然と謡の傷口を決るようなことを言った。

「兄貴さあ、もう匂とかには関わらないほうが良くない？」

「……誓？」

「だって匂とか愁に関わるたびに兄貴って辛い想いしてる気がするんだよね。それってあいつらに関わらなければ良いってことじゃないの？あの母さんにぎゃあぎゃあ言われることもないしさ」

誓はしれつとした口調でそう言いきると、席を立った。

「まあ、兄貴が自分から疵付きたいっていうなら、俺は止めないけど。あ、今日は久しぶりに俺がご飯作るから」

「あ、ああ……」

だから兄貴は少し休め、と言われ謡は彼に急かされるようにして二階へ上がることになった。

倉橋、舞田と別れしばらく町をぶらついた後、藪内は自宅へ戻って来た。だが門前に見知った顔を見つけて、眉を寄せた。見知った顔――藍田渉は愛犬のチコを抱え、泣きそうな顔で藪内を認めた。

「あ、あのね、」

「・・・・・・・・何だ」

「その、おじさんとおばさんの離婚のこと・・・は、」

「俺メールに書いたよな？同情心は要らないって」

「違う、同情心なんかじゃなくて、」

「何だよ、はつきり言えよ。いつまで経っても、俺を苛つかせ」

「心配なんだっ・・・・・・・・！！」

自分の言葉を遮ってまで吐き出された渉の言葉に、藪内は一瞬息を詰めた。

「僕は、ただ・・・奏くんのが心配で、別に同情してるわけじゃ・・・・・・・・なくて、」

「・・・何でお前が泣きそうな顔してるんだよ」

藪内は溜息をつく、渉の前に立った。

「お前、馬鹿だよなあ」

「・・・・・・・・え？」

「俺に蹴られて痛い想いしたのに、何でそんなに俺のこと気にするわけ？」

「・・・・・・・・」

渉は愛犬を抱えたまま押し黙ったが、すぐに顔を上げてにっこりと微笑んだ。小さい頃のままの素直な笑顔に、藪内は硬くなった心がほぐれつつあるのを感じた。

「決まってるよ。奏くんが、大事な友達だから」

こいつは真正銘の馬鹿だと思う。自分を蹴ったり殴ったりして傷つけた人間を、大事な友達と明言する。昔から少しも変わっていない、純粹な笑顔とともに。

「ったく、」

渉を撫でる代わりに、彼の腕の中で不思議そうに藪内を見上げているチコを撫でようと腕を伸ばそうとした瞬間、

「ちょっとお邪魔します」

場違いな明るい声が響いた瞬間、渉の背後に片目を前髪で隠した女が何処から現れた。突然のことに、藪内も渉も反応できない。女は無防備な渉の口を片手で覆うと、硬直する彼の首元にナイフを突きつけた。

「う……んっ、」

「渉!!」

藪内が一步前が出るが、

「動くなよ。この子を殺されたくないならね」

という女の楽しげな声にビクツと体を震わせた。渉がもがくが、拘束を解くことが出来ない。

彼の腕の中のチコが女を敵と認識して低く唸っているが、女はチコには目もくれない。

「安心して? 言う事を聞いてくれたら、決してこの子に危害は加えないから」

「言う事?」

「そう、言う事」

渉が苦しげに身を擦る。

「何だ、それは」

「芝貫謡、知ってるよね」

「!？」

その名に、渉も藪内も目を見開く。謡の知り合いなのか?

「芝貫だと?」

「そう。彼を連れて、今からあたしが言う場所に来て」

「何処だよ」

「……海の見える公園。この町の人間なら、それだけで分かるでしょう?」

藪内は押し黙り、女と謡の関係を推察する。

「良い？芝罘謡が洩つたら、こう言っておいて。“お前が来なければ藍田渉はお前の所為で死ぬ”って」

明るい口調で言われ、緊迫感はない。だが死ぬ、という単語に渉は顔を蒼白にして身を強張らせた。

「じゃ、この子は借りていくから」

そう言うや否や、女はグツと足に力を込めると、

「なっ、」

渉を小脇に抱え、藪内の頭のはるか上を飛んで彼の背後に着地した。

「よろしくね」

藪内にウイंकを残し、女は目にも留まらぬ速さで走り去った。

「・・・・・・・・人間、か・・・・？」

あり得ない情景に、藪内は暫く立ち尽くしていることしか出来なかった。

公園へ呼ばれて

強く壁に向かって突飛ばされ、渉は背中を強打する羽目になった。

「……っ、」

「芝貫謡が来るまで大人しくしていってくれよ」

渉を連れ去った女は、何処から取り出したロープで彼をぐるぐる巻きにし、手首と足首もそれぞれ拘束した。楽しげに鼻歌などを歌いながら。

「どうして、こんな、」

女からは渉を傷つけようという意志は感じられない。だが、渉は女が怖かった。表面上は笑いながらも、心中では何を考えているのか分からない。不気味なのだ。笑顔という仮面の下に、何か途方もない化け物を飼っているそうで……。渉は怯む体に活を入れながら、目だけで周囲を確認する。……渉が連れて来られたのは、シャッターを下ろして久しいらしい店だった。蜘蛛の巣や埃をかぶったまま放置されたアンティークの雑貨たちが薄闇の中で渉の目に入る。喧嘩沙汰でもあったのかガラスのショウケースが割れ、破片が床に落ちたままになっている。

「芝貫謡、知ってるよね？」

身動き出来ない渉の横に来た女が、耳元でそう問い掛ける。わざとなのか、ついでのように息を吹き掛けて来る。気持ち悪くて、渉は小さく震えながら目を閉じた。すると女がぐいっとな渉の顎を掴み、無理矢理自分の方に向かせる。

「……っ、」

「訊いているんだ、答えろ。芝貫謡を知っているな？」

「しっ、知ってる、知ってます、」

「関係は？」

「か、関係？」

女が何を訊きたいのか、渉には今一掴めずにいた。戸惑う渉に、女

が頷いて見せる。

「そう、関係。あたしが思うに、まだそんなに親交があるわけではないように思うのだが？」

それはそうだ。自分は、謡を苛めるグループに付き従っていたのだ。謡と親しい付き合いが有るわけがない。渉は何度も首を縦に振る。

「そうか、やはりか」

「……あなたは、芝貫くんをどうする、んですか」

掠れた声しか出せない。加えて、質問すべきではなかったかも知れないと思った。だが女はあっさり応えた。

「起きて貰うんだよ」

渉には理解出来ない言葉で。当然の如く、渉はポカンと目を点にする。

「え？」

「その時にはお前にも少し啼いてもらうから」

「……？」

「ああ、その顔は理解できない、と言ってるね。あたしの嗜虐心を大いに擽る顔だ」

嗜虐心、という物々しい言葉に渉は背筋を凍らせた。今さらながらに逃げなければ、という焦りの念が浮かんで渉はがむしゃらにもがいた。だがロープが外れてくれる訳もなく、

「暴れるな、皮が剥けるぞ」

「……っ、」

確かに少し手首を動かしただけで、手首に激痛が走った。

「さあて、芝貫謡は来るかな？大して親交のないお前を助けに、さ」
女―葉弓の楽しげな含み笑いが店内に虚ろに響いた。

……やはり疲れていたのだろうと思う。夕食作りは誓に任せ、自室に戻った謡はいつのまにやらぐっすりと寝込んでいたらしい。ノッ

クの音にも気付けない程に。

「兄貴、電話」

「…ん、誰から」

寝ぼけ眼を擦りつつ、誓から受話器を受け取る。

「名前は名乗らなかった。すっげえ焦ってて、早く兄貴を出せの一点張り」

「……………分かった、ありがとう」

へらり、と笑って誓が部屋を出ていく。謡は誰からか、と思いつつ受話器を耳に当て、

『お前、あの女とどういう関係だっ！！』

いきなりの出だしに、謡は相手が誰かを考えることも出来なかった。

「え、あ、あの」

『……………あ、悪い、』

ばつが悪そうな口調で話され、相手が誰か分かった。そしてその彼が自分に電話をして来たことに驚きもした。番号は高校の連絡網を見たにせよ。

「や、藪内くん？」

『悪い、いきなり怒鳴られても分かんねえよな……………単刀直入に言う。涉が変な女に攫われた』

「えっ！？」

『しかもそいつは、お前に用があるみたいだった』

「ぼ、僕に？」

『海の見える公園に來い……………渋るようなら藍田涉はお前のせいで死ぬと伝える、だと』

藪内が焦りを押し殺しながら話しているのがよく分かる。そして、海の見える公園とは、どの公園なのかを。

（……………榆乃木さん？）

パツと頭に浮かんだのは、赤いリボンと眼帯をして、憂いの帯びた瞳で海を見つめる女性の姿だった。まさか、あの人が？でもどうしてあの人が涉を攫うのだ？

「あ、あのその女の人って、赤いリボンしてた・・・？」

もしこの問いに藪内が頷けば、渉を攫ったという女が榆乃木涼子という可能性は高まる。だが、

「いや、リボンはしてなかった。・・・特徴つつつたら、」

一瞬の間、そして、

「左目が前髪で隠れてた。半袖のコートみたいなを着てて、」

「！？」

謡は吃驚して目を見張った。藪内が上げた特徴を持つ人物とつい最近邂逅したばかりだからだ。

神雑愁に絡んできた不良たち三人を、たった一人で倒した女性。不思議な話し方をし、何処か榆乃木涼子に似ていた。謡と愁は彼女に助けられた。その人が、渉を攫った。謡を呼び出すために。一体、何故？

「おい、急に黙ってどうしたんだよ！お前知り合いなのか！？」

「し、知り合いつていうか、つい最近会ったばかりって言うか・・・僕の思ってる人と藪内君が言ってる人が同一人物かもはっきり分らないけど、」

謡は藪内に、謎の女性との邂逅の経緯を話した。

「・・・で、海に見える公園つてのは、西崎臨海公園で良いんだよね？」

「う、うん・・・そう思うけど、」

謡は壁掛け時計を見上げた。午後七時過ぎ。父の春樹はまだ帰ってきていないが、彼が帰ってくると家から出るのは困難だ。特に最近

は。

出かけるなら今しかない。誓には適当に言っ出て出るしかない。

「僕、公園に行ってみるから、」

「・・・一人で行くのか？」

「・・・指定は、無かったの？」

「ああ、兎に角お前に公園まで来て欲しいみたいだった。誰かと一緒に来るなとか一人で来いとかいう指定はなかったな」

思い出すように藪内が慎重に答えた。藪内が来てくれるなら心強いが、

「……僕一人で行くよ」

自分を名指しで誘^{いざな}っているなら、そこには何か理由があるはずだ。それに自分や愁を助けてくれた人が何の理由もなく攻撃してくるとは思えない。

『平気なのかよ』

「多分…。藍田君は必ず無傷で戻すから」

『やけに自信满满だな。喧嘩できねえくせに』

何故か自分があの女性によって傷付けられるという危惧が浮かばないのだ。それが自分でも不思議なのだが。

「兎に角、伝言ありがとう。今から行ってみるから。それじゃ、」

『待て芝貫』

「…?」

『今から俺と渉の携帯の番号を教える。何かあったらかける』

「あ、う、うん……」

藪内が矢継ぎ早に言う十一桁の数字を紙に書き留める。

『良いか?』

「大丈夫。ちゃんとメモしたから」

『……渉のこと、頼むな』

苦しげな口調。高圧的で乱暴な口調しか藪内からは聞いたことがなかった。揺は場違いにも新鮮さを感じてしまった。そして藪内にとって渉がどれくらい大切な存在なのかを感じ取った気がした。例え、目に見えなくても。

「うん」

揺は藪内との通話を終わると、神楽の携帯にかけた。

「神楽、そろそろ上がるか」

「あ、はい」

春樹の声に神楽はデスクから腰を浮かしかけたが、胸元の携帯電話が震えたから春樹に断って出た。

「もしもし、」

『神楽さん、僕の名前は出さないで下さい』

相手は謡で、しかも挨拶抜きにいきなり話し出す。謡らしくない。また何かあったのかと神楽はそつと春樹に目を向けた。春樹は電話の相手を詮索する気はないようで、また財務諸表に目を落としながら難しげに眉を寄せている。

「これはご無沙汰しています、お母様」

『すみません、』

「いえ構いません。どうされました？」

『父は、まだ会社ですか？』

「はい」

『神楽さんにお問い合わせがあるんです……父を会社か、もしくは何処かに引き留めて帰宅を引き延ばして欲しいんです』

謡は思い詰めたような声をしていた。一体何をしでかそうのか。不穏な気配に、神楽は眉を顰めた。

「……………」

『お願いします。僕、少し出ないといけなくなって……父が帰ってきた時にいなかったら、父が激昂するのは分かっているので』

すぎるような口調。何故かそれが歳離れた弟に重なって、神楽は忘れようとしている痛みを思い出してしまった。謡は一体何をしようとしているのか。「何を、されるつもりですか」

謡のことは大事だが、神楽の主人はあくまで春樹だ。謡の依頼は、春樹への裏切りになりはしないか。

『少し、散歩に行くだけです』

どうして人は明らかに嘘と分かる嘘を吐くのか。特に謡は嘘が下手だ。声の微かな震え、上擦り。彼の声が自分の言葉を嘘だと教えている。

「あまり、無理はなさらないくださいね」

気付けばそう言っていた。

『……すみません、ありがとうございます』

「では失礼します」

神楽が通話を終わると、春樹に向き直る。以前から経理のことで気になっていたことを問い、それで時間を稼ぐことにする。

「春樹さま、実は以前から気になっていることがあるのですが……

……」

神楽がどのくらい父を家に近づけさせずにいられるかは分からない。だから、急がないと。

「あれ兄貴、起きたの？飯、まだだけど」

誓のエプロン姿は珍しいが、今はそれにかまう暇はない。

「少し出てくる。ご飯は、先に食べてて」

「はいよ」

特に何を訊くでもなく、誓は謡を見送った。謡は行ってきます、と呟いて家を出た。誓は兄貴が帰ってくる前に親父が帰らなければ良いけど……と軽く肩を竦めた。

謡は家を出て走り出す。渉をさらった人が自分と愁を助けてくれた人、かつ榆乃木涼子と何らかの関係がないことを祈りながら。

公園にて

こんなときでもお腹ってすくんだな、と、もがき疲れた渉は思った。
謎の女性が出ていってから早十分はたとうとしている。

(…芝貫くんは、来てくれるのかな、)

恐らく謡の性格上来るだろう。何があっても。

(……無理、しないで欲しいな……)

渉はそう思った。

「楡乃木さんっ!!」

「……謡？」

最近はいよいよちゅう謡に会っている気がする。ただ、向こうから会いに来るのだが。

「どうした、そんなに慌てて……こんな時間に大丈夫なのか？」

「あ、あの、僕、あなたに訊きたいことが……」

一体なんだろう。父親に叱咤されるのを承知で外出してまで訊きたいことがあるのだろうか。涼子が眉を寄せて謡の言葉を待っていると、彼はようやく息を整えて話し出した。

「あ、あの藍田君を知りませんか？」

予想外の出だしに、涼子は更に眉を寄せる。

「藍田？この前の犬を抱えた少年か？」

「……知らないんですか？」

「知らない、というのはどういう意味で？」

謡の顔がどんどん戸惑いを浮かべるのが分かる。だが涼子にも謡が何を言いたいのかがサッパリ分らない。

「そ、その、今日会ったりはしてないんですか？」

「その藍田とか？何故？」

「え、な、何故って言われても・・・」

「はつきりしないな。私に何が訊きたいんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

謡も涼子も互いに困った顔を見合わせる。そのとき、

「やあ、来てくれたんだね・・・芝貫謡」

という自棄に明るい声が園内に響いた。

「・・・・・・・・葉弓？」

「やつぱり、あなたが・・・・・・・・？」

涼子は思わず謡を見遣る。謡も涼子を見返す。

「謡、葉弓のこと知ってるのか？」

「・・・前に、僕と愁君が不良に絡まれたとき、助けてくれたんです」

「・・・・・・・・」

葉弓が軽い足取りで二人のいるベンチに近付いて来る。

「藍田君は何処ですか？・・・それに、僕を呼び出したのはどうしてですか？」

涼子は全く話が見えず、謡と葉弓を等分に見遣る。謡の横顔は硬い。対して葉弓は楽しげにににこと笑っている。彼女が健全に笑っているときほど面倒くさいことが起こることを、涼子はよく知っていた。

「謡、どういうこと？」

「・・・・・・・・さっき、クラスメートの藪内君という人から電話があったんです。藍田君が変な女に攫われたって。左目が前髪で隠れ

てて、半袖のコートみたいな服を着ていた女に。その人は、僕にこの公園に来るように言っていたそうです」

それを聞いた涼子は、無言でベンチから立ち上がった。温度のない冷たい瞳で、葉弓を睨みつける。

「……冗談だと言ったな、貴様は」

咽の奥から這い出すような低く淀んだ声で、涼子が言う。今まで聞いたことの無い口調に、謡は背中がぞつと粟立つのを感じた。

「榆乃木さん、」

「謡は黙ってる」

「……！！」

「葉弓、どういづつもりだ」

「うふふ。あまり余計なことはしたくないんだけどね」

「……！！！！」

「藍田渉は無事だよ。君を以前不良から助けた路地に、廃業になったアンティークの店があったでしょ？あそこで大人しくしてもらってるから。四肢は縛らせてもらってるけど、危害は加えてないから安心して？」

葉弓は謡の手を取る。冷たくひんやりした手だ。葉弓の手は火照りそうなほど熱いのにな。

「葉弓」

「嫌だなあ、そんな恐そうな顔しないでよ……あんたのためを思ってるのに」

謡は涼子と葉弓が一体何を言っているのかさっぱり掴めない。だが。（……俺は、この光景を知ってる？）

涼子と葉弓が、謡を挟んで口論をしている光景を見たような気がする。奇妙な既視感^{デジャビュ}。

「私のため？ふざけるな、お前が楽しいだけだろ」

「酷い言い方。ねえ、謡？」

葉弓が親しげに謡の頬に触れようとする。しかし素早く動いた涼子

の手が、葉弓の手を払っていた。ぱちん、と音が響く。

手を払われた葉弓より、謡のほうが身を竦ませる。それに気付いた葉弓が、謡の耳元でボソツと囁く。

「お父さんに頼った叩かれたこと、思い出したの？」

「っ！」

⌈
•
•
•
•
•
•
•
⌋

涼子が葉弓の頬を引っぱたこうとする。しかし謡が止める。

「榆乃木さん、ダメです………っ」

「謠」

「僕は大丈夫ですから、」

「ぷ、あはははははははははは！」

いきなり葉弓が大声で笑い出した。腹を抱え、心の中から楽しそうに。謡はポカン、と呆気にとられ、涼子是不愉快そうに顔を顰めた。

「いやあ、二人の会話を聞いてて常々思ってたけど、謡は本当に面

「白い子だね！」

•

「私は君の知り合いを攫ったんだよ？言わば悪人だ。なのに、そんな人間を庇ってくれるとはね！どれだけ馬鹿なのかな、あははははははははははっ！！」

「お前、」

涼子が葉弓に近付く。すると葉弓は笑いを一氣に引っ込め、

「待つて」

「何が、」

葉弓は謡の顔を見て、

「一つ質問があるの」

「はい」

一体何を訊かれるのか、謡は緊張する。

「君はさ、
“輪廻”
って信じる？」

「……輪廻、ですか？」

「そう、輪廻転生。つまり生まれ変わるってことだね、平たく言え

ば」

謡は戸惑うしかない。いきなりそんな質問をこの場でされるとは思っていないかったのだから。涼子を見れば、彼女らしくなく硬い表情で固まっている。体が小さく震えて見えるのは謡の目の錯覚だろうか。

「どう？信じる？」

「い、いきなり言われても、」

「ああ、そんなに深刻に考えなくても良いから。何となくでいいの。答え如何で藍田渉を殺すとかはしないから」

謡はそれを聞いて少し安心したのか、

「……あまり、信じません」

と答える。

「そう。“彼”とは考えが違うんだね」

彼？

謡は眉を寄せる。彼、とは誰のことだろう。思わず涼子を見れば、涼子は唇を噛んで葉弓を睨んでいる。自分の答えのせいだろうか。それとも、葉弓の言った“彼”のせい？

ズキッと、何故か胸が痛む。

「彼、って」

「それはあ、」

「葉弓！！」

涼子が葉弓の口を塞ぐ。

「に、榆乃木さん……」

「謡は違う！あの人じゃない！！」

「あれえ？あんだただって言ってたじゃん。謡が“彼”に似てるって」

「そんなこと言っていない！」

「素直じゃないなあ。どうしてそんなに嫌がるの？もし謡が“彼”なら起きてもらったほうが良いじゃんか」

「だから謡は違うと言ってるだろう！あの方はもっと強くて……」

「まあ確かに謡は強いっていう感じじゃないけど」

「そんなことは言っていないだろう!!」

涼子は普段なら上げない金切り声を上げてまた手を振り上げた。

「榆乃木さん、落ち着いてくださいっ!」

見ていられなくなって、謡は涼子の腕を掴んだ。

「!」

その衝撃で、涼子はビクツと身を震わせて口を閉ざした。涼子の目と、謡の戸惑った目が合う。

「に、榆乃木さん、」

謡の声は今にも泣き出しそうに震えていて。それが涼子に冷静さをもたらした。

「・・・・・・」

目で放せ、と訴えると謡は素直に腕を放した。

「久々に見たなあ。“彼”のことで乱れるあんた」

葉弓の笑顔に、涼子は冷めた目で応える。

「・・・・・藍田渉を家に返してもらうぞ」

「あらら、もう元に戻っちゃった。そんなに謡の存在はあんたにとって大事なのかな」

「煩い。あんたに構ってるほど私は暇じゃないんだ。言う通りにしろ」

「嫌だよ。だって、謡が“彼”が確かめるためにこんなことしてるんだよ?なら、確かめないと気がすまない」

「・・・・・どうやって確かめる気?」

またにつこりと葉弓が笑う。

「そんなの決まってる。少し藍田君を可愛がるの」
ピクツと謡が肩を震わせる。

「可愛がる?」

「言ったじゃん。謡が“彼”なら大事な人間が危なくなったり自分が危なくなったりしたら“力”を発現させるんじゃないかって。い

つぞやあんたを守った“あの時”みたいに」

あの時？さつきから彼だのあの時だの謡にはわからないことばかり話され、二人に付いていけない。だがなにやら不穏な空気が漂いつづけていることだけは肌で嫌というほど感じている。このままでは渉の身が危ないということにも、気付いている。

「……………」

「あれ、止めるとか言わないの？」

葉弓がさも意外だと言わんばかりに目を見開く。

「榆乃木さん、」

「……………もし謡があの人も、それで覚醒するとは思えないな」

「はひゃ？」

葉弓の口から奇妙な感嘆詞が洩れる。

「謡とあのガキは大して親交はないはずだ。あまつさえ謡はあいつの属するグループに苛められていたんだ。謡があいつを気にする理由はないだろう」

涼子の言う事は最もだった。渉と謡は友人と言えるほどの付き合いはないし、実際に手を出していないとはいえ、渉は謡を苛めていたグループに形だけとはいえ与する形になっていたのだ。その渉が痛い目に遭っても、少し心を痛めはするだろうが身を挺して守る、といったことにはならないだろう。謡が優しい人間だとしても、まさかそこまではしないだろうと涼子は思ってたのだが。だが、

「榆乃木さん、」

謡は放課後に渉と和解したことを涼子に話さなかったことを後悔していた。それを葉弓に悟られぬように涼子に伝えようとしたのだが「なあんだ、もう仲良しになってるんじゃない？」

葉弓は気付いた。それはそれは嬉しそうに、晴れ晴れとした顔で笑う。一陣の強風が吹き付け、左目を覆う前髪が浮く。

「……」

左目が賤しく下卑た笑みを浮かべているのを見て、謡は瞬時に葉弓の本性に勘付いた。

（この人は、平気で他人を傷つける……………）

「じゃ、この前のアンティークの店で待ってるね。お友達の藍田渉君と一緒にさ」

「ま、待つて……………!!」

謡が葉弓に手を伸ばそうとするが、遅い。葉弓はバイバイ、と言いながら後ろに跳び退り、脱兎の如く駆け出した。謡は彼女を追おうとするが、その手を涼子が掴む。

「い、行かなきゃ。藍田君が、」

「謡が行く必要はないだろう。あいつはお前を苛めていたんだぞ？」

「違うんです、藍田君は僕を苛めたくて藪内君のグループにいたわけじゃないんです！」

「何を訳の分からないことを言ってるんだ、謡。あんな奴、放つとけばいいじゃないか」

葉弓の遊戲に付き合うことはない。涼子はそう言いたかったただけなのだが。

「!!」

初めて謡にギツと睨みつけられて、涼子は息を呑んだ。あろうことが、謡の眼光に怯む。

（……………一体なんなんだ、）

「放してください、藍田君は僕の大事な友達なんです」

自分を苛めていた人間を大事な友達だと？

涼子には謡が理解できなかった。

『……………いけません。彼女は僕の大事な妹ですから』

（あなたはおかしい。だってあの女は兄であるあなたを殺そうとまでしたのですよ？なのにどうして妹というだけで許せるのですか）その問いは、決して発することは出来なかった。言おうと口を開くたび、あの人が酷く悲しげな顔をするから、言えなくなったのだ。あの人を、悲しませたくなかったから。

「僕、行きます」

“過去”のあの人とのやり取りを思い出し無防備になった涼子の手から逃れ、謡は葉弓を追って走り出した。

（私にはあの人が何を考えているか分からない。そう、改めて認識した・・・それからすぐ、“あれ”が起こった）

涼子はしばらくたった一人立ち尽くしたまま、“過去”に意識を飛ばしたままだった。

重なる今と過去

「藍田、くん………?」

藍田渉は四肢をロープで縛られた状態で、ぐったりと床に倒れていた。唇が切れて流れる血はまだ乾いていない。すでに頬に蒼瘡が出来始め、片方の脛が腫れて熱を持っている。アンティークを飾るためのガラスのショーケースが割れ、その破片が散らばっているところに倒れているので、ガラスの破片で怪我をしていないか不安になる。

「藍田君、藍田君、確りしてっ!!」

渉を抱え起こすと、苦しげな呻き声を漏らしながら脛を震わせた。

「藍田君っ!!」

「し、ばぬき……く」

「大丈夫!? 今解くから、」

「!! うし、ろ……!!」

ブンツ、と背後で何かが振り上げられるような音がして、謡は右腕で渉の頭を抱え、左腕を身を庇うように翳した。

「うつ……!!」

鈍痛が左腕に走り、謡は呻いた。何か鈍器で殴られたらしい。

「あつは、避けないんだ。格好いい」

襲撃者はやはり葉弓だった。薄闇の中、右腕に何かを持っているのが分かる。

「っ、藍田君は、返してあげてくださいっ、」

謡の必死な声に、葉弓がけらけらと哄笑を上げる。

「君、あたしのお話聞いてたのかな? 君には起きてもらわないといけないんだ………よっ!!」

「うああ……っ!!」

葉弓の攻撃がまた左腕を強打する。抱えられた渉が体を震わせる。

「芝貫くんっ」

「ほらほら、大事な友人が怪我をして泣いてるよ！？助けてあげなよ、涼子を守ったときみたいに、偉大な“力”でさあっ！！」

葉弓は謡の左腕を殴ったスパナを放り出すと、謡の後ろ髪を引っ張り上げた。謡が痛みに顔を歪める。

「いつ……！！」

「まだダメなの？仕方ないな、君の目の前でお友達を可愛がってあげるよ」

「ひっ……！！！」

謡を突き飛ばし、守るものの無くなった渉の胸倉を掴み上げる。恐怖に顔を歪める渉を、葉弓の左目が捉えた。何時の間にか左目を常に覆っている前髪は、風もないのにふわりと浮いている。左目は他者を傷つけるのが楽しくて仕方ない、というように醜悪に歪み、渉は恐怖に歯をがちがちと鳴らす。

「はな、放して、」

「貴様には悪いが、兄様を起こす種になってもらっよ」

兄様？と一瞬怪訝に思った瞬間、

「……！！！」

ずぶつと、自分の腹部から不気味な音が響いた。目の前に、にっこりと笑う葉弓の笑顔。

痛い、というより重い、と思った。ぐりぐりぐり、と何かが押し込められていく感覚。

「あ……かはっ、」

自分の身に一体何が起きているのか、渉には理解出来ないでいた。

「藍田、く、」

尻餅をついたまま、謡が呆然と自分を見ている。

「痛い？痛いなら泣き叫んでよ、そして兄様を起こしてよ」

葉弓はうつとりと恍惚とした笑みを浮かべ、渉の腹に突き刺したガラス片を握り締める。掌の皮膚が裂け、鮮血がぼたりと滴る。

「……！！！」

声が出ない。謡に、早く逃げてと言いたいの、ヒューヒューとい

う掠れた音しか出ない。

「早く叫べよ」

葉弓の口調に苛立ちがこもる。ブツ、という音を響かせて凶器が腹から抜かれる。ぼたた、ぼたた、と血の固まりが埃塗れの床に赤い花を咲かせる。

「・・・・・・・・つ、」

立っていることが出来ず、支えを失った渉の体は床に沈んだ。

葉弓は血のついた手をぺろりと舐め、茫然自失としたままの謡に下卑た笑みを送る。

謡は吐き気に体を強張らせる。

（藍田君が、死んでしまう、）

『・・・・・・・・姫様を、お守りしなければ』

（起きる、僕が起きれば・・・・起きるって、どういうこと？）

『こんな出自の定かではない僕を愛してくれた姫様を守らなければ、もしそれで僕が疵付き、命を散らす結果になったとしても、あの方だけは』

自分の“中”で誰かの声がする。自分より低くて耳に心地よく響くテノール。

『そのせいで姫様が涙されても』

（・・・・・・・・誰？）

『きつとまた、生まれ変わって、会えると信じて、僕は』

（生まれ変わって、会える・・・・・・・・）

自分はこの声の持ち主を知っている。そう、ずっと昔に聞いたことのあるこの声。

「兄様、早く起きてください！大事なお友達が死んでしまいますよ！この私の、あなたのたった一人の妹の手にかかって！！」

『“死”に魅せられたあの子を救えるのは実兄の僕だけ。だから、姫様には、』

（あつ・・・・・・・・い、）

謡は胸が急に熱を持ち始めて、動揺する。

目の前では、葉弓が渉をどう痛めつけようか考える光景が広がっている。

(・・・・藍田君は無傷で返すって、藪内君にも約束したのに・・・・)

目の前に広がる赤い血溜まり。倒れたままの渉。その姿が、

(え・・・・・・・?)

何故か楡乃木涼子に重なり、

頭が真っ白になり、次の瞬間、

「姫様っ!!!!!!!!!!」

どうしようもない胸の痛みに襲われて、謡は叫んだ。

なぜ涼子のことを“姫様”と称したのかも、理解せぬままに。

重なる今と過去（後書き）

ついに謡が目覚める・・・かも。というより先に渉を助けなきゃ・・・。

妹の歪んだ愛情

『姫様！！』

「！？」

“彼”の声が聞こえた気がして、涼子は顔を上げた。結局謡が立ち去った後も、涼子は公園から離れる気になれず、ベンチに座って俯いていたのだ。何故か今は海に目を遣ることが苦痛で仕方なかった。海を見ているだけで思い出す。温かい手、優しい瞳、そして、何処か寂しげな笑顔。涼子を抱き締めてくれたときの、優しい息遣い。（一体どうしたというんだ、私は。この胸を劈くような気持ちは、何だ）

本当は謡の後を追いたい。だが、何故か足が萎えて動けない。

過去に浸り、体から力の抜けた状態だった彼女の耳に飛び込んできたのが、姫様、という言葉。しかも、“彼”の声で。

「まさか、謡………？」

“彼”に似ている謡。やはり、そうなのか。

謡は“彼”の生まれ変わりなのか？そして、“覚醒”したのか？

「行かないと、」

もし本当に謡が“彼”で、“覚醒”したのなら、

（私は、あの方に会わなければいけない。そして、あの時言えなかった言葉を、言わなければならない）

ここで、蹲っけていても仕方ない。動かなければ。本当の待ち合わせ場所は此処だが、優しいあの人なら、再会の場所が少し変わったくらいで怒ったりはしないだろう。

『全く、姫様は仕方ないお方ですね』

困った顔で、それでも頭を優しく撫でてくれるはずだ。そして私は子ども扱いしないで下さいと怒るのだ。それを見た父様と母様がクスクスと笑い合うのだ。

「……………」

涼子はベンチから立ち上がると、海に少しだけ目を遣った後すぐに駆け出した。

「兄様、お久しぶりです。また兄様にお会い出来て、私嬉しい限りです」

渉は霞む目で、謡が立っているであろう方向を見た。ゆらゆらと蜻蛉のように視界が頼りなく揺れ、しかと彼を認めることが出来ない。それでも、謡が酷く怒っているのが分かった。

(・・・・・・芝貫くん、にげ・・・で、)

頭もぼんやりしてきた。刺された腹は何故か痛みを発しておらず、苦痛はない。ただこのままでは自分に待っているのは確実に“死”であることは理解しているつもりだ。それでも恐怖を感じないのは、恐らく、

「葉弓、今もまだ、死に囚われているのか」

謡から発された声の低さに、渉は驚く。

「兄様があの女に囚われているのと同じです」

「葉弓、もう涼様を認めてくれ。あの方は、姫様はもう十分苦しめられた」

「私よりもあの女を取る、というのですね」

葉弓が爪先で渉の頭を小突く。ゴツという音とともに、渉の頭がぶれる。

「うあ、あ」

「葉弓、頼むから彼は解放してやってくれ。彼は関係ないだろう」
謡の真っ黒な黒髪が何時の間にか伸びていた。腰の半ばまで垂れたストレートの黒髪。

(あ、れ・・・芝貫くんの周り、何かユラユラしてる・・・?)

渉の気のせいだろうか。彼が見る限り、謡の周囲に靄のようなものが漂っている。それも、赤い、

(・・・けい、たい)

ズボンのポケットに入れていた携帯電話が、何時の間にか外に飛び出し、床で震えている。

渉は携帯に手を伸ばそうとするが、もう限界だった。闇が、襲ってくる。

(奏く・・・、)

意識を失う直前に浮かんでいたのは数内奏の顔で、渉は唇の端に微かに笑みを浮かべて体から力を抜いた。

(あの少年を早く安全な場所に運ばなくては・・・命が危ない)

謡、いや、涼子の言う“彼”は、葉弓を睨みつけた。葉弓がにっこりと血に塗れた手はそのままに、微笑む。

「兄様の黒髪、綺麗なままね」

「葉弓、」

「兄様、今も涼・・・ううん、榆乃木涼子のことが好き？」

「お願いだ葉弓。その子を外に出してやってくれ」

葉弓は彼氏を焦らす恋人のように、どうしようかなあともったいぶったように笑う。

「兄様の頼みだから聞いてあげたいけど、どうしようかなあ」

「・・・」

「その子が死んで絶望に顔を歪める謡を見たい気もする」

“彼”は、悲しげに目を伏せて妹に問い掛ける。

「・・・どうして？そんなに謡が・・・この体の持ち主が嫌いか」
「ううん、謡のこと可愛いと思うよ。初めて目にした時からずっとね」

「じゃあどうしてそんなことを言うんだ？」

葉弓は分らないの？と訊いてから、

「だって謡は涼子のお気に入りだから」

とあっけらかん、とした口調で応える。

「え？」

「あたし、涼子の大切なものは悉く壊したくなるの。それは“昔”から変わらない。あいつが涼だったときからずっと」

だからね。

葉弓はぐつと身を乗り出し、兄の顔を穴が開くほどに見つめる。兄が怯んだ瞬間を見計らい、

「！！」

“彼”に口付けを施した。

愕然とする“彼”だったが、すぐに我に返って葉弓の体を突き放す。

「葉弓！」

「だから、あたしはずつと兄様を壊したくて仕方なかった。……

・ずつとあたしだけのものだった兄様が涼のものになってから、涼の大切なものになってから、あたしは兄であるあなたを壊したくて仕方なかった」

「葉弓……」

「あたし、兄様が謡でよかったと思う。だって別人だったら、兄様と謡それぞれを壊さないといけないでしょう？でも同じ体同居してるなら、一石二鳥じゃない。同時に壊せて、楽でしょ？」

葉弓が再び“彼”にキスしようとする。

「葉弓、止めなさい！」

何とか唇と唇とが触れる直前に葉弓を突き放すことが出来た。

「……」

葉弓は一瞬哀しげな顔になったが、すぐに不遜な笑みになる。

「ふうん、兄様はそいつが死んでもいいのね？」

「！」

葉弓がスイツと細長く白い指を渉に向ける。渉はぴくりとも動かず、声を出すこともない。

(・・・彼に何かあったら、謡が疵付く。それは避けなければ・・・)

「・・・どうしたら彼を解放してくれるんだ」

「もう死んでるかも知れないよ？」

「……………」

「もしかして、兄様……執着していらっしゃるの？」

「！」

痛いところを突かれたように、胸が痛む。

「いえ…あの少年に執着しているのは兄様でなくて謡の方かしら？」

渉は謡を苛めるグループに腰巾着ながら属していた。渉と謡は和解したばかり。謡が渉に執着する理由はない気がするのだが。

「あ、なるほど」

葉弓が何かに気づいたかのように薄く笑い、“彼”は背中を粟立たせた。

「あの子も“そう”なのね？」

「まさか……………！！」

「誰の“代わり”なんだろうね？兄様？」

唇を噛む“彼”。が、不意にその顔が何かに気付いたかのように強張る。

「姫、さ……………ま？」

葉弓も気付いたのか、ムツと唇を尖らせる。

「なあんだ…もう来ちゃったのか。詰まんない」

「！」

“覚醒”したての“彼”では、葉弓には太刀打ち出来ない。あっさ

り目の前に踏み込まれ、胸に手を当てられる……………その瞬間、

「……………っ、」

葉弓の腕が胸の“中”に入ってきた。衝撃とえもいわれぬ感触に“彼”が苦悶の表情を浮かべる。

「兄様の“中”、温かいわあ……………食べちゃいたいくらい」

「っ、はっ、ゆみ……………やめ、」

「また会いましょうね、兄様…そして、謡」

「っ…………」

頭がぼんやりとして来た。意識が飛びそうだ。

「お休みなさい」

最後に見たのは葉弓の狂気の笑顔で。

「…………涼、さ…ま」

会いたかった。長い時を経て、再び会えると思ったのに。あの、二人が好きだった海の前で。

“彼”は床に崩れ落ちる自分を何処か遠くに感じていた。

涼子が葉弓の気配を感じてたどり着いたのは、廃業になって久しいアンティークを扱っていたらしい店だった。

「大丈夫か！」

謡がぐったりと意識を失って床に倒れているが、傷があるようには見えない。だが、藍田渉という少年が血塗れで倒れている。正直彼が死のうが生きようが涼子には興味がなかったが、彼が死ねば謡がどのくらい哀しむか涼子は何となく分かっていた。

（葉弓は逃げたか……とにかく救急車だな）

謡を残したままだと何かと面倒だ。涼子は謡を背負い、通りに人がいないことを確認して店を出た。

救急車を呼ぶのに、公衆電話を探なければ。謡を背負い、涼子は小走りで公衆電話を探したのだった。

安寧は訪れることなく

「……え？」

『……涉がずっと奏くんのことを譚言で呼んでるの……あなたを連れて来たら涉が起きてくれるんじゃないかと思って……』

涉の母親からかかってきた電話の意味が、藪内は咄嗟に分からなかった。

時刻は午後九時前。涉の安否を気にかけて部屋で気も漫ろに過そそごしていた静寂を打ち破るように鳴った携帯電話を取って聞こえてきたのは、涉の母親の今にも泣き出しそうな声だった。

「それ、どういうことっすか？」

酷く嫌な予感がする。そしてその予感はその直後に的中する。

『涉、刺されたの……！』

ドクン、と心臓が鼓動する音がすぐ耳元で聞こえた。携帯を握る掌にじっとりとした汗を掻く。

「……………」

芝貫…咄嗟に藪内の中で気弱げに微笑むクラスメートの顔が浮かぶ。あいつはどうなったのだろう。

「おばさん……涉は、一人だった？」

『一人だったって、救急隊の方は言ってたわ。奏くん、何か知ってるの！？』

「兎に角、今から行きます」

藪内は病院名を聞くと、家を飛び出した。

「ん、」

ベンチに寝かせていた謡が小さく声を上げて身動ぎしたので、涼子は閉じていた目を開けて彼を見た。というより膝枕状態なので、見

下ろした、というのが適切か。

「……………」

涼子の見守る中、疲労の漂う瞳が力なく開いた。すぐに状況判断は出来ないようで、パチパチと何度か目を瞬かせる。ぼんやりした目が、涼子を捉える。

「…………… 榆乃木、さん？」

「自分がどうなったか、分かるか？」

「僕、は……………」

内省するかのように目を閉じ、

「……！」

いきなり起き上がる。動きが激しい、と涼子がいえば、案の定揺は小さく呻いてぐらりと体を揺らした。目眩がしたのだろ。涼子はそつと彼を支えてやる。

「揺、落ち着け」

「藍田君は、藍田君はどうなったんですか！？」

「何処まで覚えてる？」

揺は何とか動揺を押し込め、頭を押さえながら、

「…………… 確か、藍田君と…………… 僕を助けてくれた人が、いて……………」

思い出そうと必死に頭を働かせていた揺だったが、急に左腕に激痛が走って目を白黒させる。

「…………… つ……………！」

「揺？」

「そうだ、確か…………… 藍田君が暴行されて倒れてて、僕は藍田君を助けようとしたんだけど、あの女の人に左腕を殴られて、」

そう。そして起きる、とか何とか言われて、髪を引っ張られて、

「…………… それから、どうなったんだっけ」

その先がどうしても思い出せない。涉が結局無事だったのかもサッパリ分からない。

「その先は覚えてないのか」

「…………… なんだか頭に靄がかかったような感じがして、正直分から

ないです……僕はどうして此処に……それに藍田君は、あつ！」

渉はガラスで葉弓に腹を刺されたのだ。真つ赤な液体が傷口から溢れ、埃のかぶった床を朱に染めたのだ。あんな大怪我をして、ただで済むのか。

嫌な想像が容易に浮かんで来て、謡は顔を蒼白にして涼子を見た。涼子の澄んだ瞳がじつと謡を見返す。

「真逆藍田君、」

「……死んではない」

凧いだ湖面のような静かな口調。

「死んではない、ってどういうことですか!？」

涼子を問い詰めたとき、携帯電話が震えた。震え方を着信相手によって変えているので、神楽からかかってきたのだと知れる。

神楽に父の足止めを頼んでいる。そのことが。

「……もしもし、神楽さん？」

苦渋を含んだ神楽の声が謡の耳に飛び込んで来た。

『謡様、申し訳ありません。あまり春樹さまを留めることが出来ませんでした。今、家の近くの道路』

で信号待ちをしています』

「！」

春樹が帰って来る。長男は家にいるだろうと思っている春樹が帰って来る。もし謡が家にいないことがバレたら、春樹はどうするだろうか。

以前の“勉強会”を思い出す。

ずっと部屋から出られなかった。携帯は取り上げられ、外部との連絡を禁止された。

部屋から出られるのは手洗い。風呂は二日に一回。寝る時間は午後十一時から翌朝五時までと厳粛に決められ、勉強のノルマを達成するまでは自由に行動できなかった。許された時間以外は部屋から出られず、苦しかった記憶がある。

部屋から出ないように特注の錠まで付けられたほどだ。

謹慎を解かれた後、愁や匂に酷く心配をかけさせたと知った。それ以来父には逆らわないよう、言われたことを着実にこなして来た。

「謡様、まだ外出されているのですか？」

神楽の焦った声。普段温厚だが滅多なことでは動揺しない神楽は、謡や春樹のことになると人が代わったようになる。

「……はい、」

「謡様お願いします。以前のようなことを避けるためにも、今は家で大人しくされていてください」

自分と春樹の間が険悪になることを、神楽は酷く恐れている。謡が疵付くことも春樹が疵付くことも彼は是としない。

「謡様？」

「……分かりました。至急戻ります」

「ではもう少し何とか時間を稼げるようにします。一刻も早くお戻りくださいね」

電話は神楽の方から切れた。謡は携帯を俯いた状態で見つめていたが、何かを振り切るように首を左右に振った。一体何を振り切ろうと言っのか。

「榆乃木さんは、僕に何が起こったか知ってるんでしょう？」

嫌に静かな抑揚のない声に、涼子はまだ見ぬ謡の部分を見た気がした。「……」

「榆乃木さん」

「必ず話すから、今日はもう帰れ。今のは、そういう電話だったんだろう」

図星だったらしく、謡は息を吞んで苦しげに唇を噛む。

「また明日、此处で待ってる。ちゃんと学校に行って、放課後に来ると良い」

「本当、ですか？そう言って、明日榆乃木さん、いなくなってるなんてこと、ないですよ？」

謡が不安げに瞳を揺らす。涼子は微かに頬をゆがめ、何とか笑おう

とする。

「嘘じゃない。……ちゃんと、いつも通り此処で待ってるから」

謡は暫く涼子を見ていたが、こくりと頷く。

「分かりました。あなたのこと、信じます」

そう言つて、ベンチから立ち上がる。

「腕が酷く痛むようならちゃんと病院に行くのよ」

「……はい」

謡は当然の如くまだ納得がいかないらしく、やはり帰ることを逡巡していた。

「藍田渉は恐らく救急車で何処かの病院に搬送された筈だ。生きようと頑張っているだろう……だから謡も頑張れ」

「……絶対、明日此処に居てくださいよ」

涼子は微笑む。

「ああ」

涼子がもう一度微笑むと、謡は歩き出した。

(……悪いね、謡)

謡の背中が視界から消えるまで、見送る。まるでそれが見納めかのように。

(……)

涼子は立ち上がる。“彼”が愛した海を背に。

どこに行くの、と問い詰める母親の声を背に向かった先に、信じたくない光景が広がっていた。

「奏、くん……」

渉の母親が、涙の痕が残る頬のままで藪内を見る。

「おばさん、わた、渉は!？」

何をそんなに焦っているんだ、と思う。自分は渉を傷つけたんだぞ。どの面を下げて心配なんてしてるんだ？

「おな、お腹を刺されて……今、」

「腹、を……」

どうしてそんな目に、と考えてすぐにハツとする。

（俺は何を暢気なことを考えてる……渉をさらったあの片目の女の仕業に違いがないじゃないか……）

謡が公園に行かなかったから刺されたのか？いや、謡のあの真摯な口調。嘘を言っているようには、

（……だが事実渉は腹を刺されている。どうなってるんだ、芝貫っ!?!）

苛立ちがピークに達する。「奏君、渉が刺されたことで、何か知っているの？」

焦りに顔を歪め、拳を握り締める藪内に、渉の母親が藁にもすがるような眼差しで問いかける。恐らく渉を刺した人間を特定出来ないのだろう。

「俺は、別に……」

庇うわけではないが、謡や片目の女のことを言う気にはなれない。それに、信じてはもらえないだろうから。

「……渉、死んではいないんですね」

押し殺したような藪内の口調に、母親が息を詰めたような顔で頷く。それを確認し、藪内は入ってきた方へ身を翻した。

「渉に、会ってくれないの？」

ズキン、と胸に鋭い痛みが走る。

「渉、奏君のことを呼んで、」

「俺には」

母親の言を途中で遮る。その先を聞いてしまえば更なる胸の痛みに襲われて動けなくなる。そう思ったから。それに、

「俺には、渉の……あいつのそばにいる資格、ないから」

「……え？」

一杯傷つけた。精神的にも肉体的にも。言葉と、体の暴力で。加害者に、被害者のそばにいる資格はないんだ。だから。

「……失礼、します」

「奏君！？」

母親の呼び掛けを、藪内は受け流す。病院を出て、向かう場所がある。

（渉、頑張れ……）

渉がどういう状況で発見されたのか、何故刺されたのか、そして誰に刺されたのか。それを知らなければならぬという思いに捕われるまま向かう先、それは。

（芝貫、ちゃんと説明させてやる……）

謡の自宅は知らないが、自宅の固定電話の番号が分かるから問題はない。

藪内は停めておいたバイクを駆って目的の場所へ急いだ。

「お帰り兄貴…間に合ったな……って!？」

ドアを開けるなり倒れ込んできた兄の体を、誓は慌てて支えた。父がまだ帰宅していないからその安堵で体から力が抜けたのか、とまで思ったがどうやら違うらしい。

「うわっち……!」

荒く息をする謡の額に手をやれば、すぐ手を引っ込めなくなるほどに熱くて流石の誓も驚く。

「兄貴、兄貴!？」

長い睫毛を震わせ、謡が力なく目を開ける。熱に浮かされて潤んだ瞳が誓を捉える。蒼い唇が震えながら、声もなく誓、と弟の名を象ったように見えた。

「と、兎に角もう少し頑張れ……リビングに、」

謡は頷いて立ち上がろうとするが、力が入らないらしく崩れ落ちる。

「あ、兄貴っ」

「ご……め、」

真っ赤な顔。荒い呼吸。風邪でも引いたのか。

「……………」

脇の下に手を入れ、謡を何とかリビングにまで運ぼうとする。
だが、

「……………」

間の悪いことに、

「お、やじ……………」

神楽を伴った春樹が帰宅してきたのだ。春樹は玄関先で倒れている謡と兄を運ぼうとしているエプロン姿の誓を一瞬驚いた目で見下ろしたが、謡が靴を履いたままなのを見て目付きが変わった。

「いあっ……………」

「春樹さま！」

「親父！！」

春樹はぐつたりとしている息子の髪を鷲掴みにすると、

「……………こんな時間まで何処に行っていた」

感情のこもらない平坦な口調。それに反して激情に燃える瞳。その対比が不気味だ。

「春樹さま、」

「神楽」

「っ！」

春樹が神楽の胸のあたりをついた。神楽はバランスを崩し、ドアに背中を強打する。

「貴様にも後から訊きたいことがある」

「っ、……………はい、」

春樹は謡の髪を引っ張り、無理矢理彼を立たせた。恐怖と痛みに、謡は赤い顔を歪めている。

「……良い度胸だな。よほど私を怒らせたのか」

「う、ごめ…なさ、い、父さん、ごめんなさつ……」

喘ぐように紡がれる謝罪を、春樹は聞き入れはしない。「誓」

「えっ、何…」

「今から謡は“勉強会”を行う。誰も部屋に通すなよ。謡を誰かが訪ねて来ても、絶対に通すな」

誓は春樹の気迫に圧されて何度もコクコクと頷く。

「……………」

勉強会という名前に、謡は絶望感に襲われる。

「私を心底怒らせた罰だ……さつさと部屋に行け!!」

家全体を揺らすような大音声に、謡は体をビクツと大きく震わせふらつく足で立ち上がる。これ以上、父を怒らせてはいけない。神楽や誓にも影響がいく。

「親父、」

誓が春樹に何か言いかけるのを謡は止める。

「ち…かい、良いから」

「だ、だけど、」

久しぶりに狼狽える弟を見たなあ、と謡は場違いに感嘆した。

（あ、明日……榆乃木さんに、会わなきゃ、いけない、の……に、）

渉のこと、葉弓のこと、涼子のこと、そして、謡自身のこと。

（聞かなきゃいけない…のに。でも、無理……かな。家から、出られなくなっちゃつ、た）

限界だった。部屋に行かなければ春樹に怒られる。だが気力も体ももたなかった。喚く春樹の声すら聞こえない。

（藍田君、無事だと……いいなあ）

謡の意識は、渉の安否を考えたところで途切れてしまった。

安寧は訪れることなく（後書き）

また謡が可哀想なことになってきました……。。

父の逆鱗と弟の剥がれた仮面

意識を失った謡を部屋のベッドに寝かせた後、神楽は雇い主である芝貫春樹と二人で対面していた。場所は芝貫家リビング。誓は春樹たちに茶を出したあと、部屋に戻っている。というより春樹に半ば脅されるようにして戻らされたのだが。

神楽は蒼い顔で俯きがちにしており、春樹はそんな彼をじっと睨むように直視している。

「……………つまりお前は謡に乞われて私を会社にいさせたんだな？」

「……………はい」

「今から出るから、父を留めてくれ、そう言われたんだな？」

「はい」

春樹が怒っているのが気配だけで分かる。

「何故それを受け入れた」

「そ、それは……………」

「言ってみろ。神楽が感じたままを言え」

厳命され、従うしかない。神楽は震える声で応える。

「……………謡様は真剣に私にそう仰いました。謡様にもご事情がありかと思ひ、私で役に立てるのであれば、と」

「……………そうか」

春樹の応えは短く。逆にそれが神楽を不安にさせる。

「お前の主人は誰だ」

「……！」

予想していた質問がやはり来た。神楽は息を詰める。春樹の顔を正面からマトモに見ることが出来ない。

「神楽」

「……………春樹さま、です」

「だがお前は謡を優先したことになるな、これは」

恐れていることが起きそうな予感がする。背中に悪寒が走る。

「神楽」

恐くて返事が出来ない。許してくれないだろうか。

「お前に暇を与える」

恐れていた言葉が、ずっしりと胸の奥に響いた。

芝貫家は何処らへんか訊くと、道行く人はああ、とあっさりと答えた。やはり自宅の場所も有名らしかった。

藪内奏は教えてもらった家の前でバイクを停めた。だが時刻は疾うに十一時近い。親戚でも惑う時間に、赤の他人が訪ねて良い訳がない。だが涉のことで訊きたいことがある。このまま帰るのも抵抗がある。かといって電話で呼び出しをするのも、思っているところ……誰？」

いきなりドアが開いたかと思うと、同い年くらいの少年が顔を出した。パジャマを着て肩にタオルをかけている。風呂上がりか。だが謡ではない。

「兄貴の知り合い？」

兄貴、ということは謡の弟か。あまり似てないな、と思う。

「……こんな時間に悪いんだけど、芝貫呼んでくれるか？」

涉がさらわれたと謡の家に電話をした時に出た奴か、と藪内はようやく思い至る。

「無理」

あっさりと言われ、むしろ清々しい気分だったがここで引くわけにはいかない。

「寝てるのか？時間が遅いのは承知してるが、」

「そうじゃないよ。会えないんだ」

「……………」

「無理に押し入ろうとか考えないでよ？」

藪内は謡の弟が何を言いたいのかが分からない。核心をついた物言いをしないのだ。

「分かりやすく説明してくれ」

「うーん、ちよつと待ってて」

弟は一度家にとって返すと、タオルを置いて戻って来た。

「今家人中、ごたごたしてるんで外で話しましょう」

普段の誓のことを知らない藪内には当然知る由もないが、今誓は滅多にしない真面目な顔をしていた。

「ん、」

「あ、謡様……………」

耳元で聞こえた哀しげな声に、謡は声がした方を見た。頭がぼんやりして、何も考えられない。

「大丈夫ですか？」

「神楽さん、父さん……………」

「今お風呂をお召しになっています……………」

神楽が無理に微笑もうとしているのが分かり、謡は嫌な予感がした。

「神楽さん……………」

必死に頭を回転させようとするが、なかなか上手く働いてくれない。

「謡様」

「は、はい」

「……………」

意外な言葉に、謡は目を見開いてバツと起き上がった。だが急に動いたせいか、眩暈を感じた体がぐらりと揺らいた。

「謡様！」

神楽が慌てて支えてくれる。だがお礼を言うより先に出たのは、

「僕の、せいですか？」

そんな問いだった。神楽が慌てる。

「謡様のせいではありません！私が悪いのです、」

「違う、神楽さんのせいじゃないはずだ！僕が、僕が無理なお願いを神楽さんにしてしまったから、」

謡は神楽の腕を掴み、俯く。

「ごめ、ごめんなさい、僕が……、僕が神楽さんの居場所を奪った、」

「謡様、それは」

神楽の言葉を遮り、謡が大声で謝罪する。

「ごめんなさい、本当にごめんなさいっ……！！！」

神楽は何と言って良いのか分からないように、戸惑った顔で謡の後頭部を見ている。

「ごめんなさい！……神楽さん、父さんのこと本当に慕って、なのに、なのに」

「謡様、あまりご自身をお責めにならないで下さい、」

「でも、でもっ」

子どものようにダダを捏ねる謡の頭を、神楽の掌が優しく撫でる。

「……謡様はもう十分疵付いていらっやいます。これ以上、しかも私なんかのことで疵付かないで下さい、」

掌の手つきと同じくらい優しい声、言葉に謡の涙は止まることを知らない。

「神楽さん、ごめんなさい、……本当にごめんなさい……」

「もう良いですから、もう、謝らないで下さい」

神楽から優しい言葉をかけてもらうほど、謡の心は泣く。だがそれは悲しみの涙ではなく、喜びの涙だった。

「勉強、会？」

俺は芝貫誓、兄貴の弟ですと名乗った少年は、はいと頷いて藪内を見返す。

「勉強、つてあの英語数学とか？」

「まあ、大まかに言えば」

誓は自販機に寄りかかりながら、中空を見つめて言う。

「……ただのそれだけなら、普通なんでしょうけどね。うちの親父が言いつける“勉強会”はそんな生易しいものじゃないんですよ」

「遠まわしな言い方だな。一体どんな会なんだよ」

「所謂軟禁、とあまり変わりませんよ」

何処か皮肉げな口調。

「軟禁、つて」

咄嗟に反応出来ない。

「……携帯は必ず取り上げられます。外部との接触は完全に禁じられ、部屋から出るのも制限がかかります。トイレの回数も決められ、食事は部屋で食べます。俺と話すことも出来ない、誰かが尋ねに来て也會わせない。……こんなところですよ、かね」

諦観の浮かんだ横顔が、謡にかぶる。

藪内は知らぬ間に顔を嫌悪に歪めていたことに気付く。

「それ、実の息子にすることか？犯罪と変わらん気がするが、」

「普通に考えればそうでしょうよ。でも芝貫ですからね。恐らく通報した方が怪我をしますよ」

今どれだけ芝貫が日本という国に影響を与えているのかにおわす発

言。しかし幾ら何でも異常すぎる。

「お前にはそういうのではないわけ？」

「俺？俺は期待されてないから、大丈夫みたい」

にへら、と締りのない普段の笑顔が誓の顔に浮かぶ。その笑顔が藪内を触発する。

「何笑ってるわけ？兄貴のこと、心配じゃねえの？」

「心配しても、兄貴が親父を怒らせたのは本当だしさ。馬鹿なんだよ、親父との仲が険悪になってる真っ只中に夜間外出するなんてさ。親父が怒るの、目に見えてるのに」

誓は知らないのだろう。謡が何故夜に外出したのか。不和の父の逆鱗に触れると知りつつも外出しなければならなかったのっぴきならない事情があったことを。

それを知っている藪内は誓の物言いが腹立たしくてしょうがなかった。何も知らないくせに勝手なことを言いやがって、と臍を噛む。

「その顔は、怒ってる？」

何処か楽しむような口調。言葉遣いも敬語から常体になっている。

「お前っ……！」

カツとなっている場合ではないのに、謡と話さなければならぬというのに、涉のことが心配で仕方ないのに、頭に血が上るのを止めることが出来ない。

思わず誓に手を出しかけ、

「……！」

「俺も一応、芝貫の人間だからさ、護衛はついてるよ。あんたみたいなのを一人で軽々と潰せる奴がね」

何時の間にか現れたサングラスの長身の男が、藪内の腕を掴んでいた。ギリツと骨が軋むほどの膂力で掴まれ、藪内は痛みに呻いた。

「……っ、兄貴のほうには護衛なんか居なかったぞ……」

「それはそれ。俺たち一族も色々事情があるってことかな」

囁くように言う誓に腹が立つが、押さえ込まれた状態では手も出せない。

「兎に角藪内さん。あまり兄貴には関わらないほうが良いよ？あと苛めもね」

「！！」

何故こいつがそれを知っている？謡の性格からしてあれこれ吹聴することは無いと思うのだが。

「度が過ぎると、芝貫が怒るよ。一応兄貴は、“大事”な跡取だからね」

「何が大事な跡取だ！！全然大事にしてないだろうが！」

「馬鹿だね、藪内さん。言葉を信じるなんて、ただの馬鹿だ。言葉なんて所詮飾りに過ぎないですよ、この世ではね」

意味が分からないことを言うな！と怒鳴る藪内の腕に更に力の負荷がかけられる。

「・・・・・・・・！！」

「と、まあ兄貴に会うことは出来ませんよ。親父が溜飲を下げるまで、兄貴は鎖につながれたまま。・・・上手く親父に取り入れれば話くらいはさせてもらえるかもしれないけどね」

あははは、と哄笑を上げ、誓はより掛かっていた自販機から背中を離れた。

「俺も帰ります。俺が視界から消えたらそのお兄さんを放してやって」

後半は護衛への言葉なのだろう。誓はそう言うたさっさと歩いて行ってしまう。

「ちょ、待て・・・って、痛てえつての！！」

護衛に怒鳴っても、力は一切緩まない。藪内は怒声を上げて誓の遠ざかる背中に呼びかけたが、彼は一切振り返ることはなかった。

父の逆鱗と弟の剥がれた仮面（後書き）

あまり出番のなかった、謡の弟・誓がようやくでばって（？）来ました。兄を心配してるのか否か、よく分かんない人ですねえ。…。

謡と誓（前書き）

最近筆が遅々として進まないです・・・。そして物語の筋道が破綻していないか、ものすごい不安です。

読んでいただけている方、ありがとうございます。

謡と誓

泣き疲れて眠ってしまったようだ。神楽は、そんな謡の額を優しく撫でる。弟にだぶる寝顔に、肺腑が痛む。

（謡様、いつもお守りすることが出来ず、申し訳ありません……）
父親に手を上げられ、罵られ傷付く謡を守り、助けることが出来ない。いつも、いつも……。

（私は、）

確かに神楽の雇い主は春樹だ。謡ではない。だが、だからといって傷付いてばかりの謡を助けたいと想い、助けようとするのがおかしい・間違っているとは思えない。

『神楽さん、あの人をよろしくね』

春樹の妻であり謡の母である女性は、駅のホームで背中を押される前日、神楽にそんなことを言ってきた。彼女は自分が次の日にあんな凄惨な目に遭うことを予期していたのか。

（でも私には、）

春樹の闇を取り除くことも、謡の傷を消すこともできずにいた。そして、ついには暇まで出されてしまった。なんたる道化。滑稽過ぎる。

「申し訳、ありません」

自分の無力さに、うちひしがれる。

『お兄ちゃん！』

『神楽さん！』

いつしか重ねていた、実弟と謡の姿。バカみたいだ。神楽は一人自嘲する。

「ん、」

謡が身動きする。早く此处から立ち去らなくては。

（謡様、申し訳、ありません）

握っていた冷たい手を離す。謡が眉を寄せるが、起きる気配はない。

「失礼、します」

溢れそうになる涙を堪えながら、神楽は足早に謡の部屋を後にした。

誓は彼には珍しい気難しげな顔で家に向かっていた。その足取りは重い。

（はあ………）

内心でため息をつく誓の背後に、音もなく人が立つ。声を投げる。

「ご苦労様。あの人は？」

「しばらく動けぬようにしておきました。誓様を追いかけては困りますので」

「そう」

バカばかりだな、と誓は鼻を鳴らす。父親の逆鱗にわざわざ触れようとする兄に、兄を苛めておきながら兄の身を案じる藪内という奴に、過度の期待をかけすぎて手を出す父親に。誓の周りにはバカが多すぎる。神楽も、匂も、愁も。

（所詮兄貴に芝貫グループを継がせるなんて、無理な話なんだ。あんな腰抜けに、何が出来るっての？）

昔から泣き虫で、そのくせ変なところで一人抱え込んで。うじうじ悩んで。

（見てて苛々する。あんなのが兄貴だなんて、俺は全くついてない）

「今宵の誓様は、色々思案中のご様子」

誓は護衛……なりみやなう成宮夏の言葉に苦笑する。

「俺だつてたまには考え事もするさ………そういえば秋はどうした？
気配がないが」

「秋なら謡様を護衛中ですよ。まあ、見ていただけですが」

芝貫グループの中には、警備・警護専門の部門もあり成宮家はその

部門のトップの座を欲しいままにしている。成宮の現・当主、成宮雅博には双子の息子がおり、それを夏・秋という。双子ではあるがほとんど似ていない。そのくせ、両者とも右目の下に泣き黒子があったりする。

「秋も変わっている……兄貴を見て何が楽しいのか」

「誓様が変わっていると云わしめるとは、秋もなかなかやりますね」

「……それは明らかに俺を馬鹿にしてるな？」

「さあ」

惚ける夏に苦笑を向け、誓はまたため息をつく。

「謡様がご心配ですか？」

「誰が。呆れてるんだ」

ぶっきらぼうに言う誓。

「まあそういうことにしておきますよ」

「本気で俺を怒らせたいみたいだな？夏」

「さあ」

「……………」

誓はまたため息をついて、家路を辿った。

……激しい頭痛で目が覚めた。

「くっそ、あの野郎……」

喉元もズキズキと痛む。誓の護衛とやらに気管を絞め落とされ、意識を失っていたようだ。

藪内は片手で頭で押さえながら立ち上がる。

（……あの誓って奴、本当に謡の弟か？性格違い過ぎるだろ……………）
砂を払う。こんなとこで寝ている場合じゃないのに、自分の不甲斐なさに腹が立つ。こんなことなら謡に会おうとは思わずに、渉のそ

ばに……、

(…………いや、)

自分は涉のそばにいる資格がない人間だ。そんなことは出来ない。

「兎に角芝貫に会わないと、」

どうして涉が腹を刺されて重傷に陥ることになったのか、その経緯いきさつを訊かなければ。

……だが、訊いて自分はどうするのだろうか。涉を刺した人間に仕返しをするのか？ 涉を助けられなかった謡に報復をするのか？

(……俺は一体どうしたいんだろう……………、)
分からなかった。

神楽の温かい手が好きだった。いつも冷たい自分の手を握ってくれる神楽の手が嬉しかった。この人は自分を、芝貫グループの人間としてではなく、芝貫謡という個人として見守ってくれているのだと幼心にも感じていた。叱るときも、怒鳴りつけたりはせず諭すように、突き放すことなく怒ってくれた。子供である自分の目線で話してくれた。

(神楽、さん……)

目が覚めたとき、神楽の姿はなかった。寝る直前に握ってくれていた神楽の手のぬくもりは疾うに消えていた。謡はギュッと拳を握り締める。

(僕が奪った。神楽さんの居場所を奪った……………)

脳裡に浮かぶ、哀しげな神楽の顔。そして、腹を刺されて苦悶に顔を歪める涉の姿。

二つが謡を責める。お前さえいなければ自分はこんな目に遭わずに済んだのに。

そう言われている気がして、どうしようもない。

ぶるっと、体が震えた。自分是要らない人間ではないのか。存在してはいけない存在なのではないか。そう思えてきた。

（……ダメだ。こんなことを考えてたら、匂ちゃんや愁君が心配する。笑え、笑うんだよ）

あの子達を泣かせるのだけはダメだ、と謡の中の“何か”がブレーキをかける。

（悲しむのは、僕だけで十分な筈なのに、）

すでに神楽を悲しませた。渉を危険な目に遭わせた。涼子の言では死んではいけないようだが、恐らく生きるか死ぬかの瀬戸際にいるに違いない。謡のせいで。

（ダメだ、ぼんやりしていると余計なことばかり考えてしまう……何かしていないと、気が狂いそうだ。）だが部屋からは出られないし、携帯も取り上げられた。かと言って勉強する気など一切起こらない。
「……………」

謡はベッドに再び寝転がり、見慣れた天井を見詰める。体が酷くだるい。熱があるのだと自分でも分かる。鈍く頭が痛み、微睡むことも出来ない。ただ天井を見詰める。

（楡乃木さん、）

明日も会々と約束した。渉の身に、そして謡自身の身に何が起きたのかを教えてもらうために。

（無理、だなあ……）

“勉強会”は絶対命令だ。抜け出し、それが露見しようものなら謡の行く末は暗い。父がどのような暴挙に出るか、考えるのも怖い。

（誓に……、ダメだ）

他人に迷惑をかけてはいけない。ただでさえ今日修羅場を誓に味わわせている。これ以上、誓に迷惑をかけられない。

匂や愁には物理的にも心理的にも相談できない。神楽は暇を出されてこの部屋にやって来ることが出来ない。

（僕が、悪いんだけど……）

でもどうしても渉を助けたかったから。自分のせいで攫われたのなら尚のこと。

まだ脳裏に赤が焼き付いて離れない。目を閉じても瞼の裏にちらつく。

（藍田君……、死なないで）

今は願うことしか、謡には出来なかった。

誓は自宅の前で足を止め、傍らの青年を見上げる。

「夏、護衛はもう良い。家に帰って休め」

「はい……ああ、秋」

夏が目を遣った闇の先に、小柄な人影があつた。謡の部屋の窓を見上げることの出来る場所にいたようだ。

「夏、」

蚊の鳴くような声で、秋が夏の呼びかけに反応する。

「秋、おいで。誓様に挨拶して」

しかし秋は怯えたように誓から目をそらして、夏の背後に隠れる。

夏とは違つて女性的な顔立ちで、まだ高校生でも通りそうなくらい幼い雰囲気醸し出している。長めの前髪が大きな目を隠す。

「秋」

「……」

「良いよ、夏。気にしない」

誓は締りのない笑みを浮かべ、夏たちに後ろ手に手を振りながら家の中へ入っていく。

だが玄関のドアを締め切る前に、誓は自分を凝視している秋に向け

てにつこりと微笑んだ。遠めにも秋がビクツと身を震わせて夏の背後に完全に隠れたのが分かった。

「・・・・・・・・」

お休み、と心の中で呟いて、完全にドアを閉めた。

誓の本当の性格を、夏も秋も知っている。残虐で自己中心的で策士。夏はそんな誓に面白みと敬意を感じているが、彼とは違って箱入りで溺愛されて育った秋には誓が不気味で恐ろしく思えるのだろう。

今日の様子で大分マトモになった方で、出会った頃など絶対にそばに近づこうとはしなかったし、顔すら見れなかったほどだ。

（・・・・・・・・何故か秋は兄貴が気になるらしい。折りをみて親父に相談してみるか）

“勉強会”に突入した謡の脱走の手伝いでもされたら堪らない。

春樹の耳に入れるくらいはしておいた方が良さだろう。

「親父、まだ起きてたの」

リビングでは、春樹が飲酒をしていた。目の前の机には、神楽の名刺が一枚置かれ、春樹の目はそれから動くことはない。

（後悔か、嘲笑か。何を考えているのか）

神楽も馬鹿な男だと思う。縁切りされる恐れのある行為をする理由がサッパリ分らない。

（誰も彼も兄貴、兄貴、兄貴。あんなの何処が良いんだ）

嫉妬ではないと思いたい。誰も自分を見てくれないという子どもじみた理由で謡を軽蔑するのではない。誓は自分にそう言い聞かせる。」「・・・・・・・・酒、ほどほどにね」

春樹からの返事はない。誓は一日で何度目になるか分からない溜息を、本当に、本当に小さくついた。

謡と誓（後書き）

誓の本性が徐々に明るみに。誰にも負けないエグイ性格にするつもりです（え？）

惑いと乱心

成宮邸に帰る道中、秋がびたりと足を止めてしまったので、成宮夏は一体どうしたのかと胡乱に思う。

「秋、どうしたんだ」

秋は思いつめたような瞳で夏を見返す。迷子になってしまった子どものようだ。

「秋？」

「僕・・・は、」

「？」

「僕は、謡様を助けない、」

力なく紡がれたその言葉に、夏は眉を寄せる。

「秋」

戒めるような口調に、しかし秋は一步も退かない。

「謡様、可哀想過ぎます。どうして謡様ばかり辛い目に遭わなければいけないんですか？」

「秋に何が出来る」

「・・・・・・」

グツと押し黙る秋。

「秋が謡様を助けたいと思うのは勝手だ。少なくとも俺は反対しない。・・・ただ実行に移すなら全てを失う覚悟をしる」

ぶるつと秋の体が身震いしたことを夏は悟る。

「謡様を助ける・・・この場合“勉強会”から脱走させたとしてよう。しかしその後はどうする？謡様の家はあそこだ。逃げる場所も行く場所もない。まさか成宮家に連れ込むなどと考えてはいまいな？」

「そ、それは」

「最悪“勉強会”だけでは済まないかもしれないぞ？そんな危険を冒してまで、あの人を助けないのか？」

誓に触れることが多いためか、はたまた性格の関係上か、夏はあま

り謡が好きではない。

警護の関係上そういう感情を持つのはあまり好ましいことではないが、どうも虫が好かないのだ。

「だって、あの方は・・・、謡様は、」

秋が謡を助けたいと思うことをとやかくは言わないが、思うことと実行に移すことはまた別だ。

「秋。お前が謡様に借りがあることは知っている。謡様に助けられた“あの事”が頭から離れなくなっているだけだ。一時の感情で易々と行動を決めるものではない」

「い、一時の感情だなんて、僕は・・・そんな、」

秋が言葉に詰まり、涙の滲んだ目を腕で覆い隠す。

「秋、悪いことは言わない。あまり他人に執着はするな」

執着をすればそれだけ迷いや悩みが生まれる。そして更にそこから因果が生まれ、永遠に自身に絡みつく鎖になる。人はその鎖を引き千切ることが出来ず、苦しみの坩堝に入り込む。

秋のように感受性が豊かで他人の痛みを敏感に感じ取るタイプの人間にとっては特に厄介なことになる。

「俺たちの仕事はあくまで体の警護だ。心の方は、自身に何とかしてもらうしかない」

夏はそう言い放ち、歩き出す。弟は立ち止まったままだが、わざわざ振り返らない。

夏は知っている。秋が、自分の居場所は成宮家にしか、夏という双子の兄の横にしかないと思い込んでいることを。だから秋は自分に付いてくるしかないのだ、と。

「・・・・・・・・はい」

小さく返事をした秋の声を、夏は無視した。

「……玄関のドアを開けた矢先、ガラスが割れるような音が鼓膜を叩いた。」

「このヒステリック女が!!」

「煩いのよ、この浮気男っ」

男のしゃがれた怒鳴り声と、女の甲高い怒声が怒りの応酬をしている。

藪内は慣れた筈のそのやり取りに、しかしいつもみたいに冷静ではいらなかった。

「煩い、黙れ!!!」

リビングのドアを乱暴に開け放ち、滅多に感情を露わにしない息子が自分たちに怒鳴ったとき、夫も妻も目を丸くして取っ組み合いを止めた。

「か、奏?」

「ど、どうしたの……その怪我、」

母親が手を出そうとするが、藪内はその手を払う。ペチン、と気の抜けた音がした。

「俺に触るな、」

低く唸るような、手負いの獣のような口調に、二人は息を呑む。

「お前らのせいだ。……お前らのせいで、お前らのせいで、」

両親の不仲が自分の心を傷つけ、そして傷付いた自分は周りに辛くあたった。渉を傷つけ、遠ざけた。

そんなのはただの言い訳に過ぎない。渉を突き放したのは、自分の心の弱さが原因だ。両親のせいじゃない。両親の不和のせいじゃない。全部自分が悪いんだ。

でも、それでも。

「良かったよ……あんたたちがやっと離婚を決めてくれて。清々する」

もし涉が死んだら。自分はどうするのだろう。後を追うのか。それとも意外に安らかに眠れ、といって別れを告げるのか。壊れている自分はどちらかと言えば後者を選びそうな気がした。

「奏・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

両親が藪内の親権を巡って争っている事も知っている。そして、両者とも藪内を引き取りたくないと思っていることも、知っている。

「金と住むところさえくれたら、俺は一人で生きて行くから。だからそれだけはよろしく」

もう話すことなど何も無い。

話したくもない。

藪内は二人からそつと目を逸らすと、部屋を出た。直後に再開した口論を背に。

眠ろうとしてもどうしても眠れない。

謡は何度目か知れない寝返りを打った。薄闇の向こうに何気なく目を凝らす、当然何者の姿もない。

（・・・・僕は、何を期待している、）

涼子が会いに来てくれるのを待っているのか。父の言いつけを無視しても、神樂がそばに居てくれるのを期待しているのか。

（眠れない）

無理に寝ようとすると寝られないのは不変の事実のようだ。謡は溜息を一つ吐いてベッドの上に起き上がった。

携帯は春樹に取り上げられたため、誰かと話して気を紛らわすこと

も出来ない。いや、却って話すべきじゃない。渉があんな目にあつて苦しんでいるのに、自分だけが何の咎も負わずに世間話をするとは出来ない。

（そうだ。藍田君が苦しんでるのに、僕だけが暢気にしているわけにはいかない、）

これは罰なのだ。渉を目の前にしながら助けられなかった自分への。そう思いでもしないと、謡はこの閉じられた状況に耐えられそうになかった。

「謡さん、何してるのかな、」

液晶画面に謡の携帯番号を表示したまま、匂はぼつりと呟いた。

場所は自宅のベッドの上。愁は今日は大事を取って入院することになったが、明日には自宅へ戻れると医師も言っていたから、心配はない。

（母さんがあんなことして……。謡さんのことから、また自分を責めてそうでいやだな）

あれは絶対に母親の美佳子が悪い。

愁のことを心配して見舞いに来てくれた謡に平手をお見舞いするなど我が母ながらあり得ないと絶句した。

あの場面を愁に見られなくて良かったと、匂はそれだけを救いに思った。

（考えても仕方ない。今日のこと謝りたいし、電話しちゃえ）

匂は思い切って通話のボタンを押して携帯を強く耳に押し当てた。だが。

「あれ、」

聞こえてきたのは、こんなアナウンスだった。

『おかけになった電話番号は現在電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため、掛かりません』

（謡さん、電源入れてないのかな・・・？）

急速に湧き上がる嫌な予感。匂は一端電話を切ると、次に違う番号を表示させてそこになかなかおす。

『もしもし』

相手は、謡の弟、誓はすぐに電話に出た。何か食べているのか、もごもごしている。

「あ、誓？謡さんは家にいないの？」

『兄貴？それなら兄貴の携帯に・・・って、あ、そうか』

「何よ、何ひとりで納得してんのよっ」

『一々声を張り上げるなっ。愁にも伝えといて。兄貴、当分家庭教師無理だっ』

嫌な予感的中してしまったようだ。まさか、また？

「誓、それって」

「ああ、“勉強会”始まっちゃってさあ。兄貴が親父怒らせて」

だから携帯が繋がらなかったのか。恐らく父親に没収されてしまったのだ。

匂は眉を潜めた。謡は一体何をして父親を怒らせたのか。まさか愁を見舞いに行ったことが癪に障ったのではあるまいな。

だとしたら、と思うと遣る瀬無い気持ちになる。愁が倒れたことに謡は関係ないのに。

「それって、愁やあたしのせい？」

恐る恐る尋ねると、しかし返って来たのは誓のはあ？という言葉だった。語尾が自棄に上がり調子なのが腹立たしい限りである。

「匂と愁の？全然そんなじゃないよ」

「じゃ、じゃあどうして？」

「何か兄貴が夜に家を出て行ってさ、帰ってきたのとはほぼ同時に親父も帰って来て。兄貴が遅くまで外出してたことが分かった途端に親父が爆発しちまってさあ・・・最近、まあ大分前からだけど

二人の間って緊張してたし」

あっさりとした口調で言う。匂はこいつは本当に謡さんの弟なのだろうかと怪訝に思う。兄を心配しているようには全く思えないのだが。

「それで、謡さんは」

「さあ。寝てるか本でも読んでるか、もしかしたら親父に怯えて糞真面目に勉強でもしてるかもな。俺ですら話すこととか部屋に入ることとか禁止されてるから良く分かんけど」

今度は投げやりな口調。匂は段々腹が立ってきた。

「何よ、あんたって本当に謡さんの弟なの？お兄さんが辛い目に遭ってるのに、あんたそれでも平気なの？」

気付けばそんな言葉を発していた。言い過ぎたか、と匂が思っていると意外に朗らかな笑い声が携帯から流れて来た。匂は思わずギョツとする。

「ち、誓？」

『匂面白いこと言うなあ』

「ちょ、ちよつと気でも触れた？」

どうしよう、これ以上誓が変になったら会話が成り立たないような気がする。匂は本気で焦った。たとえ好きではない幼馴染でも自分の発言のせいでおかしくなったら気が引ける。

『大丈夫。触れてないから・・・いやあ、匂は相変わらず言うことが上手い』

「は、はあ？」

『そうか、そうだよ。今一俺が兄貴のことを心配出来なかったのは、そう言う可能性があるからなんだ。別に嫉妬、ってわけじゃないんだよな』

「・・・・・・・・」

なにやら誓の中で何らかの折り合いがついたらしい。

『兎に角兄貴と連絡をとることも会うことも出来ないから。多分一週間くらいで“勉強会”は終わると思うけど、親父の気分次第だ

ろっからあまり期待はしないように』

そう言うと、誓は匂の言葉も待たずにいきなり電話を切った。ブツと音がして、続いてツーツーという音がして、いやに匂の耳についた。

（……別に嫉妬、つてわけじゃない？……どういうこと？）

手の中の携帯を見たが、もう誓と話す気にはなれず、匂は携帯をベツドの上に放った。

あらたな波乱へ

最悪な気分朝を迎えた。

「ん、朝………」

酷く嫌な夢を見ていたような気がする。謡は重い目を擦りながら、ベッドの上で上体を起こした。

ぼんやりと中空を睨みつけながら今日は学校に行くか行くまいか迷った謡だったが、直に自分がどういう状況にいるのかを思い出した。（そうか……学校に行きたくても行けないんだよね……、今の僕じゃ、）

自嘲気味に笑みを浮かべる。と同時にケホツと咳く。体がダルい。頭がぼんやりして、考えるのが億劫で仕方ない。

「兄貴、起きてる？」

コンコン、と軽やかなノックの音とともに誓の問う声がした。

「……誓？」

「朝ご飯作ったから、ドアの前に置いておくよ……具合悪いとかない？」

誓が兄である謡を心配するような言葉を出すのは珍しい。一体どうしたのかと謡は不思議に思う。今までがおかしかったのに。

「少し、熱っぽいかな……誓、僕と話したら誓まで叱られるから、」

「大丈夫だよ。親父、もう家を出たから」

「そう。……神楽さんは？」

問うと、誓が微かに鼻で笑う気配がした。気のせいだろうか。「来てないよ。理由は兄貴が一番分かってるでしょ？」

今まで感じたことのない棘のようなものを誓の言葉から感じ取ってしまう。ただ神経過敏になっているだけなのだろうか。

だが確かに今ドアを隔てた場所に立っている誓からは今までにない悪意のようなものを感じる。

「誓、何か・・・怒ってる？」

「怒る？俺が？真逆」

楽しげにあははっ、と笑った後、謡を嘲弄するように、

「ただ兄貴の馬鹿さ加減に呆れてるだけさ」

「っ」

誓から初めて馬鹿と言われた。腹立たしいというよりも哀しく、そして昨日までの誓とは明らかに何かが違っていることを確信した。

「誓、僕は」

「親父にばれたらどんな目に遭うか知ってて家を抜け出すんだもの、それが馬鹿でなくて何なのさ？兄貴？」

「そ、それは、仕方なくて、」

「ま、俺は兄貴がそれでどうなるうとどうでも良いけど。結果的に神楽さんを巻き込むことにはなっただけど、兄貴にあっさりはいはい従ったのはあの人だし、同情も出来ないけどね」

「誓、どうしたの。何か変だよ、」

本当に弟の誓なのだろうか、と馬鹿げた疑問が浮かぶ。声は誓のものじゃないか。

「じゃ、俺学校行くから。昼飯前には家政婦さん来ると思うからさ。トイレはまあ、何とかして」

最後は至極どうでも良さそうに言い捨てると、ドアの前から誓が遠ざかる気配がした。

「誓、待って……っ！」

気付けばドア越しに弟を呼び止めていた。ギシッ、という床の軋む音がした直後、

「何」

という抑揚の一切ない声が上がった。

「誓、お願い。此処を開けて、」

口に出してから、自分は何を言ってるのかと自分で驚く。そして驚いたのは誓も同じだったらしい。妙な沈黙がドアで隔てられた二人に流れ、

この状態が既に“監禁”ではないだろうか、と謡はぼんやりする頭で思う。だが誓は“軟禁”だと思っているようだし、父に至っては“軟禁”だとすら思っていないのかも知れない。そう思うと、自然と笑みが浮かんだ。哀しいような、もうどうしようもないような、そんな言い様のない気持ちが始き上がり、喉元で燻る。

「……………」

謡は窓を見遣った。外は晴れているらしく、カーテンの隙間からは明るい日差しが差し込んでいる。

唯一の突破口はそこだ、とでも言うかのように、謡は窓をじっと見つめる。

渉はどうなったんだろう。

起き抜けに藪内が思ったのは渉の様子だった。

携帯を見ても、誰からの連絡も入っては居ない。（入るわけが、ないか……………）

入れてもらえる資格もない。

藪内は溜息を一つ零し、ベッドから這い出た。そろそろ出なければ学校へ間に合わなくなるが、行く気にはなれなかった。

行ったところで真面目に勉強するわけでもなく、一緒にいたい友人や恋人がいるわけでもない。

今日はサボることを決めて、藪内は床に腰を下した。

「おはようございます、誓様」

朝っぱらから成宮夏に会うのは珍しかった。そして余裕のなさそうな夏を見るのはもつと珍しかった。

「どうした、悲壮感漂う顔をして」

何となく訊かずとも分かったが、誓は敢えて訊いてみた。

「……秋が姿を消しました」

「ふうん？」

「成宮の婆が秋捕縛の命を一族に下しました。秋は……追われる身です」

誓は愉快げに唇の端を上げて見せた。

「昨日まで寵児と持て囃されていた人間が一日経っただけで厄介者とは。人生とは面白い」

夏は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「お前は秋を探さないのか……まあ検討がついてるのかな」

「……秋は、恐らく謡様のもとへ行くでしょう」

予想でもなく、勘でもなく、分かりきったこと。

「だろうね」

誓は軽く肩を竦め、歩を再開した。秋がどうしようと誓には一切関係がない。

傷付くのは秋か夏か謡だ。自分には一切害がない。だから誓には何の関係もない。ただいままでの生活を貫くだけだ。

「夏もしたいようにすれば良い。弟を取るか自分の人生を取るか。ただそれだけの問題だろ？」

夏が立ち止まったが、誓は立ち止まらなかった。

（さあ、無力な秋。お前は兄貴をどうやって親父の手から救い出すつもりかな？）

また波乱が起きそうな予感に、誓は一人静かに心躍らせたのだった。

死への憧憬、生への不安（前書き）

サブタイが思い浮かばない（
；
）

死への憧憬、生への不安

「はあ、はあはあっ……………」

成宮秋は、ずっと走りっぱなしだった足を止めて、息を整える。

「……………つ、くるし、」

大きく息を吸った瞬間、左脇腹にズキッという鋭い痛みが走った。

「いつ……………!!」

成宮家の寵児、と言われた秋とはいえ、不特定大勢の、しかも成宮の精鋭たちに追われれば無傷では済まないようだ。

「っ、」

恐る恐るシャツの裾を捲ってみれば、青アザが出来ていた。内出血、はしていなさそうだ。これ以上に酷い怪我を負う可能性が高い。でも、それでも。

（僕は、謡様を助きたい、）

大した接点はない。少し前に助けてもらったことがあるだけだ。

『大丈夫？……………無理したら、ダメだよ？』

他人のことなのに、まるで自分自身のことのように心配してくれる姿が嬉しくて。でも哀しげな顔が、今も忘れられなくて。

（今度は、僕が謡様を助きたい、）

助ける、というのは烏滸がましいかも知れない。だけど、少しでも力になれるなら。

「見つけたぞ、反逆者」

「……」

いつの間に、と思う間に走り出す。

「いたぞ、追えっ!!」

このまま謡の家に行けば、助けたい対象である謡にまで迷惑が掛かる。なんとか彼らを撒かなければ。

（兄さん、）

夏の顔が浮かんだが、それを振り払い、秋は全速力で駆け続けた。

誓が学校に向かっていている頃、匂は家を出て、芝貫家を見上げていた。

（謡さん、）

誓の言通りならば、謡は部屋に閉じ込められているはずだ。手の中の携帯を見るが、謡は携帯を没収されているようだし、部屋から出られないならば家電にも出られないだろうから、全く役に立ちそうになかった。

（自分の息子を自宅に、とはいえ隔離するなんて……それが親のすること！？）

家の近くで、謡の腕を掴んで問答無用に彼を家に入れようとした、彼の父親の顔が頭に浮かんだ。

（昔は凄く優しくて、謡さんの次に慕ってたのに……今のあの人は、）

春樹が変わってしまったのはいつからだっただろうか。そんなことを考えていると、不意に何かに脳裏を刺激されたような気がした。何か、とても大切なことを忘れているような気がする。

（……何？あたしは何を忘れてるの、）

また謡の部屋のほうへ顔を上げた。

「謡、さん？」

窓が静かに開いて、謡が顔を覗かせたのである。斜め下あたりから見上げている匂には気付かないらしく、ぼんやりした様子で空や周囲を眺める。

（謡さん？）

嫌な予感が匂に忍び寄る。窓からグイッと身を乗り出して、体を空

中に投げ出すかのような、

「謡さん!!」

思わず大声を上げて、彼の名を呼んだ。すると、悪戯の見つかってしまった子供のように謡はぎくり……としたようだ。謡の目が地上の匂を捉える。匂が手を振ると、謡の顔が泣き出す直前のようにくしゃりと歪んだ。

(謡さんが、泣いてしまう……)

匂や愁の前では、弱い部分を見せたがらない謡。匂たちを安心させる優しい笑みは今はなく、憔悴した顔が酷く痛々しい。

「謡さん、おはようございます!」

あたしは何普通の挨拶をしてるんだ。謡がどういう状況にいるか分かっていながら、何挨拶をしてるんだ。謡がどのくらい疲れ、悲しんでいるのか分かっていながら、何能天氣に挨拶なんか、

「……おはよう、匂ちゃん」

……吹けば消え飛びそうなくらいにか細い声。けれど、それは確かに匂に届いた。……胸が締め付けられる。何かが胸の奥にしこりを作り、凝り固まる。息をすることも忘れ、謡を見上げる。

「遅刻しちゃうよ?……気を付けて行っておいで」

今にも泣き出しそうな笑顔が、更に胸を締め付ける。

「謡さん、あたしは、」

「行つてらっしゃい」

そう言つて、謡は顔を引つ込め窓を閉めてしまった。匂はもう何も考えられないまま、学校に向かって走り出した。

もし、と思う。もし、もしも今匂に気付かなければ。

（僕は、何を考えている……………）

脳裏を過る、“死”という言葉。

（こんなの、いつものこと。一週間ほど、自由な生活を制限されるだけ。今までだって何回かあったこと。それと変わらない、変わらない…………… 筈なのに）

今日は何故こんなにも“死”というものに惹かれるのだろう。

（楡乃木さん、）

あの人は、約束通りあの場所に居てくれるのだろうか。無性に彼女に会いたくなった。

（楡乃木さん……………）

もし、とまた仮定してみる。もし、楡乃木涼子という人間が今の謠の状態を知ったら。

（あの人は、僕を助けてくれるのだろうか）

立てた膝の間に顔を埋める^{うず}。やりきれなさが胸の奥から込み上げてきて、言い様のない感情が自分の中で育ち始めている。

「僕は、」

あるはずのない助けを求めることがどれほど愚かなのか身に沁みて分かっているはずなのに、どうしてまた“助け”を求めてしまうのだろう。…………… もしかして、自分はまた“人間”というものを信じているのだろうか。皆でなくて良い、誰か一人でも自分を助けてくれることを期待しているんじゃないだろうか。“期待”をしては、傷付いて。そんな人生を歩んで来た筈なのに、自分はまだ、

（俺はまだ、期待している。人を、信じている。僕は、俺は、…………… どうしたら良い、）

“現実”と“理想”の狭間で、心は揺れ動き、傷付き続ける。

（楡乃木さん、）

耳元で波がさざめく音が聞こえたような気が、した。

…… 此処は、何処だろう。追っ手から逃れるために走り続ける内に、秋は見知らぬ土地に入り込んでいたようだ。

（どれだけ僕の行動範囲が狭かったか、これで分かるというもの……）

自嘲気味に呟き、秋は精神集中することにする。

目を閉じ、ゆっくり深呼吸をし、雑念を押し込める。“自分”という概念すら、希薄にさせる。

…… 完全に、音が消えた。ざわめく雑踏、木々の葉が擦れる音、自分の呼吸音。消えた。

「……………」

完全なる“無の世界”に、秋は一人立つ。

こうして体に溜まった疲労を癒すのではなく、“忘れさせる”のだ。癒すことには時間がかかるし、そんな暇も今はない。忘れることは、秋には造作もない。

初めはこんなことのために忘れる訓練を積んだ訳ではない。最初は、
「！」

肩をグイッと掴まれ、秋は“現実”に戻る。道行く人の邪魔になつたのだろうか、と思つたが違つた。

その人物を認めた秋の目が愕然と見開かれる。

「どうしてあなたが此処に……………」

「やっぱりキミか。久しいな」

その人物とは、謡の前世である“彼”の実妹…………… 葉弓だった。

学校に着いた誓は教室にまだ誰もいないことにニヤリ、と笑みを浮かべた。これで秘密の会話も容易く出来るというもの。

「出てこい、烏丸」

「……お気付きで」

烏丸、と呼ばれたのはまだ小学生くらいの女の子だった。真つ黒な御下げ髪が小さな顔を包み、両の目はひんやりとして暖かみの欠片もない。

「何か用か？」

「あなたならご存知かと思ひまして」

女の子、烏丸からすまりんは声変わりの済んでいない高く澄んだ声が言う。

「……………何を？」

「秋様について」

「はっ。やけに範囲広いな。悪いけど、身長体重、好物なんて知らんよ」

「あなたのお兄様と接触した、ということはありませんか？」

「……………兄貴と？」

「あの秋様が成宮家を裏切るなど、理由は芝罘謡にしかありませんから。……秋様に今日お会いになりませんでしたか」

「やけにはつきり言うなあ。でもさ、秋は兄貴に接触出来てない筈だよ」

「それは？」

「兄貴はさあ、親父のお怒りを買って家に軟禁されてるから」
女の子は眉一つ動かさない。

「ですが、秋様ですよ？軟禁されているとはいえ、一般の家に入ることなど造作もない筈です」

「お前、妙に秋を持ち上げるな。秋の味方なのか？」

「懺がふっ、と笑いを洩らす。はつきりした否定を示しているように

誓には見えた。

「私は誰の味方でもありません。強いて言うなら、成宮家の味方です」

「さすが」

懔はありがとうございます、と呟き、教室を出て行こうとする。

「もう行くのか？」

「秋様を捕縛しなければなりませんから。それに、誓様より謡様を見張っていたほうが有意義な気がしますし」

全く抑揚のない声で言い放ち、懔は今度こそ教室を出て行った。

死への憧憬、生への不安（後書き）

“死”と“生”の間で揺れる謡を救えるのは誰でしょうか。秋？匂？それとも、榆乃木涼子でしょうか。作者にも分かりません（……え？）希望はありますが、みんながうまく動いてくれるかどうか……（溜息）

神楽と弟（前書き）

神楽さんメインです。鬼社長（？）、芝貫春樹に暇を出され、実家に帰っている彼を出迎えたのは……。謡は少し、そして愁君が久々登場…のはず。

神楽と弟

「さあ、烏丸慍が動いたぞ。どうする？秋」

慍がいなくなった教室で、窓から外を眺めながら誓は不敵に微笑んでいた。慍が動いたことで、秋はどう出るだろうか。真正面から謡に近づくか。

（また自分のせいで他人が傷付いたと知った時、兄貴はどうなるかな？）

もとから繊細で傷付き易い兄。それがここ最近では、そんな彼の心を苛むさいなようなことばかりが起きていて、かなり精神的に消耗しているはず。

（それに、心の拠り所になりかけていた神楽がいなくなったことが大きいのだろうか）

誓は、ふと思う。

「そう言えば、神楽は今何をしているのだろうか」と。

「樹、帰ってくるなら帰ってくるで連絡しておいてちょうだいよ。何もないわ」

「母さん、そんな気にしないでよ。少しお休み貰っただけなんだから」

「そうもいかないでしょう。ちょっと買い物行ってくるから、敦樹のこと頼むわね」

「……はいはい、行ってらっしゃい」

賑やかな母親が出ていった途端、家は静かになった。

「相変わらず母さんは賑やかな人だ。ね、敦樹？」

神楽樹は、眠る弟の額にそつと手をやる。一昨日の晩から高熱を出して寝込んでいたのだと母親からは聞いたが、今は額も耳もひんやりとして、穏やかな寝息を立てて眠っている。

（……謡様は、穏やかにお休みになれたのか、）

謡のことを考えると、肺腑が捻れそうなほどの痛みを覚える。

「……………兄さん？」

不意に呼ばれて、神楽はハツと我に返った。弟を見下ろせば、目の前にいるのが兄だと確信を持ってないのか不思議そうな目で神楽を見上げている。

「ごめん、起こしてしまったかな」

「本当に、兄さん？」

「何疑ってるの」

思わず苦笑した瞬間、いきなり敦樹が神楽にしがみつくように身を起こした。

突然のことに、神楽はギョツとする。一体どうしたというのか。

「敦樹、どうした。怖い夢でも見たのか？」

「っ、むか、昔の……夢、見てた。今日じゃ、ない……けど、一昨日から、ず、ずっと、」

（昔の、）

恐らく実の両親から受けた虐待のことだろう。

「こわ、くて、苦しくて……でも、お母さんには、お母さんには言えなくて、」

「……………」

「お母さん、泣くから。うちが昔のこと思い出したら泣く……から、言え、なくて……………」

「そうか。辛かったな」

「う、うつつ」神楽は泣きじゃくる“義弟”の背中を優しく擦ってやる。

神楽敦樹は、神楽樹の実の弟ではない。敦樹は、神楽家の養子なのだ。

実の父母から酷い虐待を受けていた敦樹は、児童相談所の職員に救われ市内の施設に入所する。

人の“愛情”を知らない敦樹だったが、施設で職員や他の子供たちと触れ合う内に徐々に心を開き、子供らしく振る舞えるようになっていった。

だがその矢先、施設長が大麻所持で逮捕という事件が起き、施設は閉鎖することになった。入所していた子供たちは新しい施設に移ったり、ある家庭に貰われるなどして新しい居場所を手にしようとしていた。

だが敦樹は、ようやく手に入れた安住の地を手放すことに畏れを抱いていたのか、新しい施設に移ることも、里子に出されることも悉く拒んだ。無理矢理に彼を引き摺ってでも新しい施設に入れることは簡単だ。だが職員はそんなことはしたくなかった。大人の勝手な都合で虐待された上に、今度は大人の勝手な都合で“ようやく手に入れた居場所”を壊される。敦樹の幼く傷付きやすい心が壊れてしまふことを、職員はおそれた。

そんな中で施設長の妻から白羽の矢が立てられたのが、樹の母親……神楽倫子である。施設長の妻と倫子は高校からの付き合いであり、今も親交があった。

能天気だけと実は思慮深くて堅実。穏やかで母性本能に溢れた人。施設長の妻にとって神楽倫子はそういう印象の人間で、理想とする人でもあった。

神楽倫子は親友から敦樹を紹介され、事情も聞いた。結婚をし、神楽もすでに成人していたのに、夫にも神楽にも相談せずに親友の頼みを聞き入れた。神楽の父は、妻から養子をとることにしたと事後承諾を得られても苦笑するだけだった。そしてあれから七年。敦樹は八歳から十五歳になり、神楽は二十歳から二十七歳になった。

（もう七年。敦樹が虐待を受けていたのは五歳くらいまでらしいか

ら、十年経った今も敦樹の両親は敦樹を苦しめているのか、)

腕の中、しゃくりあげる肩が酷く頼りなく感じられる。今時の十五歳がどの程度の体格が標準なのかは知らないが、敦樹は華奢過ぎだと明らかに感じる。神楽は義弟の頭を優しく撫でてやる。

(母さんから何の相談もなしに、今日からうちの子になったから。いいお兄ちゃんになるのよ、なんて言われたときには驚いたけれど) 神楽は大学が忙しかったし、何より敦樹がまだ八歳と幼いこともあって、なかなか馴染めなかった。決して怖い成りではないはずだが、敦樹のほうも決して自分から神楽に近付こうとはしなかった。

(……でも、無理もないよな、)

「あ、兄さんごめんっ。うち、ずっと抱き付いたりして、」

「そんなこと気にしなくて良いから。敦樹の気が済むまで付き合うから」

「……ありがとう、兄さん。でも、もう大丈夫」

敦樹が神楽から離れ、気恥ずかしそうに笑う。

「中学三年生にもなって泣くなんて……恥ずかしいなあ」

「恥ずかしくなんかないよ。泣けるのは、良いことだからね」

心に溜め込み一人病んでいくより余程良い。

「……兄さん？」

「何？敦樹」

「兄さん、元気ない？」

いきなり核心を突かれ、息を呑みそうになる……が、寸でのところで堪えた。

「そんなことないよ、」

「兄さん、今嘔吐いた」

「！」

敦樹の円らかな瞳が、神楽の“中”を覗き込んでいるような錯覚を感じる。

「う、嘘なんて」

「……うちには言えないような、こと？もしかして、うち、兄さん

に何かした？」

「だからそんなことないから。僕は元気だから、」

敦樹はまだ何か言い募ろうと口を開きかけたが、しかし悲しげに目を伏せて黙ってしまった。

「……………」

「……………」

嫌な沈黙が、二人の間に流れる。

神楽は何と言って敦樹を宥めたら良いのか分からず、戸惑う。

「やっぱりうち……………違う、から？」

「……………え？」

「……………違う、から言えないんだよね、」

違う、とは何がだろうか。神楽が敦樹を凝視していると、俯いたままの彼の口から思いもよらぬ言葉が飛び出した。

「本当の弟じゃないから、本当の家族じゃないから、言いたくないんだよね。遠慮するんだよね、」

「……………」

神楽は愕然とする。まさかそんなふうに思い詰めているとは。

「敦樹、僕は」

「ずっと、不安だった。嫌われてるんじゃないかって、うちはこの家には必要ない存在なんじゃないかって……………また、元に戻るんじゃないかって……………」

「敦樹、」

「一緒に笑ってても、一緒にご飯食べてても、うち一人だけが場違いな気がして……………ずっと、怖かった。要らないって、お前なんか必要ないって、いつか言われるんじゃないかって、」

神楽が呆然と見つめる前で矢継ぎ早に心情を吐露した敦樹は、苦しげに咳き込み始める。

「う、げほっ、げほっ……………、げほっ！」

「敦樹！大丈夫か！」

慌てて彼の細い背中を擦る。

「っ。兄さん、こっちに戻って来れないの？」

「……え？」

「だって兄さん、げぼっ…、いつも忙しそうだし、うちも父さんも母さんも、兄さんにあまり会えなくて、はあっ、寂し……げぼっ、ごぼっ!!」

「敦樹っ、横になつて。顔が真っ青だ」

「……ぜえ、ぜえっ、う、ん……」

敦樹は苦しげに頷き、言われるままに横になる。

「敦樹、大丈夫？気分悪くないか？」

「う……ん、平気、」

疲れが出たのか、敦樹の瞼が重く下がってくる。だが神楽の手を握る力は強い。まるで神楽がいなくなってしまうことを恐れるように（敦樹と、謡様が重なってしまう……。謡様は、今頃どうされているのでしょうか）

それが、ひどく気掛かりだった。

コン、と窓ガラスに何かが当たったような音がして、謡は膝の間に埋めたままだった顔を上げた。

（……何の音だろうか、）

鳥がぶつかりでもしたのか。謡は立ち上がり、何となく窓に近付いた。だが窓には何の異常も見受けられず、窓の外にはいつもと変わらない風景が広がるだけだ。

「気のせい、か」

小さく呟き、室内に身を翻しかけた謡だったが、その視界に“何”かが入ってきてもう一度窓の外を見た。（あの人は……………）

！！）

口元まである襟のシャツの上から半袖のロングコートを纏い、タートンチエック柄のミニスカート、膝下の黒いソックス、ナイキのスニーカーという出で立ち。左目は長い前髪で見えず、見える右目は猫のそのようにつり上がり、

・・・ 藍田渉を甚振り、傷付けた人。恐らく榆乃木涼子と知り合いなのであろう人。

バンツと、謡は窓に手をつけて必死に窓の外の彼女を凝視する。

謡の視線に気づいたようで、にこりと一点の曇りもない笑顔で手を振ってくる。

その姿を見ていると分からなくなる。昨日、渉を傷付けたのは本当に彼女なのか。こちらの勘違いではないのか。

彼女が口を動かす。謡に伝えたいことがあるらしい。

だが口の動きだけでは彼女の言葉を理解出来ない。謡は更に顔を窓に近づける。

「謡様、おられますか」

いきなり女性の声とともにドアをノックされ、謡はビクツと体を震わせた。

だがすぐに声の主が家政婦の女性・・・戸田珠子だと分かる。

「な、何ですか」

咄嗟に近くにあった文庫本を開き、ベッドに寝転がる。すぐ直後にドアが開いて、四十代半ばくらいの小柄な女性が顔を覗かせた。

「戸田さん・・・ご苦労様です」

戸田珠子は事情を知っているのか、いつもは闊達としている表情を曇らせて気遣わしそうに謡を見詰める。

「お加減はいかがですか？ 顔色がお悪いですね」

戸田珠子は紅茶と手製らしいクッキーの入った皿の載った朱色の盆を謡の机の上に置いた。

「旦那様のご命令で謡様を部屋からお出しするわけには参りませんが・・・それ以外のことでしたら何なりとお申し付けくださいね」

「……有難うございます、戸田さん」

「あ、それと、」

戸田珠子は謡の横まで来ると、そつと窓の外を覗いた。

「家の前で、女の方が謡様のお部屋の方をお見上げになっていらっしやったので気にはなつたのですが……まだいらっしやいますね。謡様のお知り合いですか？」

謡は一瞬言葉に詰まつたが、珠子を心配させたくなくて首を横に振った。

「僕も今気付きましたが、全く知らない人です」

知らないどころか友人が彼女に傷付けられさえしたのだが、敢えて言う必要はないだろう。

「そうですか。……あ、長居をしてすみません。一階に居りますので、何かありましたらドアを開けてお呼びください」

「はい」

珠子は謡に一礼すると、部屋を出て行った。

謡は彼女の足音が完全に聞こえなくなつてから、また窓の外を見た。
(……いなくなつて、)

誰もいなくなつてしまっている。そつと窓を開けて首を突き出して周囲を見回すけれど、片目の女性の姿はなくなっている。

「……どうして、」

何の目的で自分の前に姿を見せたのか、謡に分かるわけが無かった。

神薙愁は、気だるい体を起こして忙しく退院の準備をする母・美佳子の背中を見ていた。

「そんなに急いで退院されなくても、」

愁を担当してくれた医師がそう言うのに、美佳子は聞こうとしない。

「愁！ さつさと着替えなさい」

苛立ったような美佳子の声に、愁は肩を震わせた後でベッドから出た。

床に足をついた瞬間にふら付いたところを、看護師の支えられる。

「ご、ごめんなさい」

「謝らなくて良いんですよ」

愁は頭を下げ、着替えを始める。

午前9時を過ぎるや否ややって来た美佳子は、愁を案ずる言葉を発することなく愁を無理矢理起こした。

「お母さん、あの」

「愁は私の息子です！！あなた方にとにかく言われる筋合いはありませんっ！！」

医師が何かを言おうとするのに、美佳子がいきなり金切り声を上げた。医師も看護師も、そして愁もそんな美佳子の気迫に息を呑んだ。美佳子は愁がまだ全く着替えていない姿を見ると、ますます苛立ちをあらわにした。

「早く着替えなさい！お前は何をやってものろまんだから！」

「ご、ごめんなさい、」

愁は母に怯えながら医師たちの顔を伺いながら慌てて私服に着替える。

医師たちは美佳子に、明らかに不穏なものを感じている。

恐らく虐待などの可能性を疑っていきそうな気がする。

「全く、匂といいあの男といい、どうして私の周りにはこんな……」

……、
ぶつぶつ呟きながら退院の準備を進める彼女を、医師たちは不気味

なものを見るような目で見遣っていた。

「そう。敦樹がそんなことをね」

湯気の立つ緑茶を飲み、神楽の母……神楽倫子は憂いのこもった息をはいた。

時刻は午前十時半。テレビもつけない室内はしん、と静まり返って時計の秒針が立てる音だけが響いていた。

「うん」

敦樹との会話を倫子に話すべきかどうか、神楽は迷った。無闇に言い触らさないほうが敦樹の為には良いのではないのかと思ったりもした。だが、神楽一人の胸に仕舞っておくのも辛いものがあつた。だから話した。なるべく、平静を装って。

「そっか、やっぱりか」

「え？」

「あの子ね、時々すごく寂しそう、というか哀しそうな顔をするところがあるのよ」

神楽は呆然と倫子の話に耳を傾ける。

「そんな、」

「だから、何となく気付いてはいたかな。この子はもしかしたら、自分のことを卑下しすぎているんじゃないか、自分を不要な人間だと思い込んでいるんじゃないか……って」

「僕は、」

「樹も、哀しそうな顔をしてるわね。今」

「！」

いきなり話題が自分に移り、しかも鋭いことを言われ狼狽える。

「あなたが何の連絡もなく突然帰って来るから何事かと思ったけど

「……………雇い主の方と何か悶着でもあったの？」

「別、に……………そんなことは。ただ、少し休みなさいと言っていただけで、」

言葉を濁す息子を、しかし母は穏やかな瞳で見詰め、

「お優しい方なのね」

という言葉を発した。

「……………」

「そんな方のもとで働けて、あなたは幸せね」

母の言葉に、神楽は堪えきれなくなったように涙を溢れさせた。だが倫子は涙の理由を問うことはせず、ただ黙って神楽が泣き止むのを待った。

「……………ん、」

敦樹は頬をくすぐる何かに気付いて、目を覚ました。瞳だけを横に動かしてみれば、兄が敦樹の首元に突っ伏している姿が目映った。どうやら敦樹を気にかけてそばにいるうちに眠ってしまったようだ。

「兄さん、兄さん」

そつと肩を揺らしながら呼べば、兄も小さく声を上げながら目を覚ました。

鈍色の瞳が敦樹を捉える。

「敦樹。具合はどう？」

「うちは平気……………兄さん、泣いたの？」

「え？」

「だ、だって頬っぺたが濡れてるから、」

敦樹が恐る恐る兄……………樹の頬に触れる。

「敦樹、」

「あ、ごめつ……」

敦樹はパツと手を離れた。嫌がられていると思ったのか。神楽は小さく笑みをこぼすと、そつと敦樹の頭を撫でる。

「？」

「大丈夫。悲しい涙じゃないから」

敦樹はよく分らない、というような表情をしていたが、神楽が彼を見守るように微笑んでいることに気付き、自分なりに納得をする。

「兄さん、うち、」

「今日は泊まっていくから、色々話そう」

「い、良いの？お仕事は？」

「大丈夫。今日と明日はお休みを貰ったから」
パツ、と敦樹の顔が明るくなる。

「でも明日は学校に行けるように、今日はあまり無理しないようにね」

「うん！」

神楽と久しぶりに一緒に過ごせることが嬉しいのか、敦樹は満面の笑みだ。発作を起す前に吐露した心情のことを忘れたのか覚えているのか、読み取れない。

（でも、僕と一緒にいてやれる時くらいは）
要らぬ不安は、忘れさせてあげたい。

それくらいしか、出来ないから。

（春樹様、謡様、）

今日だけは、彼らのことも仕事のことも忘れて家族水入らずで過ごすことを、神楽は誓った。

謡と秋く過去く

母親に急かされるままに着替え、病院のロータリーからタクシーに乗り込み自宅に戻って来たのは、十一時近くのことだった。

愁は疲れに微かな眩暈すら感じていた。

「愁」

「な、何？」

美佳子はスーツに着替えていた。

「お母さん出かけてくるから、ちゃんと寝てるのよ」

素っ気無い口調で言い放ち、愁の返事も聞かぬままに美佳子は足早に家を出て行った。

彼女を呼び止めて何処に行くのか訊こうかとも思ったが、結局止めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

体も心も、酷く疲れていた。

愁はソファに体を埋め、物思いに沈んだ。

（・・・・・・・・・・謡さん、）

学校で愁を苛めていた生徒たちに偶然街中で会ってしまい、謡に迷惑を掛けた。

それに、そのせいで謡は父親に、

「謡さん、」

姉の匂は恐らく愁が入院したことを謡に言った筈だ。彼は見舞いに来てくれたのだろうか。

「・・・・・・・・なんて、」

愁は自嘲の笑みを漏らす。

謡に散々迷惑を掛けておいて、自分が入院したら見舞いに来て欲しいと思うなどと。都合良過ぎはしまいか。

「・・・・・・・・」

また眩暈に襲われる。昨日から色々あって体がついて行っていない

のかもしれない。

愁はソファから立ち上がると、ゆっくりとした動きで自室に引き取った。

次の家庭教師の日までには元気になって、謡にお礼をしたいなあと思いつながら。

・・・どうやら転寝をしていたらしい。

遠慮がちにされたノックの音で、謡はまどろみから現実世界に戻って来た。

「ん、」

寝ぼけ眼で時計を見れば、あと二、三分で正午だった。

「謡様、そろそろ昼食の準備をしようと思つのですが、」

戸田珠子だ。

「はい、お願いします」

本当を言えば一切腹は減っていないのだが、ここで断ればまた珠子に訊いて貰うことになるから、それは避けたかった。何度も二階に足を運んでもらうのも悪いと思ったから。

「では準備が整いましたら此方にお持ちいたしますね。お手洗いなどは大丈夫でしょうか？」

「はい、問題ありません」

「分かりました。失礼いたします」

ドア越しにも深々と礼をする彼女の姿が頭に浮かんでくる。

トントントン、と小さな音を立てて彼女の足音が遠ざかって行く。
謡は小さく溜息をついた。

（勉強をする気にも読書をする気にもなれない）

謡は寝返りを打つと、ドアをじっと見詰めた。

どうして自分はあるドアを開けて外に出られないのだろうと思う。

（……………）

あのドアを開けて、知りたいことがたくさんある。藍田渉の容態はどうなのか、榆乃木涼子はあの海の見える公園に居てくれるのか、愁はまだ病院にいるのか。

知りたい。知りたいのに、どうしようもない。

「くしゅっ」

謡は小さくクシャミをして、起き上がった。

壁に背をつけて、謡はじっとドアを見詰め続ける。

「兄さん、兄さんってば！！」

「えっ、」

「……………うちの話、聞いてなかったでしょ」

恨めしげな視線を寄越され、神楽は居心地の悪さを感じた。

「……………」

敦樹は開いていた英語の参考書を閉じた。

「あ、敦樹？」

「……兄さん、何だか心此处に在らずだし、もう良い」

いつも遠慮がちの敦樹にしては珍しく、ハッキリとした物言いだ。神楽は慌てる。

「そ、そんなことないよ。ほら、機嫌直して、」

「もう良いよ。無理しなくて」

「……敦樹、」

「うちが、我が儘言うからでしょ？兄さん、困るよね」

「我が儘なんか、」

「なんかこういうこと言うと、男女のカップルみたいで抵抗あるけど、」

微かに頬を赤らめ、

「……兄さんはうちと居ても、誰か別の人のことを考えてる」と言っただ。

「……………!!」

「それが誰かなんてうちには知り得ないけど、兄さんにとってすごく大切な人って言うのは……分かる」

「敦樹、」

浮かぶのは、少しだけ悲しげな笑み。謡の悲しげな笑みと、重なってしまふ。重ねてはいけないと分かっている、筈なのに。

「敦樹、」

「だけど、」

敦樹の手が、神楽のシャツの裾をそつと握る。神楽がまじまじとそれを見れば、敦樹の顔が更に赤くなる。

「き、今日だけは……我が儘、する」

春樹や謡に会う前は、一番に守りたかった存在。いつしか離れて暮らし、春樹たちと触れ合うに連れて優先順位のようなものが徐々に出来上がっていた。

その間、敦樹がどのくらい寂しがっていたか考えもしないで。

「うん」

我知らず、一つ頷いていた。敦樹が小さくありがとう、と呟く。浮かんで来る謡の残像を脳裏に追いやり、弟の頭を、神楽は優しく撫でた。

……眠くもないのに目を閉じていたら、誰もいないはずの自室で空気が動いたような気がした。謡は何だろう、と思いつつ瞼を開き、「っ！？」

度肝を抜かれた。

「な、だ……れ？」

目と鼻の先に、きらりと光る刃の先端。そしてベッドに横になっている謡を、何の色も浮いていない瞳で見つめる少女。それらが謡を混乱に陥れる。

「君は、」

「動かないでいただきます、芝貫謡様」

「！？」

どうやら目前の少女は謡のことを知っているらしい。謡には見覚えのない少女だ。まだ小学生だろうか。顔立ちや体格は幼いのに、瞳は酷く冷たく、色がない。

「…………騒がれませぬよう。私はあなたを傷付ける気は毛頭ありませんから」

淡々とした口調。

刃先は一ミリもぶれず、謡の動向を冷徹に伺っている。

「私が用のあるのは、成宮秋という存在だけ」

「なり……みや、」

聞いたことがある。芝貫傘下の、警護・警備を生業とする一族だ。

だがその成宮と自分に何の関係があるのか。

「そのうち成宮秋は、謡様に近づかれるはずです」

「ぼ、僕に……？」

少女はこくり、と一つ頷き、

「成宮秋は反逆罪です」

と言った。謡はギョツ、と目を見開く。

「は、反逆罪……？」

「そう。芝貫謡……あなたを“檻”から解放するために成宮一族の意向に反る行為をしたためです」

「僕を……解放、」

目の前の少女が何を言いたいのかが分からない。成宮がどうしたという。自分を、解放？何から？

父親、から？それとも、

「その……反逆罪になった人を、君は、どうするの？」

「逃げられない程度に痛め付けて成宮に引き渡せ、と命じられております」

「だ、誰に？」

少女の瞳が、一瞬だけ揺れた……ような気がしたが、

「秋様の父上……なりみやかしゅう成宮夏秋様に、です」

「……」

その名前に、一気に記憶が引き戻される。

一切の温度のない冷えた瞳。歪な形だけの笑み。猛獣を思わせるような鋭い牙に、威圧感のある大柄の体。感情を一切排した抑揚のない口調。そして、己が息子を罵倒し打ち据えた。

『無理したらダメだよ』

そんなことをのうのうと言った覚えがある。その相手が成宮秋という人物ではなかったか。

確かあの時、謡は父の春樹とともに成宮家を訪問した。本来は当主の成宮夏秋だけと対面する予定だったのだが、何を思ったのか成宮

は双子の息子の次男を謡たちに対面させた。

だがそのときの次男……成宮秋は明らかに体調不良に陥っていた。真っ赤な顔に、潤んだ瞳。かたかたと震える体。息遣いは安定しているとは言えず、目付きもぼんやりとしていた。

夏秋は、そんな息子に春樹たちに挨拶をするように命じた。

だが体が思うように動かないのか、秋の挨拶は非常にしどろもどろで口調も曖昧だった。

春樹の横で座っていた謡は具合が悪いのに無理矢理連れて来なくて良いのに、と思っていたが春樹が何も言わないのでまんじりともせずに黙っていた。

……その矢先の出来事だった。夏秋がいきなり立ち上がったかと思うと、秋の頭を蹴り付けたのである。

『！？』

謡は思わず腰を浮かせかけたが、春樹に腕を掴まれて動くことが出来なかった。そんな謡の前で、床に倒れ込んだ秋の背中に夏秋が太い足を載せた。

秋の顔が苦痛に歪む。

『おと……さ、』

『貴様、わざわざ芝貫様にお越しいただいているのになんという態度だ！』

『も、しわけ……ありま、うあっ！』

足に体重がかかったのだろう、秋が苦痛の声を上げる。外見が幼く見えるためか、余計に痛々しくて見ていらなかった。

自分の腕を掴む春樹の手を振り払い、謡は立ち上がった。

春樹のバカが、という呟きは無視した。

『成宮当主！！』

『謡様、これは成宮なりの躰け方。何も口出しされませんよう』

夏秋に圧倒され、怯みかけたものの、謡は拳を握りしめて、

『これは明らかな折檻、及び虐待です！』

啖呵を切っていた。

夏秋の目に苛立ちが浮かび、倒れたままの秋の瞳が大きく見開かれる。謡は更に夏秋を糾弾しようとする。が、

『僕なら、大丈夫……ですから、』

秋の弱々しい声に、開きかけた口を閉ざすことになる。

『だけど、』

実父によって背中を踏みつけられながらも、秋は自分を氣遣う謡に気丈に微笑んで見せる。

何故かその姿が自分に重なってしまい、言い様のない感情が沸き上がる。

『ふん』

夏秋は鼻息荒く、秋の背中から足を退かした。

『謡、座りなさい』

父の冷たい声に、謡は従う他ない。だが一つだけ、秋に言うておきたいことがあったから、だから、

「回想は終わりましたか、謡様」

「あ、」

ちらりと眼球を刃先が掠めたような錯覚に、現在の謡は背筋を凍らせた。

「思い出した……秋っていうのは、」

「恐らく、あなたが思い浮かべている人物で合っています」

「でも、どうして……。会ったのはあの時の一度だけだし、大した会話だっと思ってない、なのにどうして、」

そんな人が何故、自分“なんか”を、謡を助けるためだけに一族に反するのだろう。反逆罪になったのだろう。

「どうして、」

言葉の続かない謡を見る少女の目はやはり冷たく。

「私にもさっぱり理解出来ません。成宮を、己の生家を敵に回してまであなたを助けようとする秋の気持ち、全く理解出来ません」
「……………」

「ですが成宮から離反したのは事実。ならばそれ相応の咎^{とが}を負って

もらう迄です」

少女の唇の端が歪つに歪みかけ、

「ああ、いけない。あれを白日の元で傷付けられるなど、想像しただけで笑えそうだ。謡様の前で粗相をした」

「……………っ、」

体が強張って動かない。目の前の少女は危険だと警鐘が鳴るのに、どうにも出来ない。

「さあ、あれはいつ謡様を助けに来るのでしょうか。それまではお辛いでしょうが、このままでご辛抱下さいね」

少女は成宮秋を痛め付け、夏秋に引き渡すつもりなのだろう。

……謡を助けるがために成宮家を裏切ったから。

…………… どうして？

どうして、こんな僕なんかの為に……人が傷付くの？

「こ、ここに必ず成宮さんが来るとは、」

「必ず来ます。謡様を助けに。牢獄から救い出す為に」

少女の口調ははつきりしていて、一切の迷いがない。謡は気圧されて、口をつぐむ。

「ですから、しばし我慢下さい」

謡は刃先と少女を交互に見比べながら、ただ黙るしかなかった。

惑いと不安

今日初めて携帯が鳴ったのは、昼食も摂らずに部屋にこもっていた時だった。見るともなしに眺めていた洋楽の雑誌から顔を上げ、床に放ったままだった携帯が、ノーマルなピリリリッという音を響かせたのだ。藪内奏は、何の気なしに携帯を手にして、

「……………」

藍田渉の名前が液晶画面に表示されており、息を呑んだ。

「も、もしも」

聞こえてきたのは、

『奏くん？ 渉の母です』

渉の母親の疲れきったような声だった。

「おばさん……、渉は」

嫌な予感が藪内の頭を支配する。足元が今にも崩れ出してしまいそうな、不安さが怖い。

『……何とか、一命はとりとめたみたい。でも、まだ安心は出来な
いって、』

「……………喜べば良いのか、不安になればいいのか藪内には咄嗟
には分からなかった。

『奏くんは、何処にいるの？ 昼休憩かと思って掛けてみたんだけど、
学校にしては周りが静かじゃない？』

「あ、俺……………今日は、学校休んでるんです」

『そう、なの』

「……………報告、ありがとうございます。渉と話せるようになって
たら、よろしく伝えてください」

『渉が起きたらまた連絡します。会いに来てやって』

渉の母親の言葉に、藪内は激しく動揺する。

“嫌だ、奏くん……………止めてよっ”

泣いて恐怖に怯える渉を散々痛め付けた。

時には嬉々としながら。

時には陶醉しながら。

そんな自分が渉を見舞う？

散々傷付けたくせに、よくそんなことができるな。

「俺には、そんな資格ありません」

気付けば震える声で、口走っていた。

『え？』

「お婆さんの心遣いは有り難いけど、俺には渉に会う資格はありませんから」

一方的に言って、電話を切ろうとした。

だが切る一步手前で渉の母親の声が悲鳴じみた声を上げたから、吃驚して指を止めてしまった。

『でも渉が奏くんを呼んでるのよ！！』

「・・・・・・」

『私が手を握っても、病院の先生が名前を呼んでも、あの子は・・・渉は奏くんだけを呼んで、』

あとは声にならなかつたらしい。嗚咽が受話器越しに漏れ聞こえる。

『ねえ、あの子と何があつたの？昔はあんなに仲が良くて、いつも一緒にいたのに』

「俺は、俺は」

“奏くん、”

“おはよう！今日もいい天気だね”

“奏くん、ありがとう。助けてくれて有難う”

笑った顔、怒った顔、泣いた顔。

いろんな顔を見てきた。でも最近は、泣いた顔が苦しんだ顔しか見えない。

自分がそうさせた。自分が泣かせた。

『とにかく、また電話します』

キッパリとした口調で告げ、渉の母親は一方的に電話を切った。

数内は液晶画面を見たまま、しばらくそのままの姿で呆けていた。

かちかち、と静かな空間に時計の秒針だけが立てる音が響いている。謡は刃を向けられたまま、ずっと息を詰めていた。

少女は一切身動きせず、刃先も全くぶれない。

「あ、あの」

「謡様、何か」

「本当に、成宮秋さんは僕に会いに来るんですか？」

「はい」

はつきりとした口調。

「秋様は必ず謡様に会いに来られます……私もどのようにこの部屋に乗り込んでくるのかひどく興味があります」

淡々とした口調で、本当に興味があるのか分からない。

「ああ、あと秋様が現れても下手な動きはされませんように。私でもこの狭い空間であなたを巻き込まないという自信はありませんから」

その言葉に、謡は目の前の少女の本気を知る。

「あの戸田さんは、」

「……あの料理をしていた女性のことですね。体には一切悪影響のない方法で一時眠って頂いているので、彼女のことを気になさる必要はありません」

体に一切悪影響のない方法とは何だろう、と謡はそんなことを思う。「あなたは、少し暢気ですね。ご自身の危機に全く留意されていないな

い」

「え？」

ぴた、と謡の頬に直接刃先が触れる。

ゾクツと背筋に悪寒が走り、謡は体を強張らせる。

「私が少しでも手を動かせば、あなたの綺麗な頬には赤い線が走りますよ。それを分かっておいでですか？」

色のなかった少女の瞳に、謡を侮蔑する色が差す。

「何も怯えて泣けとは言いません、ただ」

ガタンっという微かな音がして、少女、烏丸凜が口を閉じた。

「・・・来たようですね」

薄っすらと残虐な笑みが凜の顔を彩り、ついでその笑みは不意に消えた。

怪訝そうに、開いたドアの方を見詰める。

「どうして、あなたが・・・」

謡も怪訝な顔付きになる。何故なら開いたドアの先には、記憶にあるのと全く同じ青年だけでなく、

「キミを助けに来てあげたよ？芝貫謡君？」

謡と愁を暴力から助け、渉を傷付けた女性がいたから。

「謡様、」

青年は・・・恐らく彼が成宮秋だろう、一目散にベッドの上の謡に近寄ろうとする。

凜の姿に気付いているのかどうかも分からないくらいに無防備な行動だった。

「駄目だ、来たら、」

「ちよつと待ちなよ、馬鹿」

「秋様、覚悟」

謡と葉弓と凜の声が重なる。

葉弓が秋の腕を掴み、行動を抑制する。

「放してください、謡様をお助けしなきゃ、」

「馬鹿か、お前。その謡の前にいる怖い顔をした餓鬼の姿が見えな

いの？」

その言葉に初めて秋は凜の姿に気付いたらしい。本当に謡しか目に入っていないかったのだ。

「………凜ちゃん、」

「……あなたに“ちゃん付け”で呼ばれる筋合いはありませんね」
凜は謡の髪を鷲掴みにすると、刃先を秋に向けた。秋の瞳に悲しみが宿る。

「凜ちゃん、謡様を放してあげて、」

「あなたが素直に私に従ってくだされば済む話です。……成宮本家にお戻りください」

「……無理だよ、僕はもう家には戻れない。戻っちゃいけないんだ」

「……この方を助けるために、あなたは自分を犠牲にするのですか」

凜の詰問口調に、秋はゆるゆると首を左右に振った。

「それは違うよ。謡様のことがなくても、僕は成宮を出ようと思っていた。喻えそれが父様のお怒りを買っても」

「どうしてですか？……成宮が決して心地良い場所ではないとは私も思います。でもずっとあの家で過ごし、成宮の寵児と呼ばれたあなたが家を出ればどんな荒波がたつかあなただってよくご存知の筈です」

凜に髪を掴れたまま、謡は困惑していた。

今まで人形のように殆ど表情を動かさなかった少女が、秋の登場と同時に年頃の少女のように感情を露わにし始めたから。

（あの人は何を考えてるんだ）

ドアの前で腕を組み、にやにやと愉快げに秋と凜の対話を眺めている女性は一体何を考え、何をしようとしているのか。

（僕を助けに来たとは、一体どういう意味なんだ……？）

分からない。分からない。分からない。

不意に彼女と視線が交わった。

「……………」

「……………」

謡は体を強張らせ、彼女…葉弓の動向を見守る。

「ねえねえ」

その彼女が急に口を開き、秋と凜の間に割って入った。

「謡を放してあげてくれない？髪が抜けちゃうから」

「……誰ですか、あなた」

「あなたみたいな暴力娘に名乗る名前はない」

につこりと微笑みながら爆弾発言をする。ピクツと凜の口端がひきつるのを謡は見た。

「秋様はよくご存知のようですね」

「あ、えつと……………」

「……………まあ良いです。あなたの目的は何ですか？」

葉弓がくすぐったそうに小さく微笑んでから、

「う・た・い」と単語を区切りながら発音する。聞くものによっては酷く苛付かせる口調である。

「謡様？」

「正直秋がどうなるうが私はどうでも良いわけ。大事なのは謡」

「僕……………」

葉弓の言いたいことが謡には分からない。きっと凜にも分かっているに違いないだろう。

「謡にあわせたい人がいるからさ」

「僕に会わせたい人？」

「うん。涼子だよ」

その名前にドキンツと心臓が跳ね上がる。そうだ、昨日約束した。また同じ場所で会おうと。

彼女は言っていた。ベンチで待っていると。だからちゃんと学校には行けと。

「榆乃木さんに、って」

今一事態を飲み込めていない謡を見る葉弓の目が歪に傾いた。

「あいつ、今日この街を出る気だよ」

「……え？」

「あいつはもう謡には会うことなくなくなろうと思ってるけど、私それは良くないと思うんだよねえ」

謡は心臓がドクドクと高鳴るのを止めることが出来ない。

「う、嘘だ。だって僕のこと待ってるって……だから、ちゃんと学校行けて、」

「ホント謡は目出度いなあ」

「め、」

「父親に排斥され、弟にも見放されても他人を信じるなんてさ。謡は学習能力がないのかな？」

カツと顔が熱くなる。

「ぼ、僕は」

「と、まあこういう訳で、あたしは謡を家から出してあげないといけないの」

パツと謡から凜に顔を向ける。

「……あたしはあくまで謡様ではなく秋様に御用があるので、あなたの仰っていることは理解出来ませんが謡様を家から出すことに異論はありません。秋様を此处に置きっぱなしにしてくださいださるならそれで結構です」

「だってさ、謡。行こう」葉弓が差し出して来た手を、謡は戸惑った顔で見つめる。

「どうした。涼子に二度と会えなくなっても良いのか」

「そ、それは」

照れもあつてはつきりと嫌だと言えない謡だが、葉弓にはお見通しらしい。

「じゃあ早く。こいつの気持ちが変わらないうちに」

葉弓にこいつ呼ばわりされた少女が微かに鼻を鳴らす。

「でも、」

なら自分を助けようと奮闘してくれたのであろう。目の前の青年を見捨てろ、と言っただろうか。

「……………」

謡が秋を見ると、彼も謡を見ていたようではつちり目が合った。

「謡様、僕のことは気になさらず。謡様の望むとおりに」

悲しげな瞳ではあるが、口調ははつきりと芯が通っている。

「そうだよ。こいつは腐っても元・成宮の秘蔵っ子だよ？ 謡が身を案じる必要はないさ」

軽口を叩き、いまだに煮えきらない謡の二の腕を掴む葉弓。

「あんたは今一番何を願ってるんだい？ 秋を助けること？ いや違っただろ、あんたは涼子に会いたいはずだ。それが一番の願いなんだろう？」

「ぼ、僕は、」

葉弓、秋、慄から種々様々な視線を送られ、謡はなかなか決心をつけられずにいる。

答えようとした瞬間、何よりも怖い父の姿が浮かんた。“勉強会”の最中に家から出た、と知れたら。

「謡様、お父様のことが、」

「っ、」

秋に指摘され、謡は俯く。そうだ、自分に自由はないのだ。

父が、春樹が生きている限り。

『なら殺しちゃえば？』

「！？」

この場にいる人間のものではない声が出たような気がして、謡は顔を上げた。怪訝そうな葉弓たちの視線が痛い。

「今、誰か……………」

「謡様？」

秋が心配げに呼び掛けて来る。

「……………要するに父上様にばれなければいいのですね？」

殆んど口を閉ざして様子を見ていた慄が、ぼつりと呟くようにして

言った。

「え、」

「協力して差し上げましょうか。秋様をここに連れて来てくださったお礼に」

そうして懷は、笑った。それは見るものをことごとく不安に陥れるような、ひどく透明な笑みだった。

惑いと不安（後書き）

謡は涼子が街を出る前に再び彼女に会うことが出来るのでしょうか。
でわまた次回（^^）

拐(さら)い(前書き)

久しぶりの2日連続投稿

拐（さら）い

「痛いっ！！」

愁はそう叫びながら起き上がった。

「はあ、はあ……っ、夢……？」

嫌な汗が額から伝う。背中も汗びっしょりで、気持ち悪い。

（最悪、）

不登校になる前に苛められていたことを夢に見てしまった。

（うつ、）

頭がガンガンする。

脳裏に、自分を睥睨するクラスメートたちの鋭い目がありあがりと思
い浮かび、感じる悪寒に愁は腕を自分で自分の肩を抱いた。

体が馬鹿みたいにガタガタと震える。涙がじわりと滲み、うまく息
が吸えない。

「薬、」

あまり飲みたくないが、背に腹は変えられない。愁は薬を手にも
つきながらも階下に急いだ。

ミネラルウォーターをつぐ余裕もなく、水道水をコップに注ぐ。

「はあ、はあ、はあ」

必死の形相で薬を呑む。体から力が抜けて、愁はその場に崩れ落ち
る。

誰か、そばにいて欲しい。いや、誰か、じゃない。

「ね、姉さん……謡さん、助けて………」

愁が今一番そばにいて欲しいのは、姉の匂と慕っている謡だけだ。

『男のくせにびーびー泣いてんじゃねえよ！』

『さっさと金出せや、こらっ！』

『ぶっ、かわいそ〜ジャン。やめてあげなよ』

「うるさい、うるさいうるさい、うるさい！」

僕の何がいけないの？どうして寄って集って苛められないといけな

いの？僕、何かしたの？
愁は胸元でギュッと手を握りしめ、胸中で渦巻く“嵐”が過ぎ去るのを待った。

「？」

「匂、どつたの？」

「ん、何か愁に呼ばれた気がして、」

「空耳っしょ。中三の弟クンが高校にいるわけないんだから」

親友である稲瀬美月の問いに、匂はまあね、と煮えきらない口調で応えた。

「匂、なんか悩み事？シワが深いぞ」

「まあ、ね」

匂は憂いの帯びたため息をつく。

「近所のあの人のことで悩んでるのかな？」

途端に匂の顔が赤くなり、恨めしげに美月を睨む。

「不意打ち禁止」

「でも確かに格好良いよね。ちょっと影があるっていうか、何て言うか」

「美月は小堺クンがいるでしょ」

「大丈夫だよ！横取りなんかしないから！」

あはは、と笑いながら美月が匂の背中をバシバシと叩く。匂は顔をしかめ、美月の弁当箱から卵焼きを掠め取った。口に放り込む。

「わっ！あたしの卵焼き！」

「知らない」

「ごめんてば。怒らないでよ！」

「知らない」

美月といつも通りの会話をしながら、匂の頭は謡と愁のことで一杯一杯だった。

「そ、そんなこと出来るわけ……」

謡は期待をしかけ、すぐにそれを打ち消すかのように首を左右に振る。

あの父を出し抜くなど。況してや今は“勉強会”の最中。普段以上に神経を尖らせているはずだ。

「確かに春樹様は抜け目のないお方。ですが今、春樹様には一つ気掛かりなことがありのほずです」

意味深な言葉に、謡はますます混乱する。

「え？」

「謡様もお気付きのほずです。近頃起こったこと、思い出して下さい」

「……！まさか、神楽さんのこと、」

「ご名答」

凜が薄く笑う。

「春樹様の秘書を勤めていらっしやいますね。ですが今は暇を出されて帰省中とのこと」

ドクン、と心臓が馬鹿みたいに高鳴る。

「神楽さんに、何をする気ですか？！」

もう神楽を傷付けるのは嫌だ。

「春樹様の目が神楽様に向けば、謡様はその間春樹様の目を逃れられるのでは？」

「だ、駄目です。神楽さんをこれ以上巻き込むのは嫌なんだ……」

謡の必死の叫びに、慄は

「もう事態は動いています」と呟いた。

それは突然のことだった。昼食を摂った後、体がだるい敦樹を寝かせその様子を文庫本片手に見守っていたときに起こった。

いきなり窓ガラスが割られ、敦樹がビクツと目を覚ました。

割られた窓から、フルフェイスのマスクを被った黒いつなぎを着た180センチくらいの細身の人間が侵入して来た。

怯えた敦樹が神楽の背中に隠れる。

「誰だ！」

相手は応えない。ただ無言で二人に近づいて来る。

「……………」

スツと神楽の背中に隠れる敦樹に手を伸ばすのを神楽が慌てて掴む。だが、

「……………っあ！」

相手が隠し持っていたサバイバルナイフで切りつけられ、右の二の腕に赤い線が走った。

「兄さんっ……………！」

敦樹の泣きそうな声に、神楽は怯むなと己に活を入れる。狙いは敦樹だ、と直感で悟ったから。

神楽はナイフを握る左手首を掴み、捻り上げる。足を相手の足の間に入れ、

「や、嫌だ、放して！」

「敦樹！（しまった、もう一人いたのか！！）」

いつの間にか襖が開けられ、窓からの侵入者と同じ格好をした身長
の低い人間が入り込んでいたらしい。

そいつが布団の上でへたりこんでいる敦樹を羽交い締めにして、抗
う彼に白い布をおしあてようとしているのだ。「止めるっ！！」

神楽は敦樹を助けようとするが、窓から侵入してきた相手にねじ伏
せられる。

「いつ……………！」

「や…めっ、」

ついに敦樹の口が布で覆われる。敦樹が兄に向けて助けを求めて手
を伸ばす。

だがその瞬間、敦樹を押さえている奴が彼の鳩尾を突いた。

「……………っっ、」

だらり、と敦樹の手が垂れ、閉じかけた目から涙が流れた。

「あっ、敦樹っ！」

「私たちは」

神楽を組み強いているほうが、彼の耳元で囁くように言う。

低いハスキーな声。男だ。

「芝貫に連なる者です。……………あの子はいただいていきますよ。神楽

樹様」

「しば…ぬき？」

咄嗟に浮かんだのは、謡と春樹の顔。

彼らと敦樹は、縁者？

神楽がそう考えた瞬間、脇腹に何か固いものが押し当てられるのを
感じた。その直後、びりつと身体中に電流のようなものが走り神楽
は床に倒れ込む。意識を失う、ということはなかったが、身体中が
痺れて指先一つ動かせない。

敦樹が男に抱き上げられる。敦樹はぐったりとして動かない。

（待て、敦樹を……………連れて行かないでくれ、）

神樂の願いも虚しく、敦樹は連れ去られる。

（止めてくれ、僕たちの家族を連れて行かないでくれ……っ！！）
「ではな。返して欲しいなら、何をすればいいか考えることだ」

（敦樹、敦樹！！）

神樂の視界から、敦樹の姿は見えなくなった。

体が痺れて動けない神樂は、ただ倒れ伏して義弟の名を連呼するしか出来なかった。

拐(さら)い(後書き)

いつになったらアクセス解析は戻るんですかね(+|+)

疑問と恐怖と

ぴりりりり、という音に謡はびっくりと肩を震わせる。

「失礼、」

一言断り、慥が携帯電話を取り出す。

「はい、烏丸……………そうか。分かった…ああ。では手筈通りにな」
「どうやら慥は命令を下す立場にあるらしい。」

彼女は携帯を切ると、謡に向き直った。

「神楽敦樹」

「……………えっ、」

「神楽樹様の義弟の名前ですよ」

「神楽、さんの、」

「その神楽敦樹ですが。神楽様と実家にいたところを襲撃され、拐われました。私の配下の話に依れば、芝貫に連なるものの仕業のことです」

「！なんで、」

どうして芝貫の人間が神楽の義弟を拐うのだ。

謡には訳が分からない。

「神楽様は近いうちに春樹様に会われるはずですよ。義弟が拐われたのですから、今日にでも舞い戻って来るのではないでしょう」

「どうして……………？どうして神楽さんの義弟さんを芝貫が拐うんですか！？何で、どうして！？」

何がどうなっているんだ、と謡は苛ついてやけげみになる。そんな謡を、慥は子供には似つかわしくない冷めた表情で見ている。

「……………話しても構いませんが、後ろから殺気を感じます」

「そのとおり！謡、涼子に会いたいの会いたくないの！？」

「あ、会いたいです。会いたいですけど……………」

「ならここでうだうだ言っただけで外に行くよ！」

「で、でも」

例え春樹の意識が神楽に向くにしてもそれは今すぐにはないはずだ。それに、涼子と、ずっと自分のそばにいてくれて心の支えになつてくれていた神楽のどちらを優先させるかは、それは…………、（今まで神楽さんは僕を守つて支えて腐心してくれた。なら次は、僕の番ではないのだろうか。例え何の力になれないのだとしても、支えになれなくても）

「謡！」

秋を見れば、彼は落ち着いて謡を見つめている。小さく一つ、頷く。

「楡乃木さんは、すぐにでも姿を消しますか？」

「それが分かんないから急げつつてんのさ！」

謡は選択を迫られる。

「僕は、」

楡乃木さんならどうするだろう。彼女なら、謡にどちらを選んでもらいだろうか。

「神楽さんに、電話させてください」

「ちょ、謡」

「葉弓さん。ここは謡様の良い様に…………」

秋に諫められ、葉弓はむうと不満げに唇を尖らせる。

「懐、さん。携帯、貸してもらえますか？」

自分の携帯は春樹に没収されてしまっている。神楽の番号は頭に叩き込んでいるから、電話さえ貸して貰えたら電話出来る。

「……………」

懐は少し考えていたが、小さく頷いて自分の携帯を謡に渡した。

「ありがとう」

彼女に礼を言い、神楽の番号を入力する。

（神楽さん、出て…………）

神楽はなかなか出ない。電話に出られない退つ引きならない理由があるのだろうか。謡が焦れていると、

『も、しもし…………？』

震え、掠れてはいるが確かに神楽の声だ。謡は思わず声を強くした。

「神楽さん？ 僕です、謡ですっ……！！」

敦樹を謎の二人組みに連れ去られ、何が何やら分からず混乱していた神楽の携帯に來た着信。登録をしていない番号からだったから知らないふりをしていたのだが、かなり鳴り続けていたから出てみた。すると、

『神楽さん？ 僕です、謡ですっ……！！』

「！謡、さ…ま？」

謡は今“勉強会”中のはずなのに、どうして電話など掛けられるのだろうか。

「謡様が、どうして」

『神楽さん、大丈夫…ですか？』

「え？」

『僕、今知ったんですが……神楽さんは義弟さんがいらっしやるんですね』

「……………っ?!」

どうして謡がそれを知っているのだ。神楽は動揺する。何故、謡が知っている。

「謡様、何故、」

謡が口ごもる。一体何が起こっているんだ。

『神楽さん、今実家ですよね？』

「えっ、あ、はい……」

その義弟が拐われた、とは言えないと思う。芝貫に連なる者。まさか謡には関係はないだろうが……。

『あの、神楽さん……』

「謡様？」

『義弟さんの敦樹君……拐われた、って』

「!？」

何故？何故謡がそれを知ってるんだ。まさか、まさか……。

（そんな筈は……。謡様がひとさらいに関わるなど、そんな訳あるか……。）

『今、僕の家有成宮秋さんと烏丸懔さんが来ていて、その、謡は相変わらず口ごもり、対して神楽は呆然とする。』

（成宮秋に烏丸懔？謡様に何が起こっている？）

そして、敦樹が芝貫に連なる者に拐われ……。

（敦樹は、一体何者なんだ？）

実の両親に虐待され、施設に入り、やがて神楽家に養子にやって来た、小柄で細身の少年。

彼を芝貫が拐った。日本の命運に一役かっているあの芝貫が何故、あの痩せて気弱な少年を求めたのか。

（母さん、敦樹は……）

母親は、まだ戻らない。

「謡様。今謡様に起こっていることを私に話してください。私も、義弟のこと……敦樹のことを話しますから」

謡からの返事はすぐにはなかった。電話の向こう、彼が周囲の人間と話している気配がする。

『話すのは……神楽がこちらに戻ってからです。僕の家に来てください』

「し、しかし私は」

『神楽さん、烏丸懔さんは敦樹君のことを深く知ってます。知りたければ、こちらに来いと言われてます。……電話では、話せない』
神楽は目を閉じて考える。春樹には暇を与えと言われたのに、この芝貫家に行ったと知れたら、今度は。

『うち、違っから……』

そう言った敦樹の泣き出しそうな顔を思い出す。
敦樹は怯えている。“家族”から、見捨てられてしまうことを。

「……分かりました。すぐに向かいます」

『はい……お願いします』

電話を切り、神楽は母親へのメモを残すため紙とボールペンを手に取った。

『お前なんか産まれて来なければ……』

痛いよ、お母さん。殴らないで……。

『ったくよお、なんだあその目はよおっ！』

熱い、熱いよ！良い子にする、良い子になるから、煙草はやだよう
お父さん、止めてよおっ、

「早く起きろよ！」

バシンツ、と強く頬を張られ、敦樹は痛みにも呻いた。頭が痛い。気
持ち悪い。

「っ、」

手首が何か固いものによって背中の後ろでくくられているようだ。

「うつ、げぼつごぼつ……！」

「ようやくお目覚めか、お姫様？」

視界がはつきりしない内に、敦樹は無理矢理に顎を持ち上げられた。

「や、めて………」

「やめて、だつてよ。可愛いなあ」

周りには複数人いるらしく、そう言った声に追従して笑い声がかかる。

哄笑もあれば苦笑も混ざっている。

（兄さん、助けて…助けて、）

確か昼に微睡んでいると部屋に侵入して来た人がいて、

「おい、寝んなよ？」

ガツ、と腹が爪先に蹴り付けられ、敦樹はうめいた。涙が留まることを知らずに次々と溢れ出す。目の前が暗いのは、恐らく目隠しをされているせいだろう。床に面している腕はひやりとしているから、床に転がされているのだろう。

「お前に会いたいつつう人があるんだが、多忙な方だからな。ここに来るまでもうちよい時間がかかるらしいから」

「うう、」

兄さん、兄さん、兄さん。兄を何度も心の中で呼ぶ。

「ふうん、義理でも兄弟は兄弟なんだね」

女の声がした。自分に布をおしあてた人だ、と察する。

敦樹は更に身を硬くする。

「さあ、君の大事な兄貴は君を助けに来てくれるのかしらね」

吐き捨てる言い方をして、女はふふふふ、と不気味な笑いを立てる。

（怖い、怖いっ……）

次々と溢れる涙が目隠しの布に次々と染み込んで行く。恐怖に震える体を止めることは、敦樹には出来そうにはなかった。

消えぬ過去

カツン、と固いリノリウムの床を叩く音にすら敦樹はその華奢な体をびくりと震わせた。

「お、ようやくお出でなすったぜ」

耳元でねつとりと囁かれる。

「いや、遅くなっちゃった。狩野くんも忙しいのにすまなんだな」

「いえいえ。貴君のためならばなんのその」

どうやらずっと敦樹のそばにいたのは狩野という男らしい。

「いつ……！」

そんなことを考えていると、いきなり髪を掴まれて体を起こされた。

「目隠しも取ってやりなさい」

「御意に」

その会話のあと、荒々しい手付きで目隠しの布を取り払われる。

「……………っ、」

暗闇に慣れた目が明るい人工の光に悲鳴を上げて、頭すらズキリと痛んだ。ついでに手首を拘束しているものもほどこいて欲しいが、その様子はない。

「狩野くんは少し下がっていなさい」

「はい」

脇にいた男がサッと敦樹から離れる。

「……………、」

ゆっくりゆっくりと、歩いてくる人物を敦樹はようやく光に慣れてきた目で見上げている。ちくり、と頭痛とは違う刺激が脳を苛み始める。

「やあ」

「あ、ああっ……………」

言葉にならない喘ぎが、敦樹の小さく開いた口から零れ落ちる。

「久しぶりだね」

本性からは考えられないほどに穏やかな目、優しく微笑んだ顔、しなやかな体躯。それらすべてが、昔と何一つ変わってはいない。

敦樹が、“神楽敦樹”ではなかった時から何一つ。

「いや、嫌だっ!!」

「久しぶりの再会なのに連れないな」

そして“彼”は呼ぶ。敦樹が敦樹でなかった頃の名を。

「だろう？ シン？」

「……………」

一気に雪崩れ込んでくる、忌まわしい過去の記憶。

一杯一杯殴られた。

一杯一杯詰られた。

一杯一杯蹴られた。

何度も何度もご飯抜きにされた。

何度も何度も閉じ込められた。

「なあ、私のシン。何故私の前からいなくなっただんだい？」

「ひっ……………」

恐怖と拘束のせいで動けない敦樹は、自分に伸ばされてきた指に怯えか細い悲鳴を上げる。

「やめっ、放して、放してっ……………」

また殴られるのではないか、また蹴られるのではないかという不安と、過去の記憶が敦樹を縛り付ける。

「相変わらず細い首をしている」

ぬるり、と気持ちの悪い感触が首を支配する。

首を舐められているのだと分かり、背筋がぞっと寒くなる。

「この首を絞めたら、死ぬんだろうね」

「う、あう……………」

大きな瞳から、次々に大粒の涙がぼろぼろと零れる。今首に触れている手が、幼い敦樹を苦しめた。痛い目に遭わせた。

また同じことが繰り返されるのだと思うと、恐怖以外の“何か”が体の最奥から溢れ出してきそうだった。

「……け、て」

「どうしたシン。何を言っている？」

「兄……さん、たす……けて」

「兄さん。ああ、春樹の秘書をしているいけすかないあの男か。あ
るうことか私のシンを奪い取った憎い男だ」

「ち、違う」

「シン？」

「う……うちはあなたのもでもないし、うちは兄さんに奪われて
もない。あなたが、あなたが、あなたがうちをこわそ……んんっ……！」

言葉の途中で、大きな生ぬるい手のひらに口を塞がれる。ぐいっと
顎を指で上げられる。

「私が優しいからって、生意気を言うのはこの口かい？」

「ん、んんう……っ！」

「たかが“人形”風情が、人間である私にでかい口をきくんもんじ
やない」

いつそのこと指に噛みついてしまおうかとも思うが、倍返しされそ
うで怖い。

「なあシン。また私のもとで暮らしなさい。何一つ不自由のない生
活を送らせてあげるよ？」

敦樹は拒絶しようとしたが、気配を察したのかぐつと喉を押さえ付
けられた。

「ぐっ……、」

「昔のように、二人仲良く暮らそう」

「……っ、いや、」

「神楽の奴らなど目じゃないくらいに愛してあげよう」

……実の両親に虐待され愛を知らなかった敦樹に、“家族愛”とい
うものを教えてくれたのは神楽家の人たちだ。敦樹を愛してくれた
のは、神楽家の人たちで目の前にいる男じゃない。

「あなたに、は無理……です」

「何かな？」

曇りのない笑顔が怖い。でも、自分が取るべき行動は、
「あなたにはうちを愛することなんて、出来ない」

彼を拒絶すること。

神楽の家に、帰ること。

また、あの家でみんなで暮らすこと。

「……嘗めた口を聞く」

その言葉を聴覚が捉えた瞬間、強烈な拳が腹部を強打し、敦樹は痛みに呻き声を上げた。

「……っ、う、…あうっ」

「私が下手に出ればいい気になりやがって」

「はうっ………！いあぁっ！！」

革靴を履いた爪先が腹部にねじ込まれる。

「やめ、てやめて父さんっ………」

必死の哀願も、男には届かない。昔のように。男は敦樹の胸ぐらを掴み、苦渋の表情を浮かべる息子を恍惚の滲んだ瞳で見つめる。

「さあシン。痛いのが嫌なら私の言うことを聞きなさい………良い子だから」

それでも敦樹は頷かない。もう知っているから。自分が神楽家の一員だと。神楽家から離れられなくなっている。

「……悪い子だ。本当に悪い子だ、」

「！」

今まで以上に暗く粘着質な声音に、敦樹は身震いする。

「悪い子にはお仕置きが必要だな」

『悪い子にはお仕置きが必要だな』

……自分が“シン”だったときに、全く同じ言葉を放たれたことを思い出す。その言葉のあとで父に何をされたかも。

「………あ、」

ドクン、と胸の奥が厭な音を立てる。

ぶわっ、と更に大量の汗が体中の汗腺から沸き出る。

「はっ、……はあっ！」

こんなときに、発作か…と敦樹は思う。

「ちっ。そう言えば持病があったのだったか」

男は憎々しげに呟くと、控えていた狩野を呼んだ。

「はい」

「死なれては敵わん。休ませてやれ」

「分かりました。立て……！」

ぐいっとな腕を掴まれ、無理やりの体で立たされる。

「ううっ……、けほっごほっ……！」

「時間はまだある。ゆっくり考えるが良いわ」

男はそう言つと急に敦樹から興味を無くしたように、

「このあとは？」

「K国の視察の方と会食の予定です」

今まで敦樹と男たちのそばにいながら全く気配を感じさせなかった秘書らしい女が応える。

（帰りたい……母さんと兄さんのいるあの家に、帰りたい……僕を、
帰らして……、）

母は、兄は今どうしているだろう。特に敦樹が拐われる場面にいた兄は。

（僕を、探してくれてる……かな、）

そう思う間に、発作は酷くなる。目が霞んで、いく。頭がズキズキして、吐き気がする。次第に自分の体の感覚さえ無くなっていく。

「狩野くん、そのことしばらく頼んだよ」

「はい、分かりました」足音がどんどん遠ざかり、疲労感と安堵が同時に去来する。

「……い、さん……」

母や兄のことを想いながら、敦樹は意識を手放した。

母への言伝を記したメモを残し、神楽は謡の家を目指した。自家用車に乗って制限速度ギリギリで公道を飛ばし、神楽は目的地へ急いだ。

「神楽さん、」

神楽が芝貫家のドアフォンを押すと、“勉強会”中のはずの謡がドアを開けてくれる。

「謡様、」

謡は疲れきったような顔で、無理矢理といった体の笑みを浮かべる。また敦樹と重なって胸が痛んだ。

だが謡の背後に立つ少女に、神楽は警戒心を露わにする。少女は謡の背中に刃剥き出しの刀を突きつけていたのだ。

「……どういふつもりですか？」

「あまり謡様にうるうるされても困るので」

簡潔にして明瞭な応えに、しかし神楽は釈然としない。

「とりあえず神楽さん、入って下さい。敦樹、くんでしたよね……敦樹くんのこと、教えてくれるそうです。この……」

謡が少女を紹介してくれようとするが、神楽は先手を取って少女の名前を呟いた。

「……烏丸凜」

「神楽さん、知ってるんですか？」

「芝貫にいと色んなことに詳しくなるのですよ、謡様」

「そ、そうなんですか」

「ええ」

少女、烏丸凜は無表情で二階のほうを顎で示す。

「貴様の弟のことを教えてやる」

「・・・・・・」

神楽は小さく顎を引いて、謡を先頭に二階の彼の部屋へ向かった。
義弟の、神楽敦樹という少年の“真実”を聞くために。

真実と絶望と

「……………え？」

謡と神楽の疑問符がうまく重なった。

「嘘ではありません」

凜は冷静に言う。

「神楽、さん……………」

謡はどんな言葉をかけたら良いのか分からず、横に座る青年に顔を向ける。

神楽は呆然、と硬直している。

「神楽樹、貴様の義弟―神楽敦樹は芝貫の人間だよ。純粹な、ね」
「……………、」

「そして時の首相、鳴沢宗吾の実子だ」

「なっ、じゃああいつが敦樹を……………！？」

国政を担う人間が、息子を虐待していた、だと？

「憤りのポイントか？それが」

凜が神楽を嘲笑うように言う。

「っ、」

「鳴沢は芝貫を追放になった男だが、なる前は芝貫の一員だった。

そして15年前……………鳴沢が30のとき、敦樹は生まれた……………相手は鳴沢姓の一般人だったが、そいつとの子がね」

「敦樹が、芝貫の血を……………」

神楽は一体何を思うのか。

「だが敦樹への虐待が芝貫の中央にばれ、鳴沢は芝貫を永久追放になった。しかたなく鳴沢は女房の姓を名乗るようになった、というわけだ」

「……………、何で今になって敦樹を、」

苦し気に呻く神楽の手を、謡がおずおずと手に取る。

「謡様、」

「神楽さん、」

「鳴沢は敦樹が好きなんだよ」

「!?!」

凜の言葉に、謡も神楽も目を見張る。

好き、というのはどういう意味の、

「勿論家族愛じゃなく……男として、ですが」

凜は平然と言う。

「……………」

「鳴沢は敦樹に執着しています。今になって拐ったのは、ほとんど冷めたと思っただけなんだろうね。それが、自分の執着心を満たすためだけじゃなく何か別の目的があるのかもしれないけど」

謡と神楽が同時に聞いているためか、凜の語調は常体になったり敬体になったりする。

「……敦樹は、今何処にいるんだ……………」

「私を睨まれても困る。あんたの義弟を拐ったのは私じゃないから」

「っ、」

「ただ、恐らく鳴沢の隠れ家じゃないかと思う」

凜の瞳に好戦的な光が宿るのを、謡は見逃さなかった。

「神楽さん、」

だが弟を拐われた兄に、謡の呼び掛けは届かない。

凜の言葉を聞き、神楽は噛みつくように凜に迫った。

「何処だ、君は知ってるのか!?!」

「知ってるよ。教えてほしいか」

「あ、あたりま……………」

「なら一つ条件がある」

凜の瞳が、ベッドの上で不満そうに寝そべっている葉弓を捉える。

葉弓はその視線に気付かなかったのか、目を閉じたままだ。
凜の視界に、不安そうに自分を見つめる秋の姿が映るがそれは無視をする。

「条件…………?」

凜がクスリ、と小さく笑いを漏らす。

「解雇を覚悟して、謡様の外出を認めることだ」

やっぱりだ、と謡はホゾを噛む。

「謡、様？」

自分を見る神楽の瞳が、曇る。微かに疑いのこもった瞳。謡は思わず必死に首を左右に振っていた。

「ちが、違います！ 弟さんを拐わせたのに僕は関係ないですっ」

今にも泣き出しそうな顔の謡を見て、神楽が我に返ったように目を見開く。

「あ、すみません。謡様、」

一瞬でも謡を疑ったことを恥ずかしく思う。

（烏丸凜に取り入ったり、敦樹を拐ったりして、外出するために僕に交換条件を持ち出すなんて……謡様がするわけがない、）
何より謡の部屋に烏丸の人間がいる自体妙なことから。

「なぜ烏丸のあなたが謡様のことに親身になるのですか」

「別に謡様のためではない。……条件を飲むのなら、最愛の弟がいるであろう場所を教えてやる。さあ、どうする」

バレたときに解雇されるのを覚悟し謡を外出させ、敦樹の居場所を教えてもらうか。

それとも、敦樹を見捨てて、

敦樹は怖がっていた。昔のような状態に戻ることを。今も虐待されていたときのことを夢に見るのだと。

（きつと、怖くて泣いている……、）

職を失っても、替えはきく。でも、敦樹という弟は一人しかいない。替えは、いない。

敦樹が悲しんだり怖がったり、苦しんだりするのは嫌だ。ダメなんだ。

傷つくのは、自分だけで良い。

「分かった……」

神楽は謡を見て、悲しげに微笑む。

謡は息を吞んで、見返すしか出来ない。

「謡様の外出を、私が許可します」

「神楽さ、」

「だから、敦樹の居場所を教えろ」

「良いよ。謡様、望み通りに外出出来ますね。会いたい方に会いに行かれては？」

凜の言葉に一番反応したのは、ベッドの上の葉弓だ。いきなり床に立つと、硬直している謡の手首を掴んだ。

「いつ、」

「さあ、許可も出たし、行くぞ！涼子が待ってる！」

「は、葉弓さん。落ち着いて、」

さすがに秋が葉弓を宥めに入る。

「うるさい、黙れ」

「葉弓さん、」

「ね、謡。謡だって早く涼子に会いたいの、我慢してたんだよね。バカ親父がうるさいから」

「ば、バカは言い過ぎ、」

葉弓は秋の言葉を聞き流し、謡に立つよう促した。

「謡、行こう。許可が降りたよ」

だが謡は浮かない顔で、喉に何かが詰まったような表情を浮かべて神楽を見ていた。

（ちよつと、何やってんのよ。……ぼんくら）

謡を涼子に会わせようとしているのは、双方のためでは決してない。（兄様、また会いたい、）

涼子と対面させることで、謡の中で眠る兄に会うため。結局は自分のためなのだ。前世で遂げられなかった“想い”を今世で遂げるために。

「うったゝい、」

「僕、は……僕も行きます！」

決意のこもった言葉に、その場にいた全員が一斉に謡を注視した。

神楽など軽く口を開けて、彼にしては珍しく間拔けな顔を晒している。

「う、謡様……何を、」

「力も度胸もないし、きつと何の役にも立たないけど……芝貫の直系というのが役に立つかもしれないから、」

「謡様、」

「それに、神楽さんの大事な弟さんを……助けたいし、その、微力でも力になれば、」

「駄目です。それは絶対に駄目です」

「でも……！」

「僕の弟を助けたいと思ってくださることはとても有難いです。ですが、身内のことで謡様を危険な目に遭わせる訳には行かないんです……ご理解下さい」

神楽が頂垂れるように頭を垂れたから、謡はそれ以上何も言えなくなる。

「こいつもそう言ってることだし、早く……」

「や、やっぱり僕も神楽さんと行きます！」

「謡様っ、」

「神楽さんは僕なんかのこと、いつも支えて助けてくれて……だから、だから僕も神楽さんの支えになれば、って……、」

「駄目です、私の私事に謡様を巻き込むわけには、」

「だ、だけど……」

「今度、敦樹に会ってあげてください」

不意に神楽が柔らかな笑みを浮かべて謡の手を取ったから、謡は思わず

「え、」

と声を漏らしていた。

「敦樹は元々体が弱くて、あまり同世代の子と遊べないこともあったか友達が少ないみたいで、よく寂しそうにしているんです」

「そっ、なんですか……」

「敦樹も謡様と知り合えたら喜ぶと思います。謡様は、とてもすばらしい方ですから」

臆面もなく、サラリとすばらしい、と言われ謡はかぁ、と赤面する。「す、すばらしいなんて……」

「敦樹を助けて連れ帰るとき、きつとあの子は憔悴していると思います。そうしたら、謡様の力で敦樹を癒してあげてください」
癒して、と言われても謡にはどうしたら良いか分からない。

「それに……、」

「神楽、さん？」

神楽の瞳に思い詰めたような光が宿り、謡は不穏な気配を感じた。

「いえ、何でもありません」

何でもないようには見えないが、謡にはこれ以上突っ込んで訊くことが出来そうにない。内面に深く踏み込まれることが怖い謡は、他人の内面に深く踏み込むことをも恐れている。

その相手が、血の繋がった家族でも。そして自分を支え、助けられる人でも。

「敦樹の、…あの子の友達になってあげて下さい」

頂垂れるように深く頭を下げられ、謡は慌てる。

「わっ、分かりました！僕なんかで良ければ喜んで」

「ありがとうございます」

神楽が嬉しそうに微笑むも、今にも泣き出しそうに見えて。

「話も纏まったみたいだし、鳴沢の隠れ家を教えようか」

「……………」

烏丸凜が告げた場所。そこは、

「敦樹が一時預けられていた施設の跡だよ」

先生はとっても優しい人だった。

色んなお話をしてくれて、色々な遊びを教えてくれて。父母の影に怯えて眠れない夜も、落ち着くまでそばで手を握ってくれていて。本当に好きだった。

なのに、“あんなこと”があつて……、
「ん、」

目を覚ました瞬間、額を撫でられている感触がした。

「にい……さん？」

「悪かったな、兄貴じゃなくて」

「！？」

「おいつ、急に動くなっ！！」

敦樹の額を撫でていたのは、狩野という男だった。敦樹は恐怖に男の手を払い、いきなり上体を起こした。とにかく早くこいつから離れないと、という防衛本能が働いたのだ。

「……………う、」

だが激しい目眩と頭痛を感じて、敦樹はすぐに動きを止める羽目になる。

「だから言つたろ。急に動くなつて……」

「いやつ、」

伸ばされた手を、敦樹は無我夢中で払った。痛いことをされると思つたのだ。

「大丈夫だよ。オレは何もしないから」

「……………？」

怯えきつた瞳で男を見ると、彼は悲しげな顔で敦樹を見ていた。

「オレは狩野創^{かのうはじめ}。敦樹、くんをここに連れてきた狩野史哉^{かのうふみや}の双子の兄だ。まあ、弟にいいように扱われてる不甲斐ない兄貴だけどね」

……確かに顔は瓜二つだが、纏う雰囲気が先程の狩野とは違う。優しさと脆さが混在したような、なんとも表現しにくい感じ。

「痛いところはない？史哉が手酷いことをしたみたいで、すまない」

「あ…の、ここは？」

「ここは……君の思い出の場所でもあると思うよ」

「僕……の？」

「そう」

敦樹は周囲をゆっくりと見回した。自分が通っている学校の教室と似ている、だろうか。

木目の床には少しの埃がかかり、蛍光灯は複数あり点いていないものと点いているものがある。

学校にあるような椅子や机が適当に散らばり、中には倒れていたり足が折れてしまっているものさえある。

鼠色をした壁には子どもが掻いたような絵が日焼けをした状態で放置され、経った月日の長さを感じさせる。

「……え？」

その絵のうちの一枚に、敦樹の目は吸い寄せられた。

一番右端に飾ってある、恐らく男性の似顔絵を描いたのだろう絵。

「……降りるか？」

敦樹は一台だけあるパイプベッドに寝かされていたらしい。

敦樹がおずおずと頷くと、狩野創は少し顎を引いて敦樹の手をそと取った。

「まだ一人じゃ歩かない方がいいと思うから、オレに掴って」

同じ顔。敦樹を傷付けることに何にも躊躇を抱かなかった男と、同じ顔。

信じて、いいのだろうか。

「……って、史哉と同じ顔だもんね。恐いか」

敦樹の手が震えていることに気付いたのだろう、狩野創が少しだけ悲しげに微笑む。

「降りる……つ、掴まっても、いいですか？」

「大丈夫？触れたり触れられたり、平気？」

「多分」

「多分、か。敦樹くんは正直だね……はい、大丈夫？」

こくり、と頷いて敦樹は創の手を借りながら裸足で床に降り立った。
「っ、」

やはり眩暈がしたが、すぐに治まった。

「あの、絵を見たいんです」

「分かった」

狩野創の肩を借りながら、敦樹は絵が貼ってある壁のそばへ移動する。

歩くたびに頭が痛むが、無視する。

「・・・・・・・・これ？」

「はい」

敦樹はじつと絵を見上げる。

ちくり、ちくりと何かが脳髓を刺している気がする。

「これね、君の絵なんだって。君が描いたんだって・・・・“大好きだった先生”をね」

「・・・・・・・・！！」

ドクンツと心臓が跳ねる。

記憶が一瞬にして蘇る。

「私は君を裏切った」

「あんな先生のことは早く忘れなさい」

いつでもちゃんと伸びていた大きな背中。最後に会った時はその面影はなかった。

弛緩した体。だらしなく開いた口から垂れる、粘ついた唾液。

見開いた瞳は何も映さず、敦樹のことも認知出来ないようだった。

「ねえどうするの？あの子は」

「やっぱりあっちの施設に移すべきだよ」

『でもずっと園長先生の部屋で膝を抱えてるのよ？無理矢理運び出すって言うの？』

『困りましたね』

大人たちの声はあっさりと敦樹の耳にも入った。入ったが、聞こえなかった。

「ごめんな、力になれなくて」

「・・・・・・」

もう二度と母や兄には会えないような気がして、敦樹は深い絶望を感じていた。

真実と絶望と（後書き）

ちよつと主役の謡が引つ込み気味。神楽と敦樹が中心なのがもう少し続く・・・予定です。

“敦樹”と“シン”ゝ過去と囚われた今ゝ（前書き）

敦樹が主役張ってます。でも可哀想な目に遭ってます。

“敦樹”と“シン”ゝ過去と囚われた今

『今日から私たちの家族になるのよ。樹の弟』

そう紹介され、初めて義兄となる人と対面した。

お義母さんと同じで穏やかで優しいような風貌をした人だったけど、やっぱり驚いたように眼鏡の下の瞳を見開いていた。

『か、母さん？』

『あ、やっぱり驚いた？』

『あ、当たり前だよ。どういって、』

『君の部屋はこっち。トイレは、』

『母さんっ』

お義母さんは樹さんに詳しい説明をする気はないのか、うちの手を引いて部屋を案内してくれる。

樹さんは戸惑いながらもお義母さんから事情を聞き出そうとしている。

『ちょっと待っててば！』

偶然でしかなかったんだろうけど、樹さんがお義母さんに伸ばした手がうちの肘を掠め、

『……………っ！』

記憶の中で薄れながらもいまだにうちを苦しめる“あの人”の手と樹さんの手が重なって、

『嫌だ……………っ！』

樹さんの手を払っていた。

『なっ、』

『あ、…めなさ、』

樹さんに謝っているのではなかった。うちは“あの人”に謝っていた。

『ごめんなさい、ごめんなさい、』

樹さんが体を硬直させてうちを見下ろしている。

それはそうだ。手が肘に触れただけでこんなに過剰に反応されて、平然とできる方がおかしい。

そしてお義母さんは、黙ってしゃがみ込むとうちをそっと抱き締めてくれた。

きつと女性だからだろう、うちはそのことに恐怖は感じなかった。

『大丈夫、大丈夫よ。ゆっくりで良いからね』

背中を何度も優しく撫でられ、ゆっくりとだけどうちの心臓は落ちて着いて行った。

『……………』

樹さんをちらりと見上げると、彼は呆然と突っ立ったままだった。そしてうちと目が合うと、居心地が悪そうに目をそらし居間に戻って行ってしまった。

『樹には追々私が説明していくから、あなたはゆっくり休むことを考えなさいね』

うちには素直に頷くしか出来なかった。

うちは元来人見知りが激しい質だから、樹さんは勿論お義母さんの旦那さん……つまりうちの義理のお父さんになる人にもなかなか慣れることが出来ずにいた。樹さんは急に出来た“弟”という存在に戸惑っていたし、加えて初めて顔を合わせたときの衝撃的な出来事が尾を引いているのは分かっていた。うちだって自分が触った相手があのとときのうちみたく怯え謝れば、触れるのを恐れるに違いないのだから。

一方のお義父さんは最初はお義母さんの行動といきなり出来た第二の息子に驚いていたけど、表情に出ないだけなのかすぐにうちとい

う異分子がいることに慣れてしまったように見えた。

『樹はちよつと慣れるまで時間がかかるけど、旦那のほうは大丈夫。あの人、不思議さんだから』

よく分らない根拠ではあったけど、本当はどうでもよかったのかもしれない。殴られたり蹴られたり、食事抜きになったりしないのだから。うちはそう考えながら、新しく始まった神楽家での日々を送った。

『あ、あの・・・敦樹君？』

樹さんがうちに真正面から話し掛けてきたのは、うちが神楽家に貰われてから三ヶ月も経った頃だったと思う。

確か二人きりの夕食時だったと思う。

うちは思わずお茶碗を持っていた手をビクツと震わせて仕舞い、せっかく話し掛けてくれた樹さんに申し訳ない気持ちになった。

『あ・・・ごめん。驚かせちゃったね、』

樹さんはテレビとうちを見比べながら、謝ってくる。・・・悪いのはうちのなのに。

『い、いえ』

『敦樹君は、その、わ、笑わないでよ？』

樹さんの整った顔が真っ赤だ。熱でもあるんだろうかと、うちは心配になる。

『・・・・・・・・？』

うちが首を傾げていると、樹さんは真っ赤な顔のままでうちに訊いた。

『・・・・・・・・トマト、平気？』

『ふえ？』

思わず頓狂な声が出て、慌てて口を手で塞ぐ。

『・・・その、ね。僕駄目なんだ・・・トマト』

意外だった。うちは勝手に樹さんには好き嫌いなんてないと思い込んでいた。

『母さんが好き嫌いに五月蠅い人だから、母さんが家にいるときは我慢して食べるんだけど・・・』

今日はいないし、ね？と縋るように訊かれ、うちは

『食べます、』

と言っていた。

『本当？ありがとう』

樹さんはホッとしたように笑うと、トマトの載ったお皿をうちのほうに押し出してきた。

うちはなんだかくすぐったいような心持ちになりながら、トマトを箸で掴んでうちの皿に移した。

『敦樹君は、嫌いな食べ物あるの？』

一度話したことで勢いがついたのか、樹さんは会話を進めてくる。

それでも緊張してるみたいで、何度も視線がうちからずれる。

『うちは、別に・・・』

好き嫌いなんて言うことすら出来なかった。

食べ物をもたらるだけ凄いいことだし、好き嫌いなんてしたらまず間違いない平手が降って来るから。

『あ、敦樹君！？』

いきなり叫んだ樹さんを見遣れば、ぼやけた視界の中で立ち上がる彼がいる。

ぼやけた視界？

気付けばうちは涙を流していたらしく、自分でも驚いた。

樹さんが慌てて席を立ち、

『だ、大丈夫？何処か痛い？それとも僕が嫌なこと訊いた？』

膝についてうちの顔を見上げてくる。うちは首を左右に振る。泣い

ているくせに説得力がないだろうか。

『大丈夫です。何でもないです』

そうだ。何も無い。多分目に塵でも入っただけ。

『・・・・・・・・』

樹さんは口を開きかけるけど、うちが頑なになっているのを察したのだろう。

『そっか』

その一言を哀しげに呟いて。

『なら、良いんだ』

席に戻り、静かに食事を再開する。

あ、と思っただけでもう遅かった。

折角声を掛けてくれたのに、うちはどうして。

『この鈍間！！』

耳の奥で今も喚き続ける、あの人たちの罵声。

『あんたなんか誰も必要としない。消えてしまえ』

消えられるなら消えたい。そんなこと、ずっと思っている。

そっと歩み寄ろうとしてくれた樹さんの気持ちを無碍にして。

うちが自滅していると、樹さんが箸を止めて再びうちの方へ近寄ってきた。

『敦樹君』

『・・・・・・・・？』

『今日から僕は君の兄だ』

いきなり何を言い出すのだろうとうちは目を瞠る。

樹さんはうちをじ、っと見つめている。眼鏡の下の切れ長の目が綺麗だと思う。

『だから、思いつきり甘えてくれて良い』

『樹さん・・・・・・・・』

甘える？甘えるってどうやれば良いの？

今まで伸ばしてきた手は払われるか、一度取られても結局は払われるかの二つしかなかった。

誰もうちが伸ばした手を取りずっとそのまま握っていてくれたことはなかった。

樹さんは、うちが伸ばした手をずっと握っていてくれるというの？

『あと、嫌じゃなければ樹さんって名前呼びじゃなくて、』

また顔を赤くしながら、

『兄さん……って呼んでくれると嬉しいかな』

につこりと微笑んでくれた。

『……、』

『だって折角家族になれたのに、よそよそいでしょう？』

うちはどう反応したらいいか分からなくて、ぼんやりとした頭で樹さんを見詰めていた。

『ほ、本当はもっと早くに言おうと思ってたんだけど、なかなかタイミングが掴めなくて、ね。まあ僕に勇気がなかったっていうのもあるんだけど』

冷静なイメージの強い樹さんがかなり慌てている。

徐々に自分の口元が緩んでくるのを感じる。

『僕は君のこと、今日から“敦樹”って呼び捨てで呼ぶから。だから君も、』

『……い、さん』

顔が赤くなる。

何でもないことのはずなのに、ドキドキと心臓が早鐘を打つ。

本当に、本当に兄と呼んで良いの？

実の親から言葉と体の暴力で虐げられてきた、こんな何の価値もない奴に、兄と呼ばれても……良いんですか？

うちは内心だけでそう思ったのに、何故か樹さんが目を見開いている。思いを口に出してしまっていたらしい。

『樹さ、』

『価値のないなんて言うな。そんなこと言っちゃ駄目だ！』

樹さんが怒鳴り、鼓膜がピリツと震えた……ような気がした。

もしかしたら、震えたのは“心”だったのかも知れないけれど。樹

さんが今にも泣きそうな顔でうちの肩を掴んだ。

『価値のないなんて、言っちゃ駄目だ。そんなこと、言わないで』
そして樹さんは本当に泣き出してしまふ。ぼたり、と温かい涙がうちの手の甲に落ちて、それがうちにも伝播する。

『ご……めなさい、』

実の両親に幾度となく存在を否定されてきた。

痛くて泣き喚いても、返ってくるのはただの嘲りと嘲笑だけで。いつしか自分で自分を卑下するようになっていたのかも知れない。

『ごめんなさい、兄さん、ごめんなさい……にいさつ………』

兄さんという呼称が意外にすんなりと出たけれど、あとはうまく言葉に出来なかった。

言葉じゃなくて、涙が次から次へ溢れかえった。ギュツと樹さん……兄さんが無言でうちを抱き締めてくれる。

『ごめ……なさ、ごめんなさい、』

『謝らなくて良いから。謝らなくて良いから。ね？』

『う……ん、』

『ほら。涙でぐしゃぐしゃだ』

兄さんが苦笑しながらティッシュでうちの涙と鼻水を拭ってくれる。
『いきなり大声出してごめんね。びっくりしたでしょう？』

うちは首を左右に振る。つい数分前まではお互い目に見えてギクシヤクしていたのに、今は親密になったようで変な感じがする。

それでもうちは、兄さんにされるがままになっていた。

他人に、しかも男性に触れられても恐怖を感じない。不思議だな、
と思いながら。

「ん、」

再び敦樹が目覚めたとき、そこは神楽家ではなく自分がいた施設だった。

「懐かしい夢、」

母さんや兄さんに会いたい、と敦樹は心から願う。

（このまま待つてるだけじゃ、駄目だ……）

室内には狩野創ほか誰の姿もない。

逃げ出すのは今がチャンスに思えた。見つかったらただじゃ済まないことは分かっているけれど、このまま此処に居たって窮状は変わらないだろう。

（動かなきゃ、）

敦樹はそつと足を床につけた。きし、と微かに鳴った床の軋みにすら神経質に反応してしまう。

（……………）

ドキドキと暴れる心臓を宥めながら敦樹はゆっくりとドアの前へ移動する。ドアに耳をつけ、外側で何かの音がしないかを確認する。話し声も、物音一つすらない。

敦樹はあまりの緊張に吐き気を催しながらも、ドアの取っ手に手をかけ、スライド式のそれを右に開いた。

左右に板張りの廊下が伸び、しんと静まり返っている。誰かの気配を感じるといことはないし、話しかけられもしない。

創は見張りがいると言っていたが、あれは敦樹を怯えさせ大人しくさせる方便だったのかも知れない。

（なんだ……嘘か、）

そう思い、緊張を僅かに解いた瞬間……、

「あうっ……」

いきなり首元に太い腕が絡み、敦樹はあっさりと体を宙に浮かされていた。苦しさに呻きと涙が出た。じたばたともがいても、振りほどけない。

「何処に行く気だい？ “シン” くん」

「あっ、かはっ」

「いい子にしないと駄目じゃないか。俺があの人の代わりに君と遊んでも良いんだよ？」

史哉。創ではなく、双子の弟の史哉だ。

「……………っ、」

「おっと、窒息死でもされたら敵わんな」

軽くぼやき、狩野史哉は敦樹を解放した。敦樹は下にへたり込む。四つん這いになり、新鮮な空気を必死に身の内に取り入れようとする。

その敦樹の前髪を、史哉がぐいつと引つ張って顔を上向かせる。

「いや、痛いっ！」

「悪い子にはお仕置きだろ？何逃げ出そうとしてんだよ、くそ餓鬼が」

苛立ちと嫌悪を含んだ罵声に、否応なしに敦樹の肝は縮む。

「それとも……………俺様に遊んで欲しいのか？」

“遊ぶ”という言葉がこの男どんな意味を持つか、敦樹はすぐに悟る。

父親の面影と、重なる。

「……………いやっ！」

怯んだ隙を突かれ、埃っぽい床に押し倒される。

「嫌だ、止めてっ……！」

叫んだ瞬間、頬を叩かれた。目の前に星が飛び、過去の情景がちらつく。敦樹は無我夢中で暴れた。腕を闇雲に振り回すと、長めの爪が偶然史哉の頬を抉った。赤い線とぴりつとした痛みが頬に走る。史哉が獰猛な笑みをその顔に刻んだ。

「どうやらてめえは本気で俺にやられてえらいな」

「！嫌だあっ……………！！」

必死の抵抗も虚しく、バツとシャツの前を開けられる。無理矢理だったから、その反動で二、三個のボタンが弾け飛んだ。

「いや、だ……………やめて、」

「煽ったのはそっちだ」

冷たく吐き捨てられると同時に、史哉の意外に冷たくひんやりした手がむき出しになった敦樹の素肌を撫で回し始めた。

「……………っ、」

気持ち悪さと何をされるか分からない恐怖に、敦樹は抵抗も忘れて体を硬直させる。

「に……………っさ、」

ただ兄を呼ぶしか出来ない。史哉の舌が、敦樹の肌を舐める。ぞくっ、と体全体に怖気が走る。

もう駄目だ、と観念して目を閉じかけた刹那、

「何してるんだ、史哉——！」

狩野創の声がして、ついで自分の上に馬乗りになっていた史哉が視界から居なくなった。

「大丈夫か、敦樹君——！」

どうやら創が史哉を退かしてくれたようだ。敦樹の腕を引っ張って体を起こすと、自分が着ていた長袖のパーカーをかけてくれる。

「あ、ありがとうございます」

「いや、大丈夫？痛いところは？」

敦樹はふるふると首を左右に振り、ギュッと創の手を握った。とにかく誰かの、悪意のない温もりに触れていたかったから。

「史哉、お前」

兄のひと睨みに、史哉は口元の血を拭いながら立ち上がる。全く気付けなかったが、創が史哉を殴ったらしい。

史哉はせせら笑いを浮かべて、

「創、お前その餓鬼に垂らし込まれたのか？」

「何言ってるんだ。史哉、なんでこんな酷いことを……………!!」

「その餓鬼がいけねえんだよ。逃げ出そうとするから、分からしてやろうと思ったんだよ」

史哉の舐めるような視線が自分に向けられ、敦樹は怯えて彼から目を逸らす。

「だからって、こんなこと……………!!」

「潔癖なお前の言いそうなことだ。でもさ、そいつの肌、白くて綺麗だぜ？あの人執着するの、分かるってもんだ。なあ、“シン”くん？」

「止めて、」

もうその名前で自分を呼ばないで欲しい。それは既に忌み名でしかなく、今の敦樹にとっては、“神楽敦樹”というのが本当の名前なのだから。

「何でだ？お前、シンっていう名前なんだろう？」

「ちが、違う……。うちは、うちはシンなんかじゃない、」

「何が違う？あの人の実の息子であり、」

「違う、違う、」

「生きている価値がないと断言され、」

敦樹は耳を両手で塞ぐ。涙がぼろぼろと零れる。

「史哉、止める！」

だが史哉は止めなかった。

「体を好き放題に触られ、」

蘇る、足や腕を這う生温い指。生温い息遣いが耳を擦り、

「史哉！！」

創が怒声を上げ、再び史哉を殴ろうとする。だが、

「何を騒いでいらっやいますか？」

女の声がして、創が上げかけていた腕を下げる。史哉は不満そうに唇を尖らせる。

「蓮音様、」

敦樹は小さく震えながら、声のした方を向く。

する、する、という衣擦れの音とともにゆっくりと女性が姿を現す。
「……………」

「あら、あなたは、」

墨のように真っ黒な黒髪を背中の中半ばまで伸ばした、二十代半ばくらいの女性だった。

小さく白い瓜実顔がじつと敦樹を見詰める。

敦樹は恐怖も忘れて、彼女を見返す。

「・・・・・・・・・・史哉」

突然女性が低くて冷たい声を出し、スッと細めた目で立ち尽くす史哉を睨み見る。

「あとで私の部屋へ来なさい」

「・・・・・・・・・・はい」

完全に不満たらたら表情ながらも史哉が小さく頷く。

「恐かったでしょう、もう大丈夫よ」

女性がふわっと震える敦樹の肩を抱く。

（この、匂い・・・・・・・・）

コロンか何かなのだろう、花のような香りが漂う。

ぎゅっと微かに力が込められる。

「大丈夫、もう大丈夫よ。だから・・・・・・・・ね、少し休みなさい。誰も、あなたを傷付けたりは、しないから」

慈悲のこもった口調が、敦樹の鼓膜を、心を震わせる。

「ね、お休みなさい」

「・・・・・・・・・・あ、」

女性の笑顔が一瞬義兄のものと重なった瞬間、敦樹は何度目か分からない暗闇を迎えた。

「酷いことをする。・・・・・・・・手の早さは相変わらずね」

気を失った敦樹を抱き上げ、女性―蓮音は冷たい声を史哉に投げか

けた。史哉は拗ねたように口先を尖らせたままソツポを向いている。

「創、パーカー借りたままにするよ」

「あ、は、はい」

蓮音が登場してからぼんやりしていた創は、彼女に声を掛けられてハッと我に返る。

史哉に対する怒りは完全に萎んでいた。

「あとその袋の中身、この子のために買って来たんだろう？お前も一緒に来なさい」

誘いというよりも命令だった。創はもう一度頷きながら、颯爽と立ち去る蓮音のあとに付き従った。

史哉の粘着質な視線が注がれるのを感じながら。

どうして？

神楽が車に乗り込むのを、謡はただ見送ることしか出来ないでいる。今にも泣き出しそうなその顔を見て、神楽が、

「謡様、そんな悲しそうな顔をなさらないで下さい」と穏やかな声で言う。

「か、神楽さん……」

「大丈夫です。必ず敦樹は助け出します。僕の大事な弟ですから……」

慈愛のこもった眼差しに、神楽がどれだけ敦樹のことを大事に想っているかが謡にも伝わって来る。

「喻え血なんて繋がっていなくても、僕と敦樹の絆は……消えません」

だから、と神楽が先を続ける。

「必ず、助けます」

神楽はシートベルトをすると、助手席に座る烏丸凜に道案内を請う。

「分かっている。では謡様、またお会いしましょう」

後部座席に腰掛ける秋が窓越しに謡に向かって頭を下げる。彼の行く末はどうなるのだろうかと思った。烏丸凜によって、逃げ出した家に連れ戻されるのか。

（……何故か僕の周りには家に縛られた人が多い、）

謡は亡羊とそんなことを思った。

だが謡はまだ知らない。その縛りの“根”が自分の家である芝貫にあることを。

「それでは謡様、行ってまいります」

エンジンがかかった車は、立ち尽くす謡の前からゆっくりと姿を消した。

家に戻ると、玄関マットの上で葉弓が胡座をかいて不貞腐れていた。じろりと睨まれて、謡はたじたじとなる。

「謡は涼子に会いたい。の会いたくないの」

「あ、会いたいですよ」

会って、訊きたいのだ。葉弓のこと、渉に何があつたのか、そのとき謡に何が起こっていたのか、そして、涼子自身のこと。

「会って、訊きたい。色んなことを」

「ならさつさと、」

「あなたの目的は何ですか？」

だが涼子に会う前に、ハッキリさせておかなければならないことがある。

目の前にいる、長身の女性のことを。

「あたし？」

「あなたは、初めて会った時、不良に絡まれていた僕や愁君を助けてくれた。なのに藍田渉君を傷付けて、僕を呼び出した。あなたは、何がしたいんですか？」

そして涼子とは一体どういう関係なのか。

「……初めて会った時に謡を助けたのは、何か作意があつたからじゃないよ。ただの気まぐれ」

「気まぐれ……」

「でも藍田渉を傷付けたのは、謡が原因だよ」

「え？」

「……て言ったら君はどうするの？」

「あ、なたは」

「舌を噛み千切る？泣いて詫びる？」

葉弓の顔に、徐々に残酷な笑みが浮いてくる。悪寒を感じて謡は一步身を引こうとするが、腕をあつさり葉弓に掴まれる。

「あたしの前で泣いてみせてよ。その可愛い顔で泣いて、どうして藍田渉を傷付けたのか訊いてよ。僕のせいですかって訊いてよ。ねえ、可愛い顔で泣いてよ」

あまりの恐怖に、謡はその場にへたり込む。

「お前はさあ、ただ涼子に会いたい会いたいって泣き叫んで、涼子に会ってれば良いんだよ。余計なことをするから怪我をする……・お前だけじゃなくて、周りもね」

「あ、」

一番に頭に浮かんで来るのは、渉だった。

断片的に浮かんで来る、血に塗れた渉の倒れた姿。そして、謡に身代わりのように藪内やその取り巻きたちに暴力を振るわれ苛められる姿。

“災厄”の源は、自分。

「……ば、僕は」

「さあ。“傷口”を抉られなくては、黙って私について来なさい。可愛い謡」

葉弓が妖しく笑う。

謡は、ただ彼女に従うしかなかった。

「・・・・・・・・・・僕、」

頬にあたる冷たさで、愁は気絶から目覚めた。

どうやら流しで薬を呑んだ直後に気絶し、そのままだったようだ。気だるさを感じながら、愁は上体を起こす。

薬が効いたのか、発作は止まっている。

（今、何時・・・・・・・・？）

微かに痛む頭を抱えながら時計を探した愁の目に、二時という時刻を示すそれが映った。

最近眠ってばかりだ、と自嘲しながら、眩暈を起こさぬようにゆっくりゆっくりと立ち上がる。

眩暈はしなかったものの、全身が酷くだるい。精神的に疲れているのか、薬の副作用か。

「咽渴いた、」

冷蔵庫からポカリのペットボトルを出し、無作法を承知で口をつけてごくごくと飲んだ。渴ききった喉に冷えた液体が心地よい。

「……………はあ、」

母の美佳子はまだ帰宅していないらしく、屋内はしんと静まり返っている。

「謡さん、」

不意に謡のことが頭に浮かび、愁は思わず苦笑した。謡の顔を見たと思った。だが、

（こんな時間だもんなあ。謡さん、学校だよな）

謡が“勉強会”を命令されたことを知らない愁はそんなことを思う（でも何でだろう、今なら謡さんは家に居そうな気がする……………）

愁は強張った足を動かし、キッチンから廊下へ出る。外に出る際にはいつも着ているフード付きのパーカーのことは、一切頭になかった。

ゆっくり玄関へ移動し、外へ出た。

「……………え？」

愁の目に、求めた謡の姿が映る。けれど謡は一人ではなかった。

「謡さん？」

謡は女性と一緒にだった。というよりも女性が謡を引っ張っているように見える。

（……………あの人は、僕たちを助けてくれた人……………？）

数日前に街中で愁の同級生に絡まれた時に謡と愁を助けてくれた女性。その人が何故謡の家から出てきたんだろう。

「謡さん、」

何故か不安な気持ちが一気に膨れ上がり、愁は叫んだ。

「謡さん！！」

「しゅ、愁君？」

いつものフード付きパーカーを着ていない愁が、自分呼んでいる。

「謡さん、」

愁がタタタツ、と走り寄って来る。謡は思わず葉弓を見上げる。彼女は色のない瞳で愁を見下ろしている。苛立っている、と謡は直感する。

「愁君、来ちゃ駄目だ！」

だがもう遅い。すぐ側まで来ていた愁に一步步み寄った葉弓が、彼の細腕を掴んだのだ。愁の顔が痛みに強張る。

「い……………つた、」

「愁君を放してください！」

謡の抗議の声を無視して、葉弓が顔を俯かせてぶつぶつと呟いている。

「……いつもこいつも、邪魔ばかり……、」

「は、葉弓さんっ!」

「どいつもこいつもあたしの邪魔ばかりしやがって!!」

いきなり激昂したかと思うと、愁の腕を掴んだまま彼を片手だけで吊り上げた。

「あうっ……!」

「愁君っ!」

無理矢理引っ張られて痛むのだろう、愁が悲痛な声を上げる。

「や、痛いっ……」

「葉弓さん、止めて下さいっ!!」

謡は慌てて彼女にすがり付くが、敢えなく突き飛ばされてしまう。

「…………っ!」

固い道路に尻餅を着き、痛みに呻く。

「うた、謡さん、助けて……」

まただ。謡は自分に助けを求める愁を見ながら、目を見張る。

(また僕のせいで、人が傷ついていく。どうして……?)

何故自分の回りには“災厄”が満ちているのだろうか。

「どうして」

もう嫌だった。自分のせいで誰かが傷つくのは。

「な、せよ」

傷つくのは、自分だけで良い。今までだっずっとそう思ってきたし、今でもずっとそう思っている。なのに、どうして。

葉弓は愁を放さない。病み上がりの愁は徐々に抵抗を見せなくなり、顔色が蒼くなっていく。

「う……たい、さ……」

「愁君を放せよ!!」

そう心から叫んだ瞬間だった。

「葉弓、いい加減にしろ」

榆乃木涼子の、心底呆れ返った声が後ろでした。

「!?!」

尻餅をついたまま後ろを振り返ると、感情を一切感じさせない硝子玉のような瞳をした涼子が立っていた。

成宮夏が送ってきたメールに目を通した誓は、体育館内でバスケットに励むクラスメートたちに視線を戻した。ただいま体育の授業中だが、誓は仮病を使って見学にもらった。

（だいぶ面白いことになってるじゃんか。ああ、俺もこの“祭り”に参加してえなあ）

神楽、愁、匂、父親の春樹などの顔が次々に浮かんでは消え、一番最後に残ったのは兄の顔だった。

（さあ、兄貴。今どんな気持ちだ？悲しいか、辛いかな、苦しいかな？自分が謡に歪んだ想いを抱いていることは小さい時から気付いていた。その想いは年を経る程に膨れ上がり、

（もう、止められない）

これから先も膨れ続けるだろうと誓は思っていた。

どうして？（後書き）

歪んだ誓が少し顔を覗かせましたね（笑）ではまた、次のお話で。

想い（前書き）

さ、サブタイが……（汗）

想い

「に、榆乃木さ、」

榆乃木涼子は、か細い声で自分を呼ぶ謡の頭にそつと手を置き、小さくため息を吐いた。

「そんなに情けない声を出さない。男だろう」

「そ、それは」

「だけどもあ……色々頑張ったみたいだね。謡」

……正直、もう会えないと思っていた。声を聞けないと思っていた。でも榆乃木涼子という女性は自分のすぐ目の前に立っている。赤いリボンと片目にした眼帯が特徴的な。

「葉弓。その子を放しな。その子は何んの関係もないはずだろう」

涼子の呼び掛けに、葉弓は憎しみのこもった眼差しを向けた。

「涼子。いや、涼^{すず}」

（涼……？）

「……その名前と呼ぶな。その名前は、」

「兄様に呼ばれるための名前、だとも言いたいのか？」

葉弓の、愁を掴む手にさらに力がこもるのが分かる。

愁は声にならない悲鳴を上げるが、すぐに体を弛緩させ葉弓にされるがままになっている。

「愁君を放してっ！！」

謡の悲鳴じみた懇願に、葉弓が心底鬱陶しそうに顔を歪める。

「うるさい餓鬼。兄様とは似てもつかないわ」

忌々しげに吐き捨てると、葉弓は無造作に愁の腕を放した。咄嗟のことに、謡も涼子も反応出来なかった。愁の体がものしい音を立ててコンクリートの道路に、文字通り、落ちた。

「愁君っ！！」

悲痛な声を発して、謡は愁に駆け寄る。葉弓のそばに自分から近寄ることになると知りながら。

「愁君、大丈夫！？愁君つ……！」

「……っう、」

愁が小さく呻きながら、ゆっくりと目を開いた。

「謡さん、だあ……」

「愁君、」

「謡、さん……泣いてる、んですか？」

「だ、って……僕のせいで愁君が痛い目に合つて、」

愁が微かに微笑む。

「謡さんのせいじゃ、ないですよ？」

「だ、だけど」

謡が葉弓に連れられて家の外に出なければ、愁と出会すことはなかった。愁が謡たちの方に来ることも、葉弓に愁が捕われることもなかった。

愁が痛い目に合う必要なんか、なかった。

「……ごめん、ごめんね。愁君」

愁は何故謡が自分に謝っているのか、理解出来ずにいる。そして、自分を無表情に見下ろしている女性は、何者なのだろうか。

「うた……いさ、」

そしてその女性がニユツと手を謡に向けて伸ばしたことに、愁はいち早く気付く。謡を呼ぼうとするが、それよりも早く女性が無防備な謡の髪を鷲掴みにし、引き上げた。

「謡さんっ、」

髪の毛が何本か千切れたか、ぶちっという音が愁の耳に確かに届いた。謡が痛みに息を飲んだ音に加えて。

「っ、」

「涼子！愛しの兄様との対面よ！気分はどう！？」

葉弓は謡を無理矢理立たせると、右手で前髪を鷲掴みにして顎を上げさせ、左手で片手を拘束し後ろに回させた。そして涼子に問うたのだ。兄の気持ちが自分ではなく、“姫”と崇められ持て囃されてきた目の前の女に向けられているという苛立ちを抱えて。

「……………」

だが涼子は葉弓のそんな苛立ちを知ってか知らずか、ぴくりとも表情を変えない。

「葉弓」

「何よ、」

「謡を放せ。痛がっているから」

「あんた、あたしを怒らせたいの？」

今は“謡”のことなど関係ない。今は、“兄”の話をしているのだ。

「あんたの気持ちなんて私は興味ないよ。……謡を放してやって」

謡は痛みによつて自然に浮いてくる涙に目を潤ませながら、涼子を見つめていた。真つ赤なりボンに、片目を覆う眼帯。無表情に近いけれど、麗しく整った顔。服装はいつもと同じ。

「断つたら？」

「あんたは断らないよ」

「……何でそう言える？」

「別に。ただの勘」

……大抵はいつもぶつきらぼうで。

思ったことは何でも言う。容赦のない、と言えば早いのだろうけれど。

「にれ、のきさん……」

もう会えないと、勝手にそう思い込んでいた。

“明日もここにいます”と言われ、それを信じようとした。でも、やっぱり素直に信じられなくて。葉弓との会話で疑念を更に膨らませて。

「情けない声、出すんじゃない」

……同じようなことを言われてしまうほど、自分はそんなに情けない声を出してしまっているのだろうか。謡自身には意外と分からない。

「だ、って……もう会えないかと思ったから、」

「……………」

「けど、また会えたから嬉しくて、」

「……大袈裟」

ぼそり、と呟く彼女の頬が微かに赤身を帯びた、ように謡には見えただ。ただの勘違い、だろうか。

「感動の対面は済んだ？」

葉弓が苛立たしそうに二人に突っ掛かる。

葉弓の手に更に力がこもり、謡は圧迫感に呻いた。

「ほら、起きなさいよ。愛しの“姫様”が目の前に居るのよ？嬉しいでしょ、ねえ！？」

葉弓が何を言っているのか分からず、謡は苦しい体勢の儘で立ち尽くす。

起きる、とか姫様、とか。

（……一体なんの話なんだろう、）

戸惑いながら涼子を見れば、やはり彼女は無表情で。何を考えているか、掴めない。

「葉弓」

「何よ、」

「謡は、あの人じゃない」

「そんなわけない！！前にちゃんと見たんだからな。謡が兄様になるのを！」

兄様とは、誰のことなんだろう。

「あたしと兄様が再会するのが嫌なんだろうけど、あんたの思い通りになんかならないんだから……っ！」

母親に歯向かう幼子のように、葉弓が喚く。

それを涼子が無表情に受け止める。

「何を言いたいのかわからないけど、謡はあの人じゃないことは認めなさい」

「うるさいうるさいうるさいっ！！」

ムキになって何度も首を左右に振る。

「葉弓、」

「……………っ！」

ぐうつ、と謡の喉に葉弓の指が三本、食い込む。

「あんまりあたしを怒らせないほうがいいよ？ 謡がどうなるかわからないから」

「やめて、」

謡のものではないか細い声が足元からして、葉弓の片足が何かに引っ張られる。

「謡さんを放して、謡さんを苛めないで、」

愁だ。地面にぺたりと腰を着けている。恐怖に足が竦んで、うまく立てないのだろう。それでも気丈に顔を上げ、自分や謡に危害を加える女性……葉弓を見上げていた。

「謡さんは、すごく優しい人で、本当は傷ついちゃいけないんだ、」
「愁、く……………」

「いつも、こんな僕のこと心配してくれて……………面倒も見てください。とっても優しい、素敵な人で、」

愁は自分のことをそんなふうに使ってくれていたのかと謡は胸中が温かくなってくるのを感じていた。

「そんな謡さんが傷付くのはおかしいから、だから……………謡さんを、放して、ください、」

切れ切れの言葉で、必死に訴える。

「おねが……………いします、謡さんを、傷付けしないで下さい……………」

全て吐露したのか、愁が俯く。葉弓から一切の反応が返らないことが不安なのかも知れない。

謡も不安になりながら、葉弓の反応を待つ。

「言いたいことはそれで終わりか？ 餓鬼」

「え、」

「お前が謡を心底好いているのは分かった。だが、あたしにはどうでも良いことだ」

あっさり吐き捨て、謡を解放などしない。

「あたしは兄様に会うことが全てなんだっ！ 貴様らの気持ちなんか

知ったことかつ！」

葉弓の慟哭にも似た叫びが、虚しく周囲に響いた。

祈るように握りしめていた息子の指がぴくりと動いて、渉の母親は彼の名を呼んでいた。

「渉？ 渉っ！！」

ずっと閉じていた目が、すうっと開く。

「渉？ お母さんよ、分かる！？」

天井をぼんやり見ていた瞳が、声に反応したように母親のほうへ動いて行く。

「わた、」

「だ、れ……？」

「……え？」

渉の瞳が、ゆつくりと瞬きをする。まるで、目の前の人間が誰なのかをはかるように。

「渉？ ねえ、」

色を失った唇が、聞きたくない言葉を吐き出した。

「あなた、誰……？」

頭の中が真っ白になった。

その電話が掛かってきたとき、藪内は自室のベッドで転た寝をして

いた。

「……………ん、」

枕元の携帯に手を伸ばし、液晶画面を見た藪内は電話に出るか迷った。何故なら、電話主は渉の電話からかけてきたから。

「……………」

迷って、しかし藪内は結局電話に出た。

「もしも、」

『お願い、渉に会いに来てっ！渉が、渉が大変、なの……………っ』
名乗る暇すら与えず、渉の母親が涙声で訴えて来る。

「おばさん、どうしたんだよ。渉が大変って、」

腹を刺されて手術したのだからそれだけで既に大変なのだが。

『あの子、私のこと……………分からないみたいなの、』

一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。

「え？」

『先生の話だと、刺されたことのショックと出血が多かったことへの肉体的ショックのせいで、』

聞きたくない、と叫び出しそうな口を無理矢理閉ざし、藪内は彼女の言葉を聞き続ける。

『記憶、喪失……………って、』

それを聞き、頭が理解した瞬間……………、

（渉……………っ！！）

藪内は部屋を飛び出していた。

渉に、会うために。

渉に、謝罪するために。

今更、遅いのだろうけれど……………。

藪内は電話口の渉の母親に電話を切ると告げ、全速力で駆け出した。

想い（後書き）

次回は藪内と渉がメインです。話があちこちしてすみません……。
でわまた。お読みいただき、感謝いたします。

幼友達、藪内奏と藍田渉（前書き）

前回の予告の通り、藪内と渉のお話です。

幼友達／＼ 藪内奏と藍田渉／＼

…………… 白い。

頭の中が、白い絵の具をぶちまけたかのように真っ白だ。

…………… 分からない。

何かの魔法にでもかけられたみたいに、何も分からない。

どうして、泣いているの？あなたは、誰？

さっき泣いてた人と、関係あるの？

お母さんと息子さんかと思ったけれど、顔が全く似ていない。そりゃあ顔の似ない親子がまったく存在しない……………なんてことはないだろうけれど。

「あなた、誰？」

ワタル。それが、名前。

誰の？どうも自分の名前みたい。でも、ワタルが自分の名前という実感がない。何より自分が生きているという実感がない。

「渉、なんで」

ふわふわ、ふわふわと雲の上を歩いているかのように足元はおぼつかず、現実感がない。

「あなたは、誰ですか？」自分は目の前で顔を歪める人を知っている、そんな気がした。

ベッドの上で上体を起こし、ぼうつとした眼差しで虚空を見ている渉を見た瞬間、自分の中で何かが瓦解したような、そんな感覚に襲われた。

「奏くん、」

目を真つ赤にした母親が、藪内の入室に気付いてサッとパイプ椅子から腰を上げた。

「おばさん、渉は、」

母親は、首を静かに左右に振った。

「駄目なの。私のことだけじゃなくて、自分のことも分からないみたいで……」

涙声で、すぐにでも声を上げて泣き出しそうだ。

「そんな、」

藪内はそろりそろりと足音を立てないように渉がいるベッドへ足を動かす。

渉の虚ろな瞳が、藪内に気付いて彼に向けられる。

『奏くんっ』

一昔前迄は、藪内を見つけると渉は嬉しげに彼の名前を呼んだものだった。

それが嬉しくて、気弱な幼友達を守ろうと思っていたのに。

（俺は、何を間違えた……）

手酷く渉を拒絶したのは自分。両親の不仲や、彼らが離婚を考え出した頃、藪内は不安で仕方なかった。捨てられる。知らない自分は捨てられる。

そしてその不安はいつしか苛立ちに変わり、その苛立ちを渉にぶつけるようになった。

（俺は、きつと渉に甘えていたんだ……）

自分がどれだけ酷く接しても、渉なら文句も言わず自分の気持ちを理解してくれると。いつまでも藪内の味方でいて、藪内のそばにいてくれるのだと。

「渉、俺が……分かるか？」

震えた声。情けない。自分から突き放しておいて、忘れられることを恐れている。

「……………」

渉からの反応はない。ただ藪内をぼんやりと見返すだけだ。

「っ、」

母親が息を呑み、逃げるように病室を出て行く。

「俺だ、藪内奏。なあ、わた」

「あなた、誰？」

抑揚のない、平坦な声。

「渉、なんで」

「あなた、誰ですか？」

信じたくない。

信じたくない。

ただの悪ふざけだ。

（今まで俺が好き放題してたから、渉がいい加減我慢の限界になって……、）

そうだ。きっとそうに違いない。

藪内は思わず渉の手を取ろうとした。

だが、

「……………っ！！」

怯えたように、渉がさっと手を引く。藪内から目を逸らし、俯く。

「あ、わ、悪い……………」

なんでこうなった。何が、悪かったんだ。

藪内は立ち尽くし、小刻みに震える渉を呆然と見守るしかなかった。

「おばさん、」

しばらくして居たたまれなさがピークになった、藪内も病室を出た。すると出た目と鼻の先に、壁にすがり付くようにして泣いている渉

の母親の姿があった。回診中らしい看護師が困ったように彼女の背中を撫でながら声をかけている。

「すみません、後は俺が」

「あ、は、はい」

看護師に礼を言っ、藪内は渉の母親に声を掛ける。

「おばさん、」

「奏くん、渉は」

「俺のことも分らないみたいです……拒絶、されました」

胸の真ん中にぽっかり穴が空いたような、そんな感覚。

「ごめんなさいね、せつかく来てくれたのに」

情けなさそうに視線を廊下に注ぎ、彼女は言う。

「いえ……」

母親のことはそんなことはないが、自分のことは仕方ないと思う。

渉をたくさん傷付け、泣かせて来たのだから。

「俺は、別に……大丈夫です。仕方ないから、」

母親の視線が自分に戻って来るのを感じながらも今度は藪内が俯いてしまう。

「ねえ、奏くん」

「……はい、」

「少し、お話する時間を貰える？」

その言葉に、藪内は悟る。自分はこれから“糾弾”されるのだと。それも、仕方ないことなのに。

逃げ出したいと感じる自分が嫌だった。

母親は藪内を連れて屋上に出た。たくさんの洗濯物が風にはためい

ている。

「渉、ね。たまに怪我をして帰ってくるがあったの。……高校に入ってから、中学に比べて格段にそういうことが多くなったわ」いきなり言われた言葉に、藪内は硬直する。

きつと、渉の母親は気付いている。
「あの子は慌てた顔で不良に絡まれたと言っていたけど、奏くん……何か知らない？」

母親の、下界を見下ろす横顔は穏やかだ。

もしかしたら許されるのではないかと思ってしまう。自分のしてきたことを。

「俺、です」

気付けば口が開いていた。

「……………」

「俺が、渉を……、あいつをいっぱい傷付けて、」

今も耳に残る、渉の悲痛な声。やめて欲しいと、懇願する声。自分はその声を聞いて、さらに渉を傷付けて。

「だから、俺は、忘れられても仕方ないんです」

自分はそれだけのことをしてしまったのだから。嫌われたって、仕方ない。だから、

「本当に、すみません……」

泣くな。悪いのは、自分なのだから。

「……何となく、気付いてた、かな」

「え？」

意外な言葉に、藪内は思わず渉の母親を見つめてしまった。だが彼女は横顔を見せたままで、藪内を見ようとはしない。静かに言葉を続ける。

「渉はあなたのこと本当に好きだから。それは、確かよ」

「でも、俺はっ……………」

「渉を、傷付けた？」

「は、い」

誰が自分に危害を加える人間を好きでいられるのだろう。藪内には考えられない。

「そうね。渉は、確かにあなたに傷付けられた。それは、事実なんでしょう」

「……………」

本当にその通りだったので、藪内は頷くしか出来ない。反論など、出来はしない。

「私も不思議よ。どうして自分を傷付ける人間を好けるのか。自分の子どもながら信じられないわ」
「でもね、と母親は告げる。」

「私やあなたが不思議で信じられなくても、渉はあなたのこと、好きよ。程度は知らないけど、あなたを好いて慕っていることは確か。あなたのことを話す渉は、本当に楽しそうで、嬉しそうで」
息が詰まって、胸が苦しくなってきた。

「息子を傷付ける人間を、私は許せないけど、でも……あの子はその人のことを好いて私に嫌悪されるのを望まないのなら、私はあなたを許しはしないけど、憎むこともしない」

堪えていたものが溢れ出しそうなのか、渉の母親は口元を手で覆い隠し、小さく呻いた。

「……おばさん、でも俺は、」

自分を許せそうに無い、といっても良いのだろうか。ただのお為ごかしにしか聞こえないのではないだろうか。

あっさり“糾弾”してくれば、気持ちも楽になるのに。

どうして渉も、彼の母親も、自分を責めてくれないのだろうか。

「……………」本当にあるのね、記憶喪失って」

話の展開が急にガラリと変わり、藪内は虚を突かれる。

「ドラマとか小説の世界でだけだと思ってたけど、まさか自分の子どもがそんなことになるなんて」

「……………」

「自分が忘れられてしまうことが、こんなに苦しくて哀しいなんて。」

よりによって一番一緒にいる時間が長い相手に忘れられてしまうなんて」

母親が体を動かし、真正面から藪内を見た。泣きはらして真っ赤に充血した瞳が、立ち尽くす彼を捉える。

「渉を、助けてあげて」

「！」

「渉には、私よりも薬よりも、あなたという存在が一番よく効く薬の筈だから」

正面きつての思いも寄らぬ依頼に、藪内は激しく動揺する。謡や渉を傷付け冷酷な笑みを浮かべていた少年とは全くそぐわない。

「俺、俺には、」

俺に何が出来ると藪内は自嘲する。

自嘲するしか、ない。

「・・・俺に何が出来ると言うんだよ。俺は、あいつに何もしてやれない」

「ただ傍にいてあげて欲しいの。渉が何の反応を返さなくても、ずっとそばにいて、あの子を見守っていて」

「見守る、」

藪内が鸚鵡返しのように呟いた瞬間、パンツという扉を開閉する音とともに先ほど廊下で母親を気遣っていた看護師が必死の形相で現れた。

「藍田渉君のお母さん、大変です！！渉君が！！」

「渉、渉！！しっかりしなさい！」

真っ赤な液体が血だということが、藪内にはどうしても理解出来なかった。茫然と見守る彼の視界の中、再び渉が細い体を大きく痙攣させて吐血する。

苦しげに閉じられた目の端に涙が溜り、時たま思い出したように雫が滑らかな頬を流れて行く。

主治医らしい四十代くらいの眼鏡の男性医師や数人の看護師が必死に渉の命を繋ぎ止めようと各々で行動する。

「渉、」

目まぐるしく動く医師たちをぼんやりと見ながら、藪内は病室の入り口で立ち尽くすしかない。

渉の母親は息子の枕もとに膝をついて、泣きながら懸命に彼の名前を呼んでいる。

「・・・・・・・・・・っ、」

キモチワルイ。

眩暈を感じて、藪内は数歩後退した。よろよろと、彼らしくない弱々しい動作で。

脳内は赤一色で、何も考えられない。

ただ苦しくて苦しくて、藪内は喘いだ。だらだらと気持ちの悪い脂汗が次から次へと垂れる。

「奏君！」

「・・・・・・・・」

母親が病室から出てきて、藪内の手を引く。

「お願い、渉の名前を呼んでやって。あの子の心呼び止めて！！」

「でも、でも俺は」

何を今更。

脳内で誰かの声が響く。粘着質で、暗い闇の底から聞こえてくるような、そんな声。

今まで散々痛めつけておいて、泣かせておいて。

何を今更。別に死んだって構わないだろ？お前は、あいつのことが大嫌いなんだろう？

いつまでたつても金魚の糞みたいに自分のあとをついてまわってじやれ付いて来るあいつが嫌いなんだろう？なら、放っておけば良いじゃないか。あいつの親や親戚は悲しむかも知れないけど、お前は痛くも痒くもないだろう？

「俺は、」

それにほら、最近芝貫とも仲良くなってたじゃないか。

渉が死んだら、芝貫は大泣きして渉の死を悼み、加えて渉が死んだのは自分の所為だと悩み苦しむだろうな。

大嫌いな渉は死んで、大嫌いな芝貫謡は嘆き苦しむ。

傑作じゃないか。

人を傷付けて無二の快樂と悅樂を手にするお前には、最高なことじゃないか。

だから、今更善人ぶってこの女に従う必要なんかないんだよ。

この女もどうせ自分が息子を喪うのが嫌なだけで、息子の命を繋ぎ止める方法が他にもあるのならお前なんか頼ったりしないよ。

「渉、」

ほら、何ぼけつと突っ立ってるんだ。さつさとこんなところからはおさらばして、誰かを傷付けに行こうぜ？そのほうが遙に生産的じゃないか？

「お願いよ、奏君っ……！」

分らない。自分がどうしたいのか。渉を助けたいと思っているのか、渉のことなんかどうでもいいと思っているのか。サッパリ、分らない。

「奏くんっ」

どうしてそんな一点の曇りもない笑顔で俺を呼ぶんだ？

勝手に不安になって、勝手に苛立って、何も悪くない渉に一方的にその不安や苛立ちをぶつけて。

そんな理不尽な俺に、なんでそんなに笑いかけてくれるんだ？

『決まってるよ。奏くんが、大事な友達だから』

「……そう言えば、以前にそう言われたことがあった。それも、最近だったように思う。」

愛犬のチコを抱いた渉は、真っ直ぐに視線を俺に向けていた。

そして普段の頼りない弱々しい口調とは打って変わって凜と澄んだ声音で、言ってくれたのだ。

俺なんかのことを、大事な友達だと。

「俺、なんかの声が……届くのか」

「きつと。言っただけでしょう、あの子は君のこと大好きだって」

藪内はまだ迷っていたが、静かに病室へ戻った。そして医師たちの邪魔にならぬように注意しながら、渉に近付く。

「……」

酸素マスクを取り付けられながらも、渉は苦しげに眉根を寄せて荒い息を繰り返している。きつく閉じた瞳からはやはり時々涙が零れ落ちる。

「わ、たる……」

彼の名を呼ぶと、閉じられた瞼が微かに動いた。

「渉、頑張れ」

もう一度瞼がぴくりと痙攣したように動き、すうつと静かに開いた。ガラス球のように透明な瞳がゆっくりゆっくりと声のした方……藪内の方へ向けられる。

母親の言葉では自分のことも分らないらしいから、きつと声に反応しただけなのだろうと藪内は妙な期待はしないことにした。

涙で潤んだ瞳が妙に綺麗だと藪内は場違いなことを思った。渉がじつと藪内を見返してくる。

「……渉、死ぬな。死なないでくれ」

本音なのかどうか藪内にも自信はなかったが、そんな言葉がぼろりと口から零れ出た。

「今まで、ごめん。一杯、傷付けて……ごめん。悪かった」

「……」

「今更謝つても遅いけど、でも・・・俺は俺は、俺は、俺は、」

「お前に、涉に・・・死んで欲しくない。生きて、欲しい」

必死の思いで言葉を紡ぐと、藪内の視界の中で、涉が酸素マスクの下の口を小さく動かす。

辛うじて、涉が

『どうして?』

と口パクしたのだと分かった。

「それは、」

周囲では医師たちが忙しく奔走し涉の救命を施してくれているのに、その音が一切合財聞こえない。この場に自分と涉だけしか居ないという気になってくる。

「お前が俺に言ってくれたのと、同じだ」

涉が不思議そうに目を何度か瞬きする。記憶を喪っているのだから当たり前か、と藪内は思う。

「良いか?一度しか、言わないからな」

とりあえず、というように涉が小さく頷く。藪内は頬が気恥ずかしさに熱くなるのを感じつつ、言った。あくまでぶっきらぼうな口調になってしまったけれど。

「・・・・・・決まってるだろ?涉が大事な友達だからだ」

・・・・・・恥ずかし過ぎる。

藪内は今まで発したことのない類いの言葉に照れを隠せない。じつと注がれている涉の視線を痛いほど感じる。

「だ、だから俺は・・・・・・お前に、涉に、死んで欲しくないんだ。大事な友だちを、喪いたくないんだ・・・・・・」

自分が自分ではない感じがする。

まるで誰かが自分に取り寄り、藪内の意思とは関係なしに口を動かしているような・・・・・・。

『・・・・・・』

荒い呼吸をしたまま、渉が再び目を閉じてしまう。

藪内是最悪な事態を想像してしまうが、それに気付いたのか医師が声をかけてきた。幾分ホツとしたような顔で、

「……………彼は無事だよ。変なことは考えなくて良いからね」

「あ……………本当に？」

「ああ。藍田君も自分はまだ生きるんだって必死に頑張ってるんだよ。見守ってあげて」

藪内は複数回、首を縦に振る。

「お母さん。まだ予断は許さない状況ですが、今のところは落ち着きましたよ。……………渉君は必死に生きようとしておられますね」

「ありがとうございます。先生……………」

「いえ。では、私はこれで」

その医師は安堵のため息をこぼし、病室から去っていく。看護師たちが器具などの後片付けを始めた。

「渉、」

完全に眠ってしまったのだろう、渉はぴくりとも動かない。緩やかにながらも確かに上下している胸が、彼が生きているのだと示してくれている。

（渉……………、）

自分の声は渉に届いたのだろうか。死地に向かう彼の足を止めることが、出来たのだろうか。

「奏君、ありがとう」

……………お礼を言われるようなことはしていない。

そう思ったのに、渉の母親のその言葉は痛いほどに藪内の胸の裡に染み渡って行った。

弱る絆（前書き）

今回も藪内と渉のお話です。

翳る絆

“友達”。その人はそう言った。

“死ぬな”。その人はそう言った。

“ごめん”。その人はそう言った。

初めて会った筈なのに、どうしてそんなことを言うの？

どうして、そんな悲しそうな顔をするの？

どうして、そんなに苦しそうな顔をするの？

僕は、この人のことを知っている？

この人は、僕のことを知っている？

……分からない。分からない。

自分のことも。恐らく自分を想っているであろう目の前の人のことも。

今自分が何処に居るのかも。どうして横になっているのかも。

何も、分からない。

「奏君、どうぞ」

病室前の長椅子に腰掛け頂垂れていた藪内に、渉の母親が購買で買ったのであろうパックの珈琲牛乳を差し出す。

「あ、どうも」

こういうとき素直に“ありがとう”と言えないのが嫌になる。

「大丈夫？疲れてない？」

「俺は、別に……」

正面から彼女の顔を見ることが出来ない。

「ならいいんだけど。でも、ありがとうね。渉のこと、助けてくれ

て」

藪内は頂垂れたまま目を見開く。

母親の言葉を呑み込むことが出来ない。

“ 助けてくれて ” “ ありがとう ”。

(……俺が何をしたっていうんだ？ 散々傷付けて泣かせただけだ。その俺に、どうして礼なんて言うんだ？)

「あなたの言葉は、ちゃんと涉に……あの子に届いてるわ」

止める。自分にそんな力はない。

「記憶がなくなっても、きっとあなたとの思い出は、心に刻まれている筈だから」

想い出？ 綺麗なもののじゃなければ、沢山残したよ。

「あなたの存在は、涉にとっては……一番おおき、」

「止めてくれよっ！」

ついに藪内は耐えられなくなつて、立ち上がつて涉の母親に怒鳴つた。

「何度も言っただろ、俺は、散々涉を傷付けて、泣かせたつて！！ 涉が止めるつて言うたびに残虐な気持ちになつて、」

「奏君、」

「ますます手を出して、ますます泣かせて」

こうしている今でも、後悔と涉を痛めつける場面とが藪内の胸に去来する。

本来自分はここでこうしているべき人間ではない。

分かっているのに、自分はこうして椅子に座っている。

度し難い馬鹿だ、と藪内は自嘲する。

「奏君、」

「……俺、帰ります」

浮かびそうな涙をグツと堪え、藪内は歩き出す。

「奏君、待つて……」

藪内は、自分の腕を掴もうとした涉の母親の手を払った。

涉によく似た二重瞼の大きな瞳が哀しげに藪内を見詰める。

そのせいですます藪内は己に対して苛立ち、嫌悪に陥る。

「・・・・・・・・すみません、おばさん」

往来に行く人のことなど介錯せず、藪内は闇雲に走り出した。その背中を、渉の母親は哀しげな瞳のままで見送るしかなかった。

ポタ、と自分の頬に何かが落ちたような気がして、渉はそっと目を開いた。

「あ。起こしちゃったのね・・・・・・・・ごめんね」

自分を覗き込む、目を真っ赤にした女の人。

何がそんなに哀しいんだろう。渉には不思議で仕方がない。

それに・・・・・・・・女の人のおそばには、あの人がない。

血を吐き、呼吸すら満足に出来ないでいた渉に、死ぬなと言ってくれた人。

渉に、“友人”と言ってくれた人。

恥ずかしげに頬を赤く染めながらも、生きろと言ってくれた人。

「・・・・・・・・の、人は？」

「何？渉」

「・・・・・・・・さっきの、男の人。僕に、・・・・死ぬなっで、」

途端、女の人が泣き笑いになる。

何か拙いことを訊いてしまったのだろうかと思は少し不安になる。

「帰っちゃた」

その言葉を耳にした瞬間、渉は自身がかっかりしたことに吃驚する。「お母さんが、怒らせてしまったから。ごめんね、渉。奏君が来てくれて、一番嬉しかったのはあなたなのにね」

カナデ。それがあの男の人の名前なんだろうか。あまり顔と名前が似合っていないなあと心なし酷いことを渉が思った瞬間、

「・・・・・・・・つあー!!」

言葉に出来ない激痛が頭全体に走った。

「わ、渉!? どうしたの、大丈夫!?」

「あう、・・・・つ、ああつ!!」

女の人・・・・彼の母親が慌ててナースコールを押す。響く看護師の声。

『藍田さん、どうされました!?!』

「あ、あの・・・・渉が、息子が頭が痛い。凄く苦しんで・・・・!!」『分かりました。すぐに行きます!!』

通信が途切れる。

「つつ、たい、痛いよ・・・・!!」

ベッドの上で頭を抱えながら、渉が身悶える。母親は何も出来ずにおろおろするしかない。

「渉、渉!!」

「痛い、助けて・・・・なで、くん」

「・・・・・・・・え?」

渉は無意識だろう、有る人間の名前を呼んだ。助けて欲しいと。

願って。

「・・・・・・・・痛いよ、奏くん、助けて・・・・たす、けて」

ぼろぼろと涙を零しながら、渉がうわ言のように呟く。

頭を抱え、激痛を必死に堪えながら。

たった一人の名前を呼ぶ。

「奏くん・・・・・・・・!!」

「！！！」

鼻っ面を大型トラックが通り過ぎ、藪内は咄嗟に足を止めた。

「危ねえだろ、馬鹿野郎が！！」

運転手の罵声も頭に響かない。

「・・・・・・・・」

衆人の視線が藪内を見るが、すぐに興味を失って各々で歩き出す。

・・・・病院を飛び出した藪内は、あてもなく歩いていた。街の音が殆ど耳に入らない、危険な状態で。

（渉、）

きつと渉は大丈夫だ、と思わないではいられない。

そう思わないと自我を保てそうにない。

藪内は彼らしくないふらついた歩き方をしていて、案の定・・・と言っのだろうか固まって往來を歩いていた不良たちにぶつかってしまっ。

「・・・・・・・・・・悪い」

聞く者によつては全く謝られていると感じられない謝罪だけして、藪内はそのまま通り過ぎようとする。

「おい、ちよつと待てよ」

グイッと肩を掴まれ、藪内は心底面倒そうに後ろを振り返る。

「ぶつかつといてなんだ、その態度は。ちゃんと謝りやがれや」

「謝っただろうが。放せよ」

「何だ、その態度は!!」

いきりたつリーダー格の青年に、別の青年があることに気付いて彼に話し掛ける。

「こいつ、あいつだろ。藪内奏」

「藪内? ああ、大高の墨田を一人でぶちのめしたって言う?」

「たぶん」

仲間内で何やら雑談を興じ始めたように見え、藪内はその場を去ろうとした。彼らに脅威を感じたわけではなく、今は兎に角一人で居たかったからだ。

何もかもが面倒臭く、自分一人の世界に浸って居たかったから。だが、

「今日は連れはどうしたの?」

連れ、という言葉に藪内は思わず足を止める。

連れ……よくつるんでる二人の姿がパツと頭に思い浮かぶが、

「ほら、あの女みたいな顔したさ」

その言葉に、渉のことだと察しがつく。

「お前のあとを金魚の糞みたいにくっついてくる奴だよ」

「お前らには、関係ない」

素気無く言い放ち、今度こそ本当に立ち去ってやる、と藪内が思った瞬間、

「俺、その姿見てずっと思ってたんだぜ? 藪内の野郎、男に操を立てられてるって」

そんな言葉が聞こえ……文字通り我を忘れた。

「所詮、多数に無勢だな」

「行こうぜ」

不良たちが固まって路地裏を立ち去る。

「……………いつ、くそが、」

散々、殴られ蹴られた藪内は悪態を吐きながらも何とか起き上がった。

顔もだが、腹部を集中的に攻撃され、ズキズキと断続的に痛む。奥歯が折れたらしく、口の中で欠片が漂っている。

それを路上に吐き捨て、藪内は他の怪我の具合を確認していく。

「何してんだろうな、俺……………」

虚しくて、一人呟く。

渉の顔が浮かぶが、慌てて打ち消そうとする。

（俺にはこういうのがお似合いだ。両親に捨てられかけ、小さい頃からの友人にさえ優しくできない自分には、これくらいの方が……………）

そう思わないではられない。

「……………渉、」

打ち消そうとして、無理だった。病院のベッドで苦しむ渉の顔がフラッシュバックのように浮かぶ。

変わってやりたい、自分で良ければ。

……………到底無理だと明らかだけれど、それでも。

「……………これから、どうすつか、」

やるせなさそうに、藪内は呟く。

自宅に帰るのも嫌だし、かといって渉がいる病院に戻るのも抵抗がある。

（俺には、何処にも……）

路地裏に佇んでばかりもいられず、藪内はあてもなく歩き出した。

「……………」鎮痛剤が効いたらしく、頭の痛みを訴えなくなった渉は穏やかな寝息を立てて眠りに落ちていた。

（渉、一体何があったの……？それに、記憶喪失っていうのは本当なの？）

渉が小細工の出来る子ではないと思っではいるが、頭痛を訴えた時の悲痛な叫びが頭から離れない。

渉は藪内奏の名前を呼んでいた。心から、叫んでいた。記憶を喪い、彼のことも忘れているにも関わらず。

渉は、記憶喪失のふりをしている？

何か目算があつて？

（……まさか、ね。渉がそんなことをするわけがないわよね）

きつと、無意識だったのだと思う。それほど、藪内奏の存在は渉にとって大きいのだろう。問題はそれを、

（どうやって奏君に分かってもらえば良いのかしらね）

藪内は自責の念に駆られ過ぎて、素直に受け入れることが出来ないのだ。

（ねえ渉。お母さん、どうしたらいいのかしら。どうしたら、昔みたいに二人が仲良く手を取り合えるのかしらね……）

答えは、なかなか出そうになかった。

弱る絆（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます。でわ、また。

救援（前書き）

敦樹を助けに来たのは……。

救援

「……可愛い寝顔だ。史哉ではないが、襲いたくなっても無理はな
いかもね」

眠る敦樹の頬に、蓮音のしなやかな指が這う。

「蓮音様、」

「冗談だよ、創」

蓮音は微かに笑うと、創が持ったままのスーパーの袋を指差した。

「この少年のための品だろ？食事か？」

「……はい」

「素直に食べてくれたら良いがね」

「そう……ですね」

蓮音は再び敦樹に視線を戻すと、感慨深そうなため息をついた。

「蓮音様？」

「いや、なに……こんなに愛らしい少年がああ狸オヤジの息子だと
は俄に信じられなくてね。創もそう思うだろう？」

なんとも返答し難い問いを投げ掛けられてしまい、創は困惑する。
そんな彼の顔が愉快だったのか、蓮音が小さく吹き出す。

「答え辛い問いだったな……済まないね」

「い、いえ……」

「しかし、まあ……可愛いらしい寝顔だ。このままで家に帰してや
りたいものだ」

蓮音の力でなんとかならないのかと創は思う。だが、

「ああ、私には期待するなよ。先の件で好き放題し過ぎた罰でな……
監視がいつも以上に厳しいんだ」

「そう、ですか……」

「そんなにがっかりするな。きっとこの少年が大事に想い、そして
少年を大事に想う人間が助けに来るから」

やけに核心的に蓮音がそんなことを言う。

「……………」
どうしてこの人が言葉を発すると、素直に信じる事が出来るの
だろうと創は思った。

「どんな気持ちだ？」

「え？」

敦樹が過去に過ごした施設の跡へ向かう車内。
芝貫家を出てからずっと静まり返っていたが、いきなり烏丸懔が神
楽に問い掛けた。

後部座席の秋は、心労が祟ったのかぐっすりと眠り込んでいる。

「どんな気持ち、とは？」

「……自分の義弟が、自分の敬愛する芝貫春樹や謡と血縁者だとい
うことに対して、思うところはある筈だろう？」

「……………」

確かに敦樹が、自分が尽くす芝貫の人間だと知った時の衝撃は凄か
った。

そして時の首相の息子だと知った時も。

（虐待をするような奴がこの国を纏めているなど、悪寒が走る……
…）

「ふん」

何を感じたか、懔が鼻で笑う。

「首相に会っても下手な真似はするなよ。どんなに最低な輩だろう
が、相手はこの日本国の大将だ。倍になってお前に戻って来るぞ」

「別に、自分のことなど、」

「大事な大事な義弟にも危害が加えられても？」

「……………っ、」

それだけは駄目だ。例え自分に何があろうとも、敦樹をこれ以上辛い目に合わすことだけは。

神楽は一瞬だけ嫌な想像をしてしまい、慌ててそれを断ち切る。

「よほど義弟が大事なんだな。神楽樹」

「当たり前だろう……敦樹は私の大事な弟だから。義理だろうが、そんなの関係ない」

「くく。美しいことで」

先程から慥は相手を揶揄するような口調で話し続けていて、神楽は静かに怒っていた。

「……………」

「なあ、神楽樹」

「……………何だ」

「もし、謡様と敦樹を選べ……と言われたらどうする？」

慥から発されたその問いに、神楽は危うくハンドル操作を誤るところだった。

「な、いきなり何を……………」

「いや、何となく、な」

慥は質問の真意を明らかにすることなく、首を巡らせて窓の外に目をやった。

もう話す気がない、ということなのだろう。

（謡様と、敦樹の……………どちらかを選ぶ？そんなこと、出来るわけがない……………）

まさかそんな選択の場面など来るわけがないと、神楽は嫌な想像を必死に打ち消した。

『お前は要らない子なんだよ』

『このグズ、のろまつ！』

痛いよ、止めて。

殴らないで。蹴らないで。つねらないで。否定、しないで。

『お仕置きが必要なようだね』

お酒に酔った赤ら顔が、ずいっと近付いて来たかと思うと突然唇を奪われた。

生温い舌が口腔を犯そうとしたから、必死に身を擦って逃げようとした。

でも、貧弱な体が大の大人のお父さんに敵うわけがなくて。

涙を流して行為が終わるのを待っていたのに、お父さんの行為はさらにエスカレートした。

服を脱がされる、ことはなかったけどトレーナーの下に手を入れられ、素肌を蹂躪された。

やだ、やめて。

どれだけ訴えても、お父さんの気が済むまでは解放してもらえなくて。

仕舞いには足の間にお父さんは足を無理矢理に挿じ込んできて、いやだあつ！お母さん、助けてえっ……！

下着をずらされ、一物をとんでもない力で握り締められた。

痛くて怖くて悲しくて、必死にお母さんに助けを求めたけど。

お母さんはニヤニヤと笑って、様子を眺めているだけだった。

『あんだ、もつとやってやんな』

『言われんでも』

怖いよ。

助けて、もう誰でも良いから助けて。

この地獄から、解放して……。

「……………」

長い睫毛をぴくりと震わせ、敦樹は目を覚ました。

しばらくは頭がぼんやりして、何も考えられそうにない。

「起きた？」

不意に声を掛けられ、敦樹は声の方を見遣った。

だが声の主は敦樹を見てはおらず、手元の本に視線を落としている。何の本なんだろう、とうまく回らない頭で思う。

「これはギリシヤの戯曲の本だよ。興味はある？」

「……………」

こちらの視線が本に注がれていることに気付いたのだろうか。

「気分は？」

ギシツ、と音を立てながらデッキチェアから立ち上がると、ゆっくりと敦樹に近寄る。

そこでようやく相手が女性だと気付いた。

「……………」

敦樹は横になったままで体を硬直させ、女性の動向を息を呑んで見守る。女性の長い黒髪が綺麗だ、と緊張しながらもそんなことを思う。

「そんなに怯えるな。何もしないから」

しかし基本的には人見知りで、加えて先程手酷い目に遭わされたばかりだから、素直には信用出来ない。ただただじつと彼女を見詰める。目を閉じることは逆に恐くて出来ないでいる。「お腹すいていない？ 創が君のためにご飯を買ってきたんだけど」

彼女はそんな敦樹の反応を深くは考えないようで、どんどんと声を

掛けてくる。

黒くて艶のある髪がさらりと彼女の細い肩を流れる。

まるで真つ黒な川のように、と敦樹はいまだにぼんやりした頭で見
ていた。

（・・・兄さん、）

そうだ、自分は気を失う直前に目の前の女性と義兄の笑顔を重ねた
のだ。

（この人、兄さんに似てるんだ、）

そして時々義兄から香ることのあった花のような香りも。

「この、香り、」

敦樹がうわ言のように呟くと、女性は嬉しげに破顔した。

「私のお気に入りなの。あまりつけてないけど、鼻が良いん
だね」

香水が何かだろうか。

「あの・・・創、さんは」

「ちよつと野暮用だよ。ご飯は？」

「・・・食欲など一切なかった。敦樹は黙って目を伏せ、必
要のないことを示した。

「ちゃんと食べないと駄目だよ。あんた、ただでさえ細っこいんだ
から」

そう言われても欲しくないものは欲しくない。敦樹は返事すらしな
かった。

「ま、仕方ない・・・ね。こんな状況じゃ」

軽く言うつ、女性はコンビニの袋からお握りを取り出して食べ始め
た。

「あの、あなたは、」

敦樹がおずおずと問い掛けて初めて女性は自分がまだ敦樹に自己紹
介をしていないことに気付いたらしい。食べていたお握りの残りを
飲み込むようにして食べ終え、指についた米粒を食みながら名乗っ
た。

「私の名前は、芝貫蓮音。蓮の音と書いて、ハスネと読む」
シバヌキハスネ。

(・・・芝貫、)

不意に、何処かで聞いたことのある名前だと思った。

「・・・・・・そして初めまして。芝貫シン君」

「・・・・・・っ！！！」

一気だった。一気に目の前の女性に途方もない嫌悪感を感じ、敦樹は息を呑んだ。

「いや、」

何故か性別の違う“あの人”と蓮音の顔が重なる。

何もされていないのに、足を指が這う感触がする。

触れられていないのに、腕をつねられている感触がする。

「今は、神楽敦樹君、だっけ」

じわり、じわりと背中に、額に、嫌な汗を掻く。

一刻も早く此処から逃げなければ。

「よろしく」

スツ、と白く細長い指が敦樹の頬に伸び、敦樹はついに目を閉じようとして―、

「どういうことだ、蓮音！！」

という怒鳴り声があったかと思うと、部屋のドアがバタン！と開けられた。

「！！！」

敦樹は思わずビクツとして、ドアの方を見た。

「こんにちは、総帥」

「蓮音、どういうことだ！神楽の弟を拐わせるなど……！！」

神楽の弟、と男は言った。兄の知り合いなのだろうか、と敦樹は男を見つめる。

年の頃は四十代半ばくらいだろうか。若い頃は女性にモテていたであろうと窺わせる端正な顔立ちで、スラリとした均整の取れた体躯をしている。

やり手の社長、というイメージが一気に出来上がった。

「さすが総帥。お耳がお早い」

どこか嘲笑うような口調で、蓮音が言葉を紡ぐ。

男が洪面を作る。

「……………その総帥という呼称は止める」

「だって言い得て妙じゃない。私のところにも届いてるんだよ？総帥がどれだけワンマンであるか、それに……………どれだけ長男に手酷くしているか、という情報がね。それを聞いてたら、」

男の顔に明らかな動揺が走った。触れられたくない話題なのだろう。
「謡のことは、関係ないだろう……………」

「さあ、どうだろうね」

泰然としてクスクス笑う相手に苛立ちがピークに達したらしい。男は彼女から顔を逸らし、蚊帳の外状態だった敦樹に焦点を充てた。

「あ、」

「君が、神楽……………敦樹君か？」

カツ、と革靴の音を響かせ、男が一步をこちらに進めてきた。

「……………っ、」

初対面で、しかも相手は男だ。敦樹は怯え、身を固くする。

「安心して良い。私は、君の兄…神楽樹の上司だから」

「に、兄さんの……………？」

本当だろうか。兄の名前を出して安心させ、油断したところを襲いかかってくるのではないか。

そんな疑念が湧き出る。

「本当だ。私は芝貫春樹。芝貫グループを運営している者だ」

『僕は、芝貫春樹さんっていうとても偉い人の秘書をしてるんだよ』
兄が就職して数週間経ったところにかかってきた電話でそう言っていたのを、敦樹は思い出した。

「に、…兄さんから、聞いてます。とても偉い人だって、」

「……………そうか」

こういうときは、確か……………、

「兄が、いつもお世話になってます」

こう言うのだと教えられた。

「君は礼儀がなっているな。神楽にそっくりだ」

どこか寂しげに、男……芝貫春樹は言った。

「どこか痛いところはないか？」

敦樹は首を左右に振る。

「君の事情を多少は知っている……君が芝貫の血を引くことも」

そう。つまり自分と目の前にいる男は血縁関係にあたる、ということ。

間柄までは分からないが、男は知っているのだろうか。

「この子は連れ帰る。部下の大事な弟だ」

「部下、ね。総帥が暇を出したのに？」

「……別に解雇したわけではなく、休みを与えたまでだ」

「珍しく言い訳がましいね。そんなにあの部下が大事？上司よりも上司の息子を優先するような奴なのに？」

「蓮音には関係ない」

「……」

蓮音が黙ると、春樹は敦樹に手を差し伸べた。

「私が家に返してやる。……掴まって」

敦樹はおずおずと春樹の手を取った。大きくて、でもひやりとした冷たい手だった。

「あの狸オヤジが黙ってないよ。あいつはその子にご執心みたいだから」

「……何もかも自分の思い通りになると思ったら大間違いだと伝えておけ。神楽やこの子に関することは、私を通せ……とな」

「ふうん。自分の息子も同じくらい可愛がってあげたら？」

「余計な世話だ」

春樹は一切の抑揚のない声で、そう言った。

「史哉、居るんでしょう。入りなさい」

「あ、ばれてました？」

ドアの向こうからあっけらかんとした声が上がったかと思うと、史哉が顔を覗かせた。

「……………っ！」

乱暴されそうになったことを思い出し、敦樹はあわてて春樹の広い背中に隠れた。

「どうせ私を監視してたんでしょ」

「へへ」

「史哉、狸オヤジの大事なお客人が闖入者にかっさらわれようとしてるわ。取り返しなさい」

「へえへえ」

史哉がズボンのポケットからサバイバルナイフを取り出し、刃先を春樹に突き付けた。

「し、芝貫さん、」

不安になり、敦樹が弱々しく春樹を呼ぶ。きらりと光るナイフに、小さな心臓は今にも握り潰されそうになっていた。

（兄さん助けて、助けて……………！）

何度兄を呼んだだろう。

どうして一人じゃ何も出来ないんだろう。弱い自分が、本当に、嫌だ。

「ナイフで脅す、か。弱い奴のすることだな」

春樹は刃に怯むどころか、そんなことを言い出した。

史哉の柳眉がつり上がる。

「……………んだと、」

「双子の兄貴が嘆いていたぞ。最近、双子の弟が何を考えているかわからない。少し前までは、史哉の考えていることは手に取るように分かったのに、と」

「創が？」

「双子だから何もかもわかるとは思うな、とは言ったが、兄貴は悲しげに笑っていた。何もかも分かるのが当たり前過ぎて、分からないことがとても怖い、と」

「何が言いたい」

「自分で考えるんだな」

「……………果てしなくうぜえな、あんた」

「そうか」

史哉がナイフを持つ手に力を込めるのが、敦樹には分かった。

（兄さん、お母さん、お父さん……………っ）

ナイフが、春樹の目と鼻の先に翳され、

「……………っ！」

恐怖に、敦樹は目を閉じた。

抵抗（前書き）

ついに敦樹を助けに神楽が施設跡に到着します。

抵抗

「敦樹!!」

目の前に広がる光景に驚きながらも、神楽は弟の名を呼んでいた。敦樹を背中に庇うようにして立つのは、自分の上司。そして彼に向かってナイフを振り下ろす、見知らぬ若い男。

「退けっ!」

ドア口で立ち尽くす神楽を押し退け、慄がナイフの男に躍りかかる。

「なんだ、お前っ」

「悪いが邪魔なんだよ、お前は」

擲掄する口調で言い、慄は男に足払いをかけた。たったそれだけで大の男がバランスを崩す。

更に慄はナイフを持つ方の手を蹴り上げ、それでも放そうとしない男の腹に刀の鞘で峰打ちする。

「ぐっ!」

男が呻き、ようやくとナイフを落とす。

「兄さんっ……………!」

慄の動向を全員が息を呑んで見守っており、そしてその呪縛から真っ先に解かれたのは敦樹だった。

兄に会えた安堵から沸き上がる涙を流しながら、春樹の背中から離れて立ち尽くす神楽の胸に小走りで飛び込んだ。

「敦樹……。良かった、」

「兄さん、兄さん……」

「ごめん、敦樹。守ってやれなくて、ごめんな」

敦樹は首を必死に左右に振る。

神楽は愛しそくに敦樹の黒髪を撫でる。腰に回った敦樹の細い腕に力が籠るのが分かった。

「……………何もされてない?痛いところはないか?」

ビクッ、と敦樹が明らかに体を大きく震わせる。

「……………っ、」

「敦樹？」

「な、なに……もなっ、なかつ」

明らかに敦樹は何かに怯えている。

「敦樹、」

「だい、じょ……うぶだから、何も、なかつ……たから、」

今にも消え入りそうな声で、敦樹が言う。

（このパーカー、）

神楽は、敦樹が家で拉致されたときには着ていなかったパーカーに気付いた。何のへんてつもない長袖の、濃紺のパーカー。

「敦樹、これは敦樹の？」

「……………あ、これは、」

敦樹が言いにくそうにしながらも答えようとした瞬間、

「……………これは一体何の騒ぎだ？」

地の底から響いてくるような、暗く重たい声がその場にいた全員の耳を震わせた。

「蓮音、説明してもらおうか」

「……………会食、じゃなかったの？」

「先方が急用でキャンセルになったんだ。さあ、説明してもらおうか。芝貫のトップがここに理由も、な……………」

声の主は、時の首相……鳴沢宗吾だった。細まった粘着質な瞳が、兄に抱き着く敦樹を捉えた。

「……………っ、」

敦樹は兄の胸に顔を埋め、その視線から逃れる。

「それは私のだよ、神楽樹」

「なっ、」

「そしてそれは神楽敦樹などという人間ではない」

腕の中、敦樹の震えは酷くなる一方で。弟が壊れてしまいそうに思えて、神楽はゆっくりと彼の背中を撫でた。

「につ、さ……………、怖い、怖いよ、」

他の誰にも聞こえないくらいに小さく震える声で、敦樹が言う。

「助けて、シンが、僕の中の“シン”が、消えない……、助けて、」

（敦樹、何を言ってる、）

「シン、こちらにおいで」

鳴沢がそう言った瞬間、ビクンツと敦樹が不自然なくらいに体を大きく震わせた。

「敦樹、敦樹!？」

「兄さん、助けて、」

何が何やらさっぱりだが、敦樹が助けを求めているのは明らかだ。神楽は敦樹を自分の背に回し、鳴沢を睨み付ける。

「……………気に入らん。主に似るんだな、芝貫よ」

「何のことだ」

春樹が一瞬だけ神楽を見るが、すぐに鳴沢に視線を戻した。

（やっぱり、春樹さまは、まだお怒りなんだ……）

当然のことだと分かっているのに、やるせなさが入み上げる。

「シンもシンだ。私が愛してやろうと言うのに、無下にしておってからに」

どうやらシンは敦樹のことらしい。敦樹はシンと呼ばれるたびに小さく嗚咽を漏らす。違う、と繰り返すのが聞こえる。

「違う、うちはシンじゃない……うちは、敦樹……神楽、敦樹……」

うちは、

「敦樹……、」

神楽は、鳴沢に言う。

「申し訳ありませんが、敦樹は連れ帰ります……。敦樹は私の大切な弟です」

「ふん。それは私の息子だぞ。お前は義理だろうが、私たちは本当の親子なんだ……親が子供を取り戻して何が悪い」

勝手な言い分に腹が立った。その実の息子を虐待していたのは誰だ？ 今回だって、手荒なことをして敦樹を拐って。

「実の息子に、虐待をしておいて勝手なことを、」

「虐待？ははっ、人聞きの悪いことを言わんでくれよ。敦樹が何と言つか知らんが、私は出来損ないの息子を仕付けていただけなんだから」

「……仕付け？」

よくある言い訳だった。平然と言える神経が信じられない。

「今も夢に見て魘されるようなことが、仕付けだど？」

自分には要らない人間なのではないかと思ひ込ませるような所作の数々が、仕付けだど？

ぞわぞわ、と体全体が粟立つ。途方もない怒りが、神楽の胸を焦がす。

いつそのこと、慄に押さえられている男が手放したナイフで鳴沢を刺してやりたい。此処に向かう車中で慄が言っていた事は、頭の片隅からも消えかけていた。

「に……さん、ダメ、」

「！」

敦樹のか細い制止の声に、神楽はビクツと体を震わせた。

「うちなら、大丈夫……だから、止めて、」

神楽が何を考えていたのか、敦樹には分かっているのだろう。必死に神楽を宥めようとしている。

「敦樹、分かった。分かったから」

「……ん、ありがとう……、」

二人のやり取りを眺めていた鳴沢が哄笑を上げた。

「義理というのにまるで本当の兄弟のようだな。シン、そいつも体でたらしこんだのか？」

「！ち、ちがっ……」

「敦樹を侮辱するな」

押し殺した声で、神楽は鳴沢に言う。

「侮辱などしていない。シンはそうでなければならんだよ」それにな、と鳴沢が不敵に笑う。

「何度も言わせるな。それは敦樹などという名前ではない……シン

だ」

「っ、」

神楽が反論しようと口を開きかけ、

「相変わらずだな、宗吾」

敬愛する上司が口を挟んだため、驚いて口をつぐんだ。しかし上司……芝貫春樹は部下の顔を見ようとはせずに、忌々しそうに顔を歪める男をじっと見詰めている。

「黙れ、」

「何もかも自分の思い通りにならないと気が済まない」

「黙れ、と言っている」

「力がないから、言葉で相手を打ち負かそうとする」

「黙れ、黙れ……」

春樹の口角が、残虐につり上がる。

「小心者なもの、変わらない」

「黙れと言っている!!」

宗吾が地の底から響いてくるような声で吼えるが、春樹は余裕の表情で彼を見返している。

「凶星か。愉快だな」

「……やはりお前はいつでも私の邪魔をするのだな」

「邪魔？そんなもの、してないぞ……お前が勝手に私の前に現れるだけじゃないか。お前が私の邪魔をしているだけだろう」

「な、何を訳のわからんことを！貴様、あの落ちこぼれがどうなっても構わんのか！」

顔を真っ赤にし、宗吾が矢継ぎ早に怒鳴るが、春樹は最早、整ったその顔に嘲笑を浮かべている。

「落ちこぼれ……謡のことか」

春樹の声のトーンが微かに下がったことに気付けたのは、もしかしたらこの場で神楽だけかも知れない。

「あれはお前と違って大人しく大人に従うしか出来ん、駄犬だからな。私の命令も素直に聞くだろうな」

「謡ですらお前の腐りきった命令など聞き入れないさ。あれは馬鹿ではあるが、愚かではないからな」

実の息子をハッキリと馬鹿と罵る。

ないことではないだろうが、褒められた行為ではない。しかし春樹には罪悪感の欠片もなさそうだった。

「……何処までも口の減らない、」

「互いにな」

「一緒にするな!」

怒鳴る鳴沢には一切の余裕がないようだった。

敦樹を薄気味悪い視線で見ていたのとは雲泥の差だ。

「シン、私と来るんだ!!」

「い…や、嫌だ、」

「何だと?」

敦樹は神楽の背中に庇われたまま、必死に鳴沢を拒絶している。

「う……うちは、帰る。兄さんと、一緒に、皆の家に帰る、」

「敦樹、」

よく言った、というように神楽は敦樹の名を漏らした。

「シン、貴様私に逆らうのか」

「……っ、も、もう……うちは昔に戻りたくないっ。あな、あなたとはいたくない、」

ぼろぼろと大粒の涙を溢しながら、そして鳴沢に恐怖を感じながらも、自分の気持ちを紡いでいく。

彼の震えを感じながら、神楽は鳴沢から敦樹を守るように背中に庇い続けた。

「芝貫と言い、シンといい……皆私を虚仮にしおって、」

怒りに、体全体が揺れている。そんな彼に追い打ちを掛けるように、春樹が言葉を重ねる。

「……面白いことを言うな。お前、自分が誰かに崇められるような人間だと思っているのか?」

「き、さまぁ…っ、」

鳴沢は、ぼんやりと成り行きを見ている蓮音に怒鳴る。

「蓮音！こいつらをどうにかしろ！！」「あ？」

「あ？じゃないっ！シンをあの優男から取り返せっ！！」

「……………っ、」

再び名前を口にされ、敦樹が怯える。

（あの女性は一体誰なんだ……………この男の部下なら、命令には実直な筈。敦樹を、どうにかして逃がさないと、）

神楽が必死に頭を回していると、

「馬鹿者、後ろだ！！」

部屋に侵入してからずっと男を押さえ付けていた慄がいきなり怒鳴った。

「んっ！！」

「敦樹っ！！」

自宅に侵入されたときと同じ失態を、神楽はおかしてしまった。

「っ、」

敦樹を後ろから拘束しているのは、女だった。ベージュのパンツスーツを着た、まだ若い女だ。

（……………この、女性は、）

鳴沢がテレビ出演する際に彼のそばに控えている人だ、と神楽は気付いた。

「よくやった、比企^{ひき}！シンをそのまま連れて行け！！」

お誉めの言葉を受け、比企と呼ばれた女が微かに微笑む。

「敦樹！！」

「……………っ、」

勝手をされては堪らない。神楽は、腕を女に伸ばす。女性を傷付けることには抵抗があるが、敦樹を守るためならば自分の信条などかなぐり捨ててやる。

「敦樹を放せっ！！」

女の腕を掴み、敦樹の口を覆っている手を引き剥がす。

「兄さ……………っ、」

兄を呼ぼうとした敦樹だが、いきなり顔を引きつらせたかと思うと、体をくの字に折った。

「敦樹……！」

名前を言った瞬間、敦樹の口が大きく開き激しい咳をほとばしらせた。

「な、なに、」

突然の敦樹の異常に、女が動揺する。

「けほっ、げほっ……がはっ」

発作だ。しかも重度の。

神楽は女を突き飛ばし、床に崩れ落ちる弟を慌てて支えた。

「ぜえぜえ、はっ、がほっ、けほっ……につ、さ」

「話さなくて良いから！大丈夫か、敦樹、」

敦樹を抱き締め、背中を何度も上下に擦ってやる。

「っ、」

薬が此処にないことが悔やまれる。

「はあ、はあ……けほっ、」

顔を真っ赤にして咳き込んでいた敦樹の体から力が抜けていく。

「敦樹、大丈夫？」

「う……ん、」

「比企、何をしている！シンを早く捕らえんか！」

呆然と事態を見守っていた比企に、鳴沢の怒声が向けられる。

「は、はいっ！」

「敦樹に触るな……！」

「っ！」

神楽に一喝され、比企がびくりと体を強張らせる。

「お願いですから、敦樹をそっとしておいてあげて下さい。敦樹を、これ以上傷付けないで、」

敦樹を腕の中に閉じ込め、神楽は懇願する。敦樹の、必死に上下する肩を感じながら。

「私の弟を傷付けないで下さいっ……！」

神楽の慟哭が、室内に虚しく響いた。

比企が完全に硬直し、ぴくりとも動かなくなる。

「比企、何をしている！！早くシンを……っ！」

「うるさいよ、父様」

不意に、蓮音の気だるげなそんな声が響いた。

「シン……じゃなかった、敦樹君は神楽家に帰りたんだよ。それを餓鬼みたいにぎゃあぎゃあ言わないでよ、良い歳したオッサンが」
「なっ、」

「あんたは昔からそうだった。自分の思い通りにいかないと何でも声高に叫んで喚いて。子供心にも呆れ果ててた」

全員が蓮音の暴露に、聞き入っている。

一番衝撃を顔にのせているのは鳴沢だが。

「敦樹君は一生あんたのものにはならないよ」

蓮音はゆっくり歩き出すと、鳴沢の横をすり抜け神楽に守られている敦樹のそばに立った。

「！」

「大丈夫、何もしない」

身構えた神楽に小さく呟き、そつと敦樹の頭を撫でた。戸惑った瞳が、気だるげな瞳とぶつかる。

「君は、この人が本当に好きなんだね……本当の兄弟に見えるよ」

「あ、あの……、」

「史哉の馬鹿が酷いことをしたね……ちゃんと飼育出来てない飼い主の責任だ……悪かったね」

蓮音が心から謝罪していることを感じ取ったのか、敦樹は戸惑いながらもこくりと頷いた。

「神楽、樹……だっけ。この子のこと、よろしくね」

「……あなたと、敦樹は、」

蓮音は神楽の問いに、儚い笑みを浮かべて応えた。

「言わぬが花、ってね」

「……………」

「さて、」

蓮音は背筋を伸ばすと、立ち尽くす“父親”を見た。

「父様、諦めて下さい。敦樹君は、あなたのペットではありません」
それでも、

「それでも尚、見苦しく抵抗するなら私はあなたを」

「……………比企、」

「はっ、はいっ」

大人しく敦樹たちを解放することにしたのか、鳴沢が秘書を呼ぶ。
硬直したままだった秘書は、ピンと背筋を伸ばし返事をする。

「……………あれを捕えろ」

「えっ、」

「あれを捕えろ！！」

比企はもう一度頷くと、慌てて携帯を開いた。

「！！」

春樹が何かに気付いたように比企の行動を阻止しようとするが、遅い。

比企は動揺を浮かべながらも、電話に出た相手に向けて、告げた。

「Aの1、発動してください」
と。

抵抗（後書き）

次回は謡がメイン……の予定です。

謡の拉致（前書き）

鳴沢の毒牙が、ついに謡にも降りかかります……。。

謡の拉致

謡は戸惑い顔で、ずっと俯き続ける葉弓の旋毛つむじを見詰めていた。

（ずっとこの調子だ・・・）

公道で喚きたてた後、葉弓は俯いてぴくりとも動かなくなった。

渋面の涼子がどうにか彼女を謡の家に導きダイニングの椅子に座らせたものの、ずっとだんまりの状態が続いているのだ。

自分は一体どうしたら良いのだろう、と謡は溜息を吐いた。

どうやら自分には何やら秘密があるらしい、とまでは何となく分かったのだが。

「榆乃木さん、」

涼子は、と言えば彼女はソファで横になっている愁をじつと見下ろしてこちらにも動かずにいる。

「・・・先日会った時は、酷く頼り無さそうな弱いイメージしか持てなかったが、なかなか度胸があるじゃないか。謡を守りたかったんだろうな」

「そう・・・ですね」

愁が自分をどれほど慕っているのかを今更思い知らされた。

葉弓を前にして、とても恐かった筈なのに、必死に謡を助けようとしてくれた。

（こんな僕を・・・どうして愁君は、）

自分は愁に何をしているわけでもない。

なのにどうしてこんなにも自分なんかを慕ってくれるのだろう。

謡には分からなかった。

「・・・それにしても、謡」

ようやく涼子が動き、謡の横に立った。謡はゆるゆると顔を上げ、彼女と目を合わせた。

涼子の手が、そっと謡の頭を撫でた。

「に、榆乃木さんっ？」

「酷い顔をしている。……大丈夫か？」

謡は顔を真っ赤にしながら、必死に何度も頷く。なんだか幼児になったみたいで、とても恥ずかしい。

「だ、大丈夫です。僕は、全然……」

本当は体も心も疲れていたけれど、謡は強がる癖が身に染み付いていた。

「謡、嘘が下手だな」

「う、嘘なんかじゃっ、」

嘘なんかじゃない。

自分は大丈夫だ。自分は、ただ災厄を周囲に撒き散らしているだけ。大変なのは、いつだって自分意外の、自分の周囲にいる人だけだ。

愁に然り、神楽に然り。

「僕は、本当に」

本当に平気です、と強がりの言葉を発そうとした時、彼らは現れた。いきなりダイニングと玄関を繋ぐドアが開き、三人の黒スーツを着たサングラスの男たちが部屋に闖入してきたのだ。

「!？」

謡も、流石の涼子も当然の如く虚を突かれる。

その中で、一人の男が謡に目を留めると身につけたインカムに囁いた。

「対象を発見、即時に捕らえます」

「謡、逃げる……!」

瞬時に男たちの意図を悟った涼子は彼女らしくない狼狽した声で謡に怒鳴った。

「榆乃木さんは、」

「良いから早く!こいつらの目的は謡だ!」

「逃がすな!」

謡は状況をサッパリ掴めなかったが、涼子の言う通りにしたほうが良いのだろう。だが、

「愁君、」

愁を置いて逃げるわけには行かない。

謡は玄関に向かい掛けた足を、愁の眠るソファに向け直した。

「謡！」

一度に二人の相手をしていた涼子が謡の行動に気付いて、声を上げる。だが男のうちの一人がサバイバルナイフを突き出してきたため、そちらに集中せざるを得なくなる。

「愁君……っ！」

愁に近寄る謡の前に、最後の一人が立ちほだかる。

身長はゆづに190を越えているであろう。サングラスで目は見えないが、きつと冷たく凍った瞳をしているのだらうと謡は直感で悟った。

「あ、あの」

「芝貫謡だな」

男の口調は一切の抑揚がなかった。オールバックにした額に、十字の傷跡があることに気付く。

謡は男の気迫に圧され、一歩引いた。しかし男は距離を詰めてくる。

「一緒に来てもらいたいところがある」

「あ、あなたは………？」

謡の問いに、男は応えない。筋骨逞しい腕を伸ばし、謡を捕らえんとする。

「謡、逃げる。逃げなさい！！」

二人の男をどうにか往なしながら、涼子が謡に言う。

葉弓は相変わらず俯いたままで、この騒乱にピクリとも反応しない。

「！」

謡はずっと退いていたが、ついにその背が壁についてしまう。

「大人しく従えば悪いようにはしない。ただついてきてもらうだけで良い」

「そ、そんなこと言われても、」

まず素性を明かしてもらわないことには素直にほいほい付き従う訳にはいかない。

「お前に選択肢はないんだぞ」

男は何故か謡の前を離れ、部屋の中央に歩いて行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

その行動を謡は怪訝に思ったものの、男の意図に気付いてハッと息を呑む。

「駄目っ！」

男は物騒にもスーツの内ポケットから銃を取り出した。ソファで気絶したように眠る愁に狙いを定めたのだ。

「こいつを殺されたくはないだろう？」

「駄目、止める・・・・・・・・」

男がサングラスの下で、目を細めたような気が、した。
安全装置を外す音。

「くそ！」

涼子が呻き、愁を助けようとするが男たちに阻まれる。

「こら葉弓！何ボケツとしてる！！」

葉弓に怒鳴っても、彼女は動かない。眠っているのではあるまいに。

「さあどうする？」

男たちは一体何者なのか。素性のわからない相手に着いていって、無事に帰れる保障など当然、あるわけが無い。

でも、

（このままじゃ、愁君が）

さつきは愁が自分を守ろうとしてくれた。なら、今度は。

「わか・・・・りました。だから、愁君を解放してください」

「謡・・・・・・・・！」

「その、女の人も」

謡が目を閉じて掠れた声で言うと、男は愁から銃口を逸らした。
ゆっくり、男が近付いて来る気配がする。

そして、

「あうつ・・・・・・・・！」

いきなり胸倉を掴まれ、宙吊りにされる。

「んっ、」

「良い子だ、芝貫謡」

その状態のまま、運ばれる。なんて怪力だ、と薄れる意識の中で謡は思う。

「お前ら、俺が車で出るまでそのお嬢さんのお相手をしておけ」

「了解」

「謡！」

「榆乃木、さ……っ」

「黙ってる」

空いた手で、腹部を強打される。

「っ、がは……っ!!」

力が抜けたところを乱雑に肩に乗せられる。狩られた動物みただ、と謡は自嘲する。

逆さまになる視界の中、涼子が男たちをどうにか捌こうとしている姿が目に入る。

（にれの……きさん、無理……、しない、で……）
自分のためなんかには、傷付かないで。

そんなことを思いながら、謡は気を失った。

「………Aの1、成功とのこと」

比企の言葉に、鳴沢が喜悦を浮かべる。そして春樹と神楽を等分に見詰めながらだらしなく緩んだ口で衝撃的な言葉を発した。

「お前らの大事なものを捕らえた……すぐに此処へやつてくるはずだ」

神楽がハッと息を吞んで、顔を蒼くする。

「まさか、」

「ああ、その真逆さ。芝貫謡を部下が拉致したんだよ」

「！」

「すぐに到着するだろうさ………そこで提案だ、神楽樹」

目の前の男が何を言おうとしているのか、神楽には丸分かりだった。だからこそ、唇を噛んだ。もっとも巻き込みたくない人を巻き込んでしまった、という後悔の念とともに。

「シンと謡を交換、と行こうじゃないか」

神楽は思わず上司を見たが、上司の整った顔には一切の動揺がない。

「は、春樹さま、」

「何をそんなに慌てている、神楽」

「う、謡様が拉致されたのですよ！？春樹さまはなんとも思われな
いのですか？！」

思わず声が荒ぶってしまうが、どうしようもない。

何故実の息子が拉致されたのにこつも落ち着いていられるのか。

怪我をしたのではないか、ちゃんと生きているのかとか、心配にならないのだろうか。不安に、ならないのだろうか。

「………どうせ謡はここに連れられてくるのだろうか？ならばその

ときに取り返せば良い」

春樹の言葉にハツとする。

「神楽、お前にしては頭が回っていないようだな。少し落ち着きなさい」

「は、はい……」

それにしても、体の状態などへの懸念はないのかと思うが。

春樹は冷徹な瞳で、鳴沢を見返す。鳴沢は薄ら笑いを浮かべている。

「謡と敦樹君を交換……か。いろいろと小細工を思いつくな」

「なんとでも言え。……なあシン？」

ビクツと敦樹が震える。大分落ち着いてきていたのに、余計なことを……と神楽は鳴沢を憎く思う。

「お前が素直に私のもとへ戻ってこないから、他人が傷付くことになるんだよ？」

「あ……う、」

「私の元へ戻ってくれば、謡は返してやる……シンが言うことを聞けば、誰も傷付かないんだよ。シンは優しいから、誰かが傷付くのは嫌だろう？」

敦樹の、神楽の服を掴んでいた手の力が弱まる。

「敦樹？」

「う、うち……」

「敦樹、あいつの言うことは、」

「に……兄さん、“謡さん”って、前に兄さんが言ってた、大事な人”なんでしょう？」

「あ、」

「う、うちの所為で、その人、」

今にも泣き出しそうな顔をしている敦樹を、神楽が抱き締める。

「に……さ、」

「大丈夫。敦樹も謡様も同じくらいに大事なんだ……だから、変な事は考えないで」

「で、でも……」

「敦樹と謡様を交換なんて、絶対にしない。二人はものじゃなくて人間なんだから、そんなことはしない」

「う、うん……」

「ははは！！大した自信だな、神楽樹！謡がお前の前で痛い目にあってもそんな悠長なことを言っていられるのかな！？」

細い目を見開き、鳴沢が品のない笑い声を上げる。

「そんなこと、させるか！」

「此処は私のテリトリーだぞ？阻止、出来るかな？」

「そんなの関係ない。謡様も敦樹も、絶対に傷つけさせない」
神楽の睨みにも、鳴沢は哄笑を返す。

「ふん。強がつていられるのもいまのうちだ」

「……………っ、」

悔しそうに歯噛みする兄を、敦樹は不安そうな瞳で見上げていた。

謡の拉致（後書き）

閲覧、ありがとうございます。次回は藪内と渉のほうに寄り道するかも……しないかも。つまりは未定なわけです！

精一杯の恩返しと、揺れる想い（前書き）

サブタイ考えるのが難しいです・・・。

そしてまた謡が可哀想な状況に、なってます・・・。

精一杯の恩返しと、揺れる想い

「！！」

ガタンツと大きく揺れた衝撃で、謡は覚醒した。一体自分に何が起こったのだろうと状況を把握しようとした謡だが、手首に激しい痛みが走って目を眇めた。

そして、やけに息苦しいことに気付く。

（僕は・・・、一体）

混乱した頭で考えようとしても、一向にうまくいかない。ただ分かっただけは、

両手両足を縛られ、猿轡を噛まされ、車に寝かされていること。

（この人たちは一体誰なんだ、）

自分をどうする気なんだろう。

（そうだ、榆乃木さんは・・・愁君は・・・？）

涼子は大丈夫だろうと思えるのに、愁のことが不安で仕方ない。また厄介なことに巻き込んでしまい、それが心苦しい。

「目が覚めたか、芝貫謡」

「っ！」

気付けば、謡を拉致したサングラスの男がこちらに身を乗り出していた。

「そんなに怯えることはない。大人しくしていればいい」

謡は彼から目をそらした。車窓には黒いシートが貼ってあり、外を見ることは叶わない。

「もうすぐ着くぞ」

男の言葉は、酷く遠くで聞こえた。

謡が連れて来られる以上、神楽たちに動くことは出来ずに居た。ただじりじりと時間が経つのを待つだけだ。

春樹は何を考えているのか、目を閉じてその瘦躯を壁にもたせかけているだけ。

「兄さん、」

さつきから敦樹は不安な双眸で神楽を見上げては彼の存在を確かめるようにギュッと腰に回した腕に力を込めてくる。

「敦樹、大丈夫だから」

「・・・・・・」

敦樹が何か言いかけたとき、

「来たか」

ずっと口を開かなかった春樹がボソッとそう呟いた。

「春樹さま？」

怪訝に思った神楽が彼を呼ぶが、春樹は無反応だった。

ドアに、一人の男がやってきた。サングラスをした、身長が190はあるかと言う大男だった。

「鳴沢様、ただいま戻りました」

「おお帰ったか！餓鬼は？」

「こちらに」

男が身を引くと同時、両手を縛られ猿轡を噛まされた謡が倒れこむように中に入ってきた。

「謡様！！」

「動くな」

「！！！」

サングラスの大男が謡を羽交い絞めにし、全員に見せしめるように彼の米神あたりに銃口を宛がった。

金縛りにあったように、謡に駆け寄ろうとした神楽の足が硬直する。「下手な動きをしてみろ。こいつは、死ぬ」

死の恐怖に、謡が体を震わせながら涙を目の端に浮かべる。

「んん・・・っ！」

鳴沢が不敵な笑みを浮かべ、靴の音をカツカツと響かせながら謡の横へと移動する。

「んう」

荒々しい手つきで謡の顎を掴み、

「さあ交換といこうか、神楽。シンとこいつを、な」と言っ

「卑怯な、」

「なんとでも言え。シンを手に入れるためならば私はなんだってするさ！シンはそれだけの子どもなんだよ！」

神楽は唇を噛んで春樹を見た。謡が来たら取り返せば良い、というようなことを言っていたが、どうする気なのだろう。

春樹は何の感情もない瞳で謡や鳴沢を眺めていた。

謡が助けを請うように父親を見ても、父親は無反応で。まるで息子の不手際を糾弾するように。

「兄さん、うち、行く」

「！？」

突然だった。敦樹が決然とした声でそう言い、神楽から離れたのである。

「敦樹！！」

慌てて彼の腕を掴めば、敦樹は今にも泣き出しそうな顔で綺麗に笑った。

「良いんだ、うちなんかのせいで・・・あの人が傷付くのは嫌だから。兄さんの大事な人を、傷付けたくないから」

そんな震える声で言われても。そんな涙の滲む瞳で微笑まれても。

「敦樹、馬鹿なことを考えるなっ」

「うち、兄さんに色んなものを貰ったから、」

「え？」

「恩返し、ね」

これの何処が恩返しだ。恩を返すなら、敦樹が幸せになってくれることでないと思う。

「うちには兄さんや母さん、父さんと過ごせた思い出があるから。それだけで、生きていける」

それが敦樹の精一杯な強がりだと、神楽には手に取るように分かった。本当はいやだと思っていることくらい、すぐに分かる。本当の兄弟じゃないけど、本当の家族じゃないけど、それくらい分かる。
・・・・・・痛いほどに。

「敦樹、頼むから」

変なことは考えなくてくれ。神楽がそう思ったとき、

パチパチパチ、という乾いた音が狭い空間に響いた。神楽も敦樹も凜も鳴沢も謡も大男も蓮音も、全員が音の発信源を見遣る。

発信源は、春樹だった。

「いや、その意気や良し、だ敦樹君。私は君のような人間を歓迎する。君を息子にしたいくらいだ」

一頻り拍手したあと、すぐ眉を顰め、

「・・・・・・うちの盆暗とは大違いだ」

射竦めるように、囚われた己が息子を見た。ビクッと謡が視線を受けて体を震わせる。

「まあ端から何も期待はしていない」

背を壁から離すと、春樹は敦樹のもとへ歩いた。

「敦樹君。君があればのために自分を犠牲にする必要はない」

「で、でも・・・・このままじゃあ、」

敦樹の頭をそつと撫で、春樹は不敵に微笑んだ。

「私に考えがある」

やはり戻って来てしまった、と藪内は病院を見上げながら憂いたため息をついた。

（くそっ！散々傷付けといて、今更俺は何のつもりなんだ……っ）
時刻は午後四時前。まだ面会は大丈夫だろうが、どの面下げてこのこ渉に会えると言うのだ。

（でも俺のこと、渉は覚えてないんだよな）
顔を見るくらいなら良いんじゃないか、と藪内の中の弱い部分が鎌首を擡^{もた}げる。

（……いや、俺は近付くことすらしない方がいいか）
やっぱり家に帰ろう。そう決めて踵を返しかけた彼に、かかる声があった。

「あ、兄貴の同級生」

「？」

声の方を見れば、制服姿の男子高校生がいた。

「お前は、」

芝貫謡の弟、芝貫誓が何も考えていないような表情で笑う。今の藪内にとっては腹立たしいことこの上ない顔だ。

「病院に来たんじゃないの？入らないんですか？」

「てめえに関係ないだろ」

「今にも泣きそうな顔してますけど、怪我でもしてるんですか？」

「!？」

思わず両手で顔に触れると、誓がケタケタと軽い笑い声を立てた。

「嘘ですよ、嘘」

「お前！」

何からなにまで兄貴に似てないな、と藪内は更に苛立つ。

「会えばいいじゃないですか」

「っ!？」

「“その人”と何があったかは知らないけど、会いたいなら会えばいい」

（こいつ・・・何処まで知ってる？）

急に目の前の少年が不気味な存在に思えて来て、藪内は眉を顰めた。

「あなたは兄貴に比べたら全然自由だ。だからその自由を謳歌すべきですよ。会いたい人とも、会えるときに会っておかないと・・・」

・・・

意味深な台詞。皮膚が粟立つ感覚。

「お前、渉をどうする気だ・・・!!」

これ以上、渉を傷付けたくはない。これ以上、泣かせたくない。

藪内が怒鳴ると、誓がにつこりと微笑んだ。

「渉って言うんだ？あなたの会いたい人」

「・・・!!」

完全に嵌められた。

「行かないの？ここで渉さんをお見舞いに行かないで、後悔しないですか？」

今になって、誓の瞳が一切笑っていないことに藪内は気付いた。

「お前、一体」

「良かったら俺もお見舞いさせて下さいよ」

誓が近付いて来て、藪内の腕を掴んだ。その瞬間、本当に一瞬だけ体全体にビリッと電流が走った、ような気がした。

「ね？」

「・・・笑うと、兄である謡に似ていると思った。」

「勝手にしろ」

渉の見舞いに行くことを躊躇すらしていたのに、大して知りもしない相手と彼の見舞いに行く。

頭のどこかで違和感を訴えていたが、藪内は誓を連れて院内に足を運んだ。

精一杯の恩返しと、揺れる想い（後書き）

次は渉を出したいな、と思ってます。

やっぱり予定ですが・・・。

そして影の薄めな誓がようやく前面に出てきました。あくまで予定ですが、そろそろ彼を前に出すつもりです。

それでわまた。今回も御覧いただいて感謝です。

記憶く藪内奏と藍田渉2（前書き）

ようやく藪内と渉の話が進みます。

歪んだ本性を垣間見せる誓も登場します。

謡たちはお休み。

記憶 藪内奏と藍田渉 2

コンコンというノックの音が聞こえた。耳の調子がおかしいのか、酷く遠くに聞こえたけど、確かに聞こえた。

“お母さん”というらしい女の人が、椅子から立ち上がる気配がして、次いでドアがスライドされる音がした。

「奏君！・・・と、こちらは？」

「あ、えつと」

奏、という人の声。その声を聞くと、妙に安心できてしまうのだろう。

「どうも。俺、芝貫誓って言います！」

しばぬきちかい。

しばぬき……。何処かで聞いたことのあるような言葉だと思った。

「しばぬき……。まさか芝貫グループの……！？」

「はい。お初にお目にかかります」

「け、けど芝貫グループの方が、私たちに何の御用で……」

「その人が涉さん？」

その人、というのが自分のことを指しているのだろうことは予想出来た。

「そう、その人が……ね」

顔を見ていないのに、今話している人の顔が笑みを浮かべたのが分かった。

なんだか怖い人だな、と他人事のように思った。

誓は、人口呼吸器をつけゆっくり肩を上下させる藍田渉を繁々と眺めた。

（こいつが藍田渉……。兄貴と同年には見えんな）

恐らくその顔が童顔過ぎるためと、細く小柄な体つきのためだろう。誓はゆっくりとベッドの上の少年に近付いて行く。

「初めまして、藍田渉さん」

「……………」

呼び掛けると、虚ろな瞳がこちらを見た。

「し、芝貫さんその子は今記憶が、」

母親が言葉を濁らせ、誓に言う。

「……記憶、喪失になっていまして、」

認めたくない、と母親は言外に臭わせていた。

「ふむ。自分が誰かも分からない、と？」

「は、はい」

誓は首を傾げ、

「それはおかしいな」

と言う。

「え？」

「あなたも、ご自身の息子さんが本当に記憶を亡くしているか半信半疑なんでしょう？」

「！」

母親が息を詰まらせ、思わず藪内を見た。

「あなたが記憶喪失を疑う理由があるはずです。それを暴露したら、何らかの反応があるかも知れませんか？」

先程から誓の口調は何処か平坦だが、彼が何かを企んでいそうなことを藪内は悟った。

「お前、一体、」

「藪内さんだって、渉さんが記憶を取り戻したら嬉しいでしょう？」

「っ！」

渉の瞳が誓から逸れ、ドア口に突っ立ったままの藪内を捉えようとする。だがそれを誓が体で遮った。

一瞬、呼吸器の下の息遣いが荒くなる。

「……………記憶なんてね、意外と簡単に操作出来るんですよ。お三方？」

「お前、渉が記憶喪失のフリをしてるって言いたいのか…………？」

「そんな顔で睨まないで下さいよ、怖いし。…………それに、俺を責める資格、あなたにはないですよね？」

「！そ、それは…っ、」

詰まる藪内に、誓は追い討ちをかける。

「あなたは渉さんを沢山傷付けたんでしょう？もし俺が今から彼を傷付けるとして…………俺はあなたと同じことをしただけってことになりますよね？」

「お、俺は…………」

そうだ。自分だって散々渉を傷付けてきた。それなのに他人が渉を傷付けるのは我慢ならないと言うのか？…………そんな資格、ないのに。藪内は、居たたまれなくなって顔を俯かせた。渉の顔を見る勇気がない。

「……………」

誓の口端に、嘲笑のこもった笑みが刻まれる。

「渉さん、あなたは本当に記憶を喪っているんですか？」

渉の目が、藪内を求めるかのように目まぐるしく動く。だが誓の顔がそれを阻む。

「今あなたと話したいのは俺の方ですよ？集中してください」

何を思ったか、誓が渉に向かってスツと指を伸ばした。渉がベッドの上で身動きする。

「渉さんのお母さん」

「は、はいっ」

今まで誓の存在に吞まれて黙って立ち尽くしていた渉の母親が、慌

てて返事をする。

「涉さんが本当に記憶喪失かどうか疑っている理由を、教えてもらえますか？」

「う、疑っている、と言いますか、」

“芝貫”というブランドに、母親は完全に腰が低くなっている。

「疑問に思ったことはありますけど・・・その、涉が激しい頭痛を訴えまして・・・」

「頭痛？この場所です？」

母親は一つ頷いて、

「その、奏君の名前を叫びながら頭が痛いと言っていて・・・」
「！」

顔を跳ね上げた藪内に、母親が気遣わしげな視線を送って先を続けた。

「奏君、助けて・・・って、」

「な、・・・んで、」

藪内には涉の考えが本当に理解できなくなっていた。

「なんでだ！」

大声を上げて歩き出し、誓を押しつけて、藪内は涉の前に立った。ようやく視界に藪内が入ってきたことが嬉しいのか、涉が目を細める。

「なんで、なんで涉は・・・！なんで、」

上手く言葉がまとまらない。頭の中が、胸の中が熱い。

気ばかりが急いで、気のきいた言葉が出て来ない。ただただ溢れそうな涙を堪えながら、『なんで』を繰り返す。

「なんで、なんで・・・！」

こんな俺のことを呼ぶんだ。なんで、どうして！

『大事な友達だから』

以前、涉はそう言ってくれた。だが、“友達”だからと言って何でも許せるのか？……自分だったら絶対に無理だ。

友達だなんてもう思わなくなるだろう。なのに、

「どうして、こんな俺のことなんか・・・友達だなんて、」

どうにか声を絞り出す藪内を、目を細めたままの渉がじっと見詰めている。渉は何を思っているのだろう。

「し、芝貫さん・・・本当に渉は記憶喪失のふりを？」

完全なる部外者に伺いを立てる渉の母親。誓がそれに応えて彼女を振り返る。

「・・・ふりかどうかは定かじゃないですが、“忘れたつもり”になっている可能性はあると思いますよ」

「忘れた・・・つもり？」

「俺からはこれ以上言うことはないですが、確かなことが一つだけあります。・・・記憶ってね、簡単に嘘をつけるんですよ」

「うそ、」

「記憶は、人の意思で勝手に好き放題変えられるんです」

誓に顔に浮かぶ、空虚な笑み。

「藪内さん、渉さんが“あなたのことを思い出せる”かどうかは、全てあなたにかかっているんだと思いますよ」

「・・・」

こいつは本当に謡の実弟なのか、藪内には信じられなくなる。謡なら口にしないような言葉を次々と重ねて来る。

他者をひどく揺さぶる、言葉を。

「それと渉さん、兄が随分お世話になったみたいで、感謝します」
ゆっくりと病室を出て行く誓だが、ドアの前で足を止めてそんなことを言う。

藪内が彼を振り返るが、誓は後ろを向いており顔までは見えない。

「兄が壊れると、“楽しみ”がなくなるので」

「!？」

「それではお邪魔しました。渉さんのお母さん、俺はこれで」

「あつ、は、はいっ」

完全に誓の言葉や表情に吞まれていた渉の母親は、ハッと我に返って慌てて返事をした。

「おい、待て！」

最後のはどういう意味だと誓に問い詰めようと思ったのだが、右手を掴まれて意識が誓から離れる。

「渉……？」

「い……か、な……で」

行かないで。そう聞こえたのは幻聴だろうか。自分の願望だろうか。だって渉は記憶喪失なのだから。

藪内のことなど分かるう筈もないのだから。

「そ……ば、いて、」

「わ、分かった。分かったからそんな、哀しそうな顔するな」

ずっと笑っていて欲しい。幼い頃はずっとそう思っていた。そして、今もそう思った。

久しく忘れていた感情を、思い出す。

「そばにいる、から」

自分がどれだけ酷い人間か、知っている。純粹で優しい渉のそばにいる資格などないことも分かっている。

だけど、今だけは。せめて。渉が眠りにつくまでは。

「だから、笑え」

背後で、誓が病室を出て行ったのを感じたが藪内はもう振り返らなかった。

今向き合うべきなのは誓ではない。渉のだと分かったから。

藪内はしゃがみ込み、渉の手を握り返した。

渉が小さく微笑んだ……気がした。

入院患者や病院関係者、見舞い客などが行き来する院内を、誓は顔を伏せ気味にして歩いていた。

何故なら、

（愉快すぎて、笑える）

からだ。一人でにやけている顔を見られることが嫌で、俯いているのだ。人間は一人で歩いている者が笑っていると無気味だと捉えるからだ。ただ誓は“不気味”と思われるのが嫌ではなく、そうすることでは者に“自分”という存在が印象付けられるのが嫌なのだ。

（なんだ、あの滑稽な“友情ごっこ”は。見ていて反吐が出そうだった）

本当はもつと渉と敷内を揺さぶりたかった。自分の中のサディステイックな部分が酷く刺激されたから。

だが彼らのことばかりに気を取られるわけには行かず、こうして辞して来たわけだが。

（・・・どいつもこいつも、なんで生きてるんだろうな）

ある一角で、入院患者らしい小学四年生くらいのパジャマ姿の男の子がぎゃあぎゃあ泣き喚きながら地団太を踏んでいる場面に出くわす。まだ日が浅いのか、真新しいナース服の看護士が必死に宥めようとしているがうまく行っていないようだ。

「お願いだから良太くん！病室に戻ろう、ね？」

「嫌だ、嫌だ。わあああああん！！」

「どうしたんですか？」

子どもにいいように翻弄されている大人が哀れで、誓は声を掛けた。あくまで彼の気まぐれではあるが。

「あ、その、」

胸元のネームプレートには、御厨とある。

「俺に任せてください」

誓は御厨にっこりと微笑み、男の子と目線を合わせるためにしゃ

がみ込んだ。

「少年」

「う、ひぐつ、ひつく、」

腕で擦っていない方の目で、男の子は誓を見る。初めて見る人間を、怪訝そうに。

「どうして泣いてる？」

謡のように、上手に宥めることが出来るだろうか。謡なら、駄々を捏ねる子ども……しかも入院をして精神的に参っている者を、どうやって。

誓の問いに、しかし素直な答えが返って来る訳もなく。すぐに両目を隠し、ぎゃあぎゃああと更に泣き喚く。

「りよ、良太くんっ」

御厨までも泣き出しそうに顔を歪め出す始末だ。

誓ははあ、とため息をつくと良太少年の頭を鷲掴みした。

「！？」

いきなりの行為に、少年も御厨もギョツとする。だが誓は構わなかった。

「……母親が恋しいんだな？」

「……！」

「なんだ、たまにしか面会に来ないのか？」

既に子どもに対する言葉使いではなくなり、加えて誓の心は自分の“過去”に飛びつつある。

……母親に振り向いて欲しくて、いろいろ努力はしたけれど。

硝子玉のようなあの瞳には、自分は映らず、常に誓の兄ばかりを追いかけて……

「だけど、会いに来て欲しいならちゃんと言わなきゃ。伝わらないよ？」

「だ、だって」

ようやく少年が誓と話す気になったようだ。誓が頭を離すと、乱れた髪を小さな手で直しながら、

「おかあさん、良二のことで、大変そうだから、」

たどたどしくはあるが、ちゃんと誓の目を見て話す。

「良二？」

「あの、この子の双子の弟さんなんです。生まれつき肺に欠陥があつて、その……ずっとこの病院に入院してて、」

看護師がそんなに簡単に個人情報进行を明らかにするのもどうかと思つたが、誓はその点の言及は止めておくことにした。

「なるほど。おかあさんは良二の看病が大変だから我が儘は言えない。でも一人は寂しい。だから看護師さんの気を引くために我が儘を言つてると」

誓がそう言つと、少年は顔を真っ赤にして円らな瞳で彼を睨みつけた。

「ぼ、ぼく寂しくなんか無いもん！」

「嘘つけ」

誓は苦笑し、少年の頭を撫でた。柔らかい髪が、さらさらと指の間を滑つていく。誓を睨んではいるが、頭を撫でられると気持ちいいのか文句は言わないし、身動き一つしない。基本的に人見知りや物怖じをしない性質なのかも知れない。

（つまりは俺と“同類”って訳か）

いつのまにやら泣き止んだ少年に安堵したのか、御厨という看護師はホッとしているようだ。

「あの、すみません。ありがとうございます」

「いえ、俺は別に」

結果的に少年が勝手に泣きやんだだけで誓は特に何かしたという達成感のようなものは一切無かつた。

「それじゃ、俺はこれで」

もう一度少年の頭を撫でてから、誓は歩き出した。御厨が自分の後ろ姿を、何処か観察するような目で見ていることには、気付かずに。

さて、と誓は病院前のとおりで足を止めると天を振り仰いだ。病院に入る前は茜色だった空は、来る夜に向けて徐々に藍色に変化しつつある。

（ノリで藪内に着いてったけど、これからどうするかな、）

「誓様」

いきなり誓の背後に、成宮夏が音もなく立った。声は潜まり、心なしか緊迫しているように思う。

「おう、夏。状況は？」

「・・・謡様が首相である鳴沢宗吾の部下に拉致され、鳴沢の拠点へ移送されました」

「鳴沢が兄貴を誘拐？」

何故そうなる。とりあえず世間的には芝貫グループ社長の後継ぎになっている謡を攫ってどうする？芝貫全体を敵に回すだけなのに。

（確かに鳴沢は阿呆だが、芝貫を敵に回すか？そんな愚かな話が、）

「・・・夏。誘拐に至った経緯を話せ」

「はい」

夏がぼそぼそと口にする言葉たちを、誓は全くの無反応で聞く。

「・・・全てを聞き終え、誓はやれやれと肩を竦めた。

「そんなことにまでなつてるとはねえ。流石に予想外だ」

神楽には義弟がおり、その義弟は芝貫の純血ということ。しかも鳴沢の実子であり、昔に彼から様々な暴行などの虐待を受けていたこと。義弟の本名は“鳴沢シン”。

その義弟が鳴沢に誘拐されたことで神楽と凜と成宮秋が鳴沢の拠点に行ったこと。

神楽の実弟の誘拐を聞きつけた、誓の父である芝貫春樹もそこへ向かったこと。

シンをどうしても手に入れたい鳴沢が交換条件の材料にすべく謡を拉致したこと。

「で？」

「今は膠着状態ですが、すぐに決着がつくでしょう。鳴沢は一時の感情に任せて、芝貫を敵に回す愚行を犯しています。その時点で、彼の“敗北”は決していますから」

夏の言葉に、誓がクスツと笑いを溢す。

「そうだな。明日は首相が入れ替わって政界もメディアも大騒ぎだろうね」

「・・・それは芝貫に迎合していない者たちだけでしょう？社長の手にかかれれば、ほんの数分でもみ消せることでしょうか」

「違うない・・・そういえば秋捕縛の件はどうなった？」

今度は夏が微笑む番だった。

「秋の罪は不問、ということを決まったようですよ」

誰が決めたのか、という質問を誓はしなかった。

「よかったな」

と他人事のように呟き、家に向かって再び歩き出した。影のように付き従う、己の護衛とともに。

記憶 藪内奏と藍田渉 2 (後書き)

藪内と渉の話、引つ張りすぎですか・・・？
次話では、謡たちのほうへ戻ると思います。
前話で春樹が言った“良い考え”とは？
でわ、また次回。閲覧、有難うございます。

戻れない過去と、心の傷

……どうしてだろう、と謡は思う。

（父さん……どうして助けてくれないの？）

冷静な瞳で拘束された謡を見る父親に、心の中でそう問い掛ける。
（そんなに俺は駄目な人間なの？父さんは、俺がそんなに嫌い？）
神楽の義弟らしい少年には優しく労るような視線を送るのに。
どうして実の息子である自分に、優しい瞳を向けてくれない？

（もう、昔みたいな仲良しには戻れない？……教えてよ、父さん。
母さん）

母は……あの人は今何を見て、何を考えているのだろう。

「お父さん、助けてよ。助けて……」

恥も外聞も、最早ない。

ただただ昔の優しく穏やかな父にまた会いたくて。

「さあ、どうしたっ！早くシンをこちらに寄越せっ！！」

テレビで何度も観たことのある男が血相を変えてそう怒鳴る。

「さあ！こいつがどうなっても良いのか？」

「……！」

一番反応したのは神楽と神楽の義弟だった。義弟の顔が今にも泣き出しそうに歪み、こちらに向かって来そうになる。

「敦樹っ」

神楽が少年の名を呼んだ。

……可愛い子だな、と謡はぼんやりと思う。雪のように白く肌理の細かい肌、肩口で綺麗に切り揃えられた真っ黒な癖のない髪、ぱっちりした瞳にふくらした赤い唇。だが恐怖と混乱の入り交じった今の表情はひどく痛々しい。

（父さんは、俺なんかよりあんな子の方を息子にしたいんだろうな……）

『謡、将来は何になりたい？』

穏やかな物腰で謡と対等の目線で話してくれる父が好きだった。

『謡ねっ、お父さんとおんなじ社長さんになる！跡継ぎになる！』

『ありがとう、謡。でもね、謡は謡の進みたい道を選びなさい。私のあとを追いかける必要はないんだよ？』

『良いの！僕はホントにお父さんと同じになりたいのっ』

『ははは、そうかそうか。ありがとうな、謡……父さんは嬉しいよ』
『えへへっ』

……そんな会話を交わしたのは、もう何年も前。

昔と今には、大きな隔たりが出来ていた。

（俺は、あの頃は本当に、）

父を尊敬し、父と同じ道を進もうと思っていた。

今、父を尊敬していない訳ではないが父と同じ道を進みたいかどうかは最早分からなくなっていた。

「……………お父さん、助けて……………」

届かないと分かっているのに。自分の言葉は、願いは父には届かないと、分かっている……………筈なのに。

「少し黙れ、耳障りだ」

謡に銃を突きつける男が低い声で言う。

「……………っ」

息が苦しくなる。

パニックに陥りそうになる心をどうにか静めようとする。

（お願い。父さん、助けて……………）

涙で滲み切った瞳で父を見る。

けれど、父からの反応が窺えることは、なかった。

義兄がギュツと拳を握り締めるのを感じ、敦樹は思わず彼を見上げた。

唇をきつく噛み締め、辛そうに目を眇める。

（やっぱり、うちが、）

謡と引き換えに、父のもとへ行くべきではないのか。

（……“良い考え”って何なんだろう、）

芝貫春樹、という男を見上げれば、端正なその顔には一切の表情がない。自分の息子が危険な目に遭っているのに、何の感慨も抱かないのだろうか。

こんな人の下で、義兄は働いているのだろうか。

そう怪訝に思った瞬間、

（え？）

無表情だった春樹の唇に他者を嘲笑するような笑みが浮かび、

「宗吾、見るが良い。……これが、日本を支配しつつある芝貫の力だ」

そう言った瞬間だった。ドンツという轟音が部屋に響いたかと思うと、謡を拘束している男の左胸あたりにパツと赤い花が咲いたように見えた。ぐらりと無言で倒れる男を、謡が見開いた瞳で見詰める。

「敦樹、見ちゃ駄目だっ」

我に返った神楽が、慌てて敦樹を頭から抱き締める。

（今、の……何？）

周囲に漂う、焦げ臭さ。

胸に咲いた、赤い、花。

（気持ち悪い……、気持ち悪い）

「謡、何をつ立つてる。また捕まりたいのか」

「おと……お父さん、何……したの？」

謡は喘ぎ喘ぎ、春樹に問い掛ける。

そんな彼を、春樹が冷たい目で見下ろす。

「誰のためだと思っている」

「あ……、」

謡に、春樹が近付く。もはや春樹に、鳴沢の姿も絶命した男の姿も目に入ってははいない。

「父さん……っ！」

春樹はぐいっつと謡の胸ぐらを掴み、顔を寄せる。

「お前が不甲斐ないからだろう。そのせいでこうなったことが、何故分らない？」

「う……あう、」

謡に恐怖が襲い掛かる。

「自分では何も出来ない癖に、私の行いをとやかく言う資格があると思っっているのか？良いか？お前に何かあつては困るんだ……折角大きくした会社を、私の代で潰す訳にはいかないんだ」

「……っ、」

謡は思い知る。春樹は、社長の“器”である謡を必要としているのであり、“息子”としての謡を必要としない……と。

謡の瞳から、涙が零れ落ちる。

「嫌い……？」

「何？」

もう、戻れない。

父と、母と、弟と、そして自分と。

幸せだったあの日々には戻れない。

今、はつきりと分かった。

「父さんは、そんなに、そんなに俺の……っ、僕のことを嫌い……っ？」

訊くことを恐れていた問いを、謡は発した。涙でばやけた視界の中、父の顔が強張ったことに辛うじて気付く。……否定して欲しかった。嫌いではないと。それだけで良いのに。それだけで救われるのに。

「……………」

だが父から明確な答えを聞くことは叶わなかった。

春樹は無言で謡を離すと、呆然としている鳴沢に向かう。

「ふっ、うつっ……………」

「宗吾。少し悪乗りが過ぎたな」

「な、何をした」

「謡を拐った時点で、貴様は芝貫の“敵”だ」

「し、しかしあれを拐ったのはシンを拐った後だ！お前は謡を拐う前に、ここにいて何処とも連絡を取っていなかったじゃないか？なのにな！」

「愚かだな、宗吾。曲がりなりにも、芝貫グループの嫡男である謡に護衛役がいなくても思っているのか？」

「！」

「まあ護衛役などいなくても、私が何の手も打たずにお前の拠点に来るなどしないがな」

「……………」

「さあ、まだ足掻くか？今度はお前の眉間に穴が開くぞ？」

春樹の物々しい言葉に、鳴沢はブルツと身を震わせた。

あれは撃たれたんだ、と神楽は何処かぼんやりと思う。ガタガタと体を震わせる敦樹を抱き締めながら。

（謡様、）

謡は床に崩れ落ちたまま、見開いた目から涙を零し続けていた。彼の精神状態が危ぶまれる。

「敦樹、僕は謡様を、」

「う、うちは平気だよ。兄さん……」

その声は酷く細くて。

「敦樹も、来て」

「えっ」

敦樹の手を取り、神楽は周囲への警戒を怠らないように謡へ歩み寄る。

「謡様、分かりますか？神楽です」

謡の背中にそつと手を当て、刺激しないように静かな声で問い掛ける。

「か……ぐらさ、ん」

真つ赤に充血した目と、頬に刻まれた涙の通った痕が酷く痛々しい。

「大丈夫ですか？」

訊いてから、なんて馬鹿な問いなのだと自嘲する。

大丈夫なはずがない。

「はい……」

なのに微笑む謡。きっと神楽に心配をかけまいとするため。

「あ、あの」

不意に、敦樹が声を上げる。謡が、敦樹を見る。空虚な瞳で。

「うち、うち……神楽敦樹、です」

「君が」

謡が神楽と敦樹を見比べ、小さく

「そっくり」

と笑う。そして力尽きたように白目を向き、神楽にしなだれかかるようにして意識を失ってしまった。

「謡様、謡様っ」

神楽はこのまま謡が二度と目覚めないのではないかという不安に襲われ、何度も彼の名を呼んだ。

親子

うちは、兄さんと謡さんを見比べるしか出来ずにいる。兄さんは今にも泣き出しそうな顔で、謡さんの頭を撫でていた。

「……………」

酷い、とうちは、謡さんのお父さんを見る。

春樹さんは、あの人と静かに睨み合っているが自分の勝利を確信している。あの人は蒼白な顔で春樹さんを見上げているだけだ。

「謡様、」

どうして兄さんがそんなに悲しそうな顔をするの？

兄さんは何もしてないじゃない。謡さんを傷付けているのは、春樹さんとあの人だ。兄さんは、悪くないのに。

（兄さんは、謡さんのことが大事なんだ……）

きっと、春樹さんより謡さんのことの方が大事なんだ。

……………うちより？

そう思うと、胸の奥で何かがざわめくような感覚がした。ざわざわ、ざわざわと波打つ感じ。

これは、嫉妬だ。

うちは、初めて会った謡さんに嫉妬している。

うちより兄さんに近い謡さんに、嫉妬している。

「兄さん」

うちが兄さんと呼んで腕を引いても、兄さんはこっちを見てくれない。

「……………」

何で？

何で、うちを見てくれないの？

どうして、手を握ってくれないの？そんなに、謡さんのほうが大事なの……………？

「敦樹」

「っ」

不意に兄さんに呼ばれ、うちは思わず体をビクツと震わせてしまった。謡さんに抱いた嫉妬心を兄さんに見咎められたように感じて。

「謡様を、見ていて」

「に、兄さん？」

うちは立ち上がる兄さんを見上げる。兄さんはやっぱり今にも泣き出しそうな顔で、それでも優しく微笑んだ。

信じていた。

例えば普段は冷徹に接していても、本当は春樹様は謡様を大切な家族と思っっていると。

……でも、もう信じられない。信じるなど、土台無理な話だ。

このままでは、謡様が壊れてしまう。

「謡様を、見ていて」

「に、兄さん？」

不安そうに瞳を揺らす敦樹に微かに笑みを向け、私は……僕は春樹様のもとへ向かう。春樹様は首相の鳴沢と睨み合いをしていたけど、僕には関係ない。

「何だ」

春樹様が怪訝そうに僕を見る。

「春樹様」

「……………」

「僕は、謡様を大切に思っているから、敢えて聞かないようにして来ました……でも、もう無理です」

「何が言いたい、神楽」

「……春樹様にとって、謡様は何ですか」

「何？」

「謡様は春樹様のご子息なのは戸籍上、本当のことです。……ですが、春樹様は“息子”として、謡様を愛しておられるのですか？」社長の“器”などではなく、“息子”としての謡を愛しているのか。……」

「僕は、あなたが謡様に冷徹過ぎるとずっと思っていた。でも、それは行きすぎなだけで、謡様を大事に思うからこそなのだと信じていました。でも、今日のは、酷すぎます……」

自分でも何を言っているのか分からなくなる。

「謡様を取り返すためだと言っても、やりすぎです！それに、それを咎めた謡様にお前が不甲斐ないからだ、なんて……！！」

「……………」

「頭に銃を突き付けられて、怖くて不安で仕方なくて……っ！でも、父親であるあなたが助けてくれると希望を抱いて。あなたの助けをずっと待っていた謡様に、どうしてあんなに酷いことを……っ！！」止まらない。暇を貰っている形になってはいるが、僕が春樹様の部下であることに変わりはない。なのに僕は春樹様を弾劾する口を止めることが出来ない。

謡様の笑顔が、泣き顔が脳裏で交互に明滅する。

「謡様は、父親であるあなたを信じて……っ」

「神楽、」

春樹様が僕を呼ぶ。

「私にどうして欲しいんだ？謡に愛していると言って抱き締めてやれば、お前は満足するのか？」

「！そ、そういうわけでは……っ」

「お前が言っているのはそういうことだろう？親子だから、無条件で愛してやれと。違うのか？」

「っ」

「口先で愛している、と謡に言うだけで良いならば何度でも言つてやろう。今でも良いが？」

僕を見る春樹様の目には、嘲りの色がみちみちている。

「家族だから。親子だから。だから無条件で愛せ？……お前の親は、よほど目出度いんだろうな」

「！」

春樹様は、硬直する僕を押し退けるように前に進むと、謡様と敦樹のほうへ歩みを進める。敦樹がビクツと体を震わせ、それでも謡様を守るかのように腕を広げて謡様を背中で隠すようにする。

「退け」

「……………」

「邪魔だ」

春樹様は、敦樹を押し退けると気絶している謡様の腕を掴む。どうするのかと固唾を呑み、近付こうとすると。

春樹様は、力の入らない謡様の体をひょいっと背中に負ったのだ。

「神楽、話は後で聞いてやる……今はここを出る。此处は、悪臭が酷い」

春樹様が言った“悪臭”は、恐らく物の臭いではないんだろう。

「はい……」

謡様に対する春樹様の態度に納得はしていないけど、此处はから出ることには賛成だ。

僕は僕で敦樹を背負うと、小走りで春樹様のあとを追った。

鳴沢も、他の人間も、誰一人僕らを追ってくることはなかった。

硝煙の残り香が、鼻についた。

『謡ったら、今日喧嘩して来たのよ』

『謡が？珍しいこともあるもんだな』

クスッ、という笑い声。

『辛抱強く訊いたら、喧嘩の訳を話してくれたわ』

『……意味深なまえふりだな。で、理由は？』

『パパのこと悪く言ったからだ！で、あとは泣くばかり』

『私のことで？』

『みたいよ。パパは世界一のパパなんだって』

『世界一、か』

『どうしたの？変な顔して』

『……いや、何でもない。飯にしてくれ』

『はい』

にこにことしてキッチンに消えて行く妻の後ろ姿を見ながら、春樹は憂いを帯びた吐息を吐き出す。

『世界一……汚い父親なのにな』

すやすやと眠る謡の額を撫でながら、春樹はそんなことを呟いた。

「春樹様？」

過去に気を取られ、少しの間無防備に黙り込んでしまった春樹に、神楽の不安げな声が掛けられる。

「……………」

軽く眉間を指で揉み解し、春樹は車をスタートさせる。

「神楽」

「は、はい」

「お前は、覚えているか」

何を、とはすぐに聞き返すことが憚^{はば}れるくらいに抑揚のない声に神楽は上司の次の言葉を待つ。

「……………あいつが、死に損なった日のことだ」
「！」

思い出したくない情景が、痛みを伴って心と脳裏を侵食する。今にも泣き出しそうな謡と、何が起きたのか理解出来ないのか不思議そうな顔をした誓を連れ、病院の、温度のない廊下を駆けた。辿り着いたその先にあつたのは、空虚な雰囲気を身に纏った自分の上司と包帯で体のあちらこちらを巻かれた彼の妻だった。

『母さん、』

謡がか細い声で母親を呼んでも、今朝まで彼に向けられていた笑顔が返ることはなかった。母親は遠い目付きをして、口元を弛緩させたまま病室の天井を見上げていた。

『ねえ、お父さん。母さんは、どうしたの？何があつたの？お父さん』

ぴくりとも動かない父親の肩に伸ばされた息子の手は、バチンツという音を立てて、払われた。

『お、父さん……………？』

『……………』

父親からの言葉はない。

勿論、母親が険悪化する二人の雰囲気なたしなめることもない。

神楽はどうして良いか分からず立ち尽くし、誓は何を考えているのか、にこにこと楽しげに笑いながら病室をぶらぶらと歩き回っている。

“幸せ”という概念が、芝罘家からは消えてしまったということだけ、神楽は心底理解した。

「あの日から、何かが変わってしまった。私の中の何かが根底から

瓦解してしまつた……そんなふうに思っている」

「……………」

「謡はどちらかといえばあいつ似だから、謡を見るたびに思い出す。あれ以降、私たちのことが分からない透明な瞳を思い出す度、私はどうしたら良いのか分からなくなる。謡を目にする度、あいつの透明な瞳を思い出す……………」

初めて、彼の妻を襲つた“不幸”に対する春樹の想いを聞いている。
「春樹様、」

「………… 神楽は私に比べて謡も懐いている。お前になら私には言えないようなことも言うのだろうか」
深い溜息を吐き出し、

「お前からすれば………… いや、常人が見れば私の謡に対する態度は過剰に過ぎるのだろう。だが、私はああやってしか謡に接することが出来ないんだ。もう、な」

懺悔するように言つた。

「………… 謡様は、」

意を決して、神楽は声を上げた。春樹は運転のために前を見ているし、自分の言葉が彼の心を動かすことが出来るかどうかは分からない。だが、此処で言わなければ、ほかに機会はないと思い閉じかけた口をそのまま動かし続ける。

「謡様は、春樹様とお話することを望まれています。それに、謡様は………… 春樹様の態度に心を痛めています」

「……………」

「春樹様、せめて、せめて今僕にしてくれた話を、謡様にもして差し上げて下さい。そうすれば、謡様の気も少しは晴れると思います。春樹様に、“息子”として思われている、と」

「…………… そうだな」

神楽は優しい声に、思わず春樹を見返した。

だが彼の目には優しい色はなく、全てを拒絶しているように、神楽には思えた。

一瞬の静（せい）（前書き）

サブタイが・・・。あとから変更するかも。

一瞬の静（せい）

「そうか、分かった。ああ、ご苦労だったな」

真つ直ぐ家に帰らなかった芝貫誓と成宮夏は、誓お気に入りの喫茶店に来ていた。

アンティーク調の席に座り、誓はオレンジジュースにティラミス、夏は珈琲をそれぞれ口に使っていた。店内にはクラシック音楽が会話の邪魔にならない程度にかけられ、誓の耳に心地よく響く。

「どうなった？」

「誓様のご想像の通りの結果、ですよ。鳴沢のような“小物”が、芝貫に敵うわけがないのですから」

「まあね。で、兄貴は？」

誓が一番聞きたいのはそこだ。兄・謡がどうなったのか。鳴沢の命運など、正直どうでも良い。

「謡様は、少しショックを受けられたようで」

夏はそう前置きすると、今電話で伝えられたことをそっくりそのまま、誓に話した。

「へえ、親父の奴ついに重火器を取り出したか」

話を聞き終えた誓が、さも可笑しげにそう漏らす。オレンジジュースの氷を鳴らし、

「で、兄貴はおめおめ気を失った、と」

おめおめという表現に夏はぴくりと眉を動かしたが、何も言わない。

「いい加減、兄貴も限界かな。というかよくもった方だろう」

「そう……ですね」

「何だ。浮かない顔だな、夏」

愉快そうに目を細め、頬杖について夏を見上げる。

「夏も兄貴が壊れるのは嫌？」

無邪気に、愉快そうに。夏を試すように。

「誓様、」

「正直に言つてよ。別に怒らないから」

夏は無言で、誓の感情のこもらない瞳を見返す。そしておもむろに口を開くと、

「はい。嫌です」

「ふうん。嫌いなのに？」

「……確かに私は謠様を好いてはいません。ですが、身近な、幼い頃から知っている人間が壊れることは嫌です」

「夏らしいな」

ティラミスの最後の一口を美味しそうに咀嚼し終わると、ジュースで喉を潤す。

「俺は、そうは思わないよ」

ポツリと囁くように言われた言葉に、夏は、しかし大した反応は返さなかった。

「でしょうね」

と頷き、立ち上がる。

「召し上がり終えたみたいですし、帰りましょうか」

「はいよ」

伝票を手にした夏に従い、誓も立ち上がる。

「なあ、夏」

「何でしょうか」

「飯、作ってって」

「……誓様、私はあなたの護衛であつて、世話係ではないのですが」
もはや誓の夕食作りは決定事項だろうと知りつつ、夏は敢えて言うてみる。

「お前、俺の命令が聞けないっていうの？」

「分かりましたよ、分かりました。メニューは何が宜しいですか？」

誓は既に決めていたようで、夏の問い返しに即答した。

「パスタ、だな。味はお前に任せる」

「はいはい。では買い物に行きましょうか」

「うん」

誓は楽し気に頷くと、我先にと歩き出した。

（誓様こそ、謡様のことをどう思っているのだろう）

考えても詮なきことだと分かっているにも、夏はそんなことを思った。

「っ、」

謡が春樹の運転する車で自宅へ運ばれている最中、目的地である芝貫宅では。

榆乃木涼子は殴られて赤く腫れ上がった頬に、氷を包んだタオルを当てていた。そしてその姿で、静かに啜り泣く少年をじっと見つめている。

「う、謡さっ、謡さん……っ、」

謡が連れ去られたあとで覚醒した少年に、涼子はあったことをありのままに話してやったのである。するとただ啞然として聞いていた彼は、思い出したように静かに泣き出した。自分のせいだ、と何度も自分を責める。

「僕のせいだ、僕の……」

涼子が小さく息を吐き出すと、少年―神薙愁は大袈裟といえるくらい、大きく体を震わせた。

「……余り自分を責めるな。謡が悲しむ」

「で、でも……僕を守ろうとしたから、謡さんは……、」

「そんなの、謡が勝手にしたことだ。それで君が後ろめたい気持ちになる必要はない」

涼子の言葉に、愁はさらに悲しげに目を伏せる。

「……何故そんな顔をする？」

「……………僕は、」

「ん？」

「僕は、謡さんのこと……………本当のお兄さんみたいに、思ってます。だから、謡さんには……………辛い目には遭って欲しくないんです。謡さんは、今まで一杯一杯辛くて、大変で……………だからせめて僕は、謡さんの負担になりたくない……………んです。僕は、謡さんが笑ってくれてると嬉しくて、だから、だから」

細い肩を震わせて、愁は辿々しくも必死に言葉を紡ぐ。涼子はじつと彼の言葉に耳を澄ませる。

「どんな事情があっても、謡さんが辛い目に遭うのは嫌なんです……………。僕のせいで、僕の存在や行動が原因で謡さんが傷付くのは嫌なんです……………」

ついにボロボロと零れ落ち始めた涙を生む二つの目を、掌で覆い隠す。

「謡さん、謡さん……………」

少年の頭を、涼子は何故か撫でてやりたくなり実際に、撫でた。

「っ？」

少年が目の覆いを外し、不思議そうに涼子を見返す。涼子に対する恐れは、なさそうだ。

涙に濡れた大きな瞳が、涼子を映している。

「お前は、本当に謡のことが好きなんだな……………」

こくこくと声もなく頷く。

「謡は、優しいか？」

頷く。

「謡は、温かいか」

頷く。

「謡のことが、心配か？」

頷く。

「謡を、助けたいか？」

「！は、はいっ」

「そうか……。謡が聞いたらきつと喜ぶ」

涼子が微笑むと、愁もつられて微笑む。

「……謡と知り合ってまだ日は浅いが、私は不思議で仕方なかった」
「？」

「父親との関係はスムーズに行っていないようだし、学校でも似たようなものらしいから……。謡は一体何時心を休めてるのかとね」

「……………」

「だが、きつとお前の家庭教師をしているときは安らいでいるんだろつと、私は思うよ」

かあつ、と愁が告白でもされたかのように顔を赤くする。

「ぼ、僕の……………」

「少なくとも、謡の支えにはなっているさ」

今にも折れそうなくらい繊細な神経をしているのに、ちゃんと真つ直ぐ立っている謡。それを支えているのは、きつとこの少年なのだろう。

「僕が、支えに……………」

「変か？」

「へ、変ていうか……。僕が謡さんに支えられてると思ってるから……………」

……………」

「お互い様、ということだよ」

「……………あ、あの」

「何だ」

涼子の真つ直ぐな視線に、愁がたじろぐ。どうやら他人と目が合うことに苦手意識があるらしい。

「う、謡さんとあなたの、関係って何なんですか……………」

「気になるか？」

「えっ、あ……………その、」

「大した関係じゃないよ。酔狂な謡が私に話し掛けて来たって言うだけだから」

愁が首を傾げる。最もだ、と思い、涼子は言葉を付け足す。

「……………ある雨の日だった。私が傘も差さずに海を眺めていたら、謡がそばに来たんだ。皆が私を遠巻きにするのとは逆にね」

「謡さんが……………」

「意外そうな顔だね」

謡が自主的に見知らぬ他人に声を掛ける、という印象が薄いのだろ
う。

「私も警察でもない人間から声を掛けられるとは思ってなかったか
ら、驚いたけどね」

いや、と自分で言いながら涼子は心中で思う。

（謡に会った頃は、“驚く”という感情を理解出来ていなかったけ
れどな）

「……………あなたは、一体、」

愁の言葉に、涼子は透明な笑みを浮かべた。

相変わらずだな、と烏丸凜は思いながら秋が眠る車に乗り込んだ。

「……………ん、む、」

「暢気なものだな、秋」

秋は自分が何処にいるのかすぐには分からなかったらしく、眠たげ
な半眼で周囲を見回す。

「……………あれ、僕は、」

「たわけ者。鳴沢の“隠れ家”の前だろうが」

「そ、そうだった！凜ちゃん、謡様は！？」

「謡様は家に向かわれている。春樹様が連れて帰られたから春樹、という名前に秋が微かに身を強張らせる。」

「何があつたか知りたい。そう言う顔をしているな」

「ぼ、僕は謡様が無事なら、それで良いから……、」

感情のこもらない瞳と抑揚のない声音に、秋は更に緊張する。

「凜ちゃん、」

「“ちゃん”付けは止める。気色悪い」
「……………」

突き放した言い方に、秋は悄然とする。

「そ、そんな言い方しなくたって……」

「泣きそうな顔をするな。面倒臭い」

じよじよに会話が世間話に流れ始め、凜は表情には出さずに少し慌てた。

「……………そうだ、秋。例の捕縛令は取り消しになった」
「……………?」

「秋、あんたは自由だよ」

「え、えつと。凜ちゃんが何を言ってるのか、分からないよ、」

「秋を捕らえる命令は立ち消えになった。それ以前に秋は成宮を追放になった。……つまり秋、お前は完全に自由だ。何をして、

誰も文句は言わない」

「り、りんちゃ、」

「降りろ。車から降りたら、さつさと何処へでも行け。成宮の人間は今後一切お前を追わないし、その代わりにお前を助けることもない」

「や、やだよ。凜ちゃん、待ってよっ！」

凜は無言で一度車を降りると、秋が座っている側の後部座席のドアを開けて彼の細い腕を掴んだ。

「凜ちゃん、」

「早く降りろ」

「待って、痛いよっ……!」

だが凜は秋を車外に引き摺り出すと、抵抗しようとする秋を地面に突き飛ばした。

「……っ!」

ヒュッと音を立てて、抜き放たれた刀が秋の顎へ突き出される。秋が硬直し、傷付いたような瞳で凜を見上げる。対して凜の瞳には何の色もない。ただがらんどうの瞳で秋を見返すだけだ。

「どうした。もう自由になったんだぞ。嬉しくないのか?」

「り、凜ちゃん……」

「……好きにしろ。じゃあな」

尚も言い募ろうとする秋の手を無情にも振り払い、凜は運転席に座った。

「ああ、一つだけ忠告しておく。……お前も早く此処を離れた方がよいよ。これ以上“災厄”を背負いたくなければな」

「凜ちゃん、待って……っ!」

秋の声は、届かない。凜はドアを閉め、エンジンをかけると秋を顧みもせずに車を発進させた。

「凜ちゃん、」

秋は呟く。背後から忍び寄る“気配”には、気付かない。

嫉妬

匂が帰宅すると、見知らぬ女性がいて驚いた。しかも愁と一緒に茶など飲んでいる。

「あ、姉さん……」

「ただいま……どちら様？」

匂が女性を見れば、

「君がこの子のお姉さんか？」

女性の方が口を開いた。抑揚のない口調で、表情は一切動かない。

「あ、え、は、はい。そうです、けど」

「そうか。よく似ている」

女性は微かに笑みを浮かべると、自分から名乗った。

「私は榆乃木涼子と言つ。……よろしく」

「あ、しゅ、愁の姉で、神薙かんなぎ匂と言います」

二人の関係が不明で釈然としないまま、涼子につられるようにして匂も自己紹介をする。

「榆乃木さん、ですつ。……あの、うちの弟とはどういう関係なんですか？」

「……謡繋がりとだけ、言っておく」

「謡さん、繋がり？」

ということとは二人は親密な関係ではないのか。

（でも、こんな女の人のことなんて謡さんから聞いたことない……）

謡の交友関係を全て知りたいというわけではないが、目の前の女性に関しては教えてもらえていなかったことに納得がいかない気がする。

「じゃあ謡さんも来てるんですか……？」

謡は確か“勉強会”を命じられた筈。自由に動いて大丈夫なのだろうか。

不安が匂の頭を過る。

「謡さんは……………」

愁が居心地悪そうに身動きし、それを感じ取った涼子が代わりにと口を開いた。

「謡はいない」

じゃあ家で“勉強会”中なのだろう。匂は憂いの帯びた吐息をつく。謡が悲しむ顔は見たくないのに、そればかりが頭に浮かんでしまう。

「…………愁、目が真つ赤だけど、また泣いた？」

ぴくり、と愁が体を揺らす。だが匂はそれには気付かず、キッチンへ行くと冷蔵庫を開けた。

「なんかお腹すいたなあ……………」

とぼやきながら冷蔵庫の中身を物色する。

「愁、私はそろそろ失礼する」

涼子が立ち上がる。

「あ、は、はい……………」

見送ろうと愁も席を立ち掛けるが、そんな少年の肩を押さえ、涼子は言った。

「…………見送りは良い。それと、難しいかも知れないが今日のことは気に病むなよ…………謡に会っても、今日のことは触れないようにな」

「…………はい」

きつと無理だと自覚しながらも、愁は頷く。

「ご馳走になった」

飲み物の礼を言い、涼子は匂にも一声掛けると二人の視線を浴びながら神薙家を後にした。

「…………愁、今の人、本当に謡さんの知り合いなの？」

「え？」

「何か謡さんが付き合うようなタイプには見えないし…………それにあの眼帯。メボでも出来てるの？」

匂は涼子に胡散臭さを感じているらしい。不信感を隠そうともせず、に愁に訊いてくる。

「そうみたいだよ」

涼子の眼帯の下がどうなっているかなど、愁は知らないし正直どうでも良かった。彼女はどうかやら謡の“味方”であろうことが分かったから、それだけで良かったのだ。

「謡さんが、あんな人と」

匂がぶつぶつ言っているが、きっと嫉妬のようなものだろうと思う。

「姉さん、僕部屋にいるから」

「あ、愁！」

「な、何？」

これ以上涼子のことを問われたらどうしようかと思い、思わず愁はどもってしまった。

だが匂が口に出した言葉は、涼子についてではなかった。

「……謡さん、今“勉強会”中だから連絡つかないし、あんたの家庭教師もないからね」

謡のことだった。匂は一度鼻を撮ると、再び冷蔵庫を開け、今日の夕飯は何かなと軽い口調で呟く。愁はそんな姉の背中に小さく分かったと呟き、ダイニングを後にした。

神薙家を後にした涼子は、足を止めてそちらを振り仰いだ。

「謡のことが、本当に大好きなんだな」

神薙姉弟がどれくらい謡を慕い、信頼しているのかよく分かった。

（あの愁という少年は、もしや……）

少しの間一緒にいると、以前会った時には思わなかったことを発見

した。

“あの方”を慕い、本当の弟のように懐^{なつ}いていた。

（まさか……な）

前世で近い仲であつた者が、今世において何人もうまい具合に再会することなどほとんどないだろうし、あつたとしても記憶はなく知らぬ内に過すことが殆んどだ。涼子は口端に微かに笑みを浮かべると、歩き出した。恐らく“彼女”がいるであろう場所に向けて。

時折辛そうに眉を顰める謡の寝顔を、敦樹はただ見守っていた。助手席に座る神楽も、何度か氣遣わしそうに後ろを振り返る。

「敦樹、」

「……何？兄さん」

「謡様のこと、よく見ていてね」

その言葉に、醜い嫉妬心が湧くのを敦樹は感じたがそれを押し込め、兄の言葉に小さく頷く。

それを受けた兄が安堵したように微笑み、また前を向いた。敦樹は再び謡を見下ろそうとしたが、不意に視線を感じて顔を上げて、

「…………ツ、」

フロントミラー越しに、春樹と目が合った。

敦樹が醜いと感じる“嫉妬心”を見破ったぞ、とでも言いたげな目付きに感じられ、敦樹は体を硬直させる。何もかもを見破られていそうな瞳が、怖い。

こちらから視線を外すことすら出来ず、敦樹はただ春樹とミラー越

しに見詰め合っていた。

「……………」

どうしよう、怖い…と敦樹が思っていると、

「う……ん、」

「！」

謡が小さく唸り、敦樹の硬直状態が解けた。

「う、謡さん？」

「う、」

敦樹が見守る中、謡がゆっくりと目を開いていく。神楽も謡の覚醒に気付き、助手席から身を乗り出して来る。

「……………」

その姿に、また嫉妬心が沸き上がるが敦樹は素知らぬ顔をする。

「…………… 此处は、」

からからに渴いた喉で発したためか、謡の声はがらがらで歪^{ひず}んでいた。

「謡様、分かりますか？」

神楽が声を投げると、謡が声の方向に目を遣る。

「か……ぐら、さん？」

謡は神楽の姿を認めた後、横に座る敦樹へと視線を流した。

「敦樹くん、だったよね」

「は、はいっ」

謡が敦樹の手を握る。ひやりとして血の気の感じられない真っ白な手だった。

「う、謡さん？」

「ごめ……ね？」

何故自分が謝られなければならないのか分からず、敦樹は素直に混乱する。心身共に辛いだろくに、微笑んで、

「僕が、君のお兄さんの居場所を……奪ったんだ」

「え？」

神楽ですら驚く。声もなく、謡を見詰める。

「僕のお願いのせい……で、神楽さんは……っ、」

何処かが痛むのか、謡は息を詰めて小さく呻いた。

「だ、大丈夫ですか!？」

敦樹が慌てて声を掛けると、謡は小さく微笑んだ。

「大丈夫……ありがとう」

「い、いえ……」

「……神楽さんも、ごめんなさい。僕が、あんなお願いなんかしなければ、神楽さんが哀しい想いをするこゝも、なかったのに、」
敦樹がちらりと神楽を見遣れば、兄は今にも泣き出しそうな顔をしていた。今だつて、謡は十分兄さんを苦しめているじゃないか、と敦樹は内心で苛立つ。

（兄さんは何も悪くないのに、どうしてそんなに悲しそうな顔をするの？）

「謡様は、何も悪くありませんよ」

（じゃあ誰が悪いの？どうして、兄さんがそんなに苦しまないといけないの？どうして、）

「でも、僕のせいで……神楽さんの居場所は、」

（兄さんの居場所？そんなもの、こんなところにはない）

兄は。

（兄さんは、謡さんのものでも、ましてや春樹さんのものでもない）
そう、兄は。

「……兄さんは、うちだけのものだ」

小さすぎる呟きに、隣にいた謡ですら気付けない。

「大丈夫です。謡様は、何も気にされる必要はないんです。……

・さあ、ゆっくり休んで」

神楽が助手席から腕を伸ばし、どうにか謡の手をそっと包んだ。

「……もうすぐで、ご自宅に到着ですから」

神楽の言葉に薄っすらと笑みを浮かべると、謡は再び意識を失った。

「敦樹、どうしたの？」

「え？」

「……いや、なんだか」

神楽が何かを言いかけて、口籠もる。

「……兄さん？」

「いや、何でもない」

「……」

何かを言い掛けて、止めた兄。だが詳しく訊く勇氣はない。

敦樹は謡の手を放そうとしたが、謡の寝顔に哀しげな陰を感じてしまい何故か放せなくなった。

「……………」

じつと謡を見詰め続けることも躊躇われ、手は握ったままで窓の外に目を遣る。

あの人の手から今回は逃げられたけれど、自分はいつかきつと神楽家を去ることになる……そんな予感を抱きながら、敦樹は車に揺られている。

帰りたい

「！」

その車が自宅前を通過した時、愁はその排気音に大きく反応した。訳もなく、謡が乗った車を通ったのではないかと思ったのだ。

愁は居ても立つてもいられず、自室を後にすると家からも飛び出した。

「謡さんっ！」

確かに、謡は、いた。

ただぐつたりと意識を失った状態で人に背負われて。

「謡さん！」

謡を背負った、男―神楽が愁に気付く。

「待って、」

謡と話がしたい。僕を守ってくれて有難う御座いますとお礼が言いたい。その一心で愁は謡に近寄ろうとした。…しかし、

「……っ」

車の運転席から降り立った男の姿に、愁は息を詰めて足を止めてしまった。

男―芝貫春樹は、絶対零度の目付きで愁を見ている。謡と少しだけでも話したいと望む愁を拒んでいる。

「春樹様、」

「あれに構うな。早くそれを連れて行け」

“それ”？

春樹の物言いに、愁はざわりと心がざわめくのを感じた。滅多には感じない“怒り”を、愁は感じる。

（謡さんは……物じゃないのに……っ！）

「……あいつに似て生意気な顔付きをしている」

春樹に感じた恐怖も忘れ、愁は彼に向けて言った。

「うっ、謡さんは“物”じゃないっ」

「……………」

「謡さんをもつと大事にしてあげて下さいっ!!」

はあはあと息を荒げる愁を、春樹は相変わらず色のない瞳で見詰めているだけだ。

「お願いだから、謡さんを、もつと……………」

「話にならん」

不意に春樹がそう零し、溜息をつく。

「お前が謡をどれだけ慕おうが勝手だ。だが芝貫に関することお前に指図される謂れはない」

「さ、指図だなんて……………僕は、」

「……………ふん」

弱々しく視線を落とした愁を睥睨し、春樹は颯爽と自宅へ入って行く。

「ま、待つて下さいっ」

必死に声を上げるも、春樹の足を止めることは出来ない。

「春樹さんっ!」

「……………お前に名前と呼ばれるほど親しくなったことはない」

「っ、」

広い背中にある絶対的な拒絶。昔の面影は、殆ど無い。

「謡と馴れ合うのは構わん。……………だが余計なことに口出しはするな」

閉まっていくドア。消える背中を追うことは、愁にはもう、出来そうには無かった。

「敦樹、ドアを開けて貰える？」

「うん」

敦樹が謡の部屋のドアを開ける。

「ありがとう」

それに礼を行って中に入り、神楽は謡をそつとベッドに横たえた。目を覚ますだろうかと心配になったが、謡は瞼一つ動かさなかった。今だけでも、ゆっくり休んで欲しい。神楽はそう願う。

「敦樹も疲れたね。気分が悪いとか、ない？」

「うちは平気だよ、兄さん」

敦樹はそう言うが、小さな顔には明らかに疲労が浮かんでいる。

「敦樹、おいで」

「？」

素直に神楽に近寄る敦樹。その彼を、神楽はそつと抱き締める。敦樹が好きな、兄の匂いが鼻孔を擦る。

「に、兄さん？どうしたの？」

いきなりのに、敦樹は驚いてしまう。

「ごめんね、敦樹」

「な、何で謝るの？」

「……怖かったね」

「！」

「不安だったね」

「……う、」

兄の優しい声が、敦樹の涙腺を緩める。

「敦樹を、守ってあげられなくて……ごめんね」

「そ、んな……こと、ない」

あの場所に来てくれただけで、充分なのに。

「兄さんは、来てくれた。うちを助けに来てくれた、それだけ、で……ううっ」

堪えていた涙が痺れを切らしたように溢れ出した。敦樹の背中を、神楽が優しく撫でる。

「でも、二度と言わないで」

「？」

「鳴沢のもとに行くなんて、言わないで」
「っ」

見上げた兄の顔は、今にも泣きそうで。兄にそんな顔をさせていることが嫌で。

「ごめ、ごめんなさっ……、」

「恩返しなんていらない、敦樹が僕や父さんたちと同じ家で、家族としていられたらそれで良いんだから」

「……うん、うん」

「だから、もう自分を犠牲にするようなことを言わないで。勿論、しても駄目だよ」

敦樹はもう何も言えず、はらはらと涙を流しながら兄の腕の中で頷き続ける。

今、兄が自分だけのものだという現実がひどく嬉しくて。

(……このまま、家に帰りたい、)

謡のことも、春樹のことも、勿論鳴沢のことも忘れて家に帰りたい。兄と一緒にのんびり休みたい。

「兄さん、」

無理だとは分かりながら、敦樹はその願いを口に出そうとした。だが、

「神楽」

「！」

第三者の低い声に、神楽も敦樹も思わず体をビクッと震わせた。

「いつまで兄弟で話している」

「す、すみません」

兄が離れていく。敦樹は急に心細くなって来て、兄の手を掴もうとした。

「！」

しかし春樹の冷たい視線に上げかけた手は行き場を失い、結局力なく下ろされる。

「神楽、お前に話がある。下に来なさい」

「は、はい。……あの、敦樹は、」

「お前の弟に用はない」

神楽の問いかけを一刀両断し、春樹はさっさと謡の部屋を出て行き、階段を下りてしまう。

「に、兄さん……」

「敦樹、ごめん……謡様のこと、頼むね」

気弱な笑みを浮かべ、神楽も春樹に従った。

「……兄さん、うち……早く帰りたい、」

兄を奪おうとしている謡と、あまり人間味を感じられない春樹。

彼らと早く別れ、家に帰りたい。その願いは、しばらくは叶いそうにないと敦樹は心底思い知った。

選択

「うん、美味しかった」

満足そうに微笑まれては、良かったという他ない。

「結局外食になってしまいましたね」

誓はパスタが食べたいと言っていたが、食材を買おうとしたスーパーの近くにあったお好み焼き屋から漂う香りに負け結局お好み焼きを食べることになったのだ。

誓はごくごくと食後の水を飲みながら、嬉しげに笑っている。

「早くお帰りになりたいのだとばかり思っていましたけど」

「だって待ってるのは兄貴と親父の修羅場か、冷えきった空気のことちかだよ？そんな家、誰が帰りたいと思う？」

そう言う誓の目は、鉄板に向いており、

「誓様、まだ食べられるのですか？」

夏は思わずそんな問いを発していた。

「んゝ、小サイズなら行けそうだけど、まあ良いや。これも夏のポケットマネーから出るしね」

そう応えて、あはははと笑う。自分のポケットマネーというのがそんなに可笑しいのかと夏は苦笑した。健全に笑うことは良いことだし、他の客の迷惑にはなっていないから誓をたしなめたりはしない。

「……なんかお腹一杯になったら眠くなつたなあ、」

「そろそろ行きましょうか」

「だな」

誓が一瞬だけ浮かべた、気だるそうな表情を夏は見逃さなかったが言及はしない。夏は伝票を掴み、会計に向かう。

「………はあ、」

誓は水を飲みきり、ゆったりとした動作で夏に続いた。

「あ、あの……春樹様、」

春樹が一切口を開かないため、神楽は困惑していた。思わず彼の名を呼んだが、返事はない。

「……………っ、」

いたたまれなくなり、神楽は俯いた。時計の秒針が時を刻む音だけが室内には響いている。

（……誓様はまだ戻られないし、どうしたら良いんだろう）

話があると言っていたのに、どうして春樹は黙ったままなのだろう。まだ、怒っているのだろうか。そう考え、神楽は内心で自嘲する。

（……何当たり前なことを考えているんだ、僕は）

「……………神楽」

「！は、はいっ」

何の予兆もなく名前を呼ばれ、神楽の返事は思わずどもってしまった。

「神楽の弟……敦樹君と言ったか」

「は、はい。敦樹が、何か」

「彼はどうやら芝貫の直系だ。鳴沢の息子なのだから、自然とそうなる」

神楽は無言で頷く。春樹が何を言いたいのか、まだ掴めない。

「今は神楽姓、か」

「はい」

「……………」

「春樹様？」

そこはかとなく嫌な予感が神楽を襲う。

「……………便宜は私が取り計らう。彼を、芝貫で引き取らせてもらう」「なっ、」

一度芝貫姓を捨てた敦樹に、再び芝貫姓を与えると春樹は言っているのだ。

「今のところ、正式な後継者は謡だが……………あれは脆弱過ぎる。いつパンクするか知れたものではないから……………“保険”が欲しいんだよ」

保険、という言葉が心に重くのし掛かる。

「どうだ？別に二度と会えなくなる訳ではないし、それなりの待遇をする。……………悪い話ではないはずだ」

春樹の、色のない瞳が自分から一切逸らされることはない。どんな表情をすれば良いのか、分からない。神楽は、声も出せずに固まっている。

「すぐに答えを出せとは言わないが……………あまり待たせるなよ。私は気が短いんだ」

それは、言外に神楽がしばらく返事を保留した場合、実力行使に出るということを臭わせていた。

「春樹様、もし……………もしも僕が、断ったら？」

訊くのが怖かったものの、これは訊かなければいけないとだった。でなければ、敦樹がどうなるか……………

「断るのか？」

「……………っ」

「その場合どうなるか……………私の秘書をしているお前が分からない訳はないだろう」

「！」

ぞくつと背筋に悪寒が走る。

「ここですぐに答えを出して貰っても構わないんだが？」

「……………っ、ば、僕は、」

敦樹を守らなければ。

だが、守るためには春樹の言う通りにしなければならぬ。ただ、それが本当に敦樹の為になるのだろうか。

「話はもう一つある」

硬直する神楽に、春樹は話を先に進めてしまう。

「……神楽、まだ私の秘書をする気はあるか？」

「！」

「応か否か、どちらだ。そんなに難しい問いではあるまい」

「……僕は、」

春樹の行いは、決して誉められたものではなかった。だが、それなのに、

「あります……僕、いえ私は、あなたの秘書を続けたいです」

神楽はそう応えていた。

「そうか」

それほどに“芝貫”の名は強大で、すぐり付きたいものだったから。敦樹がどうなるにしても、芝貫の傘下にあつた方が目が届く。

（それに）

春樹の行いに恐れ、恐怖しながらもいまだに自分は彼に惹かれてる。

彼という人間を、まだそばで見たいと思っている。

彼に、憧れている。

（本当は、僕も……）

春樹のような、歪んだ性質を持っているのだろうか。

「春樹様、また、よろしく願います」

「……………ああ」

春樹が小さく頷いた。

兄が何を話しているのか気にはなりながらも、敦樹は謡を見守っていた。

（……別にこの人のためなんかじゃない。兄さんが、見ていて言うからだ）

言い訳のように、心中で呟く。

（なのに、何で？この人が苦しそうな顔をするたびに、胸が痛くなるの？）

「……………んっ、」

「！」

謡が苦しげに呻き、顔を痛そうに歪める。

一体彼は何を思っているのだろうか。

「ひ……………さ、ま」

「？」

敦樹は、ゆっくりと耳を謡の口元に近付ける。

「姫……………様、に……………げ、て」

「！？」

「姫様、にげて、逃げてください……………っ、ううっ」

謡の言葉は徐々に鮮明になっていく。だがそれが何を意味するのかが、分からない。

「だ、大丈夫ですか？」

みるみる蒼白になる顔と、吹き出す汗。

敦樹は思わず謡に呼び掛ける。だが反応は返らない。

「嫌……………嫌だ、誰……………か、たす、け……………て、」

「謡さん、謡さんっ？」

「姫様、姫様っ」

途端に閉じた瞳から溢れ出す、涙。敦樹は更に慌てる。何処か痛いのだろうか、気分でも悪いのだろうか。

「し、しっかりして下さいっ」

「っ、ねが……姫様だけ、は……助け、て……、」

（ど、どうしよう。兄さんと呼んだ方が良いのかな、）

敦樹が腰を上げかけた瞬間、

「っ……！」

突然謡が目を見開いたかと思うと、ガバツと上体を起こした。

「はっ、はあはあ、はあっ……」

胸元で握り拳を作り、必死に息を整えようとしている。

「だ、いじょうぶ……ですか？」

恐る恐る手を伸ばすが、それが届く前に謡が体をビクツと大きく震わせたから、敦樹も驚いて手を止めた。

「……君、は……敦樹君だった、よね……？」

「は、はいっ」

謡は拳を解くと、その手で顔を覆った。

「ごめん……」

「え？」

「色々、迷惑掛けて」

語尾は掠れて、今にも消えてしまいそうで。

きゅっ、と敦樹の胸が締め付けられる。

（まだだ……。どうして？）

「……悪い夢を見てた」

ぼつり、と謡が溢す。

「すごく苦しくて……痛くて、誰か……大事な人を亡くしたような

……、」

敦樹はハンカチを出すと、そつと謡の首筋の汗を拭った。

「っ？」

「……すごい汗だから。そ、その、風邪引くといけないから……」

どもりながら敦樹が言つと、謡が微かに笑みを浮かべた。

「ありがとう……優しいんだね」

「っ」

何故か頬が熱くなり、敦樹は慌てて顔を逸らした。

「……神楽さんと同じ。僕なんか、とても優しい……、」
「謡さん……」

「良いんだよ？こんな僕に、優しくする必要なんか、ないんだよ」
「な、何を言って、」

「僕には、優しくされる価値なんかないんだから。なのに、君も…
神楽さんもととても優しい」

そう言って、謡は涙の浮かんだ瞳を眇めた。

「こんな、僕に……」

「謡さん、」

ズキズキ、ズキズキ。

胸が痛む。

「神楽さんも、君も、愁くんも、匂ちゃんも……優しくしてくれる。
父親にも認めて貰えない、駄目な僕に」

敦樹に聞かせているのではなく、謡はただ呟いているだけだった。

自分は駄目な人間だと言い聞かせるように。

「謡さん、」

何か言うべきだと分かっているにも、敦樹にはうまい言葉は思い付かない。

ただまんじりともせずに謡のそばに座っていると、

「ただいまー」

階下から軽快な声が響いて来た。

歪（ひず）み

やっぱりなあ、と玄関に足を踏み入れながら誓は眉を顰めた。

（……嫌な空気だ）

玄関に並んだ靴を何気無く見て、神楽の革靴に気付いた。

（鳴沢の所からこっちに帰って来たのか。……どんな気分なんだろうな）

まあ、自分はいつも通りへらへらしてれば良いだけだ。誓は自分に
そう言い聞かせ、いまだソースの味の残る舌で唇を軽く舐めた。

「お帰りなさい、誓様」

ダイニングから神楽が出て来た。

「ただいま。神楽さん、来てんだ」

へらりと笑い、既に知っていたことを今初めて知ったかのように装う。

「はい」

（……俺が何も知らないと思って、平常心を装ってるか。こいつも結構な狸だよな）

今更か、と誓は思わず呟く。

「誓様？」

「あ、何でもないよ。……兄貴、今“勉強会”中だけど、会えたの？」

「……いえ、」

明らかな動揺の色が、神楽の秀麗な顔に表れる。だが誓はそれに気付いてないフリをして、

「親父は？」

「あ、あちらに」

「そう」

誓はダイニングへ移動すると、ソファーに座っている父親に帰宅の挨拶をする。

「ただいま、親父」

「……………ああ」

“お帰り”という言葉が春樹の口から聞かなくなったのは、いつからだったか。不意に誓はそんなことを思ったものの、どうでも良いかとすぐに考えるのを止めた。誓は冷蔵庫へ行くと、自分専用のお茶のペットボトルを取り出した。

「誓様、御夕食は、」

「大丈夫。友達と食べて来たから」

「そう……………ですか」

「神楽さん何かあったの？」

「……………え？」

「気のせいかも知れないけど、何だか顔色が悪いような気がしたから」

さあ、どんな反応をする？と思いつながら、神楽の応えを待つ。

「……………誓様の気のせいですよ。きっと」

笑みすら浮かべてそう言われた。

「そっか。なら良いんだ」

「誓」

いきなり春樹が名前を呼んだ。

「何？」

「席を外せ。神楽と重要な話がある」

春樹は誓の“裏”を知っているのかいないのか、いつも通りの平坦な声でそう言う。

「はいよ」

だいたい何を話すのか検討ついてるけどさ、と背を向けた拍子に舌を出す。

「じゃね、神楽さん」

「はい。お休みなさい」

「うん」

誓はへらへら笑いを貼り付けたまま、ダイニングを出た。二階には

行くが、すぐに自分の部屋に入りはしない。

先に向かう場所がある。

「・・・・・・・・」

二階に辿り着くと、誓は一度階下を見下ろし神楽がドアを閉める音を聞き、目的の部屋のドアをノックした。

するとドアの内側から、兄のものではない少年の、か細い声が応えた。

「・・・・・・・・兄さん？」

鍵の回る音を聞き取り、誓はさっとノブを掴むと思い切りドアを開けた。

「こんばんは」

「!？」

初めて見る相手に驚いたのだろう、少年が怯んだように一歩退く。

「だ、誰ですか？」

誓はにつこりと微笑んだまま、言葉を発さずに少年に手を伸ばす。

「!」

ビクツと体を震わせて、少年が目を瞑る。今日起こった出来事が彼にそうせしめているに違いない。

「敦樹、く・ん？」

「謡さん、」

どうやら兄である謡は目を覚ましているらしい。誓が少年・神楽敦樹を押し退けるようにして部屋に入ると、ベッドで横になっていた謡が誓の名前を呼んだ。

「・・・・・・・・誓、お帰り」

「ただいま、兄貴」

敦樹が戸惑いを含んだ瞳で自分を見上げてくるのが分かる。

「兄貴、この子は？」

寝たまま話すことに抵抗があったのか、謡が体をベッドから起こそうとするのを敦樹がかいがいしく支える。その様に、誓は内心で吹き出した。

（・・・ホント、兄貴は年下を手懐けるのが巧いな・・・）

「ありがとう、敦樹君」

「あ、い、いえ・・・」

白い頬が、微かに赤みを帯びる。

「誓、紹介する。神楽さんの弟さんの、神楽敦樹君」

敦樹が上目遣いで誓を見て、恐る恐るといった体で頭を下げる。蚊の鳴くような微かな声で、

「か、神楽・・・敦樹です」

と名乗った。

「敦樹君ね」

明らかに彼の物ではないぶかぶかのパーカーのせいで少ししか見えない指が緊張に揺れているのが分かった。

「別に取って食ったりしないから、そんなに怖がらないでほしいな？」

「……………はい」

たった二文字の言葉ですら語尾が萎んでしまう。かなりの人見知りか、対人恐怖症か。

（…………でもこういう人間で、意外と他人の性質を見抜くのが巧かったりするから、注意が必要…………だな）

「誓？」

黙り込んでしまった弟を心配してか、謡が呼んだ。

「え？」

「何だか難しい顔、してるから…………」

「え、そう？」

へらり、と笑う。

「まあ、何はともあれ、兄貴の“勉強会”はなくなったんでしょ？」

「え？」

「？だって敦樹君はこの部屋にいるわけだし。“勉強会”中は誰にも会っちゃいけないだろ？」

「あ、う…………うん、」

そうなった経緯を充分に知りながら、そして謡が動揺するのを知りながら、誓は無邪気に話す。

謡を揺さぶりたい、という幼い頃からの歪んだ想いは、ずっと自分の中で燻っている。

（兄貴は親父を恐れてはいるけど、俺に対してはさほどでもない。信頼、まではいかないだろうけど……。でももし、弟の俺が親父以上のえげつない性格って分かったら、兄貴はどう出るかな……。？）
父親に怯える顔が、自分にも向けられるのだ。

（考えただけで、ぞくぞくする。兄貴が、泣いている姿を見たいんだ……。）

自分がどれくらい歪んでいるかなんて、充分に承知している。だからこそ、兄のそばにるのが楽しいのだ。

「それに、何で神楽さんの弟さんが居るの？神楽さんも親父と難しい顔してたしさあ。今日、何かあったの？」

「あ、……。うん、まあ色々、ね……」

知ってるから洗いざらい話しても大丈夫だよ、と言ってやりたい。そうしたら謡はどんな反応するだろうか。

「ふうん？あ、敦樹君は俺が面倒見てようか？」

「っ」

急に話題が自分に向かったからか敦樹がぴくりと肩を揺らした。

「誓が？」

「何か兄貴、顔色悪いし早く寝た方が良いと思うから。あ、敦樹君は兄貴のほうが安心出来るか」

「え、あ、えつと……」

敦樹が返答に困って、謡の顔を窺う。

「敦樹君の言うことを言ってくれて良いんだよ」

「は、はい。……謡さんは、休んで下さい。うちは、もう大丈夫ですから」

「じゃあ決まりだね。敦樹君」

「はい」

「兄貴はもう寝るんだよ?」

「分かったよ、誓」

謡は苦笑すると、再びベッドに横になった。疲れが溜まっているのだろう、すぐにうとうとし出す。

(それに、目の前で人間が撃たれるのを見たんだ。精神的に参ってるに違いない)

「謡さん……………」

敦樹が聞こえるか聞こえないくらいの声で、謡の名を呼ぶ。その姿が、神雑愁に似ていて、

(……………笑える)

のだ。

「じゃあ兄貴、お休み」

「……………ん、…すみ」

直後、すうすうと安らかな寝息が聞こえて来た。もう眠りに落ちたようだ。

「敦樹君は、俺の部屋に行こうか」

「は、はい……………」

誓が差し出した手を取るか取るまいか迷う敦樹に苦笑し、誓は身を翻した。無理に繋ぐ必要もないから。

敦樹が慌てて自分の背中を追う気配がする。あまり他者を牽引することのない誓にとって、それは何処かくすぐつたい思いを彼にもたらした。

「やっぱり、此処に居たか」

思いの外、気持ちは落ち着いていた。目の前の女を罵る気はないし、彼女の頬をひっぱたくつもりもない。だが、訊いておかねければならないことがある。

「……………葉弓」

「……………」

「どうしてあの時、謡を助けなかった？」

責めるつもりはない。

ただ、葉弓の真意を知りたいだけ。

「葉弓？」

葉弓は何処か遠くを眺めるような目付きで、涼子の立つ辺りを見ている。

「……………あたしは、兄様に会いたいの」

「……………」

「謡の“中”の兄様は、謡が危なくなったり、謡の身近な人間が危険な目に遭った時に顕れる……………。だから、見てた」

砕けた硝子の破片を触りながらそう言う葉弓は、今までにないほど弱々しく見える。

「でも、兄様は来てはくれなかった。あたしは、こんなにも兄様に会いたいのに。こんなに……………兄様に焦がれているのに、兄様は……………来てくれなかった」

「葉弓」

「……………あんただって、兄様に会いたいでしょ？」

葉弓の問いに、

「ああ、会いたいさ」

涼子はあると応えた。じつと葉弓を見つめて。

「会えるものなら、な」

平坦で感情ののらない涼子の口調に、葉弓の眉が僅かに上がった。

「……………兄様に会うために、自主的に何かをすることはない訳？」

「……………謡を傷付けてまで、会いたいとは思わない」

……………自分でも驚くくらいの、言葉。つまり自分は“あの方”よりも

謡を優先したことになるのだろう。

「ふざけるな……っ」

唸るように、葉弓が言う。

「兄様が、どれだけお前のことを想っているか、分かっている……」

「お前は兄様よりも謡を選ぶと言うのか……っ。あんな、あんな軟弱な奴をっ！」

「違う、葉弓。聞きなさい」

「あたしは許さないよ……。兄様の気持ちを踏みにじるあんたを、兄様を“隠す”謡を！」

「葉弓、謡は謡だ。他の何者でもない。確かに謡の前世は“あの方”なんだろう。だが今、あの体は謡のものなんだ。それを無理矢理、

「お前だつてあの公園で兄様を待ってるじゃないか！兄様に会いたいからだろ！？なのはどうして……っ」

「葉弓、私は……」

「前世での約束が果たされることを信じてるんだろ？あんたはただ待つてるだけで良いのかも知れない。でもあたしは嫌だ！待つなんて嫌だ。あたしは、早く兄様に会いたいんだ！！謡のことなんて知ったことか！あたしには兄様が全てだ。昔も今も、ずっと変わらないっ……！！」

「葉弓」

「兄様にまた会つたためには、あたしは何だつてする……！！」

葉弓の言葉が、涼子の胸に重く、深く、響く。

「……ここで謡を助けた時、あたしは謡が兄様の生まれ変わりだつてすぐに分かった。今世でも会えるなんて、運命だと思った！」

恐らく神雑愁の知り合いに愁と謡がからまれたのを助けたことを言っているのだろう。そう。謡と葉弓が出会ったのは、潰れて久しい雑貨屋“ペイン”の前。葉弓は今日、そこにいた。

涼子と葉弓のただならぬ雰囲気、決して多くはない通行人が奇異の視線を彼女たちに送る。

「運命……か、」

「あたしは、兄様が好き」

「……………」

「軟弱な謡は嫌いだけど、“兄様になっている”謡は好き。だから、あたしはあんたから謡を奪うよ。あんたに、謡は絶対に渡さない」
暗く淀んだ瞳で、葉弓は涼子を睨み付ける。

「待つだけのあんたと、あたしは違う。綺麗事を言ったこと、絶対に後悔させてやるから」

そう言うや否や、葉弓はいきなり立ち上がり走り出した。

「葉弓！」

涼子は彼女を追おうとしたが、結局は止めてしまった。

今の彼女に何を言っても無駄。そう思ってしまったから。

だがその一方で言い様のない不安を涼子は抱いていた。謡から目を離さないほうが良い。

そう心に留めて、涼子も歩き出した。今日はあの公園には戻らない。

過去〱藪内奏と藍田渉〱（前書き）

藪内と渉の過去話。ほんの少しですが痛い表現あり。

過去　藪内奏と藍田渉

面会時間ぎりぎりの時間まで来てしまい、藪内は帰らなければならなくなつた。

だが、

「渉、頼むから放してくれ。もう面会時間が終わっちまうんだ」

渉が藪内の指を掴んだまま、放そうとしないのだ。眠りに落ちていても、目覚めていても。

「……渉、頼むから。また明日、来るから」

指を掴む力は決して強くはなく、寧ろ弱々しいほどだ。だがその手をこちらから放すことは、出来そうにない。

「お前、本当に記憶無くしてるんだよな？」

少しの嫌味を込めて聞いてみると、ただ透明な笑みが返ってきただけだつた。

「……どっちなんだよ」

はあ、と肩を落とす。

「今まで散々苛めてきたから、その仕返しってか？」

そう呟いた時、昔は逆に守ってたんだよなあという感慨とともに、ある過去が脳裡を過ぎつた。

「面会時間終了まであと十分余りか……。少し、昔話でもしてやるよ」

「？」

不思議そうな顔をする渉の手をギュツと握り、藪内は残された時間で過去語りを、始めた。

・・・あれは俺たちが中学一年の頃だったと思う。

その頃、俺と渉は同じクラスで毎日一緒にいた。そしてそれが当たり前の日常だった。

俺はそのときからはねっ返りで喧嘩っ早く、渉もガキの頃から大人しくて俺の後ろに隠れてばかりいた。

・・・その日も俺たちは一緒に帰る約束をしていたが、ある先生に呼び出された俺は、俺を待ってるという渉を教室に残して職員室へ行った。

そして時間も五時という時間になって、ようやく俺は先生から解放された。成績は悪い、宿題は真面目にやって来ない。つまりはお説教をされた訳だ。

『もう五時じゃなか！渉、待ってくれてるかな』

三階にある自分の教室へ走って向かう。

『渉！お待たせ！』

勢い込んでドアを開けたは良いものの、渉の姿はなかった。待ちくたびれて帰ったのだろうか、と俺は残念な気持ちになったが、あるものを見つけてその考えを打ち消した。

『これ、渉の？』

肩掛け鞆が無造作に転がり、開いた口からは渉の筆箱が顔を覗かせていたんだ。

・・・なんだか心の中が不安で占められたように感じた。

『渉！？』

渉に何かあったんだ。俺はすぐにそう気付いた。そう思うと、居ても立ってもいられなくなった。

俺は渉の鞆を肩に引っ掛け、何か手掛かりがないかと周囲をキョロキョロ見回したけど、手掛かりになりそうなものは見付けられなかった。

こうしている間にも、渉が危ない目に遭っているのじゃないかと不

安で不安で仕方なかった。俺は同級生と揉めることが時たまあり、睨まれても居た。そいつらがいつも俺の影に隠れている涉に目をつけても、おかしい話ではなかった。……先に帰ってもらえば良かったのだろうかと後悔もした。

でも後悔してばかりはいられない。俺は教室を出ると、まだ残っている奴が近辺の教室にいないかと探すことにした。

『そろそろ帰るかあ』

『だね』

運良く、今から帰ろうとする二組の二人に出くわした。

『佐野！』

『？あれ、藪内まだ残ってたの？』

片方は時々帰りが一緒になる佐野という男子だった。

『あ、あのさっ、涉知らないか？』

『藍田？いや、知らないけど……脇田、知ってる？』

横にいた脇田という女子が、

『藍田君？……あ、そう言えば、』

『な、なに？』

『さっきトイレに行く途中で、五組の永沢君といるのを見たよ？』

『永沢！』

そいつは俺とよく喧嘩をし、睨み合っている奴だった。時々涉にちょっかいを出すから、その度に追い払っていたんだが。

『でも別に変なところはなくて、二人でお喋りしてるだけだったよ？』

脇田はその後のことは知らないと言う。俺は嫌な予感に襲われながらも、二人に礼を言い走り出した。

『藪内、どうしたの！？』

佐野の呼び声は無視した。もう学校にはいないかと思ったけど、全ての場所を巡らなければ気が済まなかった。何処かに閉じ込められているんじゃないかという思いで一杯だった。

『涉、何処だ？！』

『こら藪内。廊下は走るな』

俺を説教していた教師に廊下でばったり出くわした。

『せ、先生！渉、見てない！？』

『藍田？いや、見てないけど。どうかしたのか？』

『……見てないなら、良い』

そう応えた瞬間、いきなり構内放送のメロディが流れた。この時間帯だから、教師の呼び出しかと思ったが、次に聞こえて来た言葉に、事務室へ猛ダッシュをしていた。

『一年一組の藪内奏君、藪内奏君。電話が入っています。校舎内にいたら事務室まで来てください』

『！』

きつと渉からの電話だと俺は思った。

『だから廊下は走るな！』

『先生、ごめんっ！』

形だけの謝罪をし、俺は事務室へ急いだ。

『すみません！一年の藪内っすけど！』

『電話だよ。同じクラスの藍田君』

本来そういう電話は受けないのか、事務員はいい顔をしてはいない。それでも俺は礼を言っ、電話に出た。

『渉！？』

『か、奏君』

今にも泣き出しそうな、細く震えた声。絶対何かあったのだと、俺は直感する。

『渉、今何処だ！？すぐ迎えに行く！』

『だ、駄目っ、来ちゃ駄目……っ！』

『渉！？』

切羽詰った俺の声に事務員が怪訝そうな視線を向けてくるが、そんなものに構ってはいられない。渉の身を案じながら、俺は受話器の向こうに耳を澄ませた。

『余計なこと言ったら、殺すぞ』

そんな言葉が、微かだが確かに、聞こえた。永沢の声、ではないが・

・・・。

『お前、誰だ』

『もしもくし、かなでくん？わたるくんが心配ならさ、これから言う場所に一人で来てよ』

遠くから、渉の悲鳴のような声が聞こえた。受話器を持つ手が、ぶるぶると震えた。

『・・・渉に何かしてみろ。絶対に許さねえ』

『はいはい。御託は良いから、黙って聞いてて。メモの準備しなくて良い？』

『さつさと言えよ！！』

げらげらと笑う声が疎ましい。

相手が軽い口調で言う場所を頭に叩き込み、俺は学校を飛び出した。

『渉！渉！！』

俺が呼ばれた場所は、中学からは十分くらい離れた廃工場だった。

ドラム缶が縦横無尽に転がり、曇り硝子には蜘蛛の巣があちこちにある。

『渉！！』

『・・・なで、君』

『！渉！！』

ドラム缶が一番密集している場所から、傷だらけの渉が這い出して来た。

『渉！』

俺は全速力で渉のもとへ走った。
だが、

『あぁっ！！』

『渉っ！』

ドラム缶の影に隠れていたのだろう男が、俺より早く渉に接触し渉の髪を引つ掴んだ。渉が痛み顔に顔を歪める。

『おっと、動くなよ。藪内奏・・・大事な大事な幼馴染に怪我させたくなけりやなあ』

『くそが！渉は関係ないだろっ』

この男はきつと永沢の知り合いだと俺は検討がついていた。

『永沢！！出て来い！俺がむかつくなら俺を殴れば良いだろうが！
！渉を巻き込むな！！！！』

『かな、でくん・・・』

ぼろぼろと、渉が涙を零す。それに気付いた男が愉快げに吹き出す。

『お呼びですよ？お前らできてんじゃねえの？』

『！てめっ』

俺は思わずそいつに殴りかかろうと思ったが、男が渉の咽下にナイフを突きつけるのを目にして思い留まった。男の目は一切笑わず、加えて一切の動揺もなく、ただただ他者を傷付けることに対して愉悦を感じていることを俺は悟ったのだ。迂闊に動けば、必ず渉は傷付けられる。

『・・・俺を、どうしたいんだ。どうしたら、渉を解放してくれるんだ』

『だそうですよ。永沢？』

そう男が呼びかけた瞬間、

『ただ殴られてる』

『永沢っ！』

どうやら永沢は外にいたようだ。いつものように着崩した制服姿で中に入ってきて来ると、汚らしいものでも見るような目つきで、俺と渉を等分に見遣った。

『男のくせに泣きやがって』

理不尽な言葉を渉に投げ、ついで俺に歩み寄って来る。

『で、お前は大事な幼馴染を助けに来た、と』

『……悪いだよ』

『悪かねえよ。お陰で俺はお前を好きなだけ殴ることが出来るんだからな』

俺の目と鼻の先で立ち止まると、永沢は俺の腹にパンチを叩き込むとする。

俺は条件反射的にそれを往なそうとするが、ナイフを突き付けられたままの渉の姿が視野に入り、体が硬直する。

『奏君、避けてっ』

無理だ、渉が傷付くと分かっている永沢の拳を避けるなんて出来ない。

『っ、』

『バカじゃねえの？他人のために自分が痛い思いするなんて』

次は両頬に拳が飛んで来る。渉の『避けて』と懇願する声。そんなの無理だ、と俺は思う。

『ぐあっ！』

また腹に拳が入り、俺は思わず膝を着いた。

『奏くっ、止めて、もう止めてよっ！！』

自分も怖いだろくに、渉が声を上げて必死に止めさせようとしてくれている。場違いだが、それが嬉しかったりする。

『渉、良いから……』

『奏君っ、』

『もうちよつとだから、な？』

渉が涙をぼろぼろ零しながら、嫌だ嫌だと讒言（ざんげん）のように繰り返す。

『っねが、お願いだから、もう止めて下さいっ、永沢君、お願いだからっ』

俺を痛め付けるのを中断した永沢が、渉をじっと見下ろす。渉も永沢を見返す。

『永沢、渉をこれ以上傷つけたら……マジで許さねえぞ……』

永沢の片足を掴んで威嚇するが、もう片方の足が俺の頭を蹴り上げ

た。

『がつ……！』

『かつ、奏君っ！！』

『永沢あ、さつきからこいつ、奏くん奏くんって煩いんだけど？それに俺はいつまでこのままな訳？いい加減飽きたんだけど』

男がナイフをぶらぶらさせながら、ぼやくように言う。永沢はふん、と鼻を鳴らすと、

『詰まんないことに付き合わせてすんません。なんか奢ります』

『おっ、じゃあ俺、帰って良い訳？』

『はい。もう気い済んだんで』

『りょーかい』

男は急にニコニコと微笑むと、雑に渉を突き放した。

『っ！』

『わた、る……』

永沢はもう俺たちには一切の関心を無くしたのか、男と一緒に去って行く。

『かな、奏くんっ』

渉が必死の形相で俺の方へ膝這いで寄ってくる。

『何で、何で、避けないのっ？奏君なら絶対勝てるのにっ』

腹やら顔やら殴られ蹴られして辛い俺に言う台詞かよ、と俺はおかしい気持ちになる。

『なっ、なんで笑うの……？こ、こんなに心配してるのに、バカ、バカッ！』

不安と心配の裏返しだとは分かってはいるんだが。

『……渉も、大丈夫か？』

『え？』

『お前も殴られたんだろ？ここ、腫れてる』

口端が赤くなり腫れている。抵抗しないように殴られたのだろう。

『切り傷だって……。痛かったろ？』

『ぼっ、僕は平気だよ！奏君が必ず助けに来てくれるって、信じて

たし……」

「……」

「そ、それに殴られたって、言っても、大したこと、ない、し……
っ、奏く、に比べた、ら全然っ」
うっっ、と最後には詰まり、

「……こわかつ、怖かったよっ、永沢君も、だけど……一緒にいた人も、冷たくて、言うこと聞かないと、殺すって、お前も、奏君も、って言われてっ……」

止まっていた涙を再び流しながら、渉がつつかえつつかえながらも自分の気持ちを吐き出していく。

俺はそんな渉の手を引き、頭を撫でてやる。

「……奏君に、迷惑掛けたくなかった、けど……」

「バカ渉。お前のことを迷惑なんか思ったこと、ねえよ」

苦笑した拍子に、ズキツと殴られた頬に鋭い痛みが走った。

「か、奏君っ？大丈夫！？」

「平気平気……っ、早く帰るぞ、」

「ぜ、全然平気そうに見えないよっ」

「良いから。……それに早く帰らねえと、お前の母さん心配してるぞ」

「奏君……、」

「おばさんには俺から適当に説明する。渉は俺に合わせれば良いから」

俺は一度渉の頭を撫でると、痛みを堪えながら立ち上がった。渉もふらつきながらも自分で立ち上がった。

「奏君、あの……ありがとう、助けて、くれて……」

「バカ。気にすんな」

俺は渉の鞆を突きだし、持つように促す。

「これ、僕の鞆……」

「教室にあったから、持って来た。また学校に取りに帰るの、面倒だろ？」

『あ、ありがとう……』
『別に』

とにかく早く帰ろう、と渉に言い、まだ心配そうに俺を見上げて来る渉とともに廃工場を後にした。

「渉のお袋さんに、渉が傷だらけになった理由とかさ説明するの大変だったんだぜ？……まあ俺のせいでそうだったんだから、迷惑とかは思わなかったけどな」

あの時は本当に焦って不安で、渉にもしものことがあったらと怖くて怖くて仕方がなかった。

「……随分長く話しちまったな。疲れたろ」

渉は話し始めた時から全く表情を変えず、ただ無心に藪内の顔を見つめている。

「渉、俺のせいで一杯危ない目に遭ったよな……。ごめんな」

「……………」

渉がおもむろに口を開いた瞬間、

「すみません、面会時間が終わりになります」

看護師が顔を覗かせ、藪内に声を掛けて来た。

「あ、すみません。今、帰ります」

藪内がそう言うと、渉ももう引き留めるのは無理と分かったのか掴んだままだった藪内の指を放した。

「明日、また来るから」

「……………うん、」

期待していなかった返事を貰えて、藪内は嬉しくなる。

「じゃあな、お休み」

「……お休み、なさい」

藪内は看護師に礼をし、静かに渉の病室を後にした。

……全く思い出せなかった。それがひどく申し訳なくて、渉は萎縮してしまう。

「藍田さん、体温計りますよ?」

看護師さんに言われ、体温計を脇に挟む。

「疲れた顔、してますね。今は何も気にせず、ゆっくり休んで下さいね」

「……………はい」

看護師に返事をし、渉は目を閉じた。

藪内奏の悲しげな顔を、脳裏に思い描きながら。

刺激される嗜虐心と、過去（前書き）

後半で、謡の一人称語りが入ります。

刺激される嗜虐心と、過去

「好きな所に座って」

敦樹を自室に連れて行き、誓は彼にそう言った。

だが敦樹は困り顔でドア口に立ち尽くしたままだ。

「敦樹君？」

まさか俺が怖いのだろうかと思っただが……、

「あ、あの……うち、うち……早く帰りたいんです、兄さんと、早く……」

「神楽さん、まだうちの親父と話があるみたいだったけど……。俺から言っただけよ？」

「え？」

誓の言葉が意外だったのか、敦樹が虚を突かれたような顔をする。

「何、変な顔して」

「あつ、すみません……」

「……別に謝らなくて良いけど……」

謝られても困ってしまう。それに別に誓は善意でそんなことを言った訳ではないのだから。

「それにしても体に合わない服を着てるんだね？そのパーカー、君のなの？」

「！」

「？」

固まった敦樹に手を伸ばせば、怯えたように身を引かれた。……その様が兄のものにかぶり、誓の中の残虐な部分が刺激される。

「…君、っ少しだけ兄貴に似てるよ」

「え……？」

「ここだけの話さあ、俺、兄貴のこと嫌いなんだよね」

「！？」

びっくりして目を見開く少年の姿が可笑しくて仕方ない。一歩近づ

くと、それに比例して敦樹が下がる。何かを隠すようにパーカーの前のジッパをギュツと握り締めながら。

「う、うちに何を言いたいんですか……？」

「いや、世界には苛めがいのある人間がいるってことだよ」

「っ？」

早くも敦樹の小さな顔に誓に従った後悔が浮かぶ。

「兄貴もそうだし、君もそうだ。勝手に災厄を連れて来る」

「あ、あなたは」

何かを言いかけた敦樹は、恐怖のためか先を続けられずに口ごもる。

「『本当に謡さんの弟なんですか』……でしょ？」

「！」

「凶星、だね」

へへへ、と力の抜けた笑みを見せる誓を、敦樹は正視出来ない。

「……確かに俺と兄貴は性格が一切違う。でも確かに兄弟だよ。信じられないかな？」

「そ、そんな……こと、」

「君はもう少し自分を強く見せる努力をした方が良いよ。……じゃないと俺みたいな奴につけ込まれるよ？」

「う、うちだって自分が弱虫なことくらい分かってます……っ。でも、」

「……簡単に自分を変えるなんて無理だもんねえ」

「…………っ」

「ああ、ごめんごめん。泣かせたい訳じゃないから、そんなに悲しそうな顔しないで？」

誓は敦樹から離れると、ベッドに足を組んで腰掛けた。

「ほら、座ってよ。取って食ったりしないからさ」

「……はい」

ドアの前に、居心地悪そうに正座する。

目は決して誓を見ない。

「兄貴には懐いてるのに、俺は嫌だって訳？」

皮肉を込めて、訊いてみる。敦樹からの返答はない。

「まあ確かに兄貴は人畜無害そうに見えるからね。君が安心出来るのも当然の理かも知れない」

「……別に、謡さんに懷いたつもりは、ありません」

「あ、喋った」

「ちや、茶化さないでください」

「茶化したつもりはないけど……。それにしても、兄貴に懷いてないってというのは本当？」

「だ、だって……そんなに長い時間一緒にいたわけじゃないし、……うちは、別に、」

「馴れ合う気はないって？」

「からかうような誓の口調に、カツと敦樹の白い頬が紅潮する。

「そ、そんなことは」

「嘘。差し詰め神楽さんが兄貴に盗られそうで嫌だってとこかな」

「っ……！」

「兄貴が大事なお兄さんを君から奪うと思ってるんだ？」

「ちっ、違いますっ！」

「そんな真っ赤な顔で否定されても……ね」

「そ、そんなこと思ってますんっ」

「分かった。分かったからそんなに泣きそうな顔しないでよ。悪者になった気分になる」

誓はクスクスと肩を揺らして笑う。その仕草も、謡とは似ても似つかない。

「うん……じゃあちよつと下に行くてくるよ。親父に早目に切り上げてもらえないか、訊いてくる。……俺が戻るまで、この部屋から出るんじゃないぞ」

最後だけ凄味を利かせた口調と目付きで吐き捨てると、誓は揚々と部屋を出て行った。

「……………ふう、」

ドアが完全に閉じられた瞬間に、敦樹は深いため息を吐いて体から

力を抜いた。いつの間にかかいていた背中の汗のせいか、体がぞくぞくと寒気に震えた。怖かった、のだろうか。

（あの人が、本当に謡さんの弟？）

姿形が似ていない、というのもあるが、もっと……本質的なものがまるで違うように感じられたのだ。

（でも、それだけで本当の兄弟じゃないって疑うのも……どうかな……）

敦樹は壁に凭れ、疲れきったようにその瞳を閉じた。

……大抵の人は、僕の父さんに対して称賛の眼差しを送る。僕も、父さんに憧れていた。

子供の目から見ても、テレビに出演して雄弁を語る父親を観るのは誇らしいものがあつた。友達にも、何度だって今テレビに映ったのは自分の父親なんだと自慢みたいなこともした。

それくらい、父さんは僕の自慢であり、憧れの人でもあつた。

……だけど、母さんがあんな目に遭つてから父さんは変わってしまった。確かに社長という立場もあつて、冷徹になることだつてあつたし部下の失敗には厳しく酷い時には手を出すこともあつたけれど、子供である僕や誓には優しく子煩悩な人だと言えなくもなかった。

でも、母さんが駅のホームから転落するという事故に遭い僕たちのことが分からなくなってしまうから父さんの僕たちを見る目は、とても冷たくなった。今でも、忘れられない。母さんの事故の報を受け、神楽さんと一緒に母さんの病室を訪れたときに父さんに手を払われたことを。

まるで親の仇だとも言つのように、僕の顔を睨み付けたことを。

僕は父さんが全く知らない人に見えて、竦み上がった。父さんはそ

の日、何も喋らないで仕事に行かずと母さんに付き添っていた。僕は神楽さんに連れられ、誓と家に帰った。その日は寝る時にも父さんの冷たい目が脳裏を支配して、怖くてなかなか眠れなかった。神楽さんに何度大丈夫ですから、と背中を擦られたか分からない。神楽さんの手の温もりを感じながら、僕は泣いた。どうしてか無性に悲しくて、でも神楽さんの温もりを嬉しく思いながら。

……その翌日から前日までの父さんを家の中で見ることはなくなった。笑顔はなくなって、会話も日常的なものは殆んどなくなった。朝起きて母さんの姿はなく、既にぴしりとしたスーツ姿の父さんの、話しかけられることを拒む背中だけがあった。

何度かは「行つてらっしゃい」と声を掛けただけで、反応は返って来なかった。無言で玄関に行き、靴を履き、無言で出て行く。僕や誓には一切見向きもしてくれなかった。それでも僕は、父さんに声を掛けることを止めなかった。……止めたら、もう二度と母さんが元気だった時のようには戻れない気がしたから。

そんな毎日がしばらく続いた後、父さんと関わる時がやって来た。確か誓が風邪を引いてしまい、38 近い熱を出した時だった。誓の部屋で看病していると、ノックなしに父さんが入って来た。出社前だから、相変わらずスーツだったけれど、誓のことが心配で様子を見に来てくれたのかと思って僕は嬉しくなり「父さん」と呼び掛けようとした。

……でもその前に、頭に激しい痛みを感じて僕は呻いた。

『いた、痛いよっ……!』

痛みの原因は、父さんに髪を掴まれ、引っ張られたからだだった。父さんは無表情ながらも、冷徹な瞳で僕を見ていた。

『父さん、止めてっ』

自分の一体何がいけなかったのか。一体何が父さんの逆鱗に触れてしまったのか、僕には全く分からなかった。だけど、父さんが激怒しているのは痛いほどに伝わって来た。

『謡、支度もせず何をしている』

『っ！』

抑揚が全くない声音に怯え、僕はびくりと体を震わせる。

『今日は平日だろう。さっさと着替える』

『で、でも誓が、熱っ……あるから、』

『そんなもの、誓の自業自得だ』

『そんな……っ！』

『……それにしばらくすれば珠子さんが来るだろう。彼女に任せれば良い』

『けどっ、珠子さんが来るまで一人になっちゃうよ……っ！?』

言い切った瞬間、頬を鋭い痛みが走り僕は体を硬直させた。掴まれていた髪を離された直後に頬を張られたのだと、気付くまでに時間が掛かった。

『お前……お前が私に指図出来ると思っっているのか？意見して良いと思っっているのか!?』

怒鳴り声とともに父さんの手が伸びて来て、腰を抜かした僕の胸ぐらを掴み自分に引き寄せた。

『と……さんっ、』

『早く支度をしなさい、そして学校に行きなさい、次期社長のお前が時間を無駄にすることは私が許さない』

手に更に力がこもり、僕は荒い息の下で必死に頷いていた。

父さんが恐かった。僕を息子……それ以前に人間とすら思っていないのではないかと、不安で仕方なかった。

僕が頷くと、父さんは僕を解放して部屋を出て行くとする。誓の様子を見てくれもしない。大丈夫か？の一言もない。自分の息子が風邪を引いて、熱に苦しんでいるのに。でも……、

『けほっ……』

僕には父さんを諫めることなんか出来なかった。父さんに口答えすることなんて出来なかった。

『誓、ごめんね……すぐに珠子さん、来てくれるからね』

せめてタオルを氷水で濡らし直したいと、誓の額にのせたタオルを

取ろうとしたけど、

『謡！早くしろっ！！』

部屋の外から響いて来た父さんの怒声に、それすらしてやれなかった。僕は力なく、はい、と応えて誓の部屋を逃げるようにして出た。でも父さんは既に玄関で靴を履き、僕を待ってくれさえしていない。僕は泣き出しそうになりながらも、慌てて自室で着替えた。

……父さんは僕や誓を嫌いになったわけじゃない。そう思ったかった。きっと母さんがあんなことになって、神経的に参っているのだと思い込もうとした。

……そうとでも思い込まなければ、自分という“存在”が瓦解してしまいそうだったから。

いつかは昔のように優しく穏やかな人に戻ってくれと希望を抱いていた。願っていた。

でも、それも…もう、お仕舞い……………。

眠りの中へ

敦樹を部屋に残し、誓は父と神楽のいるリビングへ向かった。

一応閉まっているドアをノックするが、返事が返る前には既にその体をリビングへ滑り込ませている。

「どうした、誓」

二人の話し合いはうまくいっていないのか、彼らの間に漂う空気は重たかった。

「神楽さん、敦樹君がお家に帰りたいそうですよ？好きなお兄さんと一緒に」

誓の言葉に、神楽が体を強張らせるのが分かった。

「親父、もうそろそろ良いんじゃないの？神楽さんも疲れてるだろうしさ」

「誓様、私は」

恐らく大丈夫だと言おうとしたのだろうが、その彼の言葉を、春樹が遮った。

「・・・そうだな」

「え、」

「今日はいろいろあってお前も疲れているだろう・・・また明日、仕事の席で会おう」

神楽の反応を見ることもなく、春樹は椅子から立ち上がると茶を入れたコップを手にしたままリビングを去って行った。

春樹の反応が意外だったのか、神楽が彼の去った方を見ながらポカンとしている。

「神楽さん、敦樹君が俺の部屋で待ってるからさ」

「え・・・あ、は、はい」

ようやく立ち上がった神楽に、誓が更に声を掛ける。

「そうそう。良かったら兄貴にも声を掛けてってあげてよ」

君の弟が嫉妬するだろうけど・・・という言葉を中心で呟きなが

ら。

「ですが、謡様はお休みになられてるのでは……」

「でも兄貴のこと心配って顔に書いてあるし」

誓が少し悪戯心を發揮して神楽を揺らがせる。途端に神楽の顔に動揺が走った。

「ほら、会える時に会っておいた方が良いんじゃないのかなって思っ
てね」

そう言って、誓はさっさと一人で二階へ向かう。

「誓様！ちよつと待って下さい」

階段の一段目に足をかけた格好で呼ばれ、誓はその体勢のままで追
つて来た神楽を振り返った。いつもの、にへら、とした締まりの無
い笑顔を浮かべて。

「何？神楽さん」

「誓様、あなたは何を知っていて、何をご存知ないのですか……
？」

それはずっとずっと神楽が誓に訊きたいと思っていたことだった。
今を逃せば訊く機会は二度とない。

神楽は何故かそう感じて、思わず問うていた。

「俺が？」

「……私には、あなたがわからないとずっと感じていました」

「へえ？初耳」

誓は心底楽しそうで。

「誓様が何を見て、何を考え、何を感じているのか。謡様や春樹様
のことをご家族としてどう想っているのか。ずっとずっと訊いてみ
たいと思っていました。そしてどれくらい“裏”のことをご存知な
のかを、訊いてみたいと」

神楽の端正な顔には、春樹と対峙するときとは別種の緊張が走って
いた。

そう、“得体の知れないもの”と対峙するときの緊張が。

「洞察力の固まりみたいな神楽さんでも、読みきれないものってあ

るんだ？それが俺だなんて、光栄だね」

「お言葉ですが、茶化さないでいただけませんか？私はあなたの本心をお訊きしたいのです」

「本心……ね」

足がだるくなってきたのか、誓は階段に掛けていた足を廊下に着地させ、少しだけ神樂のほうへ歩み寄った。

「『深淵を覗き込むとき、深淵もまたこちらを覗いている』」

「え？」

「……フリードリヒ・ニーチエの言葉だよ。神樂さんだって知ってるでしょ？」

「は、はあ」

「俺が言いたいのはね……無闇矢鱈むやみやたらに他人の“中”を覗くなつてことだよ」

「！？」

思わず身を引く神樂を嘲笑うように、誓が微笑んだ。その笑みは、いつもの締まりの無いものとは違い空々しく方向の定まらないものだった。

「俺の“本心”を知ったところで、神樂さんはどうするの？」

「……それは、」

「何？俺が“裏”社会に通じてるって言えば、神樂さんは満足な訳？兄貴や親父のことをどんな風に想ってれば、あなたは満足するの？」

「誓様、私は」

「俺の“本心”は俺だけのものだよ、神樂さん？誰にも晒すつもりは、ない」

はつきりと言い切り、誓は唇の端をきゅうつと吊りあげた。

「……それに、俺の“本心”を知る前に、別の人の“本心”を知つてあげた方がいいんじゃないの？」

「え？」

「他人より家族のこと、心配したら？」

誓が誰のことを言っているのか、神楽はすぐに理解する。

「……敦樹のこと、でしょうか？」

さあ、と誓は悪戯めいた笑みを投げ、トントンと階段を上り始める。神楽も慌てて彼の後に続いた。

神楽を引率する形で先に二階に到着した誓は、自室のドアではなく兄である謡の部屋のドアを開けた。

「兄貴のこと、気になるんでしょう？」

神楽は真正面から誓の顔を見ることが出来ず、目を逸らしたまま会釈し謡の部屋に入る。

「……うう、」

だがベッドで眠る謡が、苦しげに魘されているのを目にした瞬間、全てのことが頭から吹き飛んだ。

「謡様!？」

ドアの方へ顔を向けた横向きで、服の胸元をギュツと握り締めて魘されている。紅潮した顔に、汗が光っていた。

「謡様、大丈夫ですか？謡様っ!」

耳に口を近づけて必死に呼ぶが、謡は目を覚まさない。

ただ荒い呼吸を繰り返し、喘ぐだけだ。

「う……うっ、うう」

「謡様、しっかりしてください!謡様!謡様っ」

それでも何度か呼び、肩を揺すっているうちに、

「か……ぐらさ……ん？」

謡が薄目を開け、神楽の名前を呼んだ。

「謡様!!」

普段は白い頬は赤く、涙の滲んだ瞳は虚ろ。

「大丈夫ですか？酷く魔されていましたよ・・・？」

はあはあ、と息の荒い謡は、不意に頭に走った痛みに顔を顰めた。

「痛っ・・・！！」

「謡様？」

「頭・・・痛いです、気分も・・・悪い、」

もうどうしようもなく敦樹と謡の姿が重なってしまい、神楽は思わず小刻みに震える謡の体を抱き締めた。

意外なことに、謡が目を見開く。

「神楽・・・さん？」

「・・・」

「か、神楽さん、苦しいです・・・」

かなりの力を込めていたらしい。謡が苦しさを訴え、神楽は慌てて彼を解放した。

（・・・僕は一体何をやっているんだ、）

顔から火が出そうなほど、恥ずかしい。神楽が何も言えず黙していると、不意に謡がクスリと笑みを漏らした。

「謡様？」

「心配、してくれてるんですね。神楽さんは」

「謡様・・・」

「それとも、敦樹君と僕を重ねてるのかな」

「！！」

何気なく発されたような言葉に、神楽は強い力で心臓を掴まれたような心持ちになった。

「・・・なんて意地悪を言って・・・ごめんなさい。神楽さんは、僕なんかを心配してくれる唯一の、人なのに、」

自虐的な言葉、自虐的な笑み。

謡には似つかわしくないそれを、今の謡は刻んでいる。

「謡様、今は何も考えずに、お休みになって下さい」

今の謡に必要なのは、休息でしかない。体も心も、酷い悲鳴を上げ

ているから。

「はい・・・神楽さんも、気をつけて帰ってくださいね？」
こんなときでも、他人を気遣う。

「私は平気ですから」

「・・・はい」

神楽は、恐る恐るながらも、謡の額を撫でた。自分でも可笑しい位に、その手が震えた。

謡はその手の震えに気付いているのかいないのか、気持ち良さそうに瞳を細める。

「おやすみなさい、謡様」

謡は小さく頷いて、そっと瞳を閉じた。

・・・暫く額を撫でていると、謡から穏やかな寝息が聞こえて来た。ようやく眠りに落ちたようだ。

「・・・」

神楽は軽く息を吐き、そっと立ち上がる。謡を起こさないように、音を立てないようにドアまで移動し、謡に向けて深々と礼をする。

「ゆっくり、お休み下さい」

殆ど口の中だけで呟き、神楽は謡の部屋を後にした。

夢

「……………」

春樹にも誓にも見送られることなく芝貫家を辞した神楽と敦樹。

実家に帰宅する車内では、助手席に座った敦樹が小さな寝息を立てて眠っていた。

（……敦樹、）

赤信号にひっかかって停車している最中に、敦樹を見る。自室で眠っているであろう、謡の顔が自然に重なって、神楽は居たたまれなくなつて敦樹から視線を外す。

誓に言われた言葉が気になつて仕方ない。誓は何かを知っている。そう悟つた。

（だが、あの様子では正直に話してくれそうにはないな……）

「兄さん……」

どうしても芝貫のことに向きそうな意識を、敦樹の自分を呼ぶ呟きが引き留める。

「敦樹、ごめんね……」

敦樹を、芝貫を取り巻く禍根に巻き込みたくなかったのに。敦樹の笑顔は、守り抜きたいと思っていたのに。怖がらせ、泣かせ、苦しい思いをさせた。全く守れなかった。

（兄貴失格なんだろうな……）

自虐的な笑みを浮かべる。また赤信号にひっかかる。

（僕は、誰も守れないんだ……）

そんな思いが、神楽の頭をぐるぐると巡っていた。

「誓、待ちなさい」

神楽兄弟を見送った後、自室に戻ろうとした誓を春樹が呼び止めた。

「親父、何？」

「……お前、何処まで知っている」

「……急にどうしたの？普段俺に興味なんてないくせに」

それは揶揄でもなんでもなく、事実として誓の中に居座っていた。自分の存在が、兄である謡のその足元にも及ばないことなど、幼い頃から知っていた。だから今はそれが普通になってしまい、なんとも思わない。思えない。

「………妙なことは考えるなよ」

誓の反問は無視して、春樹はそう言う。

「“妙なこと”？それは兄貴に関すること？」

「………」

春樹は何かを押し量るように誓をじっと見つめていたが、またも誓の問いを黙殺してリビングに戻って行った。

（親父、何か感じている、か）

話は終わったと見なし、誓は階段を上る。二階に着くと、自分の部屋に入る前に謡の部屋のドアをノックした。

「兄貴？」

呼び掛けはしたが、兄からの返事はない。眠り込んでいるのだろう。誓は静かにドアを開けると、電気の点いてない部屋に体を滑り込ませた。穏やかな寝息が、耳に届く。そつとベッドに近づくと、謡は壁を背にして眠っていた。泣いたのか、枕元に触れると微かにひやりとした。

「兄貴、」

不意に思う。

昔はただ純粹に兄を慕っていたのに、いつからだろう……兄が悲しんだり辛い気持ちになることが普通になり、それを望むようにすらなつたのは。

「切っ掛けなんか、なかったのかもね……」

殆んど口の中だけで呟く。兄を起こさないよう、そつと。

「良い夢、見なよ」

兄にとつての良い夢とはどんなものかと考えながら、誓は静かに部屋を後にした。

… ああ、これは夢だ。

誓がまだ小さいから。

『お兄ちゃん、誓ね、お兄ちゃんのこと大好きだよ！』

『僕も誓のこと、大好きだよ』

『本当？嬉しいな』

無邪気な笑顔に、心が暖まる。繋いだ手の温もりは今でも忘れていない。

『兄貴』

誓が謡のことをいつから“兄貴”と呼ぶようになったのかは明確には覚えていない。

これといった契機はなかったように思うけれど、何か寂しい気持ちになったことだけは覚えてる。そんなのは自分だけだろうか。

『謡も誓も、お母さんとお父さんの大事な子どもよ』

不意に、中学の制服を着た誓の横に母さんが姿を見せた。忌々しいあの事故の時の格好で。

優しい笑顔に、胸が締め付けられる。

『謡、愛してるわ』

母さんはそう言うのに、その姿はどんどん透けて行く。まるで、霊体が天に召されるかのように。

母さん、待って！！

どうにかして母さんを止めようとするのに、母さんは笑顔を浮かべ

たままで透けて行く。

制止の声が、全く出ない。声を無くしてしまったのかと愕然とする。

『誓と、あの人と、仲良くね』

それは、まるで別れの言葉。

『謡、』

その先の言葉が聞きたくなくて、手で耳を塞ごうとする。
でも、手だけでなく体自体が動かない。

『お母さんは、もうあなたに会えないけれど』

嫌だ、止めて……！

『……ずっと、あなたを見守っているわ』

その姿は、完全に透けて見えなくなった。それにつられるように、
誓の姿も透けて行く。

『兄貴』

誓が何か言いたそうに口を開くけれど、その先は言葉にはならず・

・誓の姿も完全に、消えた。

まるで人など最初からいなかったかのように、真っ白な空間が目の
前に広がるばかり。

母さん、誓？

ようやく出るようになった声で二人を呼んでも、返答どころか物音
一つしない。

虚しさに体から力が抜け、へなへなとその場に座り込む。

母さん、誓……待って、僕を置いて行かないで……

『謡』

自分しかいないと思っていた空間に、誰かの声が響いた。

母さんでも誓でも、父さんでもない。

『何座り込んでるんだ。弱虫だな』

呆れたような、それでいて心配そうな女性の声。

『立ちなさい。しっかりしなさい。男でしょう』

耳元に、風を感じた。誰かの息遣いを、感じた。

『謡』

目に入る、真つ白な眼帯と、大きなリボン。

榆乃木さん。

相変わらず無表情で、何を考えているのか分からない。

『何泣いてるの。ほら、泣くのは止めなさい』

榆乃木さんは、いなくならない？

『何を言ってるの。誰も謡の前から居なくなつてなんかいないよ』

だって、今さっきだって母さんと誓が消えた！透けてしまった！

『消えてない。謡に、見えていないだけ』

分からない！榆乃木さんが何を言ってるのか、何を考えているのか分からないよ！

『そんなことはないだろう。本当は、分かってる』

分からない、分からない、分からない！

そうやって煙に巻いて、榆乃木さんも消えるんだ。僕を置いて、消えるんだ！

母さんと同じで、優しい笑顔を浮かべて僕を置いて行くんだ。

父さんも、母さんも、誓も・・・本当は思ってる。

僕なんて、“芝貫謡”という存在なんてあつてはいけないと。あるのが可らしいと。

榆乃木さんだってそう思ってるんでしょう！僕なんて、必要ないって思ってるんでしょう！

榆乃木さんの表情は変わらない。

その輪郭も徐々に不透明になる。

――消えてしまう。

この人も、消えてしまう。

それが分かると、胸が抉り取られるような痛みに襲われる。

母さんや誓が消えたときの痛みより、深い気がする。

まるで、母さんや誓よりも長く同じ時を過ごして来たかのような。

榆乃木さん！

不安な気持ちを悟ったのか、榆乃木さんがその顔に微かに笑みを浮かべた。

『……大丈夫。私は、あなたのそばに』
え？

『ずっと、あなた様のそばに……』
“あなた様”。

榆乃木さんが、僕のことをそう呼んだ。

『遙か昔から、私はあなた様のことを見守っています』

その言葉が終わると同時、榆乃木さんの姿も完全に消えてしまった。
その瞬間、脳裡がざわついた。

誰かが、僕を呼ぶ声がした。それと同時に、頭を殴られたような激しい衝撃を感じて……

遙は真っ白な世界で、意識を失った。

それぞれの絆／幼馴染みと兄弟／

病院を出て、無我夢中で自宅へバイクを飛ばした。

一刻も病院から離れたかった。

勿論渉のことは心配だし、そばにいて支えになるのなら、そうしてやりたいと思う。

だが、

（……俺に、そんな資格はない）

哀しみと怒りと不安がぐちゃぐちゃとない交ぜになった気持ちながら、どうにか家に帰り着く。

帰宅の挨拶もせず、荒々しい足取りで洗面所へ向かう。

鏡に向かえば、一番憎むべき男が鏡の中の自分を射殺さんばかりに睨みつけていた。

この男が、渉を何度も泣かせ、苦しませ、悲しませた。

それなのに、渉が死に瀕し、記憶を喪うと、渉のことが心配で仕方が無い。

自己中心的、傲慢。どうしようもない。

（渉、ごめんな）

女々しいと笑われるだろうか。

いや、渉になら笑われても良いか。

そう思うと、穏やかな気持ちになる。そう……自分を傷付けることに、恐怖心を抱かないくらいには。

藪内は、右手で拳を作り、勢い良く憎い男を映し出す鏡に向かってそれを振り上げた。

ガッシャアアアンツ！と激しい音を上げて、鏡が割れた。こんなにも呆気ないものなのかと、一瞬気が抜ける。だが、次の瞬間、突き抜けるような激痛が右拳に走った。吐き気すらした。

硝子の破片があちこちに散らばり、細かい破片が飛んで頬にまで傷を作った。そこから血が垂れるが、そんなことは些細なことでは

なかった。

「奏！？なにやってるの！」

母親が蒼白な顔で洗面所に飛び込んで来た。これから出掛けるのか、唇が口紅をつけたてのように真っ赤だ。

「あんたには関係ない」

藪内のハッキリとした拒絶に、母親は一瞬怯んだものの、ぽたぽたと血を足らす息子の手に気付き、

「ちゃんと消毒しないと、化膿するわよ、」

手を取るうとするが、藪内はそれを払い除けた。

「俺に触るな！」

「か、奏」

「……俺のことなんかどうでも良い癖に、心配するフリなんかするなよ——！」

「フリだなんて……」

動揺する母親の体を、洗面所から押し出す。

「奏」

「早く仕事に行けよ。俺なんかよりそっちの方が大事なんだろう——！」

「か、奏……何かあったの？今日のあなた、何か……」

「うるさい、黙れ——！」

……完全に八つ当たりだと分かっている。分かっている、止まらな

い。

「俺に構うな、いつもみたいに放っておけば良いだろう——！」

「……………」

藪内の迫力に怯み、母親は彼の前から逃げ出した。

（涉が感じた痛みは、こんなもんじゃないんだ……）

その大部分の原因は、自分だ。だから、憎い。自分自身が。

「くそっ——！」

滴る赤い液体にすら苛立つ。全てに、苛立つ。

（っ、）

ズズズキと傷口が激しく痛む。だがその痛みだけでは満足出来ず、足元に散らばった硝子の破片を思い切り握り込む。ぶつつ、と肉が切れるような音がして新たな痛みが生まれたけれど、それすらも苦痛にはならない。

「とんだマゾだな、俺は……………」

掠れた声で自嘲的に呟き、藪内は渉の無事を祈るようにギュッと目を閉じた。

今日は長い夜になりそうだと、と何処か他人事に感じながら。

………… 眠れない、と渉は心の中で呟く。

体は悲鳴を上げているし、心も疲れているのは分かる。なのに、眠れない。

何故なら、

（あの人は、どうしてあんなに悲しそうな顔をしてたんだろう…………）
昔話と称して話された話を、渉は全く覚えてはいなかった。だけど、あの人の今にも泣き出しそうな顔を見ていると、自分まで泣きたい気持ちになったのも事実。

（藪内、さん）

また明日も会いに来てくれるだろうか、と考える。
来てくれたら嬉しいと思っている自分を意外にも感じる。

（藪内さん…………）

何だろう、彼のことを考えると安心する。
全く眠くなかったのに、うつらうつらして来る。

（………… ああ、ようやく、眠れそう、）

明日になったら彼との関係を思い出せていたらいいなあと思いながら、渉は長かった一日を終えようとしていた。

ようやく我が家が視野に入り、神楽は詰めていた息を吐き出した。助手席を見れば、敦樹は穏やかな寝息を立てて眠りに就いていた。起こしてやろうとして、春樹の言葉が浮んだため、口を閉じてしま

う。

（敦樹を芝貫で引き取られるなんて・・・、）

正直なところ、嫌だった。敦樹には静かに、穏やかな生活を送って欲しいのだ。芝貫に入れば、そしてあの謡の“保険”とされれば、周囲が黙っては居ないだろう。

謡のように、心を擦り減らすような暮らしを送っては欲しくない。

（・・・春樹様には、明日お断りしよう。いくら春樹様の考えでも、是も出来ないこともある・・・）

誠心誠意、心を込めて話せば、きっと春樹も分かってくれる筈だ。

「敦樹、そろそろ起きて。・・・もう家に着くから」

「ん・・・あい、」

“はい”が寝ぼけて“あい”になっている。長い袖から覗く小さな手の甲で目元を擦る仕草も、幼い。

「兄さん、何笑ってるの？」

神楽が微笑んでいることに気付いたのか、敦樹が少し不機嫌そうに見上げて来る。

「・・・笑ってないよ」

「本当？」

「本当本当」

神楽が何度も頷き、ようやく敦樹は納得してくれたようだ。

「お母さん、心配してる・・・よね」

「・・・春樹様のことから、きつと巧い説明をしてくれてると思うよ」

その手の根回しは怠らない人だと、よく知っている。今回もそうだと信じたい。

「あの、兄さん……」

敦樹が、何か決意したようにハッキリとした口調で神楽を呼んだ。

「どうしたの？」

「うち……ここにいて、良いんだよね？」

「！」

兄が息を呑んだことに気付いたのか否か、敦樹は滔々と続ける。

「うちは、兄さんの弟で、お父さんとお母さんの子供で、居て良いんだよね？」

「あ、当たり前でしょう？急に何を、」

「……………」

「敦樹、」

神楽は一端車を路肩に停めシートベルトを外すと、体ごと敦樹に向き直り、不安そうに前を向いている敦樹の頭を優しく撫でた。

「……敦樹、君は僕たちの大事な家族だ。喻え血が繋がってなくても、そんなことは関係ない。家族だから」

「兄さん、」

「だから、そんなに不安そうな顔をしないで。敦樹はずっとうちにいて良い……いや、居て欲しい」

神楽の言葉に、敦樹は涙腺が弛むのを感じた。

「……………」

「敦樹を守るためなら、僕は何だってするよ」

「本当？本当に、うちを守ってくれる？本当に……うちは兄さんたちの家族で良いの？」

「当たり前だよ。ほら、泣きそうな顔しないの。母さんが心配してしまうよ」

敦樹は再び目を擦り、

「それは嫌だ」

と笑う。

「うん、良い笑顔だ」

そうだ。敦樹は誰にも渡せない、大事な家族なのだ。たとえ、敬愛し自分の恩人である春樹であっても、渡せない。敦樹が彼のもとへ行きたいと願うのならば、彼の意思を尊重するけれど。彼が此処に居たいと願うのならば、誰が何と言おうと、誰が何をしようとも……敦樹は守ってみせる。敦樹の笑顔が、失われないように。

「今日は疲れたね……もう少しだから、頑張って」

“疲れた”という単語だけで済ますことなど出来ない一日だったことは明らかなのに、敦樹は素直に首を縦に振った。

神楽は敦樹の頭にポンポンと柔らかく触れて、車をスタートさせた。（兄さん、ありがとう……血が繋がってないうちを守ろうとしてくれて、ありがとう……）

敦樹が心の底から神楽に感謝していることを、気付かぬまま。

敦樹が、近いうちに訪れるであろう“別れ”の予感を感じ取っていることを、知らぬまま。

母親のこと1（前書き）

9月25日に、微妙に改稿しました。

母親のこと1

早朝。

朝靄漂う街の、とある場所に、真反対の表情をした二人の女性がいた。

一人は真っ赤なりボンと片目の眼帯が印象的な、無表情な女性。

もう一人は、かなりいらだたしそうな表情をした女性だ。咽の奥が、唸るようにぐるぐると言っている。

「・・・何であんたがずっとそこにいるわけ？」

「決まってる。葉弓が下手なことをしない為だ」

無表情な女性―楡乃木涼子の口調は、表情と同じで全くの平坦であった。不機嫌な女性が涼子の返答に、更に不機嫌になる。下から、涼子をギロリと睨み上げる。

「ウザい。今すぐあたしの前から、消え失せろ」

「無理。あなたが謡に手を出さない確証がない限り、私は消えない」
「……あたしが消してやろうか？」

朝っぱらから物々しいことを言われ、しかし涼子は涼しい顔だ。ちつ、と葉弓が舌打ちを残す。

「そんなにあいつが大事？」

そんな問いにも、涼子の表情は変わらない。

「そう思いたいなら、思えば良いよ」

「・・・・・・・・」

またも舌打ちを残し、葉弓は立てた膝と膝の間に顔を挟んだ。

「謡は、兄様とは違うんだよ」

くぐもった声だが、涼子の耳には確かにそう聞こえた。

「当たり前」

「だったら、なんでそんなに謡を大事にするの？あたしから守ろうとするの？・・・まさか謡を好きになつたなんてことはないよね？」
「それはないな」

さらりと否定する涼子を、葉弓が顔を上げて疑わしい目付きで見上げる。

「……じゃあ、やっぱり兄様の“器”だから？」

「……そうかもね、」

伏せた瞳で、涼子が応える。

（要するに、こいつ自身がよく分かってないつつつことね……、）

「葉弓」

「何、」

「……悪いことは言わない。あの人のことは、諦めた方が良い」

途端、落ち着いていた葉弓が色めき立つ。立ち上がり、涼子の胸ぐらを掴む。涼子の色のない瞳が、葉弓を見る。

「どういう意味」

「あの人は、もういない。静かに、眠らせてあげたいんだ」

「いるじゃない！謡の“中”につ！！」

「違う。“あれ”はもう謡だよ。あの人のように見えるだけだ」

「あんたはただ兄様を独り占めしたいだけだ！そうやって、昔みにあたしだけを除け者にする！！」

「葉弓、頼むから、」

葉弓は乱暴に涼子から手を放すと、

「あたしは、絶対に貴様を許さないっ！！」

そう吐き捨てて、一目散に駆け出した。

「……………」

追い掛けようとして、しかし涼子の足は止まってしまふ。

（謡、）

やはり謡の自宅を張ったほうが効率良さそうだ。昨日の今日だから、謡も学校に行こうとは思えないだろう。消耗は激しい筈だから（立ち直れる、かな）

立ち直って欲しい、と願っていることに、涼子は自分でも気付いていなかった。

……長い夢を見ていた気がする。

「……母さん？」

寝起きに、謡はそう呟いた。母に呼ばれた気がしたから。

しかし見慣れた自室の何処にも彼女の姿はなく、謡は力なく項垂れる。夢の名残か、頬が濡れた感触と鼻がぐじゅぐじゅになっていることに今更ながらに気付き、謡はティッシュに手を伸ばした。

（今、何時だろう……）

時計に目を遣れば、あと五分で朝の九時になるようだった。それだけ確認し、視線を下に落とす。家に、自分以外の気配は感じられなかった。

（当たり前、か……）

父は仕事に、誓も学校に行っていて当然の時間なのだから。

「……………」

やはり起き上がる気力などなく、謡はベッドの中でだらりと弛緩する。

「母さん、」

無性に母に会いたかった。いつも、悲しく寂しい思いをしないために、心の奥底に封じている、母に。

（会いたいよ、母さん）

勿論、会うことは出来る。だが会ったとして、彼女は謡のことが分からないのだ。ただ悲しい気持ちになるだけだ。

『いつか必ず、謡が心から愛せる人が現れるわ』

（母さん、母さんは父さんを心から愛せていた？……僕を産んで、幸せだった？）

自分が過去形で考えていることに、謡は気付いていない。脳裡にちらつく母の笑顔を拒むように強く目を瞑るけれど、

『謡』

自分と呼ぶ声すら聞こえて来る。当然、幻聴だ。

「？」

不意に、微かな音が聞こえた。単調に響く、電子音。

「電話だ、」

親機は一階にあるが、子機が二階にある。

しばらく経つても、音は鳴り止まない。

何か嫌な予感がして、謡は力を入らない体に鞭打って、ベッドから這い出す。すがり付くようにしながらドアを開け、壁に片手を付けながらゆつくりと歩く。情けない話、一人で真っ直ぐ立てそうにな
いから。

「っ、」

普段なら数秒で着くのに、今日は一分近く掛かったように感じた。

「は、はい……もしもし、」

嫌な予感ますます膨らむ。

『あなた、息子さん！？』

「えっ、あ、あの」

何処かで聞いたような声なのだが、咄嗟には分からなかった。

「どちら様、ですか？」

『あつ、失礼しました。……わたくし、寿々城ホームの嶺近と申します』

「！」

寿々城ホームという名称に、謡はハッと息を呑んだ。それは、記憶喪失になった謡の母親が、体力と精神を癒すために入っている医療施設だから。

（母さんに、何かあったんだ）

嫌な予感があたりそうな気配が犇々と犇めき、謡の精神を蹂躪しようとしている。

『お父様に連絡を取ろうとしたのですが、連絡がつかず……ご自宅に』

「は、母に何かあったのですか？」

頭に浮かんでしまうのは、“死”という不吉な一文字。

『・・・職員が目を離れたほんの少しの間に、姿が見えなくなりまして・・・』

「！」

『今、職員総動員で付近を搜索していますが、まだ見つかっていません・・・』

ドクドクと、鼓動が激しくなる。

「母さんが・・・」

一体何処に行ってしまったのだろうか。まさか、死に場所を探して・・・？

『警察にも連絡しています・・・ご家族の方に、お母様からご連絡は、』

嶺近の言葉が徐々に尻すぼみになる。自分がありえないことを言っていると思っているのだろう。

「ないです。・・・ありません、」

彼女の記憶の中に、自分のような矮小な存在はいないのだから。

『そうですか・・・。もし連絡があれば、こちらにも教えてください。わたくしたちも引き続き搜索いたしますので』

「はい、」

嶺近はでは失礼、と慌しい空気を背に挨拶をして電話を切った。

ツーツーという平坦な電子音が、謡の耳だけではなくて胸の中でも虚しく響く。自分と呼ぶ母の声が蘇る。

『謡』

「母さん、」

探さなければ。

母を。あの人を。

「母さんっ」

声を上げ、母を呼ぶ。

謡は電話を置き、部屋にとって返した。まずは着替えなければ。身支度を整え、母を探しに行くのだ。

そして、家に連れて帰る。記憶がなくても構わない。もう、離れるのは嫌だ。

（母さんが戻って来てくれたら、きっと父さんだって……昔みたい
に）

喜んでくれる筈。笑って、くれる筈。

「母さん、何処に居るの……？」

着替えを済ませ、謡は家と自転車の鍵、財布、そして、いつの間にか部屋の机の上に置いてあった、父に没収されたはずの自分の携帯電話などの必要最低限のものだけを手にして家を飛び出した。

父親によって没収された携帯電話が自室の机の上のあったことを、一切気にしないままで。

母親のこと2（前書き）

今回は短いです…。

母親のこと2

母さんは何処が好きだったろうか。自転車をあてもなく走らせながら、謡は必死に頭を回転させていた。

ドラマなどのフィクションに触れすぎなのかも知れないが、人は記憶を喪失しても無意識に以前好きだったり、思い出のある場所へ足を運ぶこともあるようだから。

（母さん、無事で居て）

胸に迫る不吉な想像を振り払い、謡は母親のことに頭を巡らせる。

大事な人が傷付くのは、もう嫌だ。

（母さん……！！）

今にも萎えてしまいそうな足を必死に動かし、謡は自転車を漕ぎ続けた。

彼女はただ歩いていた。

何処へ向かっているのか、何処から来たのか、全く分からぬまま。

そしてそれ以前に、自分の名前すら分からなかった。

いや、更にそれ以前に、自分が本当に生きているのかすら、分からない。

それでも歩き続けているのは、“とても大切”なものに会うためなのだ。

その“大切”なものがなんなのか、彼女本人にも分かっていない。ただ、呼ばれているとは感じる。

誰かが、私を呼んでいる。

その想いで、彼女は歩き続けている。何処とも知れぬ道を。

「誓様」

「夏」

朝っぱらから学校内で話し掛けて来ることは珍しい存在に、誓は何事だと眉を寄せる。

成宮夏は、無感情に誓に告げる。

「楓様が姿を消されました」

「……………」

級友たちがバスケットボールを体育館のフロアに叩く無機的な音の中、誓の思考が一瞬止まる。だがすぐにいつものものにへら、とした弛緩の顔付きになり、

「嘘でしょ？」

と笑う。しかし夏がすぐに首を左右に振ったため、本当なのかわざるを得ない。

「え……だって、あんな何も分からない状態で何が出来るっていうのさ？それって自発的なものの？」

次第に不安定になる、誓の口調に夏が微かに目を細める。誓が、乱れている。母親を案じ、不安定になっている。

夏は小さく頷く。

「今、職員の方が総出で探しています」

「……………俺も行く、」

「誓様？」

誓は体調不良と称して体育を見学中で、今は夏に気付いて密かに舞台袖に場所を移していた。

「あんななまくらどもに、母さんを任せられない」

誓の目に力強い光が宿り、その光が夏の瞳を射抜く。

「協力しろ」

「しかし、授業は……」

「必要ないよ。あんな生半可な幼稚いモンは」

誓はそう笑って、ズボンのポケットを何やらごそごそと探り出す。よれよれになって出てきたのは、教師に提出する早退許可願いの用紙だった。

「お前は先に裏門に行つてろ。俺もすぐ行くから」

もう退きそうにないことを悟り、夏は了承して移動を開始する。

「母さんは、必ず俺が見つける」

自分に言い聞かすような口調で呟き、誓は許可願いの記入に取り掛かった。

幼い頃、誓とともに手を引かれて遊びに行った公園。行く度にお菓子が欲しいと言ってごねる誓を宥めた、近所のスーパー。二人きりで調べ物をした、図書館。

「……いるわけない、か」

母があゝの状態で図書館に行くわけなどない。

…他に何処をあたれば良い？母さんの好きだった場所は、何処だ？…考え詰め、しかし何も浮かばない自分に愕然とする。自分は、母のことを何も分かっていなかったのだという失望を感じた。

「僕は……」

母だけでない。父が何を考えているのかも分からない。誓が何を考えているかも分からない。

家族のことが、全く分からない。

「っ、駄目だ…自滅してる場合じゃないよ……」

今は、とにかく動いて母を探すことが大事だから。それに、母が実際に好きだった場所に行くかどうかは分からない。行くものだと考

えたのは、自分。

「動かなきゃ、母さんは見つからない……」

勝手に挫けている場合ではないのだ。動かなければ、いけないのだ。
「母さんは、絶対に僕が見付ける……！」

二人の兄弟は、それぞれ走り回る。自分たちの母親を迎えに行くために。彼女の無事を祈りながら。

揺らぐ信頼と再会への階段

二時間の会議を終え、春樹と神楽は社長室に戻っていた。ソファに腰を落ち着けた春樹に、コーヒを淹れようとメーカーに近付いた途端に内線が鳴った。

「はい社長室です」

『お疲れ様です、総合受付の武藤です』

まだ若い女性の声。確か去年採用になったばかりの筈だ。

「どうしました？」

『社長はいらっしゃいますか？外線でお電話が入ってますが……』

「何処からですか？」

『それが、寿々城ホームの嶺近と言ってもらえば分かるの一点張りで……』

「！」

神楽が勢い良く振り返ると、春樹がどうした・と訊くように眉を片方だけ上げた。

「寿々城ホームの方から、お電話だと……」

「！」

春樹の顔が目に見えて強張る。

「春樹様、」

「出よう」

神楽から受話器を受け取り、

「私だ。繋いでくれ」

『あ…はい、分かりました』

内線から外線に切り替わる。

「もしもし、芝貫です」

『ああ、芝貫さんっ。ようやく取り次いで貰えた……』

嶺近は、明らかに狼狽し声を大きく震わせている。

『…実は、楓様がホームを抜け出してしまったようっ……っ、』

「！」

『職員が少しの間、目を離れた隙に……今、職員も総出で探しているのですが、まだ見付からず……』

「春樹様？」

春樹の顔が明らかに蒼白になっている。神楽は酷く不安になって、春樹を呼ぶ。

「……警察へは」

『地元の警察に届け出ました。ですが、何の連絡も……』

「……」

『一度ご自宅にお電話しましたら、ご子息が出られて……ご自宅にも楓様からの連絡はないようで……』

「ご子息……謡」

記憶を失い、精神的にも不安定な母親がホームから姿を消したと聞いた謡は、どう思っただろうか。

『私たちは全力で楓様を探します！とにかく、芝貫さんにはご連絡をと』

「……楓が、いなくなった？」

あんな状態で、何処に行くというのだ？

「！」

神楽が息を呑む気配が伝わって来る。

「楓……」

『本当に申し訳ありません……っ。私たちがおりながら、楓様が出て行かれるのに気付かず……』

「謝罪は後で良い。早く楓を見付けろ」

こんな時まで高圧的な物言いになってしまっ自分を恨めしく感じながら、春樹は嶺近に言う。

『は、はいっ。失礼しますっ』

春樹は無言で受話器を置いた。そしてソファに座り直す。

「は、春樹様……」

神楽はコーヒを淹れることも出来ず、突っ立っているだけだ。

「楓様が居なくなられたというのは……」

しかし春樹は神楽には応えず、呆然とした表情で机を見詰めているだけで神楽の方を見ようとしもない。

「春樹様……」

「……………」

春樹は何かを振り払うように、何度か首を左右に振った後で、ようやく神楽を見た。

「神楽、コーヒーを」

「あ、はい」

事情を説明してもらえるのかと思いきや、春樹の口から発せられたのはコーヒーの催促だった。

神楽は腑に落ちないものを感じながら、命令通りにコーヒーを淹れる。…いつもは心を落ち着かせてくれる香り高いコーヒー。だが今日はその香りを楽しめそうにはなかった。

神楽は意を決して、春樹に問う。

「……楓様が居なくなられたのですか？」

「コーヒーを一口含み、春樹が微かに頷く。

「職員が目を離れた少しの間に、抜け出したそうだ……何を考えているのか……」

それは、自分の妻に対する言葉か。

それとも、職員に対する言葉か。

神楽には掴めない。

「春樹様、」

「神楽、今日の予定は」

「……正午より、中央銀行の方々との会食があります。…キャンセルなさいますか？」

きつとキャンセルにするだろうと踏んで敢えて口に出したのだが……

「いや、予定通りに」

「！」

「何だ。納得出来ない、という顔だな」

神楽は動揺する。

「楓様のことは……」

「……ホームの人間が探しているし、警察にも届け出たそうだ。私がいても、何の役にも立たん」

「だ、だから仕事をされると?」

「自分の出来ることをするだけだ。私は何か間違っているか? 神楽」
決然とした口調に、しかし神楽は動揺を隠せない。

「し、しかし……」

息子二人は、きつと母親を探している……神楽にはそんな確信があった。その確信に理由なんてないが、直感でそう思っている。

「……私には楓を見付けられる自信がない……そう言えば良いか?」

「そ、そういう問題では……っ」

何だ、このちぐはぐな会話は。神楽は焦る。

「……兎に角、会食は予定通りに行く。神楽、先方に余計なことは言うなよ」

余計なこと。

その言葉が、神楽の中から焦燥という感情を一気に奪い取った。心が冷えた。

目の前にいるのは、人間ではないと頭の片隅で囁くものがある。

“人の皮を被った悪魔”――そんな言葉が脳裡を過る。……いや、一概にそんなことを思っては駄目だ。きつと春樹も愛する女性が失踪したと聞き、動揺し混乱しているのだ。

「……分かり、ました。予定通りに」

春樹が一度頷き、目を閉じた。その姿が、妻の安全を願う夫に見えるのは、自分の願望に過ぎないのだろうか、と、神楽は思った。

わきさかはるみ

脇坂晴美が、その女性に注意を向けたのは、やけに綺麗な人だなと思っただけだった。

「晴ちゃん？」

姉が晴美の視線に気づき、声を掛けて来た。

「お姉ちゃん、すごく綺麗な人がいるよ」

「晴ちゃん！人を指差しちゃダメでしょ」

妹を注意しつつ、姉も彼女の指の先を見た。

（？）

確かに綺麗な人だと思った。緩くウェーブのかかった黒髪、滑らかな白い肌、伏し目がちの瞳、整った顔立ち。自分にはないものばかりだ、と姉が嘆息していると、

「でも……なんだか、変」

晴美が呟いた。

「晴ちゃん？」

「なんか、すぐくふらふらしてるし…それに、」

姉も、ようやく女性から感じる違和感に思い立った。

「靴、履いてないわね、」

そう、女性は裸足なのだ。細い剥き出しの足が道路をふらつく様は、ひどく痛々しい。

（何かに巻き込まれたのかしら、）

姉が危ぶんでいると、いきなり晴美が走り出した。

「晴ちゃん!？」

「ちよつとお話ししてみる!」

「ちょ、待ちなさい!」

姉の声を無視して、晴美は女性に走り寄った。荒い息のまま、

「あ、あの!大丈夫ですか?」

「……………」

だが晴美に気付いていないのか、女性は晴美には反応せず歩き続ける。晴美は慌てて彼女の蒼白い腕を掴んだ。ひんやりとして血の気を感じられなかった。

「待つてくださいつ」

すると、女性の視線がゆるゆると自分に向けられた。やっと反応してくれた、と晴美がホッとしたのも束の間、

「うたい」

「え？」

「ちかい」

「……………」

完全な片言で、しかも何を示しているのか分からず晴美は立ち尽す。

「あなた、はるき」

「あ、あの……」

誰かの名前、だろうか。

晴美は虚ろな瞳の女性を、見上げる。

美貌を持ちながらも、年齢から来る老いは誤魔化しようがない。若く見て、三十八・九、多く見積れば四十代半ばくらいか。晴美くらいの子供がいても、おかしくないかも知れない……ちなみに晴美は高校一年生で、今日は先日行われた学祭の振替休日なのだ。

銀行員だが今日は休みの姉と、久しぶりに買い物に出た帰りにこの女性に出会ったのだ。

「はるきって、旦那さんのお名前か何かですか？」

「晴ちゃん！」

姉が咎める声を出す。

関わるな、という戒めなのだろう。しかし晴美は止めない。目の前の女性を放っておけそうにない。

「うたいもちかいも、お名前ですか？」

そうだしたら珍しいな……と心の片隅で思いながらも、訊いてみる。だがやはり反応はなく、虚ろな眼差しを晴美に送るだけだ。

「わ、私の家が近くにあるんです。もし良かったら、休んで行きませんか？」

「晴ちゃん！あんた何を言ってんのっ」

「だって…」

晴美が姉を説得しようすると、女性がまた呟く。

「うたいがないてる」

「え？」

「イタイタイとないてる」

やはり“うたい”というのは人名なのだろう。いや、“ないている”というのが物の喩えならば、動物の可能性もあるか。

「うたいにあわないと。こわれるから」

全く抑揚のない口調でそう言い、女性はまた歩き出そうとする。

「そのままじゃ危ないですよ！」

「晴ちゃん、待って」

「お姉ちゃん！」

またも咎められたのかと思い、晴美は声を荒げたのだが。

「違うの、この人……前にテレビで観たことがあるような気がするの」

「え？」

「それに、はるき・うたい・ちかいというのが人名だとするなら…

…あ！」

「な、何？」

姉が何かに気付いたらしく、女性をビシッと指差した。先程晴美のその行動を咎めたのに。

「あなた、芝貫春樹の奥さん！？」

「ええ？」

芝貫春樹。

今や日本になくてはならない一大企業である、芝貫グループ。芝貫春樹は芝貫グループの社長であり、時の人だ。その奥さんが、こんなところで一人、裸足でさ迷い歩いている？

「確か、芝貫楓さん……」

姉が呟いた名前に、女性が小首を傾げた。

「はい」

「返事、した！」

驚き、声を上げる晴美。

「やっぱり……。あの、お一人……ですよね？」

「うたいにあう」

芝貫春樹・楓夫妻には、二人の息子がいる。

長男・芝貫謡。

次男・芝貫誓。

謡と、誓。楓は謡に会わなければならぬらしく、その為に歩き続けているのだろう。だが、正直に言って、今の楓の状態を見ていたら、無謀に見える。ますます放つてはおけない、と晴美は意気込む。姉はそんな晴美の横で、携帯電話を取り出した。

「何処に掛けるの？」

「警察。一般人の私たちが取らなきゃいけない行動よ」

普通の状態ではない楓を、警察に保護してもらおうと考えたのだろう。当然と言えば当然の行動である。だが本音を言えば、晴美は謡に会いたいと思っていたのだ。

（すっかり忘れていた……）

確か自分がまだ小学校五年生くらいの頃だった。晴美はブラウン管を通して、謡を知った。父親に連れられ、テレビ局の取材を受けている姿を観たのだ。晴美と一歳違いだった筈だから、まだ彼も小学生だったはずだ。愛らしい顔立ちで、屈託無い笑顔を振り撒きながら父親のことがどれだけ素晴らしくて誇れる人なのかをゆったりとした口調で連ねていた。

可愛いらしい人だな、会ってみたいな、と子供心にも思ったものだ。

「あ、警察ですか？実は……」

しかしそれを今の姉に言ったところで、聞き入れられないだろう。自分は芝貫謡の実物に会えることはないだろう。

一人悶々としている横で、姉が通話を終えた。

「すぐに警察が来てくれるわ」

「うん、分かった」

女性は大人しく立ち尽くしているが、その間にも小さな声で、

「うたいにあう、うたいにあう」

と繰り返していた。

（こんな綺麗な人に、何があっただろう……）

知りたいと思った。

謡に会いたいと思った。

だがその願いは叶わないと晴美は諦めてもいた。
その願いがすぐに実現されることも、知らずに。

疲労と不可解さと、 兄と弟（前書き）

久しぶりの時越え更新です！
どうぞご覧ください。

疲労と不可解さと、 兄と弟

『謡ね、大きくなったらお母さんと結婚するんだ!』

『あら、本当?』

『うんっ』

『でも、お母さんにはお父さんがいるからなあ』

『でも結婚する!』

『分かった、分かった。じゃあ、結婚しようね』

『うん!』

柔らかな手で、頭を優しく撫でられる。

穏やかな笑顔に、こっちまで嬉しくなる。

降り注ぐ日差しの中、母さんの姿が今にも消えてしまいそうに感じられて……

「謡!大丈夫か?」

「……ん、」

誰かに肩を揺さぶられて、謡は覚醒する。ぼやける視界に映るのは、
「……ぴくりともしないから、どうしたのかと思った」

「にれ、のきさん……?」

「何だ、幽霊でも見たような顔をして、」

楡乃木涼子が、相変わらずの無表情で謡を覗き込んでいた。

「僕は………」

耳に届く、波の音。

鼻に届く、潮の匂い。

「どうしてこんな所で寝ているんだ?」

西崎臨海公園。いつも涼子が座っているベンチで、謡は横になって

いたらしい。自転車が立てられることなく、地面に横たわっている。
「起きられるか？」

「あ……はい、」

母を探し、あちこちに自転車を走らせたものの母どころか彼女の居場所に繋がる手掛かりすらも見つけられなかった。そしてこの公園のそばを通り掛かった時、ふと頭に浮かんだのは目の前にいる女性の顔だった。榆乃木涼子に相談してみようと思った。母のことなど知らない彼女に。そう分かっていても、彼女に相談をしたかった。彼女に、会いたかった。

そう思ってしまった、あとはなし崩しのだった。園内に入り、涼子が座っているベンチまで自転車を押した。

そしてベンチが見えた瞬間、何もかもが急にどうでも良くなってしまい自転車を投げ出しベンチに横になった。母と涼子の顔が、ぐるぐると脳内を巡り謡を休ませてくれない。

（母さん、榆乃木さん）

今日に限って涼子がいなかったことが悲しかった。彼女も、結局は自分の前から姿を消してしまうのだと思った。

（誰か、そばに居て……誰か、僕のそばに、）

泣きたくないのに、自然と涙が零れて来る。でもそれを拭う気力も、なかった。

（……母さん、）

さざめく波の音を聞きながら、謡はいつの間にか眠りに落ちてしまったのだ。そして揺さぶられて、目を覚ました。

「顔が赤い。熱が……？」

涼子の言葉が途中で止まった。謡が、自分のシャツの裾を掴んだからだ。俯いているため、彼の項がよく見えた。

「謡？」

「母さつ、母さんが……いなくなった、」

「え？」

「どこに、も……居なくて、ひっく、」

「謡……」

「母さんが何処に居るのか、全然分からない…母さんの、子どもなのに……っ、」

「…幾ら自分の親のことでも、分からないことはあるだろう」

涼子がそう言えば、謡は弱々しく首を左右に振る。

「……分からないと、いけないんです…じゃないと、僕は必要ない人間になってしまっから……」

「謡、何を言って……」

「……もう、どうして良いか分からないんです。体が疲れるばかりで、何も分からなくなって、」

「謡、熱があるんじゃないのか。少し休んだ方が良い」

「僕は、平気です……」

「…言ってることが滅茶苦茶だよ、謡。疲れてるんだろっ？」

「じゃあ誰が母さんを探すんですか！」

いきなり激昂したかと思うと、謡は涼子から手を離してベンチから立ち上がった。

「謡、」

「探さなきゃ、母さん……きつと僕を待ってる、」

自転車を起こし、ふらふらしながら立ち去ろうとする。

「謡！」

「……すみません、僕…行かなきゃ、」

「無茶だ。ふらふらじゃないか！」

涼子が立ちほだかれれば、謡は方向転換をした。

「……謡、」

「母さんが、待ってる……」

涼子がこうなれば力ずくで止めるか、と思った時だった。

「兄貴！！」

第三者の声がして、涼子が振り向いた先に一人の学生が立っていた。

「ち、誓……」

「こんなところにいた！」

学生…芝貫誓が、息を切らして二人に駆け寄って来た。片手に携帯電話を持っている。

「誓、母さんが……」

「母さん、見付かったんだ!」

「え?」

「今、警察に保護されてる。俺、警察に行くけど…兄貴はどうする?」

「行く、」

そんなの当たり前だ。

彼女を探して自転車で走り回ったのだから。直に会って無事を確と確かめなければ。

「この人は?」

ようやく気づいたのか、誓が涼子に目を遣る。

「あ…えつと、」

「お兄さんとは時々この公園で会うんです」

涼子が丁寧な物腰で誓に説明する。しかも笑顔で。

「そうなんですか。…いつも兄貴がお世話になってます」

ぺこり、と涼子にお辞儀をする。しかしすぐにそんな場合ではないと思っただけ。謡の手を掴む。急かした口調で、

「じゃあ兄貴、行こう!」

「う、うん!…榆乃木さん、また!」

幾分か生氣を取り戻した謡に頷き、涼子は走り去る兄弟の背中を見送った。

涼子は謡の自転車を立て掛け、自分はベンチに腰を下ろした。

(今のが謡の弟…あまり似ていなかったな、)

それに、と涼子は目を伏せ、自分を見た誓の目付きを頭の中で再生

した。

（あれは…）

なんだ、この女……謡は気付かなかったようだ、涼子を見る誓の目はそう物語っていた。最初は怪訝そうなそれだったが、徐々に敵愾心のようなものが含まれて行ったように見えた。

そう、……恋人に近づくな、と威嚇しているような。…考え過ぎ、だろうか。

（まあ、母親が見付かったようだし…良かったな、謡）

ベンチの背もたれにしなだれ掛かり、軽く目を閉じた。母親がだいじなくあるよう、涼子は祈った。

「ち、誓！痛い、腕が痛いよ……っ」

「何だよ、今の女」

「ち、誓？」

「兄貴も母さんが居なくなっただって聞いてたんだろ？なのに何で女といちゃついてたわけ？」

謡は慌てる。

「い、いちゃついてなんかいないよ……誓、怒ってるの？」

「……………」

誓は謡から手を放すと、じっと彼を見詰めた。

一刻も早く母に会いたい謡だが、弟を無下にすることも出来ずに彼からの視線に耐えた。

「あの女とは、どういう関係？」

「関係……って言われても、」

やはり誓は何かに怒っていると感じる。だが何が彼の逆鱗に触れたのか分からない。自分にそんなつもりはなかったが、そんなに涼

子といちゃついているように見えたのだろうか。まさか。

「ね、ねえ…早く母さんの所に……」

誓は返事をしなかったが、ようやくまた歩き出した。

「誓は誰から母さんのこと、聞いたの？」

「……………」

「誓？」

一瞬、弟の横顔が強張ったように見えて誓は不思議に思った。そんなにまずい問いだったのだろうかと怪訝に思う。

「……誰でも良いでしょ、そんなこと」

結局、誓の返答はそれだった。

「う、うん……」

納得など到底出来ないが、今は一刻も早く母に会うことが大事なのだと自分を戒める。

…それでも腑に落ちない感覚は続き、誓は一步斜め前を歩く弟の背中をじっと見詰め続けた。

一体どういう関係なんだ。

謡と警察に向かうバスの中、敢えて一人席を選んだ誓は、苛々と親指の爪をかじりながらそんなことを考えていた。しかも母親の非常事態に呑気にお喋りなどしやがって、と恨めしくも思う。

「誓、」

後ろの席に座った謡がか細い声で自分を呼ぶ声に気付いたけれど、誓はあっさりと無視をする。それだけで兄からの呼び掛けは途絶えた。どうせ寂しそくに頂垂れているんだろ、とせせら笑う。

（母さんを放って女に現を抜かした罰だよ、兄貴）

まあバスから降りたら優しく話し掛けてあげるよ、と誓は思った。

そう、母を放っておくからだ。

（……兄貴も親父も、母さんのことなんか結局どうでも良いんだろ？）

そんな奴に、どうやって母親の失踪を知ったのかなど教えてやる義理は、ない。

（それに、夏くたんの存在を知られるのはまずいからな）

成宮夏には一足先に件の警察くたんに向かってもらっている。

（母さん……）

誓も早く母親に会いたかった。今まで何度も会いたいと思っていたけれど、会ったところで母親が誓を息子だと認識出来ないと分かっていたから実際に会うことはなかった。

でも今日は会うべきだと心を強く持つ。

（やっぱり俺には母さんが必要なんだ……。俺には、母さんしかない）

あのやさしく穏やかな笑みを浮かべて、もう一度自分の名前を呼んで欲しい。

（母さん待ってて、すぐに行くよ）

頼りない兄と一緒に、あなたと会いに行きます。

流れ行く窓の外の景色を見ながら、誓はそう思った。

疲労と不可解さと、 兄と弟（後書き）

相変わらずつたない文章で・・・汗
ご閲覧、誠にありがとうございます。

初対面

(……本当に会えるんだ、芝貫謡に……)

小学生の頃にテレビで見て、会いたいと思った。大きくなるに連れて忘れていったけれど。

「しかし、あの芝貫の社長の奥さんとこんな間近で会うなんてな」
生活安全課の職員が茶を啜りながらそう仲間に漏らすのを、晴美は何処か遠くに感じている。

早く芝貫謡に会いたい。それだけだから。

「あの、私たちはやつぱり……」

晴美の横で居心地悪そうに俯いていた彼女の姉が、不意に口を開く。しかし全てを言う前に、茶を啜っているのとは違う職員が彼女の言葉を防いで来た。

「まあまあ、もう少しお待ち下さい。彼女のご家族が発見者の方にどうしても御礼を言いたいとのことなので」

「でも、当然のことをしたままで……」

それでも渋る彼女に、職員が晴美には聞こえないくらいの潜めた声で続けた。

「……日本を牛耳っている“芝貫”に恩を売っておくのも悪くはないでしょう？ 後々、必ず役に立つ時が来ますから」

「……………」

「お。どうやらおいでになったようですよ？」

面談室の外が騒がしくなってきた。晴美が弾かれたようにドアを振り返る。

その瞬間、

「母さん！」

興奮の為か、頬を紅潮させた少年が母を呼びながらドアを開けた。

「芝貫、謡……」

晴美が憧れの人物に初めて対面した瞬間だった。

「母さん！母さん！！僕だよ、謡だよ。あなたの息子の謡だよっ！」
必死にそう大声を上げて、母親―楓には何の反応も見られない。
ただ光のない瞳を虚空に泳がせているだけ。

「お願いだよ、母さん。昔みたいに、僕の名前を呼んでよ……」謡
”って、優しく呼んでよ……”

おずおずと握った手は、ひんやりと冷たい。
その冷たさに、泣きそうになる。

「お母さん、お母さん……」
もう、無理なのだろうか。

自分の声は、ずっと母には届かないのだろうか。
昔のように、自分を呼ぶ優しい声を聞くことは叶わぬ夢なのだろう
か。そう考えると、胸が張り裂けそうになる。

「……………」

「母さんっ」

謡がもう一度母に呼び掛けた時、

「兄貴、もう止める」

弟・誓の冷たい声がして、びっくりと肩を震わせた。

「よそさまの目の前だ。芝貫の……親父の威厳に関わる」

「誓、」

戸口に立ったままだった誓が、ようやく室内に足を進める。自我の
ない母、情けなく膝を着く兄、興味津々に事態を見詰める警察の人
間と、二人の一般人。よく似た顔立ちの二人のその女性が、きつと
母親のことを警察に通報したのだろう。姉妹らしかった。

「あなたたちが、母を？」

「あ、はい……」

髪の高い色白の女性が頷く。対して妹らしきほうの、短髪で程よく

焼けた肌を持つ少女――外見からして高校生くらいか――は、じい
つと食い入るように謡を見詰めている。謡に興味があるのか。ある
としたら、どういう意味で？

誓が彼女を見ていると、その視線に気付いたようで、ふいつと謡か
ら目を逸らした。

「母がご迷惑をお掛けしました。お礼はそれ相応のものををご用意さ
せてもらいます」

普段のヘラヘラした態度とはがらりと変わって毅然とした態度の弟
を、兄が呆然の体で見詰めている。

「い、いえ、お礼なんてとんでもないです」

姉が胸の前で、必死に両手を振る。だが妹のほうは誓の言葉には全
く興味がないらしく、また謡を見ている。まさかとは思うが、謡の
知り合いか？

「そうはいきません。芝貫グループの社長・芝貫春樹の妻を保護し
て下さった方に、礼もなしなんて論外ですから」

「ろ、論外なんて言われても困ります……」

「あ、あの、芝貫様、」

ずっと黙っていた警察所員の一人がおずおずと話に割り込んで来た。
誓が目線で続きを促せば、やたらへこへこし、奥まった小さな目を
頻りに瞬かせながら言った。

「わ、私どももちらの方の電話を受けて、現場に駆け付けまして
……」

「だから？」

誓の声には一切の温度がなく、ふたまわり近くは離れていそうな職
員ですら息を呑むくらいだった。

「で、ですから、その……」

「お前らにする礼などない」

まさしく一刀両断だった。職員は、で、ですよね……とだけ呟いて大
人しく引き下がった。

「邪魔が入りましたが、お話の続きをしましょう。…お名前と住所

を教えていただけますか？後程、父と相談し、相応のお礼をお持ちします」

「あ、あの…ですから、」

女性がまたも断りの言葉を述べかけた時だった。女性の妹が、予期せぬ言葉を言い放ったのだ。

「私、ずっとあなたに会いたかったの……！」

誰もが目を見開き、妹を見た。妹は頬をピンク色に染め、穴が空きそうな勢いで謡を見詰め続けている。

「は、晴ちゃん？！あなた何を言い出すの？」

反応が一番早かったのは、彼女の姉だった。

しかし妹は彼女を無視し、

「昔、テレビに映っているあなたを見たことがあるの」

椅子から立ち上がり、謡の横に立つ。謡は母の手を握ったまま、ぽかんと少女を見上げている。

「その時、あなたがとても誇らしそうにお父さんのことを話す姿を見て、すごく会いたいと思った」

「晴ちゃんっ」

姉が咎めるように名前を呼ぶが、晴美の口は止まらない。

「無邪気な笑顔が可愛くて、心に残ってるの。一度で良いから会ってみたって思った」

晴美は何度も何度も“会ってみたい”と連呼した。

謡はどう反応して良いか分からず、口は閉じたものの戸惑った表情は相変わらず変化がない。

それでもどうにか言葉を紡ごうと、口をもごもごさせていたが、
「っ！？」

いきなり耳を押さえると、膝を着いたままで体をくの字に折り曲げて倒れ込んでしまう。

「うっ、…痛っ……、」

「兄貴！？」

謡の側にしゃがみ込みながら、どいつもこいつも一体何なんだと誓は段々と苛々して来た。

「兄貴、どうした。大丈夫かっ！」

顔面蒼白で、苦しそうに唸る。

「あ、たま……痛いつ……、」

消え入りそうな声で言い、あとは呻くばかりだ。

「おい、職員！」

ネームプレートを確認するのも億劫で、誓は先程口を挟んで来た職員に鋭い視線を投げた。

「は、はいっ！」

「仮眠室が何か、寝られるところがあるだろ！そこを貸せ！」

「わっ、分かりました！！」

職員は粟を食ったように大急ぎで飛び出して行った。部屋を確保する為だろう。

「兄貴、しつかりしろ！」

誓の呼びかけにも、謡は痛みには呻くばかりで応えられない。

「え、えっと、あの……」

姉妹は一体何事かとおろおろしてばかりで、兄弟の母親に至っては身じろぎ一つせず虚空を見つめているだけだ。ただ、謡が握っていた手だけは、本人の意思を無視するかのようにびくびくと動いている。だがそれに気づくものはその場にはいなかった。

「部屋の準備が整いました！こちらへどうぞ！」

先ほどの職員が戻り、誓にそう声を掛ける。

「兄貴、動かすよ」

「ち……かい、ごめ……ん、」

「何を今更……」

誓のそつけない返しに、謡は薄つすらと微笑んで意識を手放した。

体が弱いのだろうか、と晴美は弟に背負われて部屋を後にする謡の姿を姉とともに見送っていた。それとも、母親のせい……？

晴美は芝貫兄弟の母親を、横目でちらりと覗き見た。

綺麗な人、という印象は変わらないが、あの謡を苦しめていると思うと、胸が苦しくなる。この人のせいで、あの人はあんなに苦しんでいるんだと部外者の筈なのに思ってしまう。

「ねえ晴ちゃん」

「お姉ちゃん……」

「この隙にもう行かない？お礼とか芝貫とか……あまり係わり合いになりたくないのよ」

姉は声を潜めて、前かがみになりながらそんなことを言ってきた。

「でも、」

「行きましよう」

姉は一刻も早く立ち去りたいらしいが、晴美はそうはいかなかった。謡のことが心配だし、彼の母親のことも気になる。

「……私は残る」

「！何言ってるの？さっきだっていきなり謡さんにずっと会いたかったとか言い出すし、何かあの子に思い入れでもあるの？」

「お姉ちゃんには分かんないよ」

「晴ちゃん……？」

めったにない妹の真剣な顔に、姉は二の句が継げなくなる。一体何が彼女をこんなに意固地にしているのだろう。

「嫌なら、お姉ちゃんは先に帰って良いよ。私なら電車でも帰れるから」

「・・・・・・・・」

「私は、もっと謡さんと話してみたいの」

妹の横顔に、強い決意が宿っているのを姉は見て取った。

「・・・・・・・・分かったわ、私も付き合う」

「良いの？」

「良いわよ。あなたがどうしてそんなにも謡さんに興味を持つのか、私も興味が湧いて来たから」

姉はそういつて、にっこりと微笑んだ。

「ありがとう。お姉ちゃん」

帰還く藪内奏と藍田渉4く（前書き）

お久しぶりです。

藪内と渉のお話且つ長めです。
よろしくお付き合いください。

帰還く藪内奏と藍田渉4く

謡が倒れた同時刻、藪内奏は渉の見舞いに病室を訪れていた。容態は安定したようで、昨日つけていた酸素マスクは外されて渉の顔色も幾分かはマシになっていた。

それでも起き上がることは辛いようで、藪内が姿を見せたときは上体を起こそうと努力はしたものの、辛そうだったので止めさせた。

「あ、あの・・・藪内さん、」

やはり渉は藪内を苗字で呼ぶ。そうだったのは自分が悪いからなのに、藪内は苦いものが心中を満たすのを感じていた。

「何？渉」

「・・・どうした、んですか。その、右手」

渉の大きな瞳がじつと見つめているのは、藪内の、包帯でぐるぐる巻きにされた右手だった。昨晚、洗面所の鏡で自分が行った“自傷行為”の結果がこれだ。

「何でもない。・・・気にするな」

「で、でも・・・」

藪内は渉から見えないように右手を背中に隠した。

「俺のことなんか良いから・・・お前は自分のことだけ考えてろ」

藪内の言葉に、渉は悲しそうに目を伏せる。

「・・・藪内さんは、僕のこと、嫌いだったんですか？」

「は？」

いきなり言われた言葉に、藪内は頓狂な声を上げてしまう。

「何で、そう思う？」

「・・・なんだか、突き放されてる気が、するから・・・」

そして自分が何を言っているのか今、自覚したのか、ハッと我に返ったような顔を見ると両手で顔を覆った。耳が赤い。

「す、すみません・・・僕、何を言ってるんだろ・・・すみません、」

「渉、お前……」

「は、はひ……」

噛んだのか、返事が妙だ。何だかおかしくて、藪内は笑みを浮かべた……笑う資格なんか、ないのに。

「お前、顔が真っ赤だな」

藪内のからかいに、ますます渉の耳が赤くなる。

「あ、あんまり苛めないで下さい……」

「苛めてるわけじゃないが……悪い」

本当はずっと体と言葉の暴力を加えて来たんだがな、と藪内は心中だけで呟く。それを今話したら、渉はどんな顔をするだろうか。信じるか、信じないと突っ張ねるか。

「や、藪内さん……？」

藪内が黙ってしまったことに不安を感じたのか、渉が顔から手を離して、藪内を見上げていた。ひどく不安そうに、大きな瞳が揺れる。

「……どこか、具合でも悪いんですか？」

「いや、何でもない。大丈夫だ」

「そう……ですか」

納得していなさそうな表情を見せたが、渉はすぐに藪内から目を逸らした。そして、疲れたように目を閉じる。

「疲れたか、渉」

てつきり頷くかと思いきや、あまり血色のよくない唇で言葉を紡いだ。藪内が目を見開く言葉を。

「……何だか、申し訳なくて……」

「え？」

「……藪内さんのことを思い出せないことが……、藪内さんに申し訳なくて」

「っ？」

「ごめんなさい、藪内さん……」

悲しげに、そして苦し気に謝罪され、藪内は息が詰まるような想いだった。

「お、お前が謝る必要なんかねえよ」

「で、でも……」

何か言い掛けた渉の頬に、藪内はそつと触れてみた。

「藪内さんの手、冷たくて気持ち良いです」

「そうか？」

「はい。それに……手が冷たい人は、心があたたかいと言いますから……」

「俺の心は、あたたかくなかなえよ……極悪非道だ」

「そんなこと、ない」

真つ直ぐに見つめられ、少し気恥ずかしくあり……辛くもあつた。

もし記憶が戻っても、渉は同じことを言ってくれるのだろうか。

「藪内さんの心は、きつとあたたかい筈です……どうしてか、僕には分かるんです。記憶、忘れてるのに……」

そう言つて、また寂しそうに微笑む。

「渉……泣くなよ……」

いつの間にか、渉の毗から涙が溢れ、頬を濡らしていた。

（……また、泣かせちまったな、俺は……）

この関係性は二度と変わることはないのかも知れない、と藪内は自嘲する。

自分を大事に思ってくれていた幼馴染みに手を上げたあの瞬間から、自分と渉の関係は決まったのだ。

“泣かせる者”と“泣かす者”に。

「す、すみません……僕、全然泣くつもりなんか、ないのに……」

「

「良い。気にするな、渉」

そつだ、これはもう必然なのだから。

藪内奏に関われば、藍田渉は涙を必ず流すのだ。

「ごめんなさい、少し疲れました……やっぱり」

「ああ。俺のことは気にせず、寝てくれ」

「はい……おやすみなさい。藪内さん、」

「ああ。ゆつくり、休め」

渉はこくり、と小さく頷くと、すうつと瞳を閉じた。
滑らかな頬に、涙の痕が一筋、残っていた。

（結局、俺の存在は渉の害にしかならねえってことなんだな……）
渉の涙を手の甲で拭ってやりながら、藪内は項垂れていた。

渉が寝息を立て始めたのを見て取り、藪内は病室を出た。飲料を買いに行こうと、自販機のある待合室へ足を踏み出し、
「奏君」

「……おばさん、」

疲れきった笑顔を浮かべた渉の母親に声をかけられた。片手に大きなポストンバックを提げている。

「今日もお見舞いに来てくれてたのね」

「………はい」

「渉、どう？」

「……記憶はまだ戻らないみたいだけど、体の方は安定してるみたいです」

「そっか……。ごめんなさいね」

「え？」

「私がすっかりして、先生にお話を聞かないといけないのに、君に又聞きするなんて。迷惑じゃないかしら」

藪内は静かに首を左右に振る。

「迷惑なんかじゃ、ないツスよ……」

藪内の言葉にホッと安堵の息を吐き、
「そう言ってもらえると、渉も喜ぶわ」

渉によく似た笑顔を藪内に向けた。

「おばさん、荷物重くない？」

「大丈夫よ。涉のだし、見掛け程、重さはないし」

何より涉の病室は目と鼻の先だ。

「奏君、もう帰るの？」

「いや、少し風にあたっただけだから」

「分かったわ。涉も嬉しいだろうし、また戻って来て」

「……はい」

藪内は涉の母親に軽く頭を下げ、待合室に向かって歩き出した。

その猫背を見送り、涉の母親は息子の病室へ歩を進めた。寝ていてはいけないと思い、静かに涉の枕元まで移動する。

「……な、で……」

「涉？」

母親が椅子に腰掛けた瞬間に涉が何事かを呟いたので、起こしてしまったのかと危惧していると、

「……奏くん、」

「涉？寝言、かしら……」

その証拠に、涉は起き出す気配はない。

（記憶喪失になっても、奏君の名前は言えるの？）

しかし起きている時の涉は、藪内のことが分からないらしい。

…無意識、なのだろうか。

（そんなに奏君のこと、慕ってるのね……）

だがふと、母親の脳裏に“涉は本当に記憶喪失なのだろうか”という疑いが去来した。芝貫グループの次男も涉のは“フリ”みたいなことを言っていたではないか。まさか、そんな。涉がそんな大層な演技をするわけがないし、する理由も分からない。

（気にし過ぎよね。息子を疑うなんて、母親失格だわ……）

母親は自嘲の笑みを浮かべて、自分をたしなめるように二回ほど首を軽く横に振った。

「渉、お母さんのこと、思い出してくれるのかな……？」

そう呟いた瞬間、渉の右手がぴくりと動いた。何かを探すように、緩やかに手が開閉する。

「渉、どうしたの？ 喉、渴いたの？」

「……けて、」

「え？」

「奏く……、たす……けて、」

見る見る内に、渉の顔色が白くなり、苦しそうに眉が寄っていく。

「渉、どうしたの？ どこか苦しいの？」

母親の必死な呼び掛けにも、渉は応えずに、ただただ幼馴染みの名前を呼び、彼に助けを求める。

「奏くん、助けて…… 苦しい、痛いよ……」

「渉、渉！」

「助けて…… “ここ” は嫌だ、嫌だ、」

「奏君、連れて来るから、待っててっ」

確か藪内は風にあたって来ると言っていた。

母親は息子のために、彼を探しに慌てて病室を出た。

「苦しい、よ…… 奏くん、」

（ここは、どこだろう……？）

渉は、周囲一面真っ白で何もない空間にただ一人で立っていた。本当になにもない。自分以外の生き物の気配すらない。

（僕は、独りぼっち……？）

胸が、嫌な音を立てて高鳴る。

（いや、独りは、嫌、）

『渉……』

「奏くんっ？」

今、大好きな幼馴染みに呼ばれた気がした。渉は顔を上げ、彼の姿を探した。でも、やっぱり周囲は白一色で影すら見当たらない。

「何処、奏くん、何処なのっ？」

『渉、俺は』

「奏くん、何処、何処おっ!？」

『お前なんか、大嫌いだ』

「っ!？」

心臓が止まるかと思った。頭の中さえも、白く染まって行く。

『鬱陶しいんだよ、俺のあとをいつもいつもちよこまかと』

「ど…し、て？」

どうしてそんなことを、言うの？

「奏くん、嘘、でしょう？冗談、だよな？」

確かに高校に入ってから、奏は渉に冷たくなり、謡のことがあつてからは頻繁に手を上げられもした。痛かったし、苦しくて、悲しかった。でも、だけど、

「僕は奏くんのこと、大好きなのに…奏くんがいないと、何も出来ないのに、」

『止めるよ。大好きなんて、気持ち悪い』

……キモチワルイ？

「奏く、」

『俺、野郎に好かれても嬉しくないし。趣味じゃない』

「ち、ちがうよっ。大好きって言うのは、そういう意味じゃなくて、」

渉の必死の言葉を、奏の“声”は無慈悲に切り捨てる。

『黙れよ、クソが。それによお、周りの噂、知らねえの？藍田渉が藪内奏を見る目は、恋してる目だっていうやつ』

「だ、誰がそんな…」

『とにかく、俺はお前が大嫌いなんだよ。もう近づくな』

奏の姿は、一向に見えて来ない。ただただ“声”だけが、渉の脆い心を追い詰めて行く。

「奏くん、嫌だ、僕を見捨てないで、独りに、しないで……っ」

『そんなの知るかよ。他の誰かに泣き付けば？』

「奏く、」

『じゃあな、渉。俺には、二度と近づくな』

「待って、奏くん、待って!!」

奏が何処にいるかも分からないのに、渉は闇雲に歩き出す。でもすぐに何もなかったところで、蹴躓いて転んでしまう。

「痛っ…う、うつつ」

奏の“声”は、もう聞こえない。でも渉は、奏を探すために、もう一度立ち上がろうとする。

「なにっ、」

しかし、白い空間の何処からか、何本もの黒い手のようなものが伸びて来て、渉の足や腕、体を拘束する。

「やだ、なにっ、」

「独り、独り、お前、独りーお前には、独りが似合うー独り、独り、お前、独りー誰も、お前を見ない」

“声”が方々から響いて来る。暗く、低い、呪詛にも似た声。

「はな、放して、」

黒い手たちは、渉をずると引き摺って何処かに連れて行くこととする。きっとそのさきには、白い光すらない、真っ暗闇だけが広がっている……

「奏くん、助けて、奏くん、助けて……っ!」

渉は、がむしゃらに幼馴染みの名を呼び、助けを求めた。たつたさつき、引導を渡されたばかりなのに……。

「すべてを忘れれば、楽になる。実らない思慕の念を捨て、安らかな眠りに就けるのだ。」

だから、忘れなさい。

「奏……く、ん、」

目を開けているのが辛くなって、渉の瞼が徐々に下りて行く。
（もう、このまま眠ってしまおう。もう苦しまなくて済むように、
奏くんに嫌な想いをさせないように）

お別れを言えないのは心残りだけど、仕方ないや。

（奏くん、さようなら……お母さん、ありがとう……）

黒い手が、絶対に放さないとでも言うかのように更に力をこめる。
ギシツという不穏な音が、骨から響いた気がした。

（……奏くん、ごめんなさい。奏くんが僕のことを大嫌いでも、や
っぱり僕は奏くんのが……大好きみたいです）

もしかしたら友情を越えた感情なのかも知れないが、それももうど
うでも良いかな……。

（だって、僕の人生はここで終わるんだから……）

ごめんなさい、奏くん。

ありがとう、奏くん。

さようなら、奏くん。

『……たるっ』

（？）

『渉、行くな！渉っ！』

奏の“声”がする。

渉を拒絶したのと同じ声で、今度は渉を引き留める。

『何処が痛い？なあ、俺のこと、分かるのか？渉！』

（奏、くん……？）

奏の望み通り消えようとしているのに、どうしてそんなに悲痛な声
を上げるのだろう。

『……渉、俺が、そばに居るから。怖くなんか、ないから』

（奏くん、奏くん……！）

一度は抜けていた力が、体に戻って来る。

（僕は、帰るっ）

奏がいる、あの世界へ。

さっきの、自分を拒絶する奏の“声”は偽物なんだと、渉は自身に言い聞かせる。

（げんきなのかも知れないけど、奏くんは僕を待ってくれてると信じたい）

黒い手が、渉の喉に掴み掛かって来る。言う通りにならないなら殺してしまおうという気らしい。

「んっ、」

氣道を圧迫され、渉は息苦しさに喘いだ。それに力を得たように、黒い手による絞め付けは酷くなる。それでも渉は足掻くのを止めない。

（放してっ、僕は奏くんのところに帰るんだっ！母さんたちが待つてるところに帰るんだからっ！）

無我夢中で、何度も何度も心の中で唱える。

（奏くんに、……もう一度会うんだからっ！）

すると、渉の氣道を塞いでいた黒い手の力が緩んだ。それに気付き、渉は更に強い気持ちで唱える。

（奏くんに会いたい、……うっん、また会うんだ！！）

カッと目を見開いて、黒い手を睨み付ければそいつは怯えたように渉の氣道を解放する。

（奏くん、僕が戻ったら、また昔みたいに笑ってくれるかな……？）
笑って欲しいな、と渉は思う。

（……ちよつと眠くなってきた、なあ……）

藪内の優しい笑顔を思い出していると、不意に睡魔が襲って来た。

一生懸命唱えて疲れたのかな、と渉は苦笑する。

黒い手はいつの間にか何処かに消えて、渉は真っ白な空間に一人取り残された。

（奏……くん、眠い、なあ）

夢の中でも良いけど、やっぱり現実の世界で会いたいなあ……。そんなことを思いながら、渉は久しぶりに心地良い眠りに落ちて行く。

った……。

しばらくすると、頭痛に呻いていた渉が静かになった。ベッドの上で、ぐったりと力なく横たわる。

「渉……、」

藪内は、本当に渉が死んでしまうのではないかと気が気ではなかった。

異常なほどに頭を抱えてベッドの上で頭の痛みを訴えていた。

「先生、渉は、」

渉の母親が、真つ青な顔で担当医に尋ねる。担当医は、気難しい表情を崩さぬまま、

「……以前一度検査したときは脳に異常はありませんでしたが、もう一度検査をしましょう。しかし、すぐには無理ですね。体を休ませた方が良いでしょう」

「そうですか……」

「ただ、出来るだけ早く検査します。鎮痛剤が効かなくなつては遅いですからね」

「分かりました……よろしく願います、」

勇気付けるように母親の肩を叩き、担当医は病室を出て行く。

「何かありましたら、呼んでください」

渉に鎮痛剤を打った看護師も病室を出て行った。

「………はあ、」

二人が去ると、母親はパイプ椅子に力なくへたり込んだ。

「おばさん、」

「……どうしてかしら、」

「え？」

「奏……くん、」

今度はハッキリと名前を呼ばれた。なのに、やはり体は動かない。まるで自分の体ではないみたいに。

「奏君」

母親が、藪内の前に立つ。息子の覚醒を喜んでるように、涙ぐんでいる。

「おばさん、」

「渉が、あなたを呼んでいるわ」

「っ！」

「応えて、あげて。渉、喜ぶわ」

三度、シャツの裾を引かれた。早くこちらを見る、という催促なのか。

「渉……」

ようやく、体の硬直が解けて来た。さあ、振り返れ。幼馴染みの声に応えてやれ。

「奏くん、」

今にも逃げ出したくなるのを堪えながら、藪内はゆっくりと渉の方へ振り返る。

「奏くん」

振り返った先、幼馴染みの優しい笑顔があった。涙に濡れた目を、線の形に細めている。

「わた、る……？」

記憶が、戻ったのか。

嘘か現実か掴めず、藪内は恐る恐る幼馴染みの名を呼んだ。すると、幼馴染みは嬉しそうに一つ、頷く。

「ただいま、奏くん」

その言葉に、藪内の頭にはたった一つの行動しか思い浮かばなかった。

「……渉っ！」

「か、奏くんっ？」

藪内は、渉の細い体を抱き締めた。驚いた渉が栗を食ったように藪内の名を呼ぶ。

「渉、ごめん、本当にごめんな」

「ど、どうして・・・奏くん、が、謝る、の？僕、奏くんの・・・おかげで“こっち”に、戻って来られたんだ・・・よ？」

「え？」

肩に手を置いて、一端、体を離す藪内。

そんな彼に、まだ話すことを辛そうにしながらも渉が言う。

「……もう、本当に駄目になりそうになってた時、奏くんの・・・“声”が聞こえたんだ。死ぬな、って・・・、僕を呼び止める・・・

“声”が」

につこり、と微笑む。

「だから・・・僕は戻って、来られた。

奏くんが謝る理由

なんて、何も無いよ」

その言葉に、藪内は不覚にも感極まってしまい、我知らず涙腺が緩んでしまった。

「か、奏くん・・・？」

藪内の瞳からこぼれたものを見て、渉が目を見開く。

藪内が涙するのを見るのは、渉にとってもひどく久しぶりのことだったから。

「奏くん、どうしたの。何処か、痛いの・・・？」

「ちげえよ！」

「っ」

驚いた渉が肩を竦める。

「・・・何でなんだよ、渉」

「え？」

藪内は渉から目を逸らし、懺悔するような気持ちで言う。

「・・・俺がお前に何をしてきたか、それも忘れたのかよ」

「・・・奏くん、」

「酷いことたくさんしただろ！お前、怪我しただろ、いっぱい傷付

いたんだろ？」

出来るだけ声を抑えようとは思うものの、うまくいかない。もともと感情の抑制など得意ではないのだから。

「なのに！なんでそんな俺なんかのこと、そんなに・・・っ」

「嫌いになんてなれないよ」

渉が、静かな口調で言う。掛け布団の端を掴む手が、小刻みに震えている。

「・・・確かに、奏くんが僕に対してしたことだって、忘れてなんてない。すごく悲しかったことも、忘れていない」

「だったら・・・！」

「でも！それでも、僕は、」

渉は、気圧される奏の顔を見つ直ぐに見つめながら、自分の想いを吐露していく。少しでも良いから、藪内に届いてくれることを信じて。

「奏くんのこと、嫌いになんてなれない。僕、知ってるから・・・奏くんが本当はとっても優しい人だって。本当は暴力なんか嫌いな人だって」

「・・・渉、」

「僕の中の奏くんは、いつまで経っても優しい奏くんだから。だから、どんな目に遭わされても、絶対に嫌いになんてなれない。奏くんは、僕にとって大事な人だから」

無我夢中の体でそこまで言った渉だったが、急に顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「渉？」

「そ、その・・・誤解しないで欲しいのは、“大事な人”っていうのはその・・・色恋っていう意味じゃないってことで・・・」

「はあ？そんなの当たり前だろ」

「そ、そうなんだけど、念のため・・・？」

「何で疑問系なんだか」

「・・・」

ますます渉は顔を赤くして、茹蛸さながらのようだ。

「お前の気持ちは、分かった」

不意に藪内が漏らした言葉に、渉は俯けていた顔を彼の方へ上げた。しかし藪内は固い表情をして、渉が欲しい言葉をくれないような気がした。

「奏く、」

「でも俺は、俺を許せない」

「そ、そんなこと・・・！」

渉が反論しようとする、主治医が看護師を伴って病室へやってきた。いつの間にか、渉の母親が彼らを呼びに行っていたらしい。

（時間切れ・・・か、）

「失礼しますよ」

主治医が、診察のために渉のもとへ近づく。その邪魔にならぬよう、藪内はその場を離れた。

「待つて、奏くん待つて・・・！」

母親から記憶が戻ったようだと言われたのだから、渉が藪内の名前を親しげに呼んでも、主治医はいぶかしそうな顔一つしなかった。

「渉君、落ち着いて。診察させてもらうからね」

渉は数日前に腹部も刺されている。激しい体の動きや精神の混乱は良くない。

主治医は努めて穏やかな声を出す。

「大きく深呼吸して、」

しかし渉の大きな瞳は、不安そうに藪内の大きな背中を見ている。

この場から藪内がいなくなってしまうことを酷く恐れているかのよう。

「渉君」

「・・・」

渉は悲しげに目を伏せ、俯く。

藪内の言った台詞が耳について離れない。

でも俺は、俺を許せない。

（そんなこと言わないで、言わないでよ・・・）

キュツとリノリウムの床が音を立て、渉はハッと顔を上げた。

藪内の背中が、廊下へ消えようとしている。もう二度と会えない、そんな予感が胸に迫る。

（・・・声が、出ない）

藪内を呼び止める声が、出てくれない。

渉の瞳に映る藪内の背中が、渉の声を拒絶しているように見えて。

（奏くんが、自分を責める必要なんてないのに・・・、）

思っているだけじゃ伝わらない、なのに、口は金魚のようにパクパクと開閉するだけで音は出ない。出てくれない。

藪内の姿が、完全に病室から消えた。

涙が溢れ出すのを、渉は止めることが出来なかった。

帰還く藪内奏と藍田渉4く（後書き）

次回は謡に戻ります。
そのつもり・・・。

謡と誓と晴美と（前書き）

サブタイ変更するかもしれません。

謡と誓と晴美と

……子供心にも、綺麗な母が自慢だった。

それに、優しくて、あたたかくて、料理やお菓子作りが得意だったところも。

自慢で、大好きで。

母の方も、自分や弟の誓に深い愛を注いでくれていると信じていたし、ずっと愛してくれると信じていた。
でも。

（久しぶりに、会えたのに……）

母は、謡を自分の息子だと認識をしてくれなかった。透明な瞳で、ぼんやりと見返すだけだった。

（どうして？母さんは、僕に会えて嬉しくなかったの？）

母が数年前の忌まわしい事故に遭い、記憶喪失になったことは十分に理解しているつもりだ。事実としてだけでなく、確かな現実として。それでも、心はついていかない。

母親にとって、自分は最早要らない存在なのだと思ってしまう。

（お願いだよ、僕の名前を呼んでよ……）

もう名前を呼んで貰えないのなら、もう自分を息子だと認識して貰えないのなら……このまま消えてなくなってしまうたい。

「兄貴、兄貴……」

誓が呼んでいる声がするけど、それに応える気力すらない。このまま、眠りに就いていたい……。

『まだ、駄目だ』

………？

不意に、誓でも母さんでも父さんでもない、聞いたことのない声が耳に届いた。聞いたことはないのに、何処か懐かしいその声が。

『あの“約束”を果たすまで、まだ……駄目だ』

あの、約束……？

『私の勝手に巻き込んでしまつて申し訳ないが、あの“約束”を果たすまでは……再び姫様に会うまでは、まだ……』
苦しそうな声。

その声が紡ぐ約束と、姫様という言葉。
それらに、何故か胸が締め付けられる。

…あなたは、誰なんですか？

『……………今はまだ名乗れない。ただ、体を借りている恩は返そう』
……………え？

『完全に希望通りには出来ないかも知れないが……一つだけ君の願いを聞こう』

僕の、願い……。

父さんと、昔のように仲良くしたい。

母さんに、僕のことを思い出して欲しい。

二つの願いが、簡単に浮かんだ。

『君にとつて、どちらも大切な願いなのは、私にも分かる。…………し

かし、私が力を貸せるのは片方の願いだけだ』

申し訳なさそうに萎れた声。

……………本当に、この声の持ち主は一体誰なのだろう。

『それに……………私の力は、……………っ』

！ど、どうしたんですか？急に声が苦しげに詰まり、気配が揺らいだ。

『……………いや、問題はない。すまない、謡』

！！

名前を呼ばれた瞬間、体に電流が流れたように感じた。以前にも、同じ“声”に名前を呼ばれたことがある……そう感じた。

……………あれは、いつだったか。

『謡？』

！あ、そうだ。今は、僕の願いの話をしているんだった。その途中、声の主が苦しそうに詰まつて……………。

『どうする……謡は、どちらを強く願う？』

……僕が、強く願うこと。父さんと、母さん。

どちらかを選ぶ、ということ？

……あの。

『謡？』

どちらも選べない時は、どうしたら良いんですか？

『……選ばない、という選択も出来る』

……選ばない、という選択。

『……謡、そろそろ決めて欲しい。時間が……ない』

そ、そんなことを言われても……。

『私は、本来は声ですら自分を表現してはいけない。それに、謡自身に負荷を掛けてしまうから』

……僕に、負荷を。

『謡、時間だ』

僕は、僕は……。

父さんと母さんを選ぶなんて、出来ない。

昔の、幸せな暮らしは、父さん母さんどちらが欠けても……戻っては来ないから。

『そうか。……謡らしい答えで安心した』

僕、らしい答え……。

『だから、今世の“姫様”は君に惹かれたのだろう』

え？

『もう少しだけ、謡の体を借りさせてもらうよ……“姫様”にもう

一度会い、あのとき言いたかった言葉を伝える為に……』

……あなたは、一体。

『……謡には辛いことの多い現実だろうけれど……生きて欲しい。

勝手なことばかり言って、謡には本当にすまないと思っている……』
声が揺らぐ。

『謡、“姫様”を……頼むよ、』

ま、待って！

あなたは、一体……

『……………“姫様”は、君のことを……………、』

…最後まで聞けぬまま、声は完全に聞こえなくなった。

……………今のは、一体…、

「兄貴、兄貴！」

誓が、僕を呼んでいる。

「謡さん…」

そして、さつき知り合ったばかりの女の子の呼び声もする。

母さんを見つけてくれた女の子。昔に、テレビで僕を見て以来、ずっと僕に会いたいと思ってくれていたんだと言う。

テレビで、父さんのことを話していた姿が忘れられない、と。

「兄貴！」

……………誓が、珍しく僕のことを必死に呼んでくれている。本当に、珍しい。

……………母さんが呼ぶ声はしないけど、誓が呼んでくれるから、良いかな。

『謡！さつさと起きな！』

榆乃木さんの声までして来た。榆乃木さんは、警察にはいないはずなのに。

でも、もし実際に警察にいたら僕を呼んでくれるだろう…そう思いたい。

『謡！』

……………分かりました、榆乃木さん。起きます、起きますからあまり耳元で言わないで。とても、くすぐったいから……………。

「う……………んっ、」

「兄貴！…はあ、やっと起きた……………、」

「ち……かい？」

ぼやけた視界の向こう、弟の誓が肩をガックリとさせてため息を吐く。

「……まったく、心配させやがって……、」

「誓……ごめ、んね？」

「謝らなくて良い……」

謡は、ゆっくりと上体を起こす。少し黄ばんだ薄手の毛布が掛けられていた。

「誓、ここは……？」

「警察の仮眠室。貸して貰った」

「そっか……」

謡は、だるい首を巡らせて室内を見渡した。室内には、黒い皮張りのソファーが二つと四角い茶色のローテーブルしかない。周囲の壁は、長年の煙草の煙にやられ激しく黄ばんでいる。心なし、今も煙たい。

「誓、」

「あ？」

「あの子の、声がしたんだけど……」

謡が言うと、気の抜けたような顔をしていた誓の雰囲気が一気に強張った。

「誓……？」

「あの子？ 兄貴にずっと会いたいと思ってたっていう女か？」

「誓、どうしたの……、」

急に怖い空気を纏った弟に、謡は怯えてソファーの上で身動く。誓は無表情のまま立ち上がり、謡をギロリと見下ろした。

「誓、」

「……母さんがあんな状態で苦しんでるのに、何女に現を抜かしてる訳？」

低く、一切の抑揚のない声。怒っている。それも、かなり。

「べ、別に現を抜かすなんて……っ！？」

釈明の言葉は、途中で途切れる。何故なら、誓が謡の両手首を掴み、ソファの上に押し倒したからだ。さらに彼の上に、靴を履いたままのし掛かる。

「ち、誓！何して…っ！！」

「そんなにたまってるの？」

両の瞳をすうつと細め、厭らしく舌舐めずりする。背筋に薄ら寒いものを感じながらも、謡は誓から目を逸らしそうになるのをグッと堪えた。

「ち、誓、何言ってるんだよっ」

「あの女だつてそうだ。あの公園で二人きりで何してたんだ！」

「あの女って……、」

榆乃木涼子のことだとすぐに分かった。

「ち、違つよ！榆乃木さんはそんなじゃないよっ」

「じゃあ何してた！母さんが行方不明になつてた時に、なんで女と二人きりでいられたんだよ！」更に強い力で手首を握られる。振り払えず、謡は怯えた目で弟を見上げるしか出来ない。弟の両目にはほの暗い光が宿り、その中に怯え顔の兄がいる。

「……母さんよりあの女のほうが大事なんだろ、兄貴には」

「！そんなことないっ」

「ならあの女とは二度と会わな！」

そう言われた瞬間、謡はカツとなった。幾ら誓でも、そこまで言われたくはなかった。

「なんで、何でそんなこと言うの！？榆乃木さんのこと、何も知らないくせに！」

「ッ！」

謡の反駁に、誓が顔を真っ赤にして唇を噛んだ。そして、右手を謡に向かって振り上げる。

「！！！」

殴られる　謡は目を閉じて身を擦った。

だが……数秒経過しても、拳が振り下ろされることはなかった。：

…謡は恐る恐る目を開けた。

「……………誓？」

誓は右手を振り上げた姿のままだった。苦虫を噛み潰したような顔で謡を見下ろしている。

「ッ、くそっ……………！」

乱暴な手付きで謡を突き放すと、荒々しく仮眠室のドアを開けた。

「！」

「きゃっ、」

タイミング悪く、中座していた少女が戻ってきたのと鉢合わせした。体がぶつかつたが、誓は何も言わずに走り去った。

「び、びっくりした…。ああ！謡さん、起きたんですねっ」

謡が目を開けていることに気づき、少女が嬉しげに寄って行く。謡はどんな顔をして良いか分からず、戸惑いの浮いた顔で少女を見つめる。

…なにより、誓の豹変に驚いてしまい平静になれないのだ。

『たまつてんの？』

（……………誓が、あんなことを言うなんて……………）

掴まれていた手首が熱を持っていて、先程のことが現実だったことを教えている。

「謡さん？」

「！…あ、」

「……………具合、良くないですか？」

笑顔が一気に萎れて、氣遣わしそうな色が宿る。

「うつん、もう大丈夫だよ」

「でも、顔色悪いですよ……………」

少女　脇坂晴美が、不意に謡に手を伸ばした。

「っ、」

他人に、加えて女性に触れることがあまり得意ではない謡は、思わず顔を逸らす。だが晴美はそれに気付かないのか気付いていないふりをしているのか、謡の様子には構わずに彼の額にそっと手をやっ

た。

「……少し熱いですかねえ。あ、お茶を買って来たのでどうぞ！」
にこにこ一点の曇りもない笑顔で、ペットボトルのお茶を差し出す。謡は思わずそれを受け取った。……小さな「ありがとう」という言葉とともに。

「はい！是非どうぞ」

「あ、あの……、」

「？」

「……母さんを見付けてくれて、ありがとう……」

とにかく、それだけは言わなくては思っていたのだ。母にこれ以上何かあれば、きっと自分は狂ってしまう……そう思ったから。

「謡さん……、」

「母さん、たくさん辛い目に遭ったから……もう、傷付いてほしくないから……、」

ペットボトルを握る手に力がこもる。

「だから、君が見付けてくれて……母さんが無事でいてくれたから……」

初対面の女の子の前ですら泣くなんて、と思うが緩み始めた涙腺は我慢の限界にたっそうとしていた。最近泣き過ぎだ、と自嘲する。だが、次に晴美がとった行動に涙も吹き飛ぶことになる。

「謡さん！」

「っ！」

いきなり顔と言わず体全体を謡にぐつと近付けて、

「謡さんは、笑った顔の方が素敵だと思いますッ」

「！？」

「だから、笑って下さい！そんなに泣きそうな顔しないで下さいっ」
「……う、うん……」

勢いに圧されて、思わず頷く。零れそうになっていた涙も、一気に引込む。

「それにしても、謡さんの弟さん、どうかしたんですか？今、すこ

い形相で出て行っただから……」

「っ、」

まさか弟に押し倒されたなどとは言えず、謡は冷や汗を掻きながら晴美から視線を逸らす。

「喧嘩……したんですか？」

全く部外者なはずの少女が悲しげに^{まなじり}眦を下げる。どうやら自分の感情にはかなり素直な性格のようだ。

「そういうんじゃないから……」

思い返せば、最近誓とはギクシャクし続けている。だが、単純な“喧嘩”と称しても良いものか。

「……あの、謡さん」

「！……何？」

「謡さんのお母さん、綺麗な人ですよ」

そう言つて、にっこり笑う。

「そう……かな。ありがとう」

きっと母親の今の状態についても言及されるに違いないと、謡は覚悟する。

……だが、

「うちの母とは大違いです。うちの母、身なりに全然気を配らないし……結構ぶくぶくしてますし」

しゅん、と晴美は悲しげに項垂れる。

「そう……なの？」

「私とお姉ちゃんはすうりとしてるんですけどね」

態とらしく、しなを作る晴美に謡は思わず吹き出してしまふ。

「そ、そうなんだ……ふふ、」

「笑わないでくださいよ」

「う、うん……ごめんね……」

晴美は頬を膨らませるが、謡が笑顔になったことで瞳を嬉しそうに細めている。

「やっぱり謡さんは、笑顔が素敵ですね！」

「そんなことないよ…。僕のこと、持ち上げ過ぎだよ」

謡が弱々しい口調で言えば、晴美は何度も首を左右に振る。

「持ち上げるとかないですよ！本心ですもんっ」

「……ありがとう。えっと…」

「晴美です。脇坂晴美。ちなみに歳は16、高校一年生です！」

「なら誓と一緒にだね」

「そうなんですか！謡さんは一つ上ですか？」

「うん。…そうだよ」

本当に素直に感情を表現する子だな、と謡は思う。自分からしたら、眩しく感じられるタイプだ。

「あ、私と話してる場合じゃないですね。お母さんのところに行かれますよね？」

「っ、」

思わず息が詰まった。

脳裏に、透明な母親の瞳が過る。体が強張る。

「謡さん？」

「……行っても、母さんは僕のこと分からないから、」

「謡さん……、」

「ごめん、怖いんだ…」

初対面の女の子に何てことを、と思いながらも言葉は止められない。

「また、あの目で見られるのが怖い……母さんの中に、僕は居ないんだって、思い知らされる気がして……、怖いんだ……」

頭を抱えてか細い声で話す謡を、晴美は悲しげな表情で見つめるしか出来ずにいた。

信じることゝ謡と晴美

……何を言ってあげたら良いのだろう。

頼りなく俯き、カタカタと体を震わせる一つ年上の人を見守りながら、晴美は悔しい気持ちになっていた。

（私には、この人を元氣付ける言葉なんか持っていないんだ……）
それでも、何か声を掛けなければという思いが込み上げて仕方ない。テレビを通して対面した時のように、家族のことを、誇らしげに話して欲しい。だから、

「そ、そんなことありません!!」

大声を出して謡の肩を掴んだ。元氣を出して欲しい。その一心で。

「……………」

顔を上げた謡が、目を丸くして晴美を見ている。涙のたまった瞳が痛々しくて、晴美はとにかく自分の思いを口に出すことにした。

「あ、あたしは馬鹿だし阿呆だし、難しいことはさっぱり分かりませんけど、謡さんは謡さんです!」

何を言ってるんだ、馬鹿、と心の中で自分を罵る。

「脇坂さん……………」

「謡さんのことも、ご家族のことも、あたしは何一つ知らないし、分からないし、」

「……………」

何かを振り切るように、晴美は一度グツと瞳を閉じて、すぐに見開く。

「でも、大丈夫です!きっと、謡さんの願いは叶います!お母さんに届きますから!」

謡の両手を取り、

「だから、だからそんな悲しそうな顔をして、諦めないで下さい!一人で、苦しまないで下さい!・あたしには何も出来ないけど、謡さんのことなんて何も知らないけど、でも・!謡さんには、笑

顔で居て欲しいと思うから・・・」

一気に言葉を放っていく。

「・・・あ、ごめんなさい!!」

謡の両手を取ったのは無意識だったらしく、語りつくした晴美は慌てて謡の手を放した。

「・・・脇坂さん、どうして」

「え？」

「どうして、初めて会った僕なんか、そんなに良くしてくれるの？」

「謡さん・・・」

「僕に優しくしてくれても、僕には何も返せないよ・・・？何のお礼も出来ない。なのに、どうして」

晴美は、無性に悲しくなってきた。

どうしてそんなことを言うのか、という点ではなく、謡にそう言わせている彼のバックグラウンドに対して悲しくなる。僅かながらも、義憤も感じる。

「そんなんじゃないありません！」

「え？」

「あたしは、謡さんに何か恩返しがして欲しいから、こんなこと言ってる訳じゃありません！あたしは、あたしは、謡さんに元気になって欲しいだけで、・・・笑って欲しいだけで、」

謡が、晴美の顔を見てハッと息を呑む。

「脇坂さん、」

「謡さん、よく言われませんか？・・・自虐的過ぎるって」

「・・・」

「・・・お茶、呑んでくださいね」

「あ、」

晴美は泣きそうになるのをどうにか堪えて、仮眠室を飛び出す。

（僕は、・・・最低だ）

晴美に貰ったお茶のペットボトルを握り締めながら、謡は俯く。心

底、自分を嫌いになりそうだった。

「くそっ……！」

警察署を飛び出し、誓は道端であるにも関わらず刺々しく毒づいていた。通りがかりの子供づれの主婦が子供を急かしてそそくさと立ち去る。

（……俺は、）

制御できない感情に焦る。

母のことを忘れて女のことを話す兄を見ると、感情のセーブが効かなかった。

（だからって、あんな……）

あんなことをするつもりはなかった。

実兄の上に馬乗りするなんて、一切考えられないことのはずなのに……ただ、とにかく腹立たしかったのだ。女に現を抜かし、鼻の下を伸ばしていた姿を思い出すだけで、とにかく苛々するのだ。

（兄貴をぶち壊してしまいたい……そんな欲求があったかと訊かれたら、否定は出来ねえな……）

そうだ、もともと自分にはその気があったではないか。実の兄に対する、歪んだ感情。

ほの暗いそれが、どんなに異常なのかも知っていたはずだ。

（……当分、兄貴の顔は見ない方がいいか、）

少し落ち着いて来た誓は、頭を巡らせて母と兄にいる警察署を見上げた。

息子のことを覚えていない母親と、弟の歪んだ性癖を掻き立てる兄。

「……夏」

「はい」

今の今まで一切なかった青年の気配が、誓のすぐそこに音もなく出現する。本当に幽霊みたいなやつだ、と誓は苦笑する。

「母さんと兄貴を頼む。俺は神楽に連絡を入れておくから」

「……楓様はどうされるのですか？」

気配を直前まで一切感じさせない青年

成宮夏が、少し心配

そうな口調で誓に問い掛ける。

「今の俺は、今の母さんや兄貴の近くに居られる自信がない」

きつと傷つけるだけ、という言葉は呑み込んでおく。だが聡い夏ならば言わずとも悟るだろうと思う。夏は整った眉を微かに歪める。

「誓様、」

「良いから。頼んだからな」

「……分かりました」

それで良い、と応え、誓は夏に背を向ける。

「ちゃんと夜にはお戻り下さいね？」

確りと聞こえたであろう夏の声を、誓は聞こえないフリをして誤魔化した。

（……ああ、自己嫌悪だ。お母さんのことで落ち込んでる謡さんに何てことを……）

仮眠室を飛び出した晴美は、先程ペットボトルのお茶を買ったばかりの自動販売機のスペースに戻っていた。世にも情けない表情で、自販機にしなだれ掛かっている。

（私なんて、謡さんのこと何にも知らないのにあんな偉そうなことを言つて……あぁ、穴があつたら入りたいっ）

「あぁ、私のバカバカバカッ。空気読めよー！」

「あ、あの……」

「謡さん、最低なこと言つてごめんなさいっ」

「あ、謝るのは僕の方だよ」

「っ！？」

近くで謡の声がして、晴美はぎょっと目を剥きながら振り返った。

「う、うっうっ謡さんっ!？」

謡が、晴美の過剰な反応に驚いて微妙に身を引いているが、それでも晴美から目は逸らさない。

「脇坂さん、ごめんね」

「……えっ？」

「あと、ありがとう」

いまだに潤んでいる瞳で、謡はほんわかと微笑む。

「それに、お茶もご馳走様」

「……」

まだ反応を返せないでいる晴美の横にある自販機に小銭を投入し、

「脇坂さんは、ジュースは飲む？」

「え、あ、はい。大好きですけど……」

「そっか」

ジュースのボタンを押した。

「はい。お茶のお礼だよ」

「あ、ありがとうございます」

差し出された流れで、晴美は反射的に受け取る。ひんやりとして、心地良い。

「……脇坂さんは、何だか眩しく見える」

ぽつりと、謡がそんなことを言う。

「？」

「僕にないものを持つてるから、羨ましいよ」
気弱に微笑まれる。

「謡さん……」

「脇坂さんは、ご両親とは……うまくやれてるのかな」

「……時々、父が過干渉な時がありますけど……普通に仲良しだと

思います」

「そう。…とても素敵なことだね」

「……………」

これは、踏み込んで訊くのを許してくれていると考えて良いのだろうか。

だが謡の瞳はそつと伏せられ、長い睫毛が小さく震えているように見えて、晴美は唇を噛んだ。目に見えぬバリアを感じてしまう。

「謡さん……………」

「ごめんね。初対面の君に、変な話ばかりして…………困るよね…」

晴美は必死に首を左右に振る。その仕草に、謡が顔を上げて彼女に微笑む。

「…………母さんを施設に戻さない」と

「どうするんですか？」

「施設の人に連絡すれば、向こうが来てくれるから」

ズボンから携帯電話を取り出して、施設の番号を呼び出す。

（謡さんの携帯電話、ストラップ無いんだ…………）

そんなことを考えていると、謡の電話はいつの間にか終わっていた。

「すぐに人を送るって」

「そうですか。良かった……………」

晴美がホッとして笑うと、

「脇坂さん、連絡先教えてくれる？」

「えっ？」

まさか連絡先を訊かれるなんて思わず、晴美は我知らずドキリとしてしまった。

「え、えっと」

「母さんのことが落ち着いたら、改めてお礼を言わせて欲しいから……母のことでも、僕のことでも大変な迷惑を掛けてしまったから」

「……………」

晴美にとっては、別に迷惑でも何でもなかったのだが、謡と接点を

持てるのなら良いかとポジティブに考えることにする。

「携帯の番号で良いですか？」

「うん」

「赤外線が良いですね」

その方が楽だから、晴美はそう言ったのだが、謡の不思議そうな顔を見て思わず首を傾げる。

「謡さん？」

「・・・赤外線がどうかしたの？」

「え？」

「え、えつと・・・今、携帯電話と赤外線て何の関係もないよね・・・？」

「・・・どうやら本気の疑問らしかった。

謡は携帯電話の赤外線送受信の機能を知らないのだ。

「えつと、それはですね・・・」

晴美は、自分の携帯の液晶画面を謡に見せながら赤外線送受信の説明をしてやる。

「へえ、凄いな・・・」

本当に心の底から感心しているのが分かる。

晴美は思わず頬が緩むのを感じた

幼子が大発見をした

かのように感心している姿が可愛くて。

「これだったら、データの交換も早いんです。やってみましょうか」
「うん」

そうして二人は自分たちの番号を交換し合った。

「・・・何だか、久しぶりだな」

気の抜けたような声で、謡がそんなことを言う。

「？」

「こうやって、歳の近い人と番号の交換をすること。・・・僕、あまり人付き合いが得意じゃないから」

「・・・」

寂しそうな横顔に、晴美は息を呑んだ。

今にも、横に居るこの人が消えてしまいそんな感覚に、思わず謡の腕を取っていた。

「あたしで良ければ、いつでも連絡下さい！授業中とかは無理だけど、そのほかなら何を差し置いても応えますから！」

謡は驚いた顔で晴美を見つめていたけれど、不意に顔を綻ばせて・
・笑った。

それは今にも掻き消えてしまいそうに儚いものではなく、正しく花も綻ぶような笑みだった。

（・・・謡さん、綺麗だ・・・、）

男性相手に綺麗というのもどうかと思いつつ、晴美はそう感じた。

「ありがとう、脇坂さん」

「い、いえ」

何だか晴美の方が気恥ずかしくなってしまうて、焦りつつ謡の腕から手を放した。

「・・・警察の人に、施設の人が来るのを伝えないとね。・・・母さんのところに戻るよ」

「あ、あたしも一緒に行きます」

うん、と頷き、謡が先行する。

「・・・謡さん」

「え？」

「・・・いつか、きつとお母さんも謡さんたちのこと、思い出してください。謡さんが信じてあげなきゃ、駄目ですよ」

「そうだね・・・。僕が母さんを信じていなきゃ、駄目だよね」

「はい！」

あたしも一緒に信じますから、という言葉は心の中だけで呟く晴美だった。

見送りと別れ、そして（前書き）

適切なタイトルが浮かびません…。

そしてお久しぶりです。

お読み頂ければ幸いです。

見送りと別れ、そして

「それじゃあ、母のこと、よろしく願います」

「はい。この度は、本当に申し訳ありませんでした」

母を迎えにやって来た職員二人は、謡に何度も必死に頭を下げていた。

「もう、良いですから。でも、二度とこういったことがないよう、よろしく願います」

「は、はい！」

謡は職員から目を逸らし、車に乗り込んでいる母親を見つめた。

「……母さん」

反応はないと分かっているながら、謡は母を呼んだ。

「……………」

母親は、車内に興味を引かれているのか、あちこちに視線をさまわせている。謡の声が届いているふうでは、なかった。

「（母さん、どうか元気で）願います」

今の母親の状態が“元氣”と言えるのかは分からないけれど、そう願わないではいられなかった。

「それでは」

職員の一人は後部座席の母の横に座り、もう一人は運転席へ。

エンジンが、静かに音を立てる。

「父には、僕からも連絡はしておきますが、」

「はい。こちらからも、お詫びのご挨拶はさせていただきます」

「願います」

後部座席の職員が深々とお辞儀をして、車のドアを閉めた。

「母さん、さよなら」

もう二度と会えないような気がして、気付けばそう呟いていた。弱気になっている、のだろう。

「謡さん……………」

心配そうに自分を見つめる少女に気付くことすら出来ないくらい、母親の乗った車をじっと見つめる。

車が、静かに警察署の駐車場を出ていく。

「……………っ、」

車を見つめることだけですら辛くて、謡は唇を噛んで、俯く。コンクリートに染み込んでいく、透明な液体には気付かないフリをする。そのとき、

『謡』

「……………っ!？」

母の、“声”がした気がした。しかし、母の乗った車はすでに視野には入らず、空耳なのだとすぐに分かった。

(空耳、だ……………)

「謡さん、大丈夫ですか？」

「ん?…うん、大丈夫だよ」

「……………謡さん、」

「ありがとうね。一緒に見送ってくれて」

「いえ、これくらい何でもありませんから」

「うん、でも……………ありがとう」

「謡さん、そんなうるうるした瞳で見られたら襲ってしまいますよ?」

湿っぽい空気をどうにかしたくて、思わずふざけたことを口走ってしまった。慌てて口を塞ぐが、後の祭り。

(どっ、どうしようっ。完璧、嫌われた!あたしの馬鹿馬鹿馬鹿!)

謡の反応が不安で、晴美は今すぐにこの場所から逃げ出したいくなってきた。

「あ、ご、ごめんなさい!変なこと言いましたっ」

とにかく、早い内に謝ってしまえ!と半ばやけくそになりながら、晴美は頭を下げた。気まず過ぎて恥ずかし過ぎて、晴美は謡の顔を見ることが出来ない。

「……………っくりした、」

「っ？」

「脇坂さんもそういう冗談、言うんだね」

怒っていたり、呆れたりしている声音ではなかった。晴美は、恐る恐る顔を上げる。苦笑する謡の端整な顔がそこにはあった。

（まるつきり冗談、というわけではないのだけど、）

「え、えへへ」

とりあえず、笑っておこう。

「さて、母さんも無事に送ったし…。そろそろ、帰らなきゃ」

「……あ、」

そっか、謡さんも帰らないといけないんだ……。

そんな当たり前のことが、晴美にとってはかなりショックだった。

「脇坂さん？」

「あ、あの…」

「？」

泣きすぎて赤くなってしまった瞳が、自分をじっと見つめているドキドキする。

「脇坂さん、どうしたの？」

「ま、また会ってもらえますかっ!？」

そんなつもりはなかったのに、どんでもなく甲高い声になってしまった。

署の入り口にいる警官の、何事だ、という鋭い視線が晴美に突き刺さる。

「脇坂さん、」

「い、いつでも構いません。謡さんの都合の良い時に、短時間で、少しお喋りするだけで構いません、だから、だから…」

「良いよ」

「！」

あっさり了承され、晴美は思わず舌を噛みそうになった。

「いつにしようか？僕、あまり自由な時間がないけど…本当にそれで良いの？」

気遣わしそうにひそめられた眼差しが、晴美に罪悪感を抱かせる。

（無理を、我が儘を言っているのは私の方なのに……）

「う、謡さんに会えるなら、構いません！チラツとでも、全然っ！」
「な、なら良いんだけど……」

晴美のあまりの懸命さが可笑しかったのか、謡が笑顔になる。

「なら、時間が出来たらまた連絡するから。脇坂さんも、遠慮せずに連絡してもらって構わないから」

「！は、はいっ。ありがとうございますっ」

晴美も嬉しくなって、にっこりと笑顔になる。
そのとき、

「！ちよつとごめんね」

ズボンのポケットに入れていた携帯電話が着信を告げたようで、晴美に断りを入れて謡が携帯電話を取り出す。

（……非通知？誰だろう、）

嫌な予感を感じながらも、謡は通話ボタンを押した。

「……もしもし、」

『芝貫謡か？』

「………あなたは？」

誰何の問いを投げながらも、謡の中の“何か”が、警鐘を鳴らす。
早く切れ、何も応えるな。そうしないと……。

『呑気なことを言う』

「っ、」

『つい昨日密度の濃い時間を過ごしたばかりではないか』

「！」

耳と言わず、脳や心の奥の奥にまでじわりと浸透する、粘着質な男の声……。

「あな、たは……」

『やっと分かったか、芝貫謡』

「どうして、この番号を……」

頭にこびりついて離れない、無機質な鉄の砲口。

父の、冷徹な所作。

『個人の電話を調べるくらい、たわいもないに決まっているだろう。謡』

「あ、あなたに名前と呼ばれる筋合いなんてありません!」

動揺のままに大きな声を出してしまい、謡はハッと晴美を見た。

「……………」

晴美が心配そうに謡を見詰めている。謡も動揺して、思わず彼女から顔を背けてしまう。

「僕に…何の用ですか。大体あなたは昨日つ……………」

『今日は、お前に大事な話があるのだよ。謡』

「そんなの…!」

『別に危害を加えようと思っではないよ。そんなに心配なら、会う場所はお前に任せてやる。人間が多いところを選んで構わんよ』

昨日のことなどなかったかのように話す相手　鳴沢宗吾に不快感しか湧かない。今すぐにでもこの電話を切ってしまいたい。なのに、次に鳴沢が何を言うのかが気になってしまつ。

「そんな、勝手なことばかり……………」

『榆乃木涼子』

「……………っ!？」

なぜこの男が涼子の名前を知っているんだ。

『何故私がこの名前を知っているか、不思議だろう?』

「……………っ、」

『何のことはない、お前の身近にいる人間のことを軽く調べただけに過ぎない』

言うことを聞かなければ、お前の周囲の人間を傷付ける　鳴沢は遠回しにそう言っているのだろう。謡は、きつく唇を噛む。

『そんなに時間は取らせんよ。どうだ?』

断れないのを分かっていながら、いけしゃあしゃあと鳴沢が言う。卑しい顔でほくそ笑んでいるに違いない。

「……………分かり、ました」

鳴沢が喉の奥で笑う。

『場所はどうする。お前に決めさせてやる』

自分のよく知る場所を指定しようとして、謡は口を噤んだ。

これ以上、電話の向こうの男に、自分の知る場所を汚されたくない
と、土足で踏み込まれたくないと思ったから。

「結構です。あなたが決めて下さい」

鳴沢が晒う。

『勇敢なことを言う。なら、昨日の場所でも構わんということか？』

「！」

『私は全く構わないが・・・まあ、昨日の今日だ。あれに知られた
ら敵わんしな』

あれ、というのが自分の父親なのだろうと言うことは、謡にも分か
った。

『さて、どこにするかな』

「……どこだって構いせんから、時間は短くして下さい」

『横にいる女性とデートでもするのかな』

「っ！？」

横にいる女性、というのは、

「……謡さん？」

晴美のことか？

「！」

強い視線を感じて、謡は勢い良く後ろを振り返った。体中から、冷
たい汗が吹き出す。

「……鳴沢、」

視線の先、ハイヤーの後部座席の窓を下げて作り物じみた笑顔で手
を振る男がいた。

「謡さん、あの人……」

鳴沢は、時の人だ。

テレビの露出は多いから、晴美もすぐに彼が誰なのかが分かったよ
うだ。

「脇坂さん、今日は本当にありがとう…必ずまた、連絡するから」
（謡さん、顔が真っ青だ…。それに、首相と謡さんが知り合いだなんて……）

「それじゃあ、行くね」

晴美は思わず謡の腕を掴んでいた。

謡に何か不吉なことが起きる気がして。

もう二度と、会えない気がして。

「脇坂さん、」

「謡さん、あの…、」

どうやって引き留めようかと必死に考える晴美を他所に、ハイヤーが軽くクラクションを鳴らして来た。

「ごめんね」

今にも泣き出しそうな笑顔をしながら、謡がそつと晴美の手を退けた。

「謡さんっ」

「またね」

謡が、ゆっくりとした足取りでハイヤーへ向かって歩いて行く。

晴美は、ただその背中をじっと見守ることしか出来なかった。

「可愛いお嬢さんではないか」

謡を出迎えた鳴沢宗吾は開口一番にそう言った。

「あなたには、関係ありません」

謡は体を固くして、つつけんどんに応えた。

違う、と鳴沢が笑った。ハイヤーが、静かに発車した。

見送りと別れ、そして（後書き）

ご閲覧、ありがとうございます。

嫌悪

「いや、しかし昨日の今日で私の誘いを受けてくれるとはね。嬉しいよ」

横に座る謡を嫌らしい目付きで眺めながら、鳴沢がそんなことを言う。

謡は俯いたまま、応えない。

「それにしても、あの可愛いらしいお嬢さんはどなたかな？しかも警察の前であんなに仲良くするとは……謡もすみにおけないな」

晴美までもからかうようなその口調に、謡は思わず鳴沢を睨み付ける。

「良い目をする」

「っ！？」

いきなり片手で顎を掴まれたかと思うと、鳴沢の顔がぐつと寄って来た。

「なにす、」

「敦樹のように怯えるだけではない、怯えの中に決して折れない意思が見えている目だ……私の好物だよ」

「っ、」

嫌悪感しかかわかず、謡は鳴沢を睨み付け続ける。

「とは言え、今日は話をするだけの時間しかなくてね……そう睨まないで欲しいな」

「……なら、早くこの手を放して下さい」

ふ、と軽く笑って、鳴沢が謡の顎を解放した。そのまま背中を車のシートに着け、車窓を眺め始める。

（話なら、今しても良いんじゃないのか……？）

そう疑問に感じた謡が、口を開き掛けた時

「そこを左へ」

鳴沢が指示を出し、車を誘導する。

「……一体どこへ、」

「もうすぐ着く」

行き先を素直に告げる気はないらしい。質問を口に出しきる前に、ぶっきらぼうな口調で吐き捨てて来た。

「心配しなくても、監禁などせんわ」

「……………」

昨日の今日でよく言う、と謡は心中で鳴沢を罵った。

昨日、神楽の弟である敦樹を隔離し、散々なぶった人間の言う台詞ではないと思う。

（敦樹君は、どうしているだろうか……）

謡の思考が、神楽の弟に向かう。大きな目をした、色の白い子だった。敦樹が兄の神楽をとて慕っていることも、神楽が弟の敦樹をとて慈しんでいることもよく分かった。

（神楽さんにも、敦樹君にもたくさん迷惑を掛けてしまった…）

自分の“弱さ”が周囲の人たちに多大なる迷惑を掛けてしまっていることが、とても辛かった。

（愁君、匂ちゃん……）

近所に住むあの子たちのことも、そうだ。二人とも、こんな弱虫で頼りにならない自分を、本当の兄のように慕ってくれている。なのに、謡は何もしてあげられていない。慕われることなんて、何一つしていないのに。

（？）

不意に、指先に何かの感触がして、謡はよるべない思考の海から抜け出さざるを得なくなった。

「っ—」

「私のような人間の横で、物思いに沈んでいて良いのかな？」

鳴沢が謡の手を握り、親指の腹を使って手の甲を撫でていたのだ。

その撫で方に邪なまのを感じて、謡は鳴沢の手を払った。

「触らないで下さい！」

触られていた手を背面に隠しながら怒鳴れば、鳴沢は愉快そうに喉

を鳴らした。

「“触らないで下さい！”か。初な女子学生のようなことを言う」「っ」

「謡は男にしては滑らかな肌をしているな」

鳴沢の目線が、謡の胸元に合わされる。嫌らしい目付きに、謡は背中をぞくりと粟立たせた。やはりこいつの誘いになど乗らなければ良かった、と思っても後の祭りでしかない。

「その服の下も、きつと滑らかで綺麗なのだろうな」

謡は今までにないくらいの憤りを浮かべた瞳で鳴沢を睨んだが、その瞳ですら彼にとっては興奮の材料でしかないようだった。

「良い瞳だ。……私を誘っているのかな？」

「な……にを、」

「……やはり敦樹といい謡といい、芝貫の男は同性を魅惑する傾向が強いようだ」

「え？」

「ますますお前が欲しくなった、」

「っ！」

市街を走る車の中で、いきなり鳴沢が謡に襲い掛かった。

半ば呆気に取り残されている謡にのし掛かるような形になり、謡の胸元に手を掛ける。

「な、やめっ、」

「良いな、そそられる」

「ふ、ふざけないで下さいっ！」

「そんな口を聞いて良いのか？今のお前をどうこうするのも、私の思い通りになるということ、分からないか？」

「……………ッ！」

なんて卑怯なんだ、と謡は唇を噛む。そんな姿が、更に鳴沢の嗜虐心を刺激することにも気付かずに。

「話があるんでしょう。放して下さい」

声が震えてしまわないように、出来るだけ声を抑えて謡は言葉を紡

ぐ。

「ふむ」

「……早く、放して下さい」

鳴沢が白けたように、鼻を鳴らした。

「今のお前の目は、気に入らんな。春樹とそっくりだ」

「！」

不意に父の名前が出て来て、謡は喉を詰まらせる。父親にそっくり

言い様のない、複雑な感情がわき上がって来る。

「興醒めだな、」

まあ良い、とため息を吐いて、鳴沢は謡から手を放した。

シートに背中を着け、囁くような声音で言う。

「……春樹の秘密を、知りたくはないか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6477f/>

時を越えた輪廻

2011年10月20日14時01分発行